ヘヴィーオブジェクト 七〇%の支配者（しはいしゃ）

「もー!!　駄目だ、ぜんっぜん勝てる気がしない!!」

今度の舞台は極東洋上に浮かぶ『資本企業』の一角にして、オブジェクトの始まりの地『島国』。『資本企業』の暴走した自防ＰＭＣ戦力を巻き込んだアジア圏海洋戦で、かつてない強敵オブジェクトの出現に窮地に陥るクウェンサーたち。

そんな危機の中、彼らのもとに現れた心強い協力者――。クウェンサーに巨乳を押し付ける天然ビッチ系の女囚！　そして主人であるヘイヴィアを「クソ虫」呼ばわりして痛めつけるウィンチェル家所属の眼帯美人メイドさん！

……果たしてこれで本当に勝てるのか近未来アクション!!

か-12-47

ヘヴィーオブジェクト 七〇%の支配者

鎌池和馬

電撃文庫

9784048663793

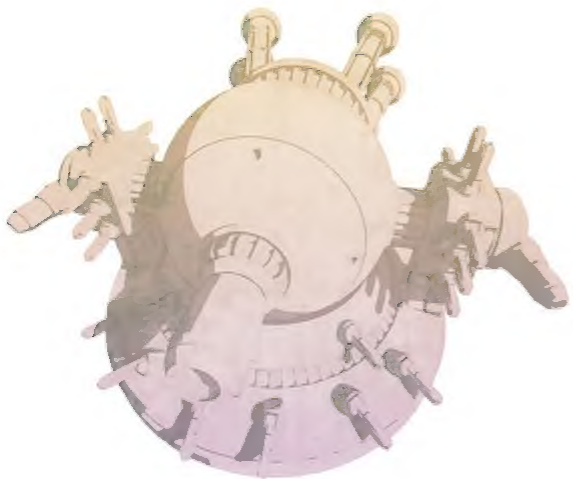
1920193006308

ISBN978-4-04-866379-3
C0193 ¥630E

ASCII MEDIA WORKS
アスキー・メディアワークス

KADOKAWA 発行●株式会社KADOKAWA

定価: 本体630円
※消費税が別に加算されます



鎌池和馬（かまち かずま）

本日のレプリカント的観察日記。オオアリクイ！　なんと言ってもにゅるにゅる長い舌が特徴。五本指のロボットアームが複雑すぎる場合、こういう所から攻めてみるのもありなのかな？　とか思いました。

【電撃文庫作品】

とある魔術の禁書目録（インデックス）①～㉒
とある魔術の禁書目録（インデックス）SS①②
新約 とある魔術の禁書目録（インデックス）①～⑨
ヘヴィーオブジェクト シリーズ計八冊
インテリビレッジの座敷童①～③
簡単なアンケートです
簡単なモニターです
ヴァルトラウテさんの婚活事情

イラスト：凪良（なぎりょう）

バンダイナムコのゲーム『アルトネリコ』シリーズのキャラクターデザインをつとめる。電撃文庫では『シャープ・エッジ』『F』（著／坂入慎一）、『アブラクサスの夢』（著／高橋弥七郎）などを担当する。個人サークル『S.E.C』でも活動中。
http://www.sec.or.tv/

鎌池和馬
KAZUMA KAMACHI
イラスト・オブジェクトデザイン
凪良 NAGIRYO

結局、戦争はなくならなかった。
でも、変化はあった。
――超大型兵器オブジェクト。
それが、戦争の全てを変えた。

ヘヴィオブジェクト
HEAVY OBJECT

Dominion 70% 七〇%の支配者

INDEX

000010 序　章

000012 第一章
豊かにしてくれない資源
>>『島国』あめのだりん上陸戦

000116 第二章
『新型』はどこへ消えた
>>太平洋極西方面掃海戦

000214 第三章
暗闇の奥で光る女神の瞳
>>ニューカレドニア方面総力戦

000394 終　章

【ビーアブレイズ】BE ABLAZE

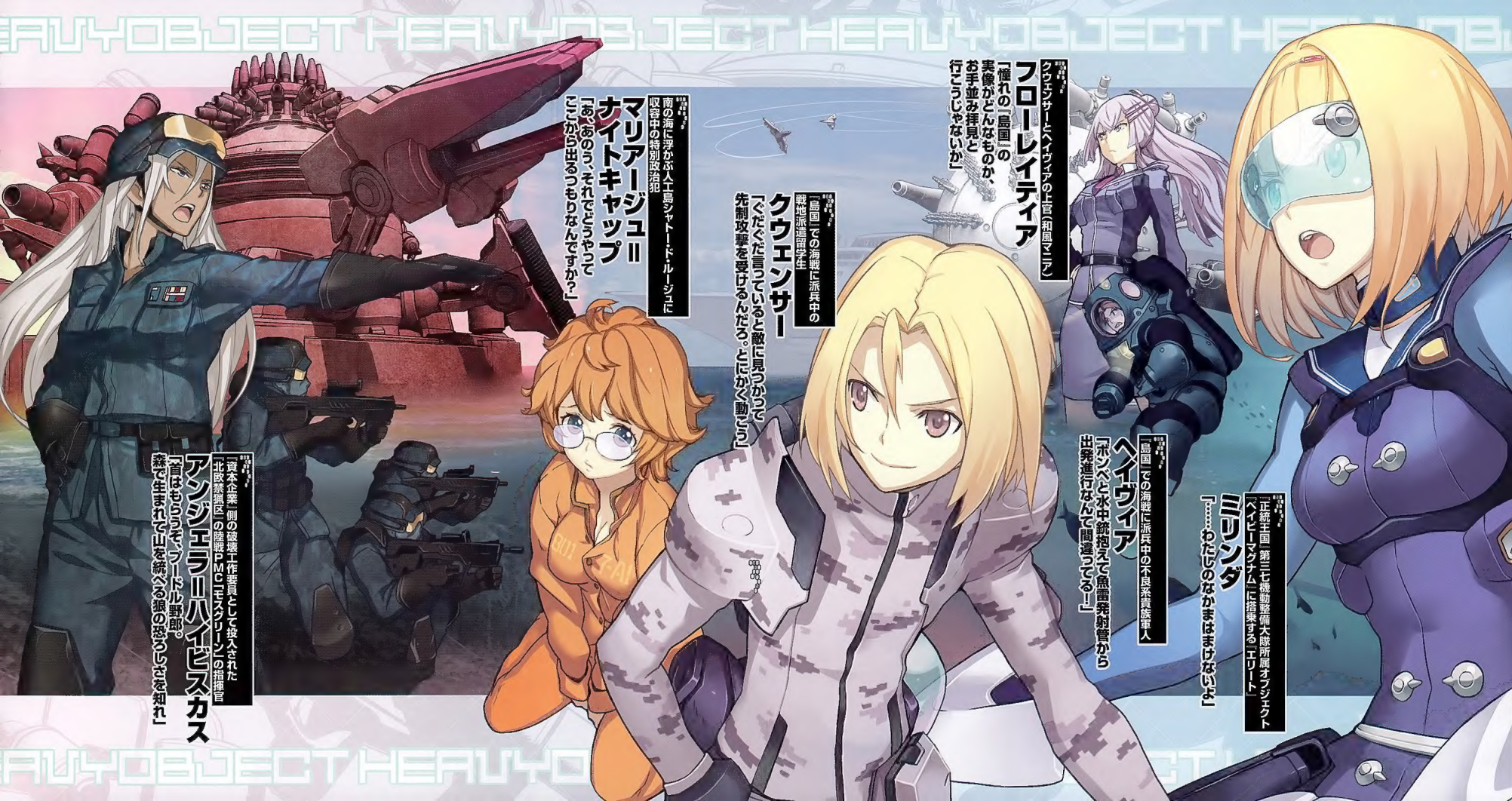
『資本企業』の『島国』が運用する水陸両用第一世代のオブジェクト。暴走した自防PMCとの内戦を早期終結するために大会社が正式派遣。『資本企業』の正式名称は『ゆうひ』。

第一世代でありながらも機体にバージョンアップを重ね、現役の第二世代に負けず劣らない性能を誇る。主砲はコイルガンとレールガンの多段式加速砲。メインカラーリングは赤銅色。

燃料、酸化剤、薬品などを使った火炎放射によって「火遁の衣」と呼ばれる熱波の壁を何重にも張り巡らせ、黒煙や蜃気楼によってレーザー誘導などの照準情報を歪める近接防御システムを採用している。

Designed by Hinokazu Watanabe(2725 inc.)

name/Frolaytia=Capistrano
place of birth/Paris, Normandy
age/18
sex/female
weight/51kg
height/173m
body size/97.58.81(cm)
hair color/silver(+ blue dye)
eye color/purple
post/commander of
BRAVEST operation
(plural units)
class/Major
belong/37th C.M.B.



クウェンサーとヘイヴィアの上官（和風マニア）
フローレイティア
「憧れの『島国』の実像がどんなものか、お手並み拝見と行こうじゃないか」

『正統王国』第三七機動整備大隊所属オブジェクト『ヘイビーマグナム』に搭乗する『エリート』
ミリンダ
「……わたしのなかまはまげないよ」

『島国』での海戦に派兵中の不良系貴族軍人
ヘイヴィア
「ボンベと水中銃抱えて魚雷発射管から出発進行なんて間違ってる！」

『島国』での海戦に派兵中の戦地派遣留学生
クウェンサー
「ぐだぐだ言っていると敵に見つかって先制攻撃を受けるんだろ。とにかく動こう」

南の海に浮かぶ人工島ジャトー・ド・ルージュに収容中の特別政治犯
マリアージュ＝ナイトキャップ
「あ、あのう、それでどうやってここから出るつもりなんですか？」

『資本企業』側の破壊工作要員として投入された『北欧禁猟区』の陸戦PMC『モスグリーン』の指揮官
アンジェラ＝ハイビスカス
「首はもらうぞ、ブードル野郎。森で生まれて山を統べる狼の恐ろしさを知れ」

戦争へようこそ。
これが今の時代ってヤツだよ、
だからつべこべ言わず存分に楽しむと良い。
死にたくなければな。

――とある僻地勤務の留学生のつぶやき

HEAVY OBJECT

Dominion 70%

ヘヴィーオブジェクト
七〇%の支配者

鎌池和馬
KAZUMA KAMACHI

序章

[redacted]からオブジェクトの時代へ。

『国連の崩壊』だの何だの噂されているが、実際のところ、理由なんて[redacted]なものじゃった。

当時、儂は学徒兵として動員されていてな。ああ、あの頃は第一次超高齢化社会の真っ最中で、労働人口の激減に伴い、農業も商業もスッカスカだった。頼みの綱は知財だけ。そんな訳で、誰も彼もが飛び級しまくっていたんだ。儂も生理が始まる頃には院に入っていたよ。

話が逸れたな。本題に戻ろうか。

結局のところ、[redacted]も、[redacted]も、[redacted]は誰も彼もがイベントを求めていたのさ。人間は[redacted]を[redacted]過ぎた。軽く[redacted]を五、六回は[redacted]に。気づいていながら[redacted]がなかった。単純に、[redacted]の[redacted]を見据えた[redacted]ってだけじゃない。[redacted]は作っても[redacted]できない。膠着、停滞する兵器。平たく言えば、[redacted]は盛り上がらない。上限に到達すれば、後は軍縮の責任を負う。最終[redacted]って言ったって[redacted]以外に何が

できる？　しかも、金喰い虫の[redacted]を怠って反体制側なんかに[redacted]じゃろうしな。

だから、皆が[redacted]の登場を願った。

大鑑巨砲主義はちょうど良かった。[redacted]として分かりやすい[redacted]があったし、[redacted]と違って地球全土を[redacted]に収める事もない。つまり、[redacted]と[redacted]を分けて、どこか[redacted]をスポーツのように眺める事ができる。

皆は[redacted]の到来を夢見た。

悪役は『島国』が買って出た。[redacted]は示し合わせたような[redacted]を編成し、仰々しい[redacted]をどっさり持ち出して[redacted]に挑んでいった。

のちの[redacted]だって、[redacted]。平等で公正で、[redacted]、[redacted]。そいつを作るためのな。

今、『島国』はどうなっているのかね。

そこから逃げた身で偉そうな事を言えた義理はないが、外から眺めているとこう思うよ。

哀れな国だ、と。

（『正統王国』軍第三七機動整備大隊所属の整備兵、アヤミ＝チェリーブロッサムの『島国』に関する口頭証言を文書化したもの。なお、原文は少将以上でないと閲覧不可とされている事から、極めて高度な機密情報を含むものと推測される）

第一章　豊かにしてくれない資源　〉〉『島国』あめのだりん上陸戦

1

――その日は朝から嫌な予感がしていた。

豪華客船スカーレットプリンセス号の航海日誌には『正統王国』の公用語でそう書き記されている。

全長三八〇メートル、最大船速四〇ノット、乗員乗客の最大収容人数は二五〇〇名。もはや、『安全国』のリゾートホテルを横に倒して海に浮かべているようなスケールだった。ちなみに船のお値段は、ホテルにゴルフ場を一八ホールつけてもなお足が出る。三段になったデッキには一つずつプールが取り付けられており、船体後部にはヘリポートまで設置されていた。

操舵室には二〇人前後の船員が詰めていた。

電子化、自動化がすっかり進んだ現代の大型船は、それを操るために必要な人間もまた極端に削減されている。三交代制という事で×三倍の人員を確保してあるが、それでも一〇〇人

に満たない。乗員乗客の命を握る船員よりも、『ウェイトレス』の数の方が多いというのだから驚かされる。

初老の男性が小さく息を吐いた。

アルフォンソ＝ズーム。この豪華客船の船長を務める人物である。

「船長。間もなくマラッカ海峡に入ります」

「分かっている」

若い（と言っても三〇代に入っているのだが）航海士からの報告に、アルフォンソは短く答えた。

パナマ運河、ジブラルタル海峡、スエズ運河などと同じく、マラッカ海峡はインド洋と太平洋を繋ぐ『海の門』だ。狭く細く、いろんな世界的勢力が領有権を主張する『熱い海』ではあるのだが、何より最も近道のコースなのだ。軍事物資を山ほど満載し、国費でオブジェクトに護衛されるような輸送船団でもない限り、地球一周クルーズを行う豪華客船だってこのマラッカ海峡のお世話になるしかない。この辺りの事情は、船舶の燃料費を計算すれば嫌でも分かる。

アルフォンソは魔法瓶からマグカップへコーヒーを注ぎながら、若い航海士へ声を掛ける。

「今の私の悩みが分かるかね」

「暗礁ではありませんね。嵐に巻き込まれて漂う漁船の残骸とかでしょうか？　この辺りの海はあまり奇麗ではないと聞いております」

「娘の事だ。軍に入るのはまあ良いとしよう、今はクリーンな戦争の時代だからな。だが、よりにもよって双子の娘が揃って督戦専門の『黒軍服』を何故選んだ？　嫁入り前の若い婦女子が、軍で最も鉛弾の飛び交う場所へ自ら身を投じるなどどうかしている」

「はあ」

「あれは母親の英才教育の反動だな。成金商人のコンプレックスってヤツさ。幼い頃からピアノだのバイオリンだの社交ダンスだのに漬け込んだおかげで社交界に拒否反応が生じた。深窓の令嬢であれと願う娘に、その息苦しさから教えてどうする。なあ、そうは思わないかね」

「あの、ええと……結論の方は？」

「船長の私が、こうして遠い『安全国』に想いを馳せる事ができるんだ。単純な海図だけなら、ここはそんなに危険な海域ではないよ。肩の力を抜きたまえ」

適当に言いながら、アルフォンソ＝ズームは大型の無線装置へ目をやった。いくつものランプが点滅しており、この海域でかなりの数の電波が飛び交っているのが分かった。『複雑な情勢』とやらを一目で示している。

「船籍『正統王国』アマゾン方面、識別番号 PL-055。こちらの位置を捉えているか。スクランブル交差点へ入る前に確認をしておきたい。どうぞ」

『ばっちり押さえています。GPS、ビーコン、レーダー、全て正常なり。豪華客船スカーレットプリンセス号、画面の指示の通りに進入してください。ようこそ、東南アジアの正門へ。

どうぞ』

「了解、港湾管制。今日も良い一日を。終了」

定型の挨拶と共に通信を終えながらも、船長の顔には不審の皺が徐々に浮かんでくる。

若い航海士の顔も怪訝そうだった。

「船長。今の通信なのですが……」

「ああ」

アルフォンソ＝ズームは重たい息を吐きながら、

「名刑事や名選手と同じだ。普通、プロの人間は仕事中に豪華客船を豪華と呼ぶ事はない」

では、今の通信は一体何だったのか。

少し考えれば誰でも分かる答えを、船長は口に出して言った。

「……来るぞ。『ヤツら』だ」

2

派手な荒波の上を飛び跳ねるように、一〇人乗りの小型漁船が豪華客船へ向かって疾走していた。そう、疾走。エンジンを丸ごと入れ替えたその漁船は、ほとんどウィリーするような格好で海の『上』を進む。具体的には時速八〇キロくらい。水中翼船の例を出すまでもなく、船

は水の抵抗さえ軽減できれば三ケタの大台すら叩き出せる。そして水の抵抗をなくすには、船自体を水の上に押し上げてしまうのが一番手っ取り早いのだ。

漁船の側面には分厚い鉄板がボルト留めしてあり、中にはこんがり日焼けした男達がぎゅうぎゅうに詰まっていた。彼らの手には、傷隠しと錆止めのため無理矢理に塗装した旧式のライフルやサブマシンガンがあった。どう考えても魚を獲るためには必要のない道具だ。

通信に割り込み、その頭を押さえた海賊。小型マイクを無線機のフックへ戻した日焼け男の一人が、目の前のご馳走を見て口笛を吹く。

「よお！　今回の獲物はすげえな!!　頭にでっかいアンテナがついているぞ。あれは衛星回線だ。カジノでブラックカードの照合するためのもんだ。きっと金持ちばっかり乗ってやがる！」

適当に発破をかけると、海賊仲間もやいのやいのと騒ぎ始めた。

「ええっ？　あれだよ、最近流行りのウォール街だべ？　株とか為替とかいじくるためのもんだって」

「『正統王国』だからロンドン市場だろ」

「何でも良いさ、紳士淑女の集まりなら。それより対艦ミサイルどうなってる？　最低でも二発はいるぞ。最初の一発目はデモンストレーションだ。逆らったらホントに沈められるっつーのを肌で感じてもらわねえと」

「任せろよ。船の横に四本ぶら下げてるよ」

「馬鹿野郎!!　道理で燃費が悪い訳だ!!」

素人の海賊集団に、最新鋭の軍事機密の塊であるミサイルの量産なんてできるはずがない。

が、『最新鋭』でなければ話は変わる。

例えば、五〇年前の兵器の製造に、今の技術で取り組んだとしたら？

家電量販店で売れ残っている特売のハードディスクが、五〇年前なら政府の最高機密扱いだったのと同じように。素人集団でも、兵器製造に手が届いてしまう。

ちなみに。

東南アジアのお祭りの中には、三から五メートルの巨大なロケット花火を作り、高度五〇〇〇から一万メートルまで打ち上げる豪快なものがある。真横に倒せば、ロケットモーターの『素体』としては悪くないだろう。

そうこうしている内に、仲間達の船も集まってきた。

こんがり男はもう一度無線機を摑み直す。

「よお。AからFは豪華客船の前へ！　適当に機雷撒いて足止めしろ。GからIは右舷側、JからLは後ろから対艦ミサイルで囲い込む」

『うるせえな！　リーダーはおめえじゃねえだろ!!』

「金持ちの船だからって乗り込んで小遣い稼ぎしようとすんなよ。あくまでも、向こうから救命ボートで降りてきてもらう。護身用の豆鉄砲で死にたくねえだろ」

こんこん、と軽い音が聞こえた。

同じ船に乗る味方が、人差し指で大型無線機の表面を叩いている。

彼は小声で質問してきた。

「どこにぶち込むの、ミサイル？」

「『正しい使い方』はするなよ。一発でホントに沈めちまったら人質を取る事もできない。喫水線には当てるな。狙うならもっと上……」

無線のマイクを手にしたまま日焼け男は遠くを指差した。

豪華客船スカーレットプリンセス号へ突き付けた指を、すいっと上へ上げる。

「……例えば、操舵室だ」

ファシュッッッ!!!!!!　と全長七メートルの巨大な筒が漁船の側面から飛び出した。固形燃料、平たく言えば火薬の力で空飛ぶ対艦ミサイルは、船上の乗組員を直接狙うという『あるまじき』運用方法をまっとうすべく、海面を斜め上へ跳ね上げるように突き進んでいく。

成功だ、と誰もが思った。

豪華客船最上部の操舵室を吹っ飛ばしても、即座に船が沈む事はない。前述の通り、船の弱点とは本来下……それも、海水の流入する喫水線なのだ。だが、優雅な紳士淑女はそれに気づかない。突然プロの航海士達が全滅し、船内で火事が起これば、何が何でも救命ボートで逃げ出そうとする。後は、動力なく漂うだけのボートを取り囲んで人質を吟味すれば良い。

しかし。

直後に、豪華客船の一〇〇〇枚以上ある全ての窓へ、一斉に複合素材のシャッターが下りた。三〇センチ以上の厚さを誇るそれは防弾ガラスを挟んで内外二列に配され、平たく言えばどう考えても民間の船には不釣り合いだった。

……は？　と。

一瞬、こんがり日焼け男の思考が空白に染まった。

直後に手製の対艦ミサイルが操舵室の辺りへ激突したが、爆炎と黒煙の、なんと頼りない事か。全てが吹き散らされた後に見えたのは、わずかにへこむシャッターの傷だけだった。

返す刀で。

事態が動く。

ガシャガシャガシャガシャ!!　と、得体のしれない金属音が連続する。サイドデッキの両翼では船首から船尾まで近接防御用の二〇ミリガトリングガンが次々とせり上がり、街路樹のように立ち並ぶ。三段デッキのプールが割れて二一センチの速射砲がそびえ立つ。彼ら海賊達からは見えなかったが、屋根一面は板チョコや蜂の巣のように細かく分かれていて、それら垂直ミサイルハッチがパタパタパタパタと順次開放されていく。

地雷だ。

地雷を踏んだ。

ようやくそれだけ分かった海賊男の無線機に、つい先ほど話した豪華客船の船長の声が届いてきた。

『偽装巡洋艦スカーレットプリンセス号、標的との会敵を確認』

まさしく死刑宣告。

地獄の蓋が開く号令だった。

『作戦コード「血染めの姫君」発令。現刻より状況開始。海賊ども、遺書を書くなら今しかないぞ』

言葉と同時に、羊の皮を被った狼が内側に秘めた牙や爪を存分にさらけ出した。

たかが一五隻程度で囲い込めると慢心したのが運の尽き。

狐狩りの時間が始まる。

3

そしてクウェンサー＝バーボタージュとヘイヴィア＝ウィンチェルの馬鹿二人は、偽装巡洋艦スカーレットプリンセス号の下層、揚陸部隊用船倉で呻き声を発していた。

見た目こそ豪華客船を装っているが、内部構造は根本から異なる。全長三八〇メートルを誇る船体の内、下部の半分以上が一つの大きな空間になっていた。そしてそこには、たくさんの軍用エアクッション船がぎゅうぎゅうに詰められている。クウェンサー達はそこにパック詰めの寿司ロールみたいな格好で押し込められている訳だ。

小型なのに戦車だって乗せられちゃう☆　が売り文句らしいが、人が使うには最悪の居心地だった。全体的に機械油臭い。

「横暴だ!!　俺らは相乗りしていただけじゃねえか。それなのに海賊掃討の矢面に立たされるなんてアリか？　そもそも第三七機動整備大隊のお仕事じゃねえし。一体誰が給料を払ってくれるんだよ!!」

「船に乗っているんだからチケット料金は払えよって事なんじゃないの？　まあ、真面目に仕事する気ないのは同意なんだけどさ」

「そもそも何が偽装巡洋艦だ。ほぼ四〇〇メートル！　大鑑巨砲主義時代の戦艦だってここまでじゃねえぜ。『島国』のヤマトより一〇〇メートルもデカいなんてイカれてる!!」

「戦艦ってカテゴリ消えたらしいし仕方ないんじゃない？　それに偽装艦って話だろ。護衛船団に守ってもらっちゃ敵方にバレる。一匹狼で全部対処しなくちゃいけないんだ。海賊を安全に釣り上げるためには重装甲化はかかせなかったって訳だよ。ロケット砲だの魚雷だの、一発二発はもらったってびくともしないくらいタフじゃないとさ」

大鑑巨砲主義が航空機に敗北したのは歴史が証明しているが、逆に言えば、航空機が出てこない状況なら本来の長所を生かせる。海賊を誘い殺すなんて持ってこいなのだった。

「……テメェ、何でさっきっから鼻息荒げている訳よ？」

「え、大きな機械を見るとわくわくしない？　人間の本能だよ」

ヘイヴィアが気味の悪い変態を両手で遠ざけようとしたところで、耳障りなブザーと共に船倉の照明が真っ赤なものに切り替わった。

顔も知らないどこかの誰かがノリノリで叫んだ。

「健気な『ウェイトレス』の諸君、命を懸けたサメ釣りの時間だ！　あとで映画化されるくらい派手な戦いにしよう。ロックンロール!!」

「うるせえな、準備ならできてる!!　そんなに主役を張りたきゃ一人でやれよワンマンアーミー！　俺らを巻き込むんじゃねえ!!」

ヘイヴィアが『貴族』らしくお上品に中指を突き立てて喚き散らしたが、それで事態が変わる事はない。

ガコォン……!!　という重たい音と共に、目の前の壁が中央から大きく左右に割れる。偽装巡洋艦の船首部分がお城の門のように開放されていくのだ。そこから次々に、水陸両用のエアクッション船が砲火渦巻く海の戦場・マラッカ海峡へと滑り出していく。

と。

偶然か必然か、いきなり外から火を噴いたロケット砲が船倉内に飛び込んできた。
慌てたようにヘイヴィアがクウェンサーの頭を押さえつけて身を伏せたところで、密閉空間に凄まじい衝撃波が撒き散らされる。
鼓膜、というより胸の辺りに鈍い痛みが炸裂する。
「うぐばっ……!?　げぼっ!!　ど、どこが安全で簡単な掃討作戦だくそったれ!!」
「『簡単な』なんて冠がついているものに裏がない方がおかしいって事だろ……」
「ていうか、待て、ちょっと待て!!　このエアクッション船、滑り出してねえか？　おい、ちょっと!!　ボロボロの負傷兵だらけだよ！　このまんま最前線に放り込むんじゃねェェェ

拳銃を取り出し、立て続けに発砲していく。

標的の胸板へ三つほどの赤黒い風穴が空くのを目で追って、クウェンサーは我に返った。

「駄目だ、ヘイヴィア！　殺しちゃ駄目だろ!!」

「あ？　何だって!?　爆音で聞こえねえよ!!」

「殺すなってー!!」

偽装巡洋艦のサイドデッキ上に立ち並ぶ二〇ミリのガトリングガンが一斉に火を噴き、クウェンサーの頭上を飛び越える手製の対艦ミサイルを撃ち落としていく。返す刀で垂直発射ミサイルがいくつも海賊の漁船へ飛んでいった。ヘリポートからは、やかましいローター音を発しながら軍用攻撃ヘリが飛び立とうとしていた。

一方の海賊達は『スカーレットプリンセス号』の針路を阻むよう半円状の包囲網を築いていたが、これはもちろんこちらの戦力を測り間違えたために選択した自殺同然の布陣だった。報告では一五隻前後という事だったが、すでに半数近くが沈んでいる。

あちこち忙しく、見ているだけで目と頭が疲れてくる。

おまけに黙っているだけで難聴になりそうな劣悪環境だった。

クウェンサー達を乗せたエアクッション船がその場を離れると、ついさっきかち合った海賊の高速艇が空中からの攻撃で空き缶のように吹き飛ばされ、海の藻屑と化していく。

耳鳴りが止まらないまま、クウェンサーは間近のヘイヴィアへ大声で叫ぶ。

「殺すだけなら艦砲射撃があれば十分だ！　わざわざ俺達が外へ放り出された理由は別のところにある!!　作戦前会議ブリーフィングで説明受けなかったっけ!?」

「おっ？　おーおー！　あったっけそんなの!!」

「連中が中古の巡視艇じゃなくて自前の漁船を使っているのは、ヤバくなったら海へ武器だけ捨てて無害な漁師のふりをするためだ！　黙って皆殺しにすると民間人虐殺の疑いを持たれてしまう。だから何人か生け捕りにして、私は海賊ですって吐かせなくちゃならない。そういう話だったろ!!」

「つまりあいつらが石投げて落とした蜂の巣を素手で拾ってこいって話じゃねえかよ！　くそったれ、やっぱろくでもねえ仕事だぜ!!　勤務外手当は出るんだろうな!?」

戦況はどうやったってひっくり返らない。

こうしている間にも射撃音と爆発音が連続していた。

艦砲の速射砲や攻撃ヘリのロケット砲が、海賊達の船を一方的に吹き飛ばしているのだ。

「二隻！　また味方が二隻やったぞ。くそ、さっさと海賊捕まえないと全滅しちゃうってば!!」

「うるせえな!!　ならテメェが向こうの漁船に飛び乗って首根っこ掴んできやがれ!!」

敵の海賊は一〇メートル程度の漁船を改造した高速艇が、ぽつぽつと残っているだけ。『正統王国』海軍フル装備、ほぼ四〇〇メートルに届く大鑑巨砲主義の塊みたいなスカーレットプリンセス号が沈む事はもうありえない。

だが一方で、窮鼠猫を噛むというか、一矢報いるくらいなら、まだありえる。

あの漁船には手製の対艦ミサイルが搭載されているのだ。空気の力で浮かぶエアクッション船の一隻くらいなら吹き飛ばす事だってできるだろう。

「ていうか、怖え、怖え!!　真上をミサイルが突き抜けやがった!!　近接防御の支援はどうなってんだ!?」

「磁気に反応して起爆するタイプか？　こいつは積層プラスチックの船体に合成繊維の風船だから、すり抜けられたのかもしれない……」

「くそ、今さらサイドデッキのガトリングガンがこっち向きやがったぜ。……ん？　こっち？？？」

「ふっ、伏せろ!!　あと舵切れ！　味方の弾幕で蜂の巣にされるぞ!!」

ヴ――――ッッッ!!!!!!　と、壊れたブザーのような射撃音と共に、海面から数メートルの高さを飛ぶ対艦ミサイルを捕捉したＣＩＷＳの列が毎分五〇〇〇発もの勢いで巨大な鉛弾を撒き散らす。二〇ミリ、と言えば親指大の金属塊。俗に言う対物ライフルで使われる弾丸よりもずっと大きい。一発でも掠ったら冗談抜きで手足が飛ぶ。

「……一発のミサイル落とすためにあんなにやらなきゃいけないんだよなあ。オブジェクトのレーザービームが使えれば話も変わってくるんだろうけどさ、攻守のバランスって何なんだって話だよ」

「この状況で何でまた鼻息荒げ始めてんだよ!?　命の危機に見舞われると種の保存の本能が働くみてえな感覚で設計バカの血が騒ぎ出すとかじゃねえだろうな!!」

「え？　流石にメカと性欲は組み合わさないよ。兵器の擬人化少女って冷静に考えてみるとちょっとグロめな成分があると思うの」

「そこは『装着してる』で良いんだよ!!　『外科手術的な切り貼り』はあんまり考えんな!!」

馬鹿二人含む総勢三〇名の乗るエアクッション船の後部には、直径二メートルほどの巨大な送風機に似た動力機関が三つほど取り付けられていた。その内の一つが（味方が放った近接防御の弾幕によって）不気味な黒煙を放っている。

「あれ海賊にやられた事にしてみんなで負傷手当提出しないか？　ボーナスくらいもらったってばちは当たらないよ」

「でもそれやったら素人集団相手に深手を負った事になっちまうぜ。不名誉だ」

そうこうしている内に決着がつきそうになっていた。

途中から大空へ解き放たれた攻撃ヘリがハッスルし過ぎているらしい。雨のように降り注ぐ対地ロケット砲が、周辺の海水ごと小さな漁船を爆炎に包み込んでいく。

呑気に青い空を見上げていたクウェンサーが、ポツリと呟いた。

「おい、ヤバいんじゃないの？　もうそろそろ海賊の漁船が全部沈んじゃうぞ」

「生け捕りの話はどこ行っちまった!?　私は海賊ですって吐かせねえと民間人虐殺の罪を押

し付けられんだろうが!!」

馬鹿二人はあっちこっちを見回すが、辺りの海には不気味な黒煙が立ち上り、今まさに沈みつつある藻屑がちらほら覗けるだけ。もはや『戦っている』という感覚はほとんどなかった。まるで宝探しか何かだ。

「いた!!　あそこ、黒煙の陰にもう一隻、漁船がある。あれ取り逃がしたら生け捕りコースは諦める羽目になるぞ!!　国際会議でニヤニヤ笑いの吊るし上げだ!!」

バタバタバタ!!　とクウェンサー達の頭上を攻撃ヘリが勢い良く突っ切った。明らかに同じ標的へ襲いかかろうとしている。

ヘイヴィアは思わず額に手を当てて、

「向こうのパイロットは臆病者か!?　目についた脅威は全部取り除かねえと安心できねえってタイプらしい。高速で飛び回るヘリなんて海賊どもに落とせる訳がねえのに!!」

「どうするんだよ。ここで生け捕りに失敗したら、軍法裁判で交霊術を試さなくちゃいけなくなるぞ」

「ああもう!!」

ヘイヴィアはヤケクソ気味に叫ぶと、エアクッション船の操舵を担当する若い兵士へ叩きつけるように言う。

「漁船に向かって全速力で突っ込め！　……なんてこった。敵の命を守るために体張らなくち

やならないなんてよ!!」

「だから具体的にどうすんの!?」

「そりゃもちろん」

ヘイヴィアは何故かライフルと一緒に肩へ下げていた携行型ミサイルの安全ピンを外すと、それを肩に乗せて構え出した。陸は戦車、海は小型巡視艇、空は対地攻撃機まで。値段が高過ぎる事を除けば傑作と呼ばれるミサイルだ。

「味方のヘリとかち合うしかねえだろ」

躊躇はなかった。

赤外線と紫外線で同時に相手を捉えつつ、ヘイヴィアは引き金を引く。

ボシュッッッ!!　という発射音と共に細長いミサイルが槍のように飛び、ヘリのすぐ横を突き抜けていった。

損害なし。

いや、至近でバックファイアに巻き込まれたクウェンサーが真後ろへ吹っ飛ばされていた。カンフー映画のザコキャラみたいに、そのまんま二、三メートルは飛ばされる。

「熱っ!!　熱っつ!?　な、何が起きたんだ？　敵襲!?」

「……ま、元気なら良いか」

エアクッション船に同乗する全ての兵士達がヘイヴィアに注目していた。味方を撃つのか？

と彼らの目は疑問を投げかけていた。

「本気で狙ってりゃあとっくに落ちてる！　わざと狙いを外して撃ったんだ。もっとも、怖がりな向こうのパイロットは気づいてねえだろうがな!!　死にたくなけりゃ構えろ!!」

驚いたように今さら小刻みに回避挙動のようなものを取った攻撃ヘリが、鋭角な挙動で旋回を始める。明らかにこちらを警戒している動きだ。相手がパニックに陥っている場合、そのまま攻撃を受ける恐れがある。極端に寝不足の兵士が銃声の渦に巻き込まれた時、どちらが味方の銃声か分からなくなってしまうのと同じだ。

ヘイヴィアはヤケクソ気味に叫んだ。

「時間は稼いだ、十数秒だけな！　そのまま漁船に突っ込め!!　一人でも生け捕りにできりゃそれで良い!!」

最後に残った一隻の漁船へ、一直線にエアクッション船は向かっていく。その間、ヘイヴィア達はアサルトライフルを上方に向け、味方の攻撃ヘリにひたすら連射を続けていた。一面がオレンジ色の火花で埋め尽くされていく。

「きちんと整備してりゃ、ライフル弾程度は弾き返すだろうさ」

ドガガガガガガ!!　と。

ひたすら無駄弾を撃ちながら、ヘイヴィアは薄ら笑いすら浮かべていた。

「だが臆病者には分からねえ。死にたくねえ一心でパニクって作戦内容を忘れちまうような

野郎だ。必死になって豆鉄砲を回避してくれるはずだ」

漁船を改造した高速艇に、真横からエアクッション船が接触した。

厳密には、衝突とは違う。

エアクッション船は空気の力を使って海面から浮かび上がっている船だ。そして空気を溜め込むスカート部分は、防弾防刃用の合成繊維でできた巨大な風船。

真っ向から衝突するのではなく、エアクッション船が乗り上げた。

ぼこんっ!!　と。

高速艇の甲板に立っていた海賊の男一人を、そのまんま海上へ突き飛ばすような格好で。

スカート部分が柔らかい風船だったのは、どちらの陣営にとっても幸運だっただろう。手足をバタバタ振ったまま、数メートルも水平へ投げ飛ばされた男は小石のように海面へ叩きつけられる。

同時に、漁船とエアクッション船が交差したそのポイントへ、天空からロケット砲弾が降り注いだ。

爆風に、『正統王国』軍の兵士達も空中へ投げ出される。

だが戦意は衰えない。というか、完遂しない限り炎と黒煙の海から帰れない。先に海へ落ち

た海賊の上に、得体のしれないプロレス技のように何人もの兵士達が飛びかかっていく。
鈍い音が何度も炸裂した。
塩辛い潮水の中に頭まで突っ込まされた海賊がもがき苦しむ。
クウェンサーとヘイヴィアは海賊の襟首を掴んで海上へ顔を引きずり上げた。
耳元で、怒鳴りつけるように叫ぶ。
「ここで水を使った『尋問』されたくなけりゃあ！　さっさと全部吐きやがれ!!　私は皆々様に迷惑をかけたクソったれの海賊様ですってな!!」

4

そんなこんなで。
途中で海賊掃討なんていう『寄り道』に付き合わされたものの、クウェンサーやヘイヴィア達、第三七機動整備大隊の本来の目的は別にある。
そもそも、馬鹿達は整備大隊の先遣隊としてマラッカ海峡へやってきていたのだ。機雷、重油攻撃、スクリューへの投網攻撃、そして前述の海賊。これくらいなら『軍』ではなく『民』でも行える。万に一つも艦船に損傷がないよう、整備大隊の大船団が通行する前にあらゆる脅威を取り除いておいた、という訳である。

つまり、今回の獲物はそれくらいヤバい。
オブジェクトとオブジェクトの戦いが全てを決める時代に、たった一隻の後方支援艦さえ失いたくないほどの。
「……ホントに来ちゃったよ」
目的地は一つ。
極東の洋上に浮かぶ、オブジェクトの始まりの地。
現在は『資本企業』の一角。アジア圏海洋戦力の要となるポイントの一つ。
「『島国』だってさ。大丈夫なの？　世界で初めてオブジェクトを送り出した職人達の楽園って話だし、何より和食で有名なヘルシー大国だよ？　もう一二等身くらいのムキムキマッチョが得体のしれない新兵器満載で襲いかかって来たりしないだろうね」
うんざりしたように言うクウェンサーが佇んでいるのは、小型空母の甲板だ。航空機の離発着よりも、オブジェクトを挟み込んでの整備用スペースを確保する意味合いの方が大きい。
やる事がないのか、甲板の縁に腰掛けているお姫様が、ぼんやりとした瞳をクウェンサーの方へ向けた。
「今回のしごとは、そんなにあぶないものじゃないってフローレイティアはいってた」
「……あの人は有能なんだけど、口約束については大体信用ならないんだけどな。だって『島国』だよ？　『資本企業』の一角なんて言ってるけど、兵器開発関連の技術レベルはズバ抜け

てるっていうか、ズバ抜け過ぎてガラパゴス化してるって話じゃん。当然、オブジェクトだって」

「そもそも、まっこうしょうぶにはならない」

「ああ、確かに向こうも向こうで揉めているとかいう話はあったけどさ……」

クウェンサーは軽く息を吐いて、

「元々、『資本企業』は完全ＰＭＣ制で軍隊さえ上場企業として扱われているようなイカれた勢力だけど、近年激化する争いに、各大会社がバラバラに拠出する軍隊だけじゃ戦力不足になってきた。だから、ほとんど半公共化の自防ＰＭＣって枠組みを新設して、海上警備を一気に強化しようとしたんだけど……」

「その自防ＰＭＣがかってにぼうそうしたおかげで、『島国』のうみはないせんじょうたいになってる」

「……世界各地で不名誉除隊されて腐ってた寄せ集めの兵隊を万単位用意して、最新鋭の武器を渡したらどうなるかなんて目に見えているだろうに。完璧に油断しきっていて、オブジェクトまで明け渡したんだろ？　何なの？　自殺がしたかったの？？？」

「こうれいかしゃかいが広がっているんだから仕方がないよ。わかものがいないんだもん」

「人手が足りないのは分かるけど、小遣い稼ぎ感覚で外からやってきた人間が命を懸けて最後の最後まで国を守るなんて、一体どうやったらイメージできるんだ？？？」

クウェンサー達が所属している『正統王国』軍の戦略シミュレートでは、この内戦は長くは続かないと予測されている。自防ＰＭＣの戦力は侮れないが、彼らはオブジェクト含む兵器を貸与されているだけで、独自に整備や生産ができる状態ではないのだ。おそらく補給もままならない。備蓄が切れた瞬間から嬲り殺しの憂き目に遭う。

結果、保っても二ヶ月、下手すれば数週間という数字が弾き出される。ただし、その間は『島国』周辺の防衛態勢が手薄になるのは間違いない。混乱に乗じて、普段は進めない場所まで切り込み、普段はできない事をやってのけるのも夢ではない。

お姫様は唇を尖らせて、

「……『資本企業』のケンカなら、わたしたちが介入するひつようなんてないのに。かってになぐり合っていれば良い」

「河原で殴り合って仲直りされても困るんだろ。だから俺達が脇腹をしっかり刺して、再編入不可能な事態へ持ち込む。殺せる敵は殺せる内に殺しておけば、別の戦場でうっかり遭遇なんて間抜けな目に遭わずに済むんだし」

そこまで言った時、整備大隊全員の無線へ同時に連絡が入った。

現場司令官のフローレイティアからだ。

『お前達。これから「島国」を切り崩すための作戦前会議ブリーフィングを行うぞ。総員、搭乗艦の会議室へ集合。モニター越しに説明を行う。……あと飛行甲板でバスケやってる馬鹿

者達。海へボール落としたヤツは責任を持って今すぐ崖から飛んで回収する事。軍の備品だぞ、損失は許さん。以上よ』

5

「見ての通り、現在『島国』の海は内戦状態にある。この混乱した状況を利用して、普段の警備状況では入り込めない深部まで潜り込み、威力偵察と破壊工作を行うのが今回の任務だ」

檀上で、スクリーンに表示された海図にいくつかの矢印を追加させながら、フローレイティアはそう告げた。

「自防ＰＭＣのネックは補給線で、スパコンを使った戦略シミュレートではこの内戦、ガス欠によって早期決着するものと推測されている。『島国』を治める大会社側も、特にこいつを重要視して破壊作戦を決行するだろう」

スクリーンに映し出されているのは、『島国』南洋にある諸島だ。そこには本来ない島がある。人工浮揚島。巨大なフロートを組み合わせて造られた、自走も可能な工業製品の島だ。

形は……一二角形を中心に、各頂点から木の枝のように港湾ドックが広がっていた。

全体的なシルエットは、船の舵を切るのに使うハンドル状の『舵輪』のように見える。

直径はおよそ二〇キロ強。財力を操る巨大な舵輪だ。

「海底資源採掘用人工浮揚島あめのだりん。こいつが自防ＰＭＣ側の補給と備蓄の要ね。太平洋の深海で石油や鉄鉱の脈が次々と発見されてから、『島国』は一等の資源大国に変貌した。おかげで環境遺産は油まみれになってしまったが。こいつがある限り、自防ＰＭＣは弾薬や燃料には困らない。外貨に換金できれば食料も密輸できるだろう。まさしく戦争の中心軸だ」

フローレイティアはペンライト型のレーザーポインターを使って、スクリーン上の資料のあちこちを指し示しながら、

「元々こいつは『島国』の軍用備蓄基地として機能していた。燃料と弾薬の宝庫で、建設当時から警備を一任されていたのが問題の自防ＰＭＣ。ヤツらは内戦開始と同時に『あめのだりん』を丸ごと乗っ取ったって寸法だ。平時の備蓄分だけでも九〇日は戦えるし、海底資源の採掘と精製機能をフルに使えば、燃料も弾薬も無尽蔵に生産できる。金喰い虫ならぬ人喰い虫ってところかな」

「質問です」

クウェンサーは手を挙げてから発言した。

「……その、俺達って『あめのだりん』を潰す側？　潰して何のメリットが？？？」

「良い質問だ学生。そして人の話は最後まで聞け」

フローレイティアは細長い煙管を軽く咥えてから、

「今回の我々の任務は、『あめのだりん』周辺の掃海。および内部に潜入するであろう破壊工

作要員の物理的排除だ。大規模な破壊作戦のスケジュールを傍受したので、こいつの出鼻をくじく。平たく言えば、頼まれていないのに『あめのだりん』を勝手に防衛する。……何故なら、そっちの方が内戦は長引いて、『島国』全体に大きな経済的損失を与えられるからだ。異論がある者は？」

……外道極まりない作戦だが、そもそも彼らは戦争中で、博愛精神や世界平和に興味はないのだ。『安全国』に分類される『島国』へ直接乗り込み、非戦闘員の一般市民を虐殺するとかいう話は問題外として、率先して内戦を早期解決し、洋上展開されているオブジェクト含む『島国』の機動艦隊を守る理由は特にない。その場合、内戦終結で余った残存戦力は全て自分達へ突き付けられる羽目に陥る。

そんな折、ひょい、と小さな手が挙げられた。

お姫様のものだ。

「となると、わたしがたたかうのは？」

「孤立無援の自防ＰＭＣ側のオブジェクトだと思ったの？　だが違う。圧倒的戦力を持つ、本来の大会社側だ。倒せる敵を自由に倒せる環境なら、より強い敵を倒せるように動いた方がのちのち効果的だ。内戦を長引かせつつ、将来のライバルを早い内に摘んでおく。分かっていただけたかな？」

敵を守るための戦争。

孤立無援の弱い側に助太刀するための戦争。

……そう言葉にすると西部劇のガンマンみたいに聞こえるが、根底にある信条がここまで歪んでしまうのは、やはりステンドグラスのように砕け散った世界特有のものか。

「では始めるぞ。こいつはあくまでも『正統王国』の利に適う戦争だ。『資本企業』の正義なんぞ知った事か。憧れの『島国』の実像がどんなものか、お手並み拝見と行こうじゃないか」

6

そしてクウェンサーとヘイヴィアの馬鹿二人は、他の兵士達と同様に潜水艦の魚雷発射管の中に詰め込まれていた。一人一本。感覚的にはほとんど棺桶と変わらない狭苦しさだ。ダイバースーツや酸素ボンベなどのせいで余計に窮屈に感じられる。

『ばっかじゃねえの？　もはや職業差別だ!!　俺はレーダー分析官だぜ。ボンベと水中銃抱えて魚雷発射管から出発進行なんて間違ってる！　軍の誓約書にこんな事までやるって書いてあったとは記憶してねえぞ!?』

「うるさいよヘイヴィア。潜水艦は音が全てなんだ。ぎゃあぎゃあ騒ぐと敵艦に気づかれる」

『上等だ！　ここは一発、盛大な屁でもかまして連中の顔をしかめさせてやる!!』

「密閉空間に閉じ込められているんだ。自分のケツの穴を呪う事になるからやめなって」

無線でつまらない事を言い合っていると、クウェンサーが詰め込まれた棺桶の内部が赤い光で満たされた。魚雷管が開く合図だ。

火器管制官から見送りの挨拶が耳に入る。

『呑気なヒヨコども。クソを垂れるのは人間の尊い自由意思に任せるが、そいつは艦を離れてからにしろ。ロックンロール！』

『ちくしょう、嫌がらせに目覚まし時計でも投げ込んでおくべきだったか!?　ああん!?』

文句が出た瞬間に魚雷発射管の外側の扉が開放され、勢い良く海水が流れ込んできた。クウェンサーは流れに逆わらず、発射管が完全に海水に満たされてから、ゆっくりとした動きで潜水艦の外へと抜け出していく。

『ヘドロと油だらけ……。海底油田を造ると必ずどこかから重油が漏出するって話は聞くけど、すごいなこりゃ。バーナーで火を点けたらそのまんま海が燃えそうだぞ』

『エコと資源を秤にかけて、金になる方選んだ弊害だろ。俺らの知った事じゃねえよ』

『あのでっかい塊なに？　新手のミュータント？』

『油分の塊だろ。下水とかに転がってんのと同じだ。巻き込まれると身動き取れなくなっちまうぞ』

クウェンサーとヘイヴィアを含む一〇人の兵士達は、モーターのついたビート板のような機材を両手で持って、暗く光の遮断された海を進んでいく。目指すは長ったらしい冠のついた

『あめのだりん』だが、当然、内戦の混乱期とはいえ、そう簡単に進めるほど甘くはない。

何か、数メートル大のブヨブヨしたシルエットがいくつも見えた。

油の塊の中に細長い鋼の円柱……魚雷らしきものが突き刺さったままだと知り、クウェンサーの背筋に冷たいものが走り抜ける。

ヘイヴィアの方は冷静だった。

『「資本企業」のスマート魚雷だろ。内戦中でどっちが撃ったもんかは知らねえが』

『お、おい、ここすり抜けていくのか？　爆発したら挽肉になっちゃうよ』

『スマートっつってんだろ。ネット経由で随時更新される敵艦の音紋以外にゃ反応しねえよ。人間を殺すためのもんでもねえし』

『……そんなものなのか？』

『一発二万ドルらしいぜ。小魚のちょっかいで爆発したら大損だろ。重要目標だけに正確な反応を示すように調整されてんだ』

『でも不発弾じゃん！　信頼性なんかないよ』

先行するヘイヴィアにガイドされるように、おっかなびっくりクウェンサーは油の塊とスマート魚雷の間を縫って泳いでいく。

その時だった。

ゴウンゴウンゴウンゴウン、とコインランドリーをもっと大きくしたような、轟音とも震動

とも受け取れる何かが近づいてきた。
それは馬鹿二人の真横をゆっくりと通過していく巨体だった。
どこかの潜水艦だ。
クウェンサーは思わず目を剝いた。
『おいふざけんな!!　今、まさに今!!　不発弾の魚雷の横を通り抜けている最中だよ！　あの音紋に反応したら俺達も吹っ飛ぶぞ!?』
『つーかそれどころじゃねえぞ!!　どこの艦か知らねえが、スクリューが生み出す水流に体を持っていかれる……!!　どっかに摑まらねえと吸い込まれてズタズタにされちまう!!』
『摑まるって言ったってどこに……!!』
ぐん!!　と体を引っ張られるような感覚に、本能的な怯えが生じた。とっさに、近くにあったものへクウェンサーはしがみついてしまう。
油分の塊から突き出た魚雷だった。
『きゃーっ!!!!』
もう戦術的思考とか三千世界の彼方へ吹っ飛んでしまった。とにかく爆発しない事を祈りながらプロパンガスのボンベみたいなのの本体へ体を預ける。
『もう駄目だ、ちびる！　今回ばかりはホントにちびる!!』
『うるせえな!!　プールで小便するのと似たようなもんだろ！　ガタガタぬかすんじゃね

え!!』

『そんな事してみろ、ダイバースーツの中がたっぷたぷになっちゃうよ！　逃げ場のない自家生産の地獄だ。自殺ものの恥なんか抱えたくない!!』

王と騎士の国の若者達は、小学生並のプライドを守るため決死の我慢を実行する。

ゴン!!　という嫌な音が響いた。

『今度は何だよ!?』

『漂う油の塊に潜水艦が衝突しやがった!?　こっちに突っ込んでくるぞ!?』

艦首を中心に、バットでも振り回すように巨体が回転する。クウェンサー達のすぐ近くを草刈り機のようにスクリューが通過していく。

『……危ねえな、くそ。どっちの艦か知らねえが、巻き込まれたら全滅だったぜ』

『助けなくて良いの、あれ？』

『どうやって？　つーか、どっちだろうが敵の船だろ？』

顔と言わず全身気持ちの悪い汗まみれだが、両手を使って拭う事もできないのがもどかしい。

クウェンサーとヘイヴィアを含む兵士達は慎重に油の塊の横を通り抜けていき、他の艦から出てきたであろう別働隊と合流を果たしていく。

最終的に一〇〇人前後に膨れ上がった『正統王国』軍の兵士達は、『あめのだりん』を目指して泳いでいく。

『あれか？　すごいな、あんなデカいものが浮かんでいるなんて……』

『つまり、それだけ無茶してるって事だろ。絶対に環境汚染の親玉だぜ。アメコミだったら悪の秘密基地になってそうだ』

海中から見上げる『あめのだりん』のイメージは、どこまでも広がる巨大な天井だった。ひっそりと潜入するため人工浮揚島の真下へ向かう必要があった訳だが、海の中において『上を塞がれる』というのはなかなかに圧迫感があった。ボンベにトラブルがあった場合、もう逃げ場はない。確実な死が待っている。

『行こうぜ。目指すは水害時の緊急排水ポンプだ。普段は動いてねえから、そこから逆流してフロートの中まで潜り込める』

『……気づかれたら終わりだよ。スイッチ一つで毎秒七トンの海水をいつでも放出できるんだから。排水溝に流れる昆虫の気分を味わう羽目になる』

いくつかのセンサーを工具で潰し、金網状の蓋を取り外すと、クウェンサー達は順番に排水ポンプから内部へ潜入していく。配管と言っても直径は二メートル以上あるから、移動には困らない。

ポンプの巨大装置から『あめのだりん』の予備機関部へと入り込んだクウェンサー達は、ようやくダイバースーツを捨てて重たいボンベを肩から下ろす事ができた。

「おい、小隊長はどこ行きやがった？　あいつがいねえと話にならねえぞ」

呆れたようにヘイヴィアが言うと、近くにいた女性兵士がこんな言葉を返してきた。

「どこかではぐれたみたいね。無線も応答なし。合流するまで待ってみる？」

「いいよ面倒臭せえ！　そいつ確か『スカーレットプリンセス号』ではしゃいでたヤツだろ。あんなのと一緒に心中するなんてごめんだぜ。そもそも一〇〇人以上の大所帯をいつまでも隠せる訳ねえだろ。お調子者を待ってる間に爆弾でも投げ込まれたら一網打尽になっちまう」

「あのー、ヘイヴィア。ここは一応敵地なんだけど、小隊長捕まったらまずい事になるんじゃないの？」

「味方にも見つけられねえようなヤツが敵から見つかる訳あるか。つーか、正直に言ってテメェらもイラついてたんじゃねえの？　先生怒らないから手を挙げてごらん」

優等生達は誰も手を挙げなかった。

ヘイヴィアは質問を変えた。

「黙っていても自分の判断で勝手に潜水艦へ帰る小隊長サマに義理立てして全員爆死するか、今のままでも作戦を継続させてみんなで生きて帰るか。生き残りたいヤツは挙手を」

馬鹿どもは全員揃って手を挙げた。

方針は決まったようだった。

『あめのだりん』はちょっとした島に匹敵するサイズの巨大フロートだが、屋内施設であるのは変わりがない。一〇〇人単位の大人数を一箇所に留めても通路でぎゅうぎゅう詰めになるだ

けだ。部隊を一〇人ごとに分けて、バラバラの順路を進み、複数の方角から敵を狙った方が効果的である。

そんな訳で班分けの時間だ。

クウェンサーは片手を挙げた。

「俺はガイドさんの指示に従うけど、誰が先頭に立つ訳？」

「そりゃテメェ、階級順に決まってんだろ」

ヘイヴィアは適当に言ったが、全員の注目を浴びた新入りの少尉がぶるぶるぶる!!　と首を横に振った。顔も真っ青になっている。

女性兵士はうんざり気味で、

「駄目そうね」

「じゃあ履歴に頼ろうぜ。経験と実績順だ」

ヘイヴィアがもう一度言うと、全員の視線が馬鹿二人に向いた。

言うまでもない事だが、実績だけなら複数のオブジェクトを生身で撃破してきた彼らがトップランカーだ。……功罪が共に激しいため、総合評価は地均し状態ではあるのだが。

「……マジかよ」

「ぐだぐだ言っていると敵に見つかって先制攻撃を受けるんだろ。とにかく動こう」

そんな訳で方針が決まった。

クウェンサー達以外は実戦参加回数を基準に一〇人ごとの最小単位を束ねるリーダーを設け、行動を開始する。

「ここに戻って来られる保証はどこにもねえ。いつどこで海へ飛び込む必要が出てくるかも分かったもんじゃねえ。多少かさばってもダイバースーツとボンベはまとめて抱えていくしかねえな」

「敵さんはどこからやってくるんだっけ？　この『あめのだりん』ぶっ潰して自防ＰＭＣの補給線を断ち切ろうとしている破壊工作要員っていうのは」

「味方の識別信号を悪用して輸送ヘリから堂々と、だ。そろそろ時間だぜ。このままヘリポートを目指そう。どうせ途中のどこかでターゲットとかち合うだろうさ」

「……質問なんだけど、『あめのだりん』を守る自防ＰＭＣと破壊工作要員ってどうやって見分ける訳？　どっちも同じ『資本企業』の『島国』装備だと思うんだけど」

「見分ける必要なんかあんのかよ？　どっちも敵なのは変わらねえだろ」

7

南の島の近海に、海戦用のフロートを取り付けた『ベイビーマグナム』が解き放たれた。

大規模船団の小型空母。飛行甲板の上で待機している整備兵の婆さんの本来の仕事は、『ベ

イビーマグナム』が帰投した際に迅速かつ正確に機体の整備や修復を行えるよう待機している事なのだが、今回ばかりは事情が違った。

アヤミ＝チェリーブロッサム。

サクラの名を冠するファミリーネームの通り、彼女は『資本企業』の『島国』からの亡命者である。そして亡命前から技術者であった事から、今は敵対する『島国』側のオブジェクトの戦力調査に駆り出されている。

B5くらいのタブレット端末に表示された、衛星画像や前線の観測手が撮影したビデオ映像などを眺めながら、ヘッドセット越しに『ベイビーマグナム』を操るお姫様と言葉を交わす。

「出た出た。『あめのだりん』の周りには二機のオブジェクトが確認されている。片方は『島国』が内戦早期終息のために正式派遣している第一世代の『ゆうひ』。『正統王国』が定めた敵性コードだと『ビーアブレイズ』だったか。文字通りの火の海を生み出すオブジェクトじゃな」

『……だい1せだい？』

「『島国』特有のもったいない精神じゃな。向こうは完全な新兵器開発よりも古い機体のバージョンアップの方が得意なんじゃ。型遅れの戦闘機にカメラを積んで、偵察機としてしつこく使い回したりな。分類自体は第一世代でも、現役についてこれるように中身はガラリと入れ替わっている。ナメてかかると沈められるぞ」

【ビーアブレイズ】
BE ABLAZE

全長… 85メートル

最高速度… 時速650キロ
(左右への側面回避挙動を得意とする。前進だと半分程度)

装甲… 5センチ×200層(溶接など不純物含む)

用途… 水陸両用第一世代

分類… 戦略防衛兵器

運用者… 『資本企業』の『島国』

仕様… エアクッション

主砲… コイルガン+レールガンの多段式加速砲

副砲… レーザービーム、連速ビーム砲、火炎放射器など

コードネーム… ビーアブレイズ
(近接防御システム『火遁の衣』によって戦場を火の海に変える事から。なお、『資本企業』の正式名称は『ゆうひ』)

メインカラーリング… 赤銅色

『でも、1ばんのぶきは「かえんほうしゃ」なんでしょ？　かくへいきにもたえるオブジェクトのきょういになるとはおもえない』

「あれは『火遁の衣』と呼ばれる近接防御用の兵装じゃ。辺り一面に重油やナパームをばらまいて火の海に変えてしまうが、対人効果の他に黒煙や蜃気楼によって照準情報を誤魔化す意味合いが強い。レーザー誘導なんてあてにならないと思った方が良い。本体に辿り着くまでに温度層の違う蜃気楼が何重にも仕掛けられているから、光は屈折しまくって使い物にならない」

もっとも、現在『島国』の海は内戦状態に陥っていて、二つの勢力が激突している。

お姫様が狙うのはその内の片方であり、『ビーアブレイズ』は最優先撃破目標という事になる。とはいえ、もちろんこれだけを集中していれば良いほど状況は単純ではない。『海の内戦』にはもう一つ、巨大な敵が別にいる。

『あめのだりん』を補給拠点にする自防ＰＭＣ側が操るオブジェクト。

反逆の象徴。

「もう片方は『にんぎょ』。『正統王国』の敵性コードは『マッドクッカー』になる。こいつはソルトレールガンを搭載した第一世代じゃな。当然、独自の改良をさんざん重ねているから、実際には第二世代を蹴散らすほどの戦力を備えているはずじゃが」

『ソルトレールガン？？？』

「低温超伝導の兵器化が実現する前の主流派じゃよ。溶融塩と呼ばれる液体を利用している。

【マッドクッカー】
MAD COCKER

全長…75メートル

最高速度…時速580キロ

装甲…2.5センチ×400層(溶接など不純物含む)

用途…海戦専用第一世代

分類…海洋長距離侵攻用兵器

運用者…自衛PMC

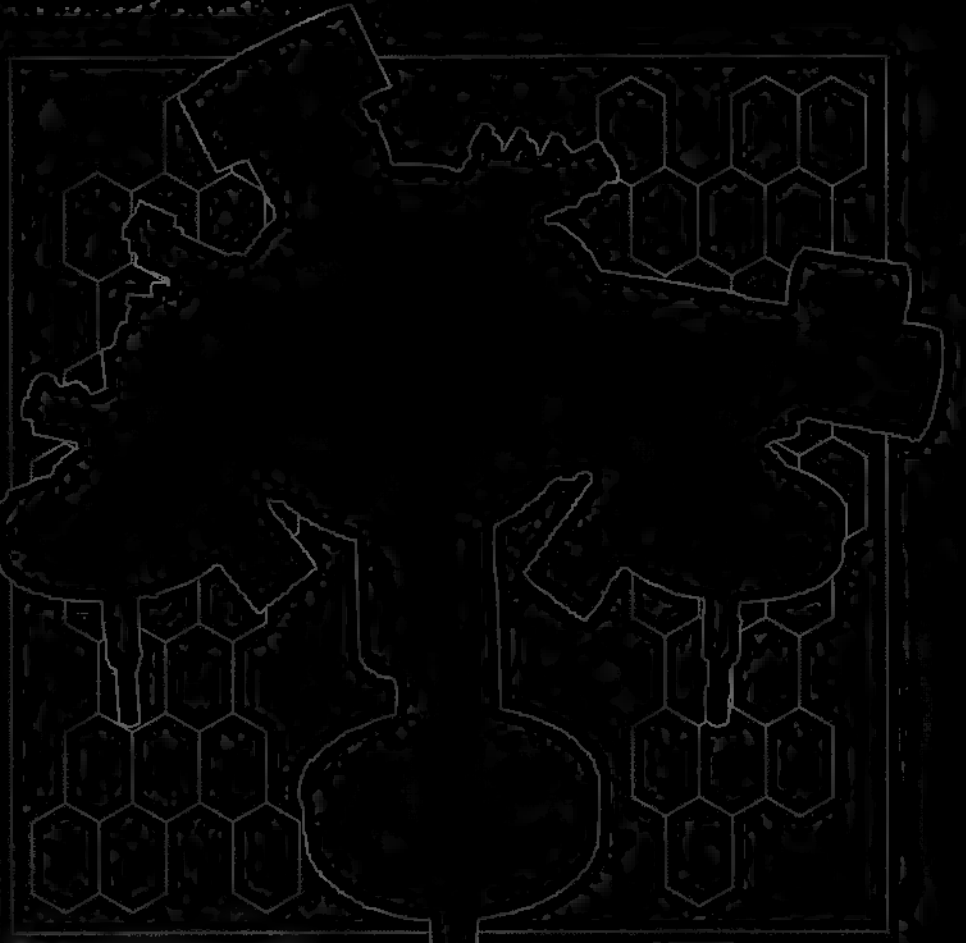
仕様…静電気式推進+海戦用フロート

主砲…ソルトレールガン

副砲…レーザービーム、下位安定式プラズマ砲など

コードネーム…マッドクッカー
(塩を利用した主砲システムを調理機材に見立てたもの。
「資本企業」の正式名称は『にんぎょ』)

メインカラーリング…白



MAD COCKER

塩そのものを一二〇〇度で熱して液化させると、単なる塩水の一〇倍以上の導電性を実現できるからな。こいつを使って安価で原始的なレールガンを構築する事もできるという訳じゃ」

当然、その原材料は足元の海からほぼ無尽蔵に手に入れられる。

規格外の動力炉があれば、竈の方も心配はいらない。

時代遅れのソルトレールガンが今日まで研究され続けているのも、海に囲まれた『島国』が継戦能力向上を狙っての事だろう。

「現バージョンでは砲弾の方も九〇％以上は塩をベースに導電性を確保したものじゃ。砲弾の核は中央を通るタングステンの細長い杭『うしのこく』のみ。発射と同時に塩の塊は粉々に砕け散り、全運動エネルギーを託されたタングステンが一気に敵機のタマネギ装甲を貫徹する仕組みじゃな。旧来の戦車砲の仕組みを今でも応用している辺りも、『島国』特有のもったいない精神によるものか」

海中に溶ける鉄分やレアメタルをフィルターで吸着・凝縮できる技術さえ獲得できれば、正真正銘、完全な無補給での恒久戦闘も夢ではなくなる。単騎での交戦能力というよりも、実証研究の面で極めて危険な意味を持つオブジェクトである。

「分かっていると思うが、メインで狙うべきは大会社が正式派遣した『ビーアブレイズ』。内戦状態を長引かせて経済的に疲弊させるなら、弱い方を守って強い方を攻撃し、できるだけ両者の戦力を均等に近づけるべきじゃからな。しかし踏み込み過ぎると『資本企業』の二機が結

託して『正統王国』の排除へ乗り出す恐れがある。……つまり、無理して倒しに行く必要はない。遠くからチクチク狙撃していって、三機が三機とも様子を見なくてはならないこう着状態を作り出すだけでも十分に損耗は与えられる」

現代の戦争はオブジェクトの数で決まる。

一対一なら真っ当な戦闘に突入するが、一対三なら戦う前から迅速に撤退する。

……そうした前提だと、『どっちにつくか分からないオブジェクト』が紛れ込むのは、『島国』側にとってとてつもない圧力となるだろう。

普通なら『正統王国』が攻めてきたら『資本企業』は協力してこの対処にあたるべきだ。

だが内戦状態で相手の事は信じられない。

結託しようと言った舌の根も乾かない内に脇腹を刺されたら、一対二の不利な状況での戦闘を余儀なくされる。

そうした恐怖が、戦場を縛り付ける。

『りょうかい。10キロけんからのえんきょりほうげきにてっする』

「我々は勝負を決するどころか、最後まで付き合う必要さえない。大企業側が行う大規模な『あめのだりん』破壊作戦の出鼻さえくじければ、後は撤退して安全に対岸の火事を眺めるだけで良い。長期化した内戦は経済面から深刻なダメージを与えるじゃろう。所詮は『資本企業』の中のゴタゴタだ。儂らが命を懸けて戦うだけの価値はないんじゃよ」

8

自防ＰＭＣの補給拠点である『あめのだりん』の轟沈を画策する『島国』大企業側は、オブジェクト同士の大規模な戦闘の陰に隠れる形で施設内部へ大量の破壊工作要員を送り込んでくる。

今回の破壊作戦には入念な準備期間を経て実行されており、同クラスの作戦はそう何度も繰り返せるものではない。

つまり、この一回を妨害してしまえば、大企業側も『あめのだりん』を破壊する機を失う。

内戦は長期化し、クウェンサー達『正統王国』の目的は達成される。

時折、別の通路へ向かった仲間達と無線で連絡を取り合いながら、クウェンサーやヘイヴィア達一〇人は慎重へ先に進む。

「おい、こっちにエレベーターあるけど」

「そんなの乗ってみろ、ドア開いた瞬間に蜂の巣だよ。四角い箱じゃ逃げ場がねえ。素直に階段使って上へ登ろうぜ」

『資本企業』側の破壊工作要員は、味方の識別信号を使って『あめのだりん』側を騙す形で、ヘリポートからやってくるらしい。クウェンサー達は海底から上へ登り、ヘリポートを目指す。

どこかの道で破壊工作要員とかち合うと推測して、だ。

『あめのだりん』は海底部分から海上まで、およそ三階分くらいの高さがあるらしい。

「……しっかし、技術大国なんて話は聞いてたのに、意外とボロだな。あっちこっちの壁とか天井の板が剝がれてる。あっちもこっちも配管が剝き出しだし……。建造途中で予算を切られたのか？」

「なあクウェンサー。俺の見間違いだと思うんだけど、テメェさっきから何を振り回してる訳？」

「何って、デジカメですけど？」

「今は人殺しの真っ最中なんですけど!?」

「だから手ぶらでお使いなんて耐えられないんですけど!!　せめて『島国』のテクノロジーの一つでも持って帰らないと気が済まないっての!!」

そんなこんなで、クウェンサー達の部隊は階段を目指す。

元々、非常用として用意されているものらしい。扉を抜けた先に、何度も折れ曲がるようにコンクリート製の階段が設置されている。

『奇襲で全滅』を避けるためには、誰かが先行して調べるべきだ。

ヘイヴィアは指でサインを出し、味方が何か別のサインを返し、ジェスチャー合戦になって、最後はジャンケンになった。

チョキを出したままわなわなしているヘイヴィアが、仲間達に背中を押されて階段へと突き出されていく。

「……これってチェスならキングが敵陣に切り込んでんじゃねえか？」

「俺は何かあっても責任取りたくないよ。だからポーンで良いよ」

蛍光灯の光が不規則に瞬く。

クウェンサーを入れた五人が斥候役だ。ヘイヴィアは四角く折れ曲がる階段の隙間から頭上を見上げるようにアサルトライフルを構えながら、

「狭苦しい階段とか最悪だぜ」

「何で？」

「ちょっとは考えてからしゃべれよ。エレベーターほどじゃねえが、待ち伏せし放題だろ」

呟いた直後だった。

パパン!!　と。

理想の場所で理想の通りの発砲が襲いかかってきた。

「ぎゃあ!!」

「わあ!!」

真上、手すりから身を乗り出すようにしての撃ち下ろし。

先行していた五人は反撃しながら後退するしかない。クウェンサーは間近で血まみれの肩を押さえて崩れ落ちそうになる味方の兵士の体を摑んで、元来た出入り口を目指しながら、

「ヘイヴィア、下がれ！　下がれ!!　この構図じゃ一方的にやられる!!」

「うるせえだから時間稼いでんだろ馬鹿野郎!!　テメェは負傷兵を引きずって……!!」

「手榴弾を落とされたら終わりだ!!　時間稼ぎどころか全滅するぞ!!」

コンコン、という硬い音が響いたのはその時だった。

手すりの向こうへ放り出すように、頭上の襲撃者が爆発物を投擲してきたのだ。途中の壁に何度かぶつかりながら、手榴弾はヘイヴィア達の元へと落ちてくる。

「……っっっ!!!??」

敵はセオリーを外さない。

その場の全員が、狭い出入り口のドアへ殺到するが、実際に通路まで逃げられたのは何人もいなかった。

バムッッッ!!　というくぐもった爆発音が炸裂する。

顔中誰かの血で真っ赤にしたヘイヴィアが、壁に体を預けながら叫んだ。

「損耗あり!!　被害確認しろ!!」

「ほぼゼロです、負傷した二等兵が手榴弾に覆い被さってくれました!!」

「馬鹿野郎が、一人で格好つけやがって……!!」

「丸めたダイバースーツを手榴弾に被せていましたから、おそらく本人に死ぬつもりはなかったかと……」

「良いよ言わなくて！　格好つけた事にしてやれよ!!」

とにかく、わずかに稼いでくれた時間を使って、返り血まみれの『正統王国』軍は通路まで引き返す。待機していた仲間達と合流する。

さらに手榴弾を落としてきたのか、複数の爆発音が耳に響く。

「やべえぞクウェンサー、こりゃ敵の方が一枚上だ。さっきチラッと軍服見えたけど、ブラフじゃねえとしたらすげえのが投入されてやがる」

「え、なに？　『島国』ってそんな有名な部隊あったっけ？」

「『島国』じゃねえんだ」

ヘイヴィアは顔についた血と汗を腕で拭いながら、

「モスグリーン.co.ltd。オブジェクトの投入が禁じられたせいで、一年三六五日泥沼の戦争を繰り返している『北欧禁猟区』の陸戦ＰＭＣだ。ここ最近は上陸作戦を中心に、海兵隊の領分にも事業を拡大させているらしい。今回の派兵は差し詰め新商品のプロモーションってヤツかもな」

「つまり？」

「兵士の練度は日々の訓練の質と量で決まるっつーが、連中は年がら年中実戦に放り込まれっ放しなんだ。オブジェクトに頼り切りの俺らじゃ対処のしようなんかどこにもねえ！　経験値が圧倒的に違う以上、白兵戦でまともにやり合っても勝てる道理はねえぞ!!」

9

勝てない相手との真っ向勝負は、続ければ続けるほどにこちらの損耗が増す。

子供でも分かる計算だ。

ただ、それでも白旗を揚げてさっさと帰る事が許されない場合はどうすれば良いか。

「有利な場所まで逃げようぜ。少しずつ撃って、少しずつ下がって、また少しずつ撃って、この繰り返しで敵の数を減らすしかねえ」

「そんな分かりやすい手、いつまでも敵が引っかかり続けるものなのか？　モスグリーンってのはどいつもこいつも眼帯に葉巻の鬼軍曹みたいなのが集まっているんでしょ」

「良いからテメェは途中の道にありったけの罠を張れよ。撃ち合いで勝てねえ以上、撃ち合い以外で向こうの手札をどれだけ削れるかに勝負がかかっているんだぜ」

時間はない。

しかし一目で看破されるような罠では意味がない。

幸い、このフロアは壁や天井の板が外されていたり、それらに沿うような形で太い鋼管が血管のようにのたくっていたりする。『仕掛け』を隠す場所には事欠かない。

「おい、素のままのプラスチック爆弾を設置するだけか？　ネジとか釘とか山ほど埋め込むのがセオリーだろ」

「時間がないんだよ。どっちみち衝撃波は通路を突き抜ける。昏倒した相手を撃ち抜くくらいの仕事はしてくれるんだろ？　……それより安物のロケット集めてきてくれよ。手持ちだけじゃ火力が足りない。どうせビビって使わないなら弾頭部分も罠にしよう」

「あん？」

「接触信管つきの弾頭なら地雷になる。あちこちに落ちてる紙とかマットとかで覆い隠しちゃえ」

他にも、加熱すると霧状に膨張する危険な洗剤や、皮膚に直接つくと激しい痛みと共に炎症を引き起こす漂白剤なども爆弾に組み込む。どれもこれも、通路のロッカーなどにしまってあったものだ。

およそ三〇近い罠を張り巡らせる。

「こんなもんで大丈夫なのかよ。腹の出たオヤジの日曜大工だってもう少しお上品だぜ」

「この黄金比が分からないなんて悲劇だね。どれかを避けようとすると、別のどれかに引っかかる。絡まった紐みたいに、一本一本は単純でも解く事はできない。短期間にここまで芸術的

な仕上がりができたら表彰ものだと思っていたけど？」

「刑務所の中ならファンができるかもな。得体のしれねえモヤシ野郎とか」

さて待ち伏せポイントまで下がろう、とクウェンサー達が背後を振り返った直後だった。

派手な衝撃と共に、前方で爆発が起きた。

通路側面の壁が奥からの衝撃によって破壊されたのだ。

行く手を塞ぐように、灰色の粉塵が通路の奥で溢れている。

転がったままヘイヴィアが叫ぶ。

「ちくしょっ!!　さっきから何なんだ!!」

「何だ？　耳がキーンってなってて聞こえない！」

「くそったれのフ○ック野郎!!　モスグリーンがショートカットしてきやがった！　退路を断たれた以上は下がるしかねえ。俺らがついさっき罠張った通路をだ!!」

カメラやセンサー類でこちらの行動をモニターされていたとは思えない。

敵はただの勘や経験則だけで、こちらがどう動くかを正確に予測している。そして一番嫌がるルートから回り込んでくる。ここまでの精度でやられたらほとんどエスパーだ。

パパン!!　パン!!　と複数の銃声が、一時的に機能不全に陥っているクウェンサーの耳にも響いてきた。

もう論理的な思考なんて悠長な事は言っていられなかった。

とにかく目先の脅威から逃げるため、自ら仕掛けた蜘蛛の巣へと飛び込んでいく。

壁の穴から顔を覗かせるモスグリーンの兵隊は、わざわざ一人ずつ急所を狙うなんて行儀正しい事はしなかった。

通路の一点。

罠として設置したはずのロケット砲の弾頭へ、正確に鉛弾を叩き込んでいく。

ドゴッッッ!!!!!!　という爆発音がクウェンサー達を呑み込む。

10

モスグリーンを指揮するアンジェラ＝ハイビスカスという女性は、爆発の直後、わずかに眉をひそめた。

「……何だ？　まだ動いているな」

「仕掛けてあった罠そのものの殺傷力が低く抑えてあったのでしょう。彼らの良心が命を救ったようですな」

「なら昏倒した馬鹿者にとどめを刺してやれ。ヤツらが思い浮かべていた通りにだ」

床の上に転がったまま手足をピクピク痙攣させていた金髪の工兵が、その手を動かした。自

分から罠に引っかかるように、ワイヤー代わりの釣り糸を掴む。

シュシュッ!!　と真っ白な蒸気のようなものが通路を埋め尽くす。

部下の兵士が楽しそうに言った。

「わお、化学兵器だ。ヤツら条約違反ですよ、大尉」

「漂白剤の原液か。はしゃぐのは結構だが、防護マスクやスーツに持ち合わせはあるのか？」

「え、あ……それは……」

「ちなみに私は支給した覚えがない。自滅覚悟で張った煙幕が、空調の流れに乗ってこちらへやってくるぞ。ここは一度下がれ。こんなつまらない形で損耗を出したら、隊の評価に影響する。広告代理店に借りは作りたくない」

一方、有毒な煙幕の中に放り込まれたヘイヴィアはほとんど絶叫していた。

「テメェ、この馬鹿っ、クウェンサー!!　ただでさえ地獄のフルコースだってのに、さらに追加でデザート注文してんじゃねえよ！　何だこりゃ、げほっ、がほっ、漂白剤か!?」

「喉をやられたくなければ黙るんだ。あと、ダイバースーツのマスクはあるな？　喉に痛みは感じていても、今からでも被れば致死量には達しない！」

「冗談だろ、この中這って進めってのか!?」

「こんな即席の煙幕、空調のスイッチ一つですぐに消えてなくなる。そうしたら全員分の死体袋が必要になるぞ。黙って鉛弾で蜂の巣にされるのとどっちが良い!?」

どのみち、もう無傷では生きて帰れない。

クウェンサー達は酸素マスクを被り、多少の化学性炎症は許容してでも通路を下がり続ける。途中、さらに何度か昏倒用の爆破トラップに自ら引っかかりつつも、何とか階段の所まで辿り着く。

「……こ、ここからどうするんだ馬鹿野郎。階段は上を取られてやがるぜ。飛び込んだって一方的に撃ち下ろされる。ちょっとでも身の危険を感じたら手榴弾をバカスカ落としてお掃除完了だ」

「ヘイヴィア、ロープはあるか？　崖登りは？」

「できるが、そいつが何だってんだ？」

「どうせ役には立たない階段だ」

吐き捨てるように言いながら、クウェンサーはプラスチック爆弾の『ハンドアックス』を取り出す。

「それなら、こっちから粉々に吹き飛ばそう。邪魔な構造物を兵隊ごと爆破して、全部崩して、ただの竪穴にしてからロープで登るんだ」

「本気で言ってんのか？　上を押さえられてるっつっても、あれがモスグリーンの全兵力って訳じゃねえんだぜ。敵はヘリポートからやってきてるんだ。上へ登れば登るほど中心地へ近づいていく。あんな化け物達の数が増えていく！　ここで作戦切り上げて、最下層から海に脱出

した方が良いんじゃねえのか？」

「その場合、俺達はフローレイティアさんの拳でじきじきに天国送りにされるだろうし、あいつらは完全に俺達の動きを読み切ってる。……逆に考えてみなよ。ここは喫水線下、海の中だ。あちこちにある血管みたいなパイプ、爆発で破れても水は出てこなかった。あれは浸水時の緊急ポンプのものだろ。俺達が上を押さえているとしたら、下でもがく敵を駆逐するためにどんな手を使う？」

「……まさか」

「一定のエリアを水密扉で全部封じたら、その中を水没させる。鉛弾使った撃ち合いなんて危険な事しなくても、適当なバルブをひねるだけで敵を全滅させられるんだ。雑魚相手のあくびが出る戦いなら、絶対楽な方を選ぶ。水没を使わない方がおかしい」

「で、でもよ！　こっちにゃダイバースーツと酸素ボンベがあるんだぜ。たとえワンブロック丸ごと水没させられたって致命傷にゃ……」

「なるんだよ。毎秒何トンの水が襲いかかってくるか知らないが、そいつは間違いなく激流だ。通路だの階段だの、あっちこっちに体ぶつけながら延々流されるんだぞ。自動車にロープで体を繋げられたまま砂利道をひた走るようなもんだ。手足なんて簡単に千切れるに決まってる。酸素ボンベだって途中で破裂するさ」

うえ……と、ヘイヴィアがマスク越しに呻き声を発した。

「漂白剤使った自滅の壁は、連中にとっても予想外だったらしい。ノーミスクリアしたいって傲慢の表れもかなり強いと思うけど。でも、今この瞬間だけはモスグリーンの予測の檻から逃れてる。ここで上を目指さないと、後はじり貧だぞ。連中がどのバルブを開けるか品定めが終わった瞬間に、俺達は激流に呑まれてバラバラにされてしまうんだ！」

11

後方待機している第三七機動整備大隊の大船団。小型空母の作戦指揮所で様々な報告を受けていたフローレイティアに、管制官が切羽詰まった声を発する。

「レーダーに接近する感あり、かなり速い!!　海面スレスレをマッハ二前後で飛行中。これは巡航ミサイルか、いや……航空機です!!」

「オブジェクトが制圧する戦場でか!?」

無尽蔵のエネルギーを生み出す動力炉と対空レーザーを山ほど搭載したオブジェクトにとって、エースパイロットの複雑な回避挙動はもはや意味を為さない。捕捉、照射、撃墜。それが現代戦のセオリーだというのに、相手は軽く無視してきた。

思わず目を剝くフローレイティアに、管制官も当惑した顔つきのまま、

「挙動を見るに無人機ではありません。近接防御展開……効果確認されず！　来ます!!」

「くそったれ！　総員、対ショック姿勢!!」

その瞬間。

飛行甲板上で『ベイビーマグナム』の整備や修復のため待機していた整備兵の婆さんは、鋼鉄の平面の上、それこそ一メートル未満のギリギリのラインへ乗り上げる『資本企業』製制空戦闘機をその目にした。

fli-21T。

一般的に普及されているfli-20の改良型だ。量産配備の手前で止まっていて、今は北欧禁猟区に駆り出されて種々の最終テストを行っていたはずだった。

機体はわずかに斜めになっており、婆さんの側に機体上面がわずかに見えた。

コックピットにはエリートの特殊スーツに似た耐Gスーツを纏う小柄な少女が、そして右の主翼を埋めるように、巨大な雪の結晶を背負う乙女のシルエットが、青いペイントで施されていた。

ICE GIRL ONEという文字を呆然と見送る婆さんの前で、主翼の下に取り付けられたラグビーボールのような塊が解き放たれた。

対艦航空爆弾。

本来であれば、その重量と高空からの位置エネルギーを利用し、敵艦の装甲をぶち抜いてからその内部で起爆するはずの爆弾だ。しかし飛行甲板スレスレで解き放たれたそのラグビーボ

ールは、装甲を貫かずにその場でバウンドしてしまう。
宙へ放り投げられた爆弾を見て、婆さんはとっさに決断した。
ただ地面に置くよりも広範に効率良く爆風と破片を撒き散らすよう、『適度に浮かばせた』二〇〇キロもの爆薬を眺めながら。
（……敵は、鋼鉄の腹の中に収めた戦闘機になど興味を持っていない。狙いはオブジェクトの整備部隊やその設備、つまり儂らそのものか!!）
「飛び込め!!　死にたくなければ!!」
全ての工具を放り捨て、身を翻し、九メートル以上ある飛行甲板の縁から躊躇なく飛び降りる。海水へ到達する前に、派手な爆発音があった。ちょっとした小島のような鋼の塊全体が不気味に軋む。
婆さんの体が水柱と共に一度海水の中へ消え、再び顔を出す。
どれだけの整備兵達が追従できたのかは不明。
「……ど……やって……これだけの、対空レーザー網を……？」
近くに浮かんでいた若い整備兵が、呻くように呟く。
婆さんは舌打ちしながら、
「空気というのも一定ではない。温度の違い、湿度の違い、塵や埃……海上だと塩分なども含まれるか。そして、そういう層の違いでは光がわずかに歪曲する。蜃気楼などが分かりやす

い例じゃがな」

「そんなっ、そんなの……たとえセンサーを使ったって、計測しきれるはず……」

「ああ、北欧禁猟区のエースパイロットは、そいつを勘と嗅覚だけで嗅ぎ分けて切り込んできた！　一体どこの誰なんだ。操縦士エリート並か、それ以上のセンスを備えているぞ!!」

12

爆弾一つ設置するのに命懸けだった。

クウェンサーが階段の基部へプラスチック爆弾を張り付けている間、ヘイヴィアを中心とした何人かで階段の上方目がけてとにかくアサルトライフルを連射する。目的は敵の足止め。手榴弾を放り込まれないよう、わずかに顔を覗かせる隙も与えない形で弾幕を張っていく。

たった三〇秒の出来事だった。

「くそっ、駄目だ！　手榴弾が来るぞ!!」

「こっちも終わった!!　下がれ下がれ!!」

ほとんど転げ回るような格好で、クウェンサーやヘイヴィア達は階段から通路へと逃げ戻る。

最初に手榴弾が炸裂した。

続けてクウェンサーが無線機のボタンに手を掛け、プラスチック爆弾の『ハンドアックス』

が起爆する。

ビルの爆破解体のように、まるでスプリングのように畳まれた階段全体が地下へと沈み込んでいくかと錯覚する動きで、滑らかに崩れていく。大量の粉塵がこちらにまで流れ込んできた。もっとも、漂白剤だの洗剤だので元々通路は最悪な事になっていたのだが。

ここで問題が発生した。

「おい、何だ!?　出入り口のドアが全部瓦礫で埋まっちまったぞ！　これじゃ逃げられねえ!!」

「だったら壁も天井も壊して穴を広げれば良いだろ。ほら、どいたどいた!!」

順当に壁や天井を爆破して『隙間』を広げると、クウェンサー達はそこから『元階段の竪穴』へと潜り込んでいく。

堆く積まれた瓦礫に混じって、何か呻き声を発している血まみれの影がいくつもあった。

ヘイヴィアは短く呟く。

「やめておけ」

起き上がる事もできない敵兵が、それでも懐から拳銃を取り出した。

パパン!!　というアサルトライフルの発砲音と共に、呻き声が止まる。

ヘイヴィアは舌打ちしながら、クウェンサーに言う。

「もううんざりだ。さっさと登っちまおうぜ」

専用のロープ射出機などはない。血まみれになった足元の瓦礫から、クウェンサー達は適当なおもしを拾い集める。握り拳くらいのサイズのコンクリート片で、あちこちからねじれた鉄筋が飛び出しているもの。それをロープの端にくくりつけると、モーニングスターのようにぐるんぐるん回してから真上へと投げる。

「おっ、あっ、何だ？　一発で引っかからねえぞ」

「ていうか落ちてくる。避けろっ」

二回、三回と真上へロープを放り投げ、味方の兵士達が支給されたヘルメットの素晴らしさに感動の涙を流す中、ようやくヘイヴィアの投げたロープが、引っかかる強い手応えを感じ取った。おもしに使ったコンクリート片から飛び出した鉄筋が、壁に残っていた階段の残骸に上手く引っかかったらしい。上階の扉のすぐ近くだ。

ヘイヴィアはその場で体重を掛けて入念に強度チェックしながら、

「おい、俺が登っている間に上から敵さんが撃ち下ろしてきたらどうしようもねえぞ。しっかり援護してくれるんだろうな」

「なら俺に銃を渡してごらんよ間違ってアンタのケツの穴を撃ち抜く自信があるから」

中指を立てながらも、ヘイヴィアはロープを使って垂直に壁を登っていく。その間に他の兵士達もロープを投げ、二つ目、三つ目とルートを確保していった。

例によってモヤシ系なクウェンサーは自力で崖登りはできないため、一番最後にヘイヴィア

達の手でロープごと一本釣りしてもらう事になった。
廊下へ転がり出たクウェンサーは、壁一面に描かれた表示に目をやった。
〇m、とある。
こちらのフロアには、先ほどまでの血管みたいな鋼管はない。床や壁も、ピカピカに光を返す純白で統一されていた。まあ、所々でパネルが歯抜けになっているのは変わらないが。
「……とりあえず喫水線より上へ上がったみたいだな。水没攻撃はもう利かない」
全員がボロボロだった。
手榴弾から部隊を守るために身を挺した兵士までいるため、数も揃っていない。
軍服は誰のものかも不明な血で汚れ、あちこち裂け、薬品臭い匂いで満ちている。
「水没攻撃はねえってのは分かったけどよ、これから先はどうすんだ」
「逃げているだけじゃ駄目だ。どうにかして北欧禁猟区の怪物達の数を減らさないと。『あめのだりん』を巡る内戦を泥沼化させて、『島国』の経済を大恐慌に陥れるためには、強い方の戦力を削らないといけないんだろ」
「俺はもうやだよ、あんなの勝てる訳ねえ。そもそもあいつら主食は何なの。プロテイン？それともステロイドか？？？」
まだオブジェクトも出てきていないのにヘイヴィアがすっかり泣き言モードになっているのを見ると、どうやら『北欧禁猟区』の陸戦ＰＭＣのモスグリーンは相当の手練れらしい。

ヘイヴィアは無線で別働隊と連絡を取り合ったが、どこもモスグリーンから洗礼を受けたのは同じらしい。正面からの撃ち合いを望む部隊はほとんどない。

とはいえ、誰かが結果を残さない限りは敵地から帰れない。

これではもうくじ引きで罰ゲームを決めるようなものだ。

「大体、モスグリーンの連中は今、ここから下に向かってんだろ。ヤツらと戦うためにはまた下りなくちゃならねえ。水没作戦使われちまったら全滅だぜ。一体どうすんの？」

「それについては考えがある」

クウェンサーは壁に背中を預けるようにして座り直しながら、

「ここのポンプは全部電動だ。手動のバルブ操作じゃチョロチョロしか出ないから心配しなくて良い」

「電源を攻撃するってか？『あめのだりん』は文字通り船の舵みたいな形しているんだぜ。中央の主電源の他に、各部一二箇所の中ほどに補助電源が取り揃えてある。広大な施設を歩き回って一つ残らず電源をぶっ壊せると思ってんのか。そんなのができたらここまで追い詰められたりしてねえよ」

「落とすのは一箇所だけで良い」

「それじゃ別の電源に切り替えられるのがオチだぜ」

「普通にやったらな」

クウェンサーはニヤリと笑って、
「例えば『安全国』で大人気の携帯ゲーム機。こいつには、家庭用の交流電源と直流のバッテリーの二つの電源がある。コンセントを何度も何度もガチャガチャ抜き差ししまくると、電源の変更プロセスが誤作動を起こしてシステムが落ちちゃう事があるんだ。セーブデータが吹っ飛ぶかもしれないからオススメはしないけど」
「それと同じ事をガチの戦争でやれって？」
「これ以上に最適な答えはないよ。水没作戦を封じるのももちろん、泥沼化を望む俺達としては全電源を完全に破壊してしまう訳にもいかない。そんな事やったら戦争が終わっちゃうからな」
クウェンサーの言葉を聞いたヘイヴィアは、生き残った他の兵士達へ目をやった。
喜んで賛同する者はいなかったが、声を上げて抗議する者もいなかった。何でも良いから正しい答えをくれ、というのが本音なのだろう。
ヘイヴィアは舌打ちすると、
「他に意見がねえなら、そいつに賭けるしかねえな。ここでウジウジしてたって追い詰められるだけだしよ。殺されたくなけりゃ殺すしかねえんだ」
「一番近い電源は？」
「三〇〇メートル先。六番補助電源」

味気のない石鹸みたいなレーションや水筒の水を口に含んだクウェンサー達は、再び銃を手に六番補助電源へ向けて歩き出す。

喫水線、つまり海上へ出たためか、通路の壁一面には窓があった。ガラスの向こうは冷たい灰色の海が広がっていて、二、三キロ向こうに堤防のようなものが見えた。クウェンサー達がいる所と同じように、中心部から外側へ大きくせり出した港湾ブロックの一つなのだろう。

クウェンサーがそちらへ目を向けた途端、後ろから強い力で肩を摑まれた。

ヘイヴィアが引き倒すような格好で無防備なクウェンサーを純白に輝く床へ転がした直後、ビキリ!!　という甲高い音が響く。

クウェンサーは最初、何が起きたのか分からなかった。

タァァァン!!　という銃声が遅れて聞こえて、ようやく狙撃されたと気づいた。

「伏せろ、馬鹿、伏せろ!!」

ヘイヴィアの叫び声と共に、味方の兵士達が慌てて床へ飛び込む。

クウェンサーは倒れたまま目だけで窓の方を見た。傘の先端で突いたように、小さな穴と亀裂が走っているだけだった。あまりの弾速に、衝撃が伝播しきる前にライフル弾がガラスを

突き抜けたのだ。

「どうやったら気づけるんだ、あんなの!?」

「ライフルのパッシブセンサーがたまたま何か捉えたんだよ。ありゃ動体反応に使うマイクロ波だ！　スポッターなしで超長距離狙撃決める時の必需品ってヤツだよ!!」

味方の内の何人かが身を屈めながらもアサルトライフルを構え直していた。窓の傷と、向かいの壁の着弾点を一本の線で繋いで、どこから狙撃されたのか『あたり』をつけて反撃しようとしているらしい。

ヘイヴィアは伏せたまま否定的な声を発した。

「やめとけ、もう移動してるし対物ライフルでもなけりゃ届かねえよ。マイクロ波を飛ばしたって事は、相手は『撃って逃げる』タイプだ。派手な装置だけ別の場所に設置して、無線でリンクしてやがったらヒントにならねえしな。馬鹿正直に顔上げて反撃したって、次のポイントから撃ち抜かれるのがオチだぜ！」

クウェンサーは倒れたまま口を開く。

「……このまま伏せて移動したら？　窓の下なら、壁に隠れて向こうの射線から隠れられるんじゃ……」

「俺だってそうしてえけど、狙撃手の武器が対物ライフル一本って保証はあんのか？　ミサイルだのガトリング銃だの持ち出されたら、壁ごとブロック肉にされちまうぞ」

予定通りの入れ食いだ。

13

『資本企業』の航空ＰＭＣ『スカイブルー.Inc』のエースパイロットの少女は、持ち込んだスマホから垂れ流される大音量のハードロックに身を委ねながら、率直な感想を抱いた。

透明な風防の向こうに広がる青空は、いくつもの黒煙によって汚されていた。味方の損耗ではない。『正統王国』の軍艦が次々と火を噴いているのだ。

彼女達の主戦場である『北欧禁猟区』では、こう簡単にはいかない。オブジェクトに頼れない、常に死と隣り合わせの泥沼の戦場を行く古参の強者達であれば、こんな小手先の攪乱戦術などすぐに見破り、時には手動照準さえ駆使して目障りな羽虫を落としにかかるだろう。一個単位の飛行隊の手による『重巡殺し』はもはや英雄の勲章の一つと言っても良い。それをここまであっさりと、二桁単位に手が届きそうになってしまうと、かえって少女は不気味さを覚えてしまうくらいだった。

（……元より、本社の命令で得点稼ぎをしている状態だが、所詮『外』の世界などこんなものか。この戦場に死因があるとすれば、そいつは退屈すぎて居眠りするかもしれない可能性だけだな）

無線を使って飛行隊の同僚達に指示を出す。

次の獲物を見定める。

旗艦として使われている小型空母。リスク分散のため、大艦隊の中に同型艦はいくつかあるが、防御火器の弾幕の分厚さを見ればどれが本命なのかはすぐに分かる。

「アイスガール1より各機。合図と共に空母の艦橋へ一斉攻撃を仕掛ける。上を叩いて下を混乱させるぞ。予想が正しければ、あの船はオブジェクトとも繋がっているはずだ。戦場の主役とやらにまでパニックを伝播できれば御の字だな」

至近、一〇〇メートル以内から近接防御火器のガトリング砲を突き付けられるが、毎分何千発撃ち込まれようが少女達の戦闘機を食い破る事はできない。それらは海を挟んで隣の艦艇を蜂の巣にするだけだ。

一気に突き抜ける。

『アイスガール1』は分厚い防弾ガラス越しに、こちらを静かに見据える指揮官らしき銀髪の女性の顔さえ捉える事ができた。

構わない。

操縦桿上面にあるミサイル発射用のボタンの表面を、親指で静かに撫でる。

複数の狼が丸々太った草食獣の頭を噛み砕く。

その直前だった。

『管制(CT)よりアイス飛行隊各機！　九時より誘導開始(ディフエンスチヤーリー)を確認。繰り返す、九時方向より空対空ミサイル(AM)の誘導開始(ディフエンスチヤーリー)を確認!!　至急回避(キヤンセル)しろ、全力だ!!』

（……っ!?）

ミサイルアラートはなかった。

より正確には、周囲の艦艇(かんてい)から無意味な照準電波を浴びまくっていたのだが、突然の横槍(よこやり)に気づけなかったのはそれだけが原因ではないだろう。

『アイスガール1』は全員に指示を飛ばし、攻撃を中断して各々バラバラに回避(かいひ)挙動を取る。四機を二機ずつに分け、艦橋の左右を凄(すさ)まじい速度で突き抜ける。防弾のはずの空母の窓が粉々に砕けていくが、エース達にそれを確認している時間はない。

「アイスガール1より管制(CT)、回避(キヤンセル)を確認！　四番機が多少の破片を被(かぶ)っているが交戦維持(アクテイブ)!!」

『発射前に電波の照準はなかった。おそらく敵は画像識別を使っている。セミアクティブ方式で、パイロットの目で直接君達を照準しているはずだ!!』

ぞくん、と。

その瞬間(しゅんかん)、『アイスガール1』の背筋を震(ふる)えのようなものが走り抜けた。

それは恐怖(きょうふ)ではない。

それは不安ではない。

それは戦慄(せんりつ)ではない。

感情のベクトルとしては、まさに一八〇度の正反対。

「……来るぞ」

そう。

少女は、マリーディ＝ホワイトウィッチは獰猛に笑っていた。

「何かが来る。私達と同じ領域にいる何かがだ！　各機、本物の戦場を思い出せ。慣らし運転はここまでだ!!」

直後だった。

暗号化を施されていないオープンな帯域で、わざわざ人に聞かせるように誰かが通信に割り込んできた。

『ニヤニヤ笑いで退屈な仕事してんじゃねえよ、オブジェクトで先に進んで錆びちまった連中の足引っ張ったってつまんねえだろ。エースはエース同士、時代遅れの大空で飛び回るとしようぜ、「資本企業の氷の乙女」ちゃんよ』

そのきざったらしい言葉遣いから、ようやく『アイスガール1』は思い出した。

『正統王国』のエース。『人間の外殻に空を飛ぶために必要な機構を積み上げていく』彼女達の方式と違い、『空を飛ぶ機械から限界まで無駄を削ぎ落としていく』コンセプトで造られた美しい刀のようなデルタ機を自在に操る飛行機乗り。この時代に敢えて不便なセミアクティブを好んで使い、時には見当違いな方向へ飛んでいったミサイルを『照準のやり直し』でお手玉

のように操って敵機を翻弄する、鋼鉄の死神。
その名を思い浮かべ、思わず舌なめずりすらしてしまう。
「バーニング・アルファ。『正統王国の朱き邪眼』とやり合えるとはな……!!」
『よせよ、こっ恥ずかしい。俺はお嬢ちゃんと違って中二病だの邪気眼だのってキャラ作りが許される歳でもねえんだ。そういうの向けられると指先がぞわぞわしちまう』
言い合う間にも、すでに殺し合いは始まっている。
複数の艦艇の隙間を縫い、追いつ追われつ、様々な戦闘挙動を取りながら二つの飛行隊が『後ろの取り合い』を続ける。
邪魔な艦隊の列が束の間、彼女達を遮る。
「……にしても、空戦でハードロックとは趣味が悪りぃな。つーか定番過ぎて萎える。源泉はハリウッド映画か？　それともテレビゲーム？　何にしたって一番はクラシックに決まってんだろ。そういうガキ臭いのはおっぱいの成長と共に卒業していくものなんだがな』
「それでインテリのつもりか、化石にしがみつきやがって。『正統王国』のかび臭ければ何でも良いっていう風潮はいただけないな。そういうのを悪食って言うんだぞ。湿った靴下みたいな匂いのするチーズを絶賛するようなもんだ」
『……』
「……」

沈黙があった。

直後に艦隊の列がわずかに途切れる。二つの飛行隊を遮る壁がなくなる。

ゴッ!!　と。わずかな隙間を縫うように、鋼の塊が思いきり交差した。

天空を支配するエースパイロット同士の殴り合いが始まる。

14

モスグリーンを指揮するアンジェラ＝ハイビスカスという女性は、狙撃手からの報告を受けて小さく舌打ちした。

「迷子の狙いは六番補助電源だな。それ以外だったら流石に呆れる」

電源自体はいくつもあるサブであり、一基二基停止したところで『あめのだりん』全体に影響は及ばない。また、構造体の先の方に存在するため、例えば燃料などを誘爆させても『あめのだりん』が轟沈する事はない。

だとすると、

「……狙いは電源の非常交換システムへ干渉し、全電源を同時に誤作動させる事でのブラックアウトか。馬鹿が馬鹿なりに考える」

ちなみに内戦状態の『あめのだりん』を巡っては、同じ『資本企業』でも二つの勢力が存在

する。『あめのだりん』の死守を狙う側と、轟沈を狙う側だ。

アンジェラ達、モスグリーンは『轟沈を狙う側』から金で雇われて派遣されてきた訳だが……。

「曹長。マーキングの方は？」

「すでに完了しております。C班が中央の主電源を制圧済み。二五〇〇以上あるバルブの開放箇所も把握しておりますし、水没作戦自体はいつでもいけます」

モスグリーンは『あめのだりん』を轟沈する側だ。そして、これだけ巨大なフロートは、ちょっと対艦ミサイルや魚雷をぶつけたくらいでは沈まない。

そこで内部に潜り込み、『巨大なフロートが水の重さでねじれるように』計算してから、正確に複数のブロックを水没させようとしていた。

水は体積に比例する、計算のしやすい錘だ。

アパートの狭苦しいユニットバスを満たすだけで二〇〇キロもの重量を確保できる。広大なフロートだからこそ、てこの原理などと応用すればクッキーやビスケットのように真ん中から割ってしまう事だってできるのだ。

つまり、

「……このタイミングで全電源を喪失して『あめのだりん』が完全なブラックアウトに陥った場合、作戦は継続できると思うか？」

「バルブ開放箇所へ一つ一つ爆弾を設置していけば可能でしょう。……ただし四桁に届きます。『あめのだりん』全域を強行突破する必要もありますね」

「となると、問題の六番補助電源を迷子に取られる前に手を打った方が早いか」

言うだけ言うと、アンジェラ＝ハイビスカスは無線機へ口を寄せた。

「B班とD班。負傷者の回収のついでに六番へ攻撃を仕掛けろ。最悪、制圧できない場合はこちらの手で六番を爆破してしまっても構わない。主電源は確保してある。数ある補助電源の一つを破壊してもこちらの作戦に支障はない」

曹長と呼ばれる男は、主の足元で座ったまま指示を待つ猟犬のように、微かに首を傾げながらこう言った。

「全部隊を差し向けないのですか？」

「目的を履き違えるな。迷子はあくまでもただの部外者だ。我々は依頼の通り、『あめのだりん』の轟沈を第一に考える」

15

『マッドクッカー』に『ビーアブレイズ』。

立場は違うものの、共に『資本企業』に属する二機を相手取りながら、お姫様の『ベイビー

マグナム』は海上を機敏に動き回る。

当初は二機の戦いをかき乱すよう、遠距離から砲撃でチクチクと横槍を入れていく予定だったが、事前に立てた作戦の通りに事態が推移してくれるとは限らない。

二機同時に接近され、そこから先は三つ巴の殴り合いになった。

……お姫様の狙いは自防ＰＭＣや『あめのだりん』を殲滅しようとしている『ビーアブレイズ』を撃破し、『島国』周辺海域の内戦を長引かせる事ではあるのだが、こうなってしまうと一機だけに攻撃を集中している場合ではない。

大前提として、自分が生き残るためには『マッドクッカー』にも応戦する必要が出てきた。

この状況で『ベイビーマグナム』という戦力を失うのは、一〇〇〇人規模の大隊全員の命を危険にさらすのと同義だ。

「……っ!!」

お姫様は稲妻のような回避挙動によって自ら生み出す高Ｇに耐えながらも、敵機を正確に把握し、七つの主砲を使って反撃を繰り返す。

『ビーアブレイズ』は様々な燃料、酸化剤、薬品などを使った火炎放射を得意とする機体で、『火遁の衣』と呼ばれる熱波の壁を何重にも張り巡らせ、光を歪める事で様々な照準を誤魔化していく。

『マッドクッカー』は溶融塩を利用したレールガンによる砲撃を得意とした機体で、一説では

海水から塩や金属を取り出して砲弾を自動補充するとも言われていた。

（……さいわい、2きにきょうりょくかんけいはない。バラバラのじょうたいなら、ここからでも『よこやり』は入れられる。1きずつつぶしてあんぜんにきとうするしかない）

狙うはやはり『ビーアブレイズ』。

七つの主砲をバラバラに放ち、相手の退路を断ったところで、動きを止めたターゲットへ改めて集束させた主砲をぶち込んでいく。

理想通りに事が進んでいる。……そのはずなのに、炎の向こうにいる『ビーアブレイズ』に主砲が当たらない。

『ふふふはは。まるで「とうぎゅう」だな。あたまのいやしい「せいとうおうこく」のエリートでは仕方がないか』

「……自分でよけるうでがないからシステムにたよるようなルーキーが何を言っているのやら。パパとママにあたらしいじてんしゃをかってもらったからじまんしたくなっちゃったの？」

『こちらをしゅうちゅうこうげきするということは、「あめのだりん」を守ってないせんのどろぬまかを助けようとしているようだが……本気かね？　中にはなたれたのはモスグリーンだぞ。ヤツらは何があっても「あめのだりん」を沈める。付き合うだけむだだろうに』

「……わたしのなかまはまけないよ」

『ほざけ。だれがかつかまけるかなどかんけいない。モスグリーンなどつかいすてだ。あれが

しっぱいしたら、私がこの手で「あめのだりん」を沈めてやれば良い。はじめから、しょうぶになどなっていないのだよ』

「……」

……そう、そんなに死にたいのね」

『ははっ！　せんそうをなんだとおもっている⁉』

「なら、『だっしゅつこう』からやきとかしてあげる。その上でどうりょくろをふっとばす」

その時だった。

ひっそりと『ベイビーマグナム』と『ビーアブレイズ』を同時に攻撃できる位置取りを確保した『マッドクッカー』が、主砲のソルトレールガンを突き付けながら、おずおずと通信に割り込んできた。

『あのー……ひょっとしてみなさん、ほんとの主役をわすれてはいませんかね……？』

「『うるっさい‼　すっこんでろ‼‼‼』」

カッ‼　と閃光が迸ったかと思ったら、二面同時攻撃をまともに浴びた『マッドクッカー』が戦場に巨大な花を咲かせた。

「あ」

オペレーターからの撃破報告を聞いて、お姫様はようやく事態を知った。

『あめのだりん』を守る側……自防ＰＭＣ側のオブジェクトを破壊してしまった。

これでは、放っておくと『ビーアブレイズ』が『あめのだりん』を壊しに行くのを止める者がいなくなる。それだと困るので、『ベイビーマグナム』が割って入るしかなくなった。互いに距離を取りながら、それでも全体としては『あめのだりん』へとじりじり近づいていく格好で戦線が移動していく。

『ふふふはは!!　てきを守るために自らがたてになるとはさすがだな「正統王国」！　あたまの足りないエリートさえヒロイックにうごいてくれる!!』

「……ああもう、わたしは自分のいのちをかけて一体何をやっているんだろう……」

おそらく『あめのだりん』を守るために戦っている『正統王国』の兵士全員が思っている事と見事にシンクロするお姫様なのだった。

『ベイビーマグナム』対『ビーアブレイズ』。

無差別級の殴り合い、その第二ラウンドが始まる。

16

パパンパン!!　と短い連射が続いた。

クウェンサーの近くで、同じ軍服を着た味方の兵士達がバタバタと倒れていく。

「くそっ、きやがった！　モスグリーンだ!!」

ヘイヴィアが叫ぶ。

スナイパーに狙われて顔を上げる事もできないまま、今度は六番補助電源へ繋がる純白の通路を塞ぐように傭兵達が顔を出した。距離はおよそ二五〇メートル前後。数は一〇人から二〇人。遮蔽物のない直線的な通路だが、彼らは太い鋼管を何本も台車に載せて、それを盾代わりに使っていた。

一方、クウェンサー達には盾にできるものがない。

後ろへ一度下がろうにも、そこまでだって数十メートルはある。急いで下がるより前に、背中を次々と撃ち抜かれていくのがオチだ。

「ああもう!!」

クウェンサーは倒れたまま背中へ手を伸ばし、プラスチック爆弾の『ハンドアックス』を取り出した。ボールペンに似た電気信管を取りつけて天井へ投げつけると、無線機のスイッチを押す。

爆発音と共にガラガラと天井が崩れ落ちた。

ガハゴホと咳き込みながら、ヘイヴィアは瓦礫の山に体を押し付けて遮蔽物を確保する。

「ちくしょう、クウェンサー！　撃ち合いはこっちに任せてテメェは負傷者の手当てをしろ。

爆弾魔にゃこれ以上できる事は何もねえ!!」

「俺は専門の衛生兵じゃない！」

「テメェ以外に空いてる手がねえんだ!!　あいつら撃って押し返さねえとグレネードを叩き込まれて全滅しちまう!!」

勝手に撃ち合いを始めてしまったヘイヴィア達から取り残されたクウェンサーは、おろおろとした目つきで床に倒れたままの味方の兵士達へ目をやる。こうしている今も血だまりは増えていて、もうどこから手を付けて良いのか分からない状態だった。

軽傷でまだ手足を動かせる負傷者達と一緒に、とにかくポーチを漁って使えるものを全部純白に輝く床へ並べていく。

「何だこれ、弾は体の中を抜けているのか!?」

「知るか、まずは血を止めるのが先だ。悩んでいる暇でそいつ死ぬぞ！　おいそっちの足を持て。太股を包帯で縛って血流止めてしまおうぜ!!」

「生理食塩水？　何これどうやって使うの!?」

「輸血と一緒!!　血の代わりにそいつ流し込んで血圧を調整するの！」

「輸血ってどうすんの!?」

「普通の点滴と一緒で、肘の静脈探して針刺すのよ!!」

やんややんやと騒ぐクウェンサー達は意外と元気いっぱいだった。ノリとしては文化祭の準

備期間って感じである。瓦礫を遮蔽物にして必死な形相で弾をばらまいているヘイヴィア達がちょっと羨ましそうな目で時折後ろを振り返っている。

「……痛てえ……ってバカバカ本当に痛いよ何それ消毒薬ぶっかけんなしみるしみる!?」

「ハハハ貸してた金をいつまでも返さないから優しくしてもらえないのよこの馬鹿野郎」

「何それ!?　待って、接着剤!?　それで傷口塞ぐの!?　金なら利子つけて返すから待ってよ!!」

「何当然の事言ってるの？　他にはステープラーと安全ピンしかありませんけど？」

「ていうかあっちに衛生兵いない？」

「いるじゃん！　おいそっちでサブマシンガン撃ちまくってるヤツ！　アンタ血と硝煙より白衣の天使の方が似合ってるよ。アドレナリン全開にしてないでこっち来い!!」

「えっ、えっ？　でもわたしい、こっちのカレにお願いされちゃったっていうかぁ」

「乗り換えの時期だって！　かもーん!!」

と。

ついに男女入り乱れての『放課後の文化祭準備という名のイチャイチャムード』に我慢ならなくなったヘイヴィアが味方に向けて怒鳴り散らした。

「オイうちのナースちゃん横取りするんじゃねえよ!!　一服の清涼剤なんだから!!」

「何を言っているんだ、金髪のツインテールにナースキャップなんてクウェンサーちゃんの出

番じゃないか。お前の横に置いておくなんてもったいない」

「よろしい分かった殺し合おうぜクウェンサー？」

その時だった。

爆音が間近の音声をまとめてかき消した。

「ぶわっぷ!!!??」

「ちっくしょ……。二五ミリのグレネードを立て続けにぶち込んできやがった！　やっぱりこれじゃ火力が足りねえ!!」

爆発物と言っても対人用に開発されたものなので、瓦礫の山が崩れる事はない。

が、放物線を描いて飛ぶグレネードが瓦礫の山を飛び越えるように撃ち込まれたら、もうクウェンサー達を守るものはない。爆風と大量の鉄球を豪雨のように浴びせられる。

今のもただのミスショットとは違う。

何発か試し撃ちして、最適な射撃コースを計算しているのだ。

本命の一発が発射されたら、遮蔽物の陰で身を丸めているクウェンサー達は皆殺しだ。

ヘイヴィアは舌打ちしながら、

「ロケットでもミサイルでも良い。こっちも爆発物かき集めろ！　連中が遮蔽に使ってるあの台車を吹っ飛ばそうぜ!!」

「やってくれるなら全部任せますけど射撃の腕は向こうの方が上です！　呑気にランチャー担

いで狙いを定めている間に額の真ん中をぶち抜かれる。なけなしの弾幕張ったって向こうは全然ビビってくれませんし!!」

「ていうかテメェ誰だよ!?」

「ひどい!!　今まで背中を預けていたのにー!!」

特に男の娘でもないのにめそめそし始めた少年Aを放っておいて、ヘイヴィアはクウェンサーの方へ目をやった。

と、何やら彼は血まみれの手で無線機のボタンを操作していた。

「何やってやがんだ!?　SOS飛ばしたって騎兵隊なんかやってこねえぞ!!」

「そうでもない」

「あん？」

悪態に真顔で答えられて、ヘイヴィアは面食らった。

クウェンサーは軽く無線機を振りながら、

「喫水線より上へ出たのは水没作戦から逃げるためのものだった。でもそれとは別の目的だって考えていたんだ」

「だからそれが六番補助電源ってヤツだろ！　非常時の切り替えのシステムに介入する事で、いくつもある電源をまとめて落とすとかっていう。でもそこまで近づけねえんだよ！　突撃したって鉛弾とグレネードで押し返されるだけだ!!」

「さらにもう一個」

クウェンサーは間髪入れずに言った。

初めから考えていた事を口に出して説明しているような調子だった。

「……知っているかヘイヴィア。ここ最近の騎兵隊ってのはさ、核にも耐える装甲と地球だって割れそうな馬鹿デカい主砲を携えて、見目麗しい女の子が乗り回すものらしいぞ」

「おい、それってまさか」

「オブジェクト以外に何があるんだ？」

ッッッ!!!??　と、視覚も聴覚も全部吹っ飛んだ。

爆音、なんていう領域ではなかった。

支援を受けているはずのクウェンサー達が、軒並み純白の床へ投げ出される。すでに伏せていた兵士も、ゴロゴロと床の上を転がされる。

「ばっばぶ!?　ばぶあ!?　ばぶぐえ……!!」

「だっ、大丈夫、分かってるよヘイヴィア。解説の時間だろう？　お姫様から『マッドクッカー』の撃破報告が上がっていたんだ。可動域が広がったから、『ビーアブレイズ』との戦闘の合間を縫って支援砲撃してもらったって寸法さ。チカッ☆」

「おぶっ、俺が言いてえのはなあ……今のが遺言で良いんだなって事じゃあ!!!!」

オブジェクトによる砲撃は、基本的に海深くへと攻撃を加えるようにはできていない。クウェンサーが遠く離れたお姫様に砲撃支援を要請するためには、喫水線、つまり海上へ出なくてはならなかったのだ。

『あめのだりん』の直線通路自体が飴細工のように歪み、引き千切られていく。まずはクウェンサー達の近くに一発。安全地帯の線引きをするようだった。それから徐々に遠ざかるように、モスグリーンへ近づく形で死の砲弾が次々と撃ち込まれていく。

複数の鋼管を束ねて台車に載せた程度の、即席の遮蔽物でどうにかできる猛威ではない。

モスグリーンの傭兵達も慌てて後退しようとしたみたいだが、構造体全体が凄まじい勢いで揺さぶられたせいで、まともに走る事もできなかった。

噛み千切られるような破壊があった。

真っ白な通路も構造体も兵士の体も全てお構いなしにすり潰されて宙を舞っていく。

クウェンサーは片手で耳を塞ぎ、もう片方の耳に無線機を当てて叫んでいた。

「中止だー!!　全部中止ー!!」

『……？　クウェンサーのいっていることがぜんぜんきこえない』

「ああもう、六番補助電源が火を噴いたーっ!!　目的地がなくなっちゃったぞ!!」

バゴッ!!　と三〇〇メートル先の鉄扉が内側から吹き飛ばされて、大量の炎と煙を噴き出し

た。

何か諦めたようにヘイヴィアがクウェンサーの肩を叩いた。

「うちの大魔神を人間の争いに巻き込んだのが運のつきだぜ。吹っ飛んじまったもんはもう仕方がねえ。次の補助電源に向かうしかねえぞ」

海を挟んだ向かい、数キロ先の別の堤防みたいな場所にも、『ベイビーマグナム』の砲撃が突き刺さった。おそらく狙撃手の潜んでいたであろうポイントが、構造体ごとズタズタにされている。

「……他の補助電源は無事なんだろうな、おい」

「もうお姫様に全部任せて帰りてえぞ」

「俺もそうしたいけど、『あめのだりん』が真っ二つになって沈んだら作戦失敗なんだろ。あいつらの内戦長引かせるためにもうちょっとだけ頑張ろうよ」

その時だった。

メチャクチャに引き裂かれて、通路として最低限の体裁すら失った瓦礫の向こうで、何かが動いた。二五〇メートル地点、モスグリーンの連中が出てきた通路の角の所だ。

長い銀の髪に褐色の肌の女性だ。

モスグリーンの関係者だろうが、豊満な胸につけた略式章を見る限り、階級はかなり高そうだ。

「やってくれたな、『正統王国』の犬が！　これは『資本企業』の問題だというのに」

「『島国』の問題だろう！　俺もアンタも部外者なのは変わらない！」

ヘイヴィアがアサルトライフルで褐色の女性を狙ったが、『ベイビーマグナム』による砲撃の余波か、『あめのだりん』全体がぐらりと不気味に揺れていた。狙いが定まらず、ライフル弾は彼女のすぐ横の壁へと撃ち込まれる。

オブジェクトによる徹底的な砲撃のせいで、壁や天井どころか床さえない。

体感的には、クウェンサー達からモスグリーンまでの二五〇メートルが、全て谷へと変わってしまったようだった。

クウェンサーは中指を立てて、

「今回は痛み分けだ！　部隊を下がらせろ、『北欧禁猟区』だろうが何だろうが、生身の兵士じゃオブジェクトの猛攻には耐えられないぞ！」

「そうかな。目的を履き違えるなよ、温室育ちのお坊ちゃん」

ゴゴンッ!!　と、『あめのだりん』がもう一度不気味に震動した。嵐の夜に投げ出された小舟のように足元がおぼつかなくなる。

ヘイヴィアが顔を青くして叫んだ。

「何だ!?　お姫様の砲撃とタイミングが合ってねえぞ!?」

「我々の目的はあくまで『あめのだりん』の轟沈だ。中央の主電源経由で必要な隔壁と海水バ

ルブの操作は済ませてある。後はてこの原理で巨大なフロート全体をねじ曲げ、真ん中からビスケットのように割れるのを待つだけだ」

さらに揺れた。

時に傾斜は三〇度に届く。何かを摑んで体を支えないと転がってしまいそうなくらいだ。が、クウェンサーがとっさに摑んだ床の亀裂のすぐ傍に、銃声と共にオレンジ色の火花が散った。

二五〇メートル先の、銀髪に褐色の女性が持つ拳銃だった。

通常、拳銃はじっくり狙って撃っても一五〇メートルが限界だ。これだけの揺れの中、正確にクウェンサーの手元へ叩き込んだその一発だけで、相手の練度の高さが窺えた。

とっさに、亀が危険を感じて甲羅の中へ首を引っ込めるように、クウェンサーは手を離してしまう。

それが向こうの狙いだった。

「おい、ちょっとヤベえぞ！　クウェンサー!!」

ヘイヴィアが叫ぶが、クウェンサーは滑り台を下りるように、真っ白な床に空いた『巨大な谷』へと身を投じてしまう。

それを確認してから、褐色の女性もまた、舌なめずりすらしながら『巨大な谷』へと飛び込んでいく。

そこは冷たい海の中。

オブジェクトによる支援砲撃も、想定通りの威力は発揮できない。

17

「……がっ!?」

背中を強く打ち、クウェンサーは息を吐いた。

血管のようにのたくる太い鋼管の群れを見て、自分が下の階層に落ちた事を改めて思い知らされる。

配線関係がイカれたのか、先ほどまであった照明は切れていた。辺りは暗い。背中はびしゃびしゃに濡れていた。床一面に海水の巨大な水溜まりができている。ここは喫水線下、海の中だ。水漏れの原因がパイプの破損くらいならまだしも、外壁そのものから海水が流れ込んできているとすると、かなりまずい状況だった。

起き上がり、とりあえず手近な柱へ身を寄せながら、クウェンサーは考える。

（どうする……？　すぐには上へ上がれない。どこか別の階段を探すしかない。ライトを点けるか？　敵に居場所を知らせる事にはならないか）

ザザッ、というノイズが聞こえてきたのはその時だった。

クウェンサーの無線機からだ。

ヘイヴィア達からかと思ったが、そうではないらしい。

『鳥籠にネズミが一匹……』

顔をしかめた。

さっきも聞いた、銀髪に褐色の女性だ。おそらくモスグリーンの現場指揮をしている人間だろう。

（……一体いつの間に暗号を解析されたんだ!?）

『良いか、小鳥じゃない。ネズミが一匹、だ。猛禽の餌は活きが良い方が好ましいからな』

「勝負はお前達『モスグリーン』の勝ちだ。『あめのだりん』はもう沈むってのは嘘じゃあないんだろう。ここから巻き返すのは無理だ、こいつが轟沈してしまえば内戦の泥沼化を望む『正統王国』の思惑は実らない。だったら今さら何を望む？　アンタ達だってさっさと撤退しないとまずいんじゃないのか!?」

『簡単な話だよ』

声を聞きながら、クウェンサーはあちこちを見回した。

ただでさえ周囲は暗く、それ以上に敵は身を隠す術に長けているはずだ。素人同然の『学生』の努力程度で見破れるような腕ではない。

『最優先は「あめのだりん」の轟沈だ。だからさっさと済ませた。個人的で、脇道に逸れる、無意味な目的を果たすためにな。こいつを潰した後なら、多少の寄り道くらい上も目を瞑るだ

ろう』

「……まさか死んだ部下の復讐でもしたいって言うのか？」

『こんな所で死ぬような連中じゃなかった』

初めて。

そこで、どろりとした人間臭い感情が声に乗って流れてきた。

背筋に走る悪寒を信じ、クウェンサーは改めて装備を確認する。丸めた潜水服と酸素ボンベに、プラスチック爆弾の『ハンドアックス』。サバイバルキットには小型のナイフや鉄串なんかもあるのだが、こちらは上手に扱えないだろう。ナイフ一本で『北欧禁猟区』の猛者と渡り合おうなんて、おそらくヘイヴィアだって考えないはずだ。

『新兵訓練を終えて、いきなりルール無用の「北欧禁猟区」に投じるのも忍びない。本物の地獄を見せる前に、ぬるま湯の戦場でいくつかの武勲を立たせて、勲章の二つ三つでも与えてやりたかった。なのに、このザマだ。あいつらは胸に何もつけないまま、ただ墓場へ埋められる。こんなのってアリなのか？　そんな惨めな葬儀をあげてみろ、あいつらは天国でも己を恥じるだろうよ』

「……ここがどれだけ理不尽な仕事場かっていうのは、オブジェクトを運用できない泥沼の『北欧禁猟区』に生きる連中の方が詳しいと思っていたけど？　嫌なら適性がないとか何とか言って追い払うべきだった。アンタはそれができる立場にいた!!」

『それを!!　ここで見極めるつもりだった!!　お前みたいな温室育ちのハナタレ小僧をピクニック気分で撃ちながらな!!』

そこまで聞いて、クウェンサーはようやく相手の怒りの本質を見抜いた気がした。

単純に、部下が殺されたからここまで頭に血が上っているのではない。

彼らの本来の戦場である『北欧禁猟区』で戦死していれば、それは仕方がないの一言で済ませられたかもしれなかった。

格下の。

見下していた。

オブジェクトに守られる事でしか戦争を継続できない、モヤシ野郎のクウェンサー達の手で返り討ちに遭った事が、一人の武人として何よりも許せないのだ。猛将や英雄との一騎打ちで殺されればそれもある意味歴史に名を残すかもしれないが、戦場で死肉を漁る山賊や野犬などに寝首をかかれたら死ぬに死ねない。それと一緒なのだ。ヤツらは、根本的に、そもそもクウェンサー達を同じ人間扱いしていない。

こんな所で死ぬような連中じゃなかった。

その言葉が何よりの証拠だ。

「……歪んでいるよ、お前。一瞬でも悪い事をしたって思った自分が馬鹿みたいだ」

『首はもらうぞ、プードル野郎。森で生まれて山を統べる狼の恐ろしさを知れ。墓になんて刻

んでやれば良いのかどうかも分からない惨憺たる有り様だが、せめて果物代わりに首の剝製くらい供えてやる』

照明の切れた闇の中、極限まで鍛え上げられた狼が密やかに狩りの準備を始めていく。

黙っていれば、すぐにでもクウェンサーの喉笛は噛み千切られる。

並の努力、正攻法で身を守ろうとしたって、筋力の衰えたプードルの脚では大した事もできないだろう。

改めて確認するが、こちらの装備は丸めた潜水服と酸素ボンベに、プラスチック爆弾の『ハンドアックス』。サバイバルキットには小型のナイフや鉄串なんかもあるのだが、こちらはほぼ使い物にならないと考えて問題ない。

これだけで何ができる？

答えを出せなければ、辿る末路は一つだけだ。

18

当然ながら、アンジェラ＝ハイビスカスは間抜けなプードル相手でも決して気を緩める事はなかった。

敵をここへ誘い込む前から、その装備については一日で看破している。

ヤツは工兵。

主となるのは背中に負ったプラスチック爆弾。ライフルどころかサイドアームの拳銃すら収めていないという事は、ひょっとしたら戦地派遣留学生かもしれない。他にはサバイバルキットになけなしの刃物、特別なところでは丸めて腰につけた潜水服とボンベくらいか。

気になるのは爆弾よりも潜水服。

まともな頭を持った人間なら、真っ向からの勝負でアンジェラに勝てるとは考えないだろう。彼女が手にしているのは大振りの軍用ナイフに拳銃だったが、たとえ標的の工兵が軽機関銃を振り回そうがアンジェラは傷一つ負う事なく処刑できると確信している。

ヤツが勝機を狙うとしたら、一点一点を狙って攻撃するところから離れるはずだ。

つまり、この区切られた交戦区域を丸ごと埋め尽くすような一撃。そういうものであれば、アンジェラの戦闘技能を無視して叩き伏せる事もできる可能性がある。

ここは喫水線下、海の中。

一番簡単なのは潜水服とボンベを身に着けて、一帯をくまなく水没させてしまう事だが……。

（それはない。周囲一帯は停電状態でバルブは動かないが、爆弾を使ってバルブ自体を破壊してしまえば開放だけならできる。だがあまりにも強力かつ迅速な水没化を行えば、その莫大な水流によってヤツもただでは済まない）

言ってみれば、ゴツゴツの岩だらけの渓流へ水死体を流すようなものだ。凄まじい勢いで何

度も硬い突起に体をぶつけていくと、手足さえもげる事がある。合成繊維製の潜水服だけでは、この衝撃には耐えられない。

（危険を考慮して手動でゆっくりとバルブを開放したとしても、それだと水没までに時間がかかり過ぎる。効果を発揮する前に、ヤツの喉を一〇〇回は切り裂ける）

潜水服は多少の水圧に耐える作りになっているものの、流石に爆弾を使った爆風を抑え込むほどの強度はない。

よって、交戦区域のあちこちに爆弾を設置して、自爆まがいの大爆発を起こす線もナシ。

となると、後は……。

（足元には海水の水溜まり）

柱の陰から、夜目を駆使して周囲を観察する。

間抜けな標的の背中が、ここからでも見える。

（合成繊維の潜水服は絶縁体だ。電気を流せば、私だけに逃れようのない攻撃を放つ事もできただろうが）

ニヤリと笑う。

ナイフと拳銃を掴み直す。

（生憎と、オブジェクトからの砲撃で配線は切れている。この一帯は停電状態だ、だから海水へ電気を流す事もできない！　私の部下を挽肉に変えたお前達の砲撃で追い詰められろ!!）

わずかに息を吸い、アンジェラは行動に出る。
一面に海水の水溜まりが広がっているにも拘らず、ほとんど音を発しないで迅速にクウェンサーの背中へ向かう。
その時だった。
標的がおかしな行動に出た。
彼は、間違いなく背後から迫るアンジェラの存在に気づいていなかっただろう。
クウェンサーはいきなり潜水服のヘルメットだけを頭に被ったのだ。そして、その手で何かを摑み直す。
あと一歩。
そのナイフを持った腕が肩越しに喉笛へと絡みつく一秒前に。
彼は、無線機のボタンへ手を伸ばす。
（爆、だ……!!!??）
真意なんて、測る事もできなかった。
直後の出来事だった。
ゴッ!!　という爆発音が空間全体を圧搾した。

19

モスグリーンと共同作戦を実行している、航空専門の空軍ＰＭＣ『スカイブルー.Inc』のエースパイロット、マリーディ＝ホワイトウィッチは、無線からの指示を受けて眉をひそめた。
金髪碧眼の可憐な少女、という外見が獰猛な怒りに埋め尽くされていく。
「攻撃中止？　撤退命令!?　おい、どういう事だ管制(ＣＴ)!?　邪魔をするな、次の攻撃で確実にバーニング・アルファを仕留められるっていうのに!!」
『管制(ＣＴ)よりアイスガール１へ。頭に血が上っている時点で危険な兆候だ。我々は五分五分の戦いではなく一方的な得点稼ぎのために来た。本来の趣旨から離れている』
「ちょうど撃破数も次でキリ番なんだ。土産話も欲しい。譲れよ!!」
『管制(ＣＴ)よりアイスガール１へ。「正統王国」の第一世代が「資本企業」の「にんぎょ」と「ゆうひ」を立て続けに沈めたんだ。驚くべき事に、数の優位性を無視して一対二の戦闘を制している。よほどの手練れだぞ。相手は身軽になって可動域が広がりつつある。急いで切り上げないと、今度はお前が追い詰められる。そもそもスカイブルーの仕事は適当に艦隊を喰って指揮系統を攪乱させるだけだ。モスグリーンと違って明確な作戦目標はない。こんな温室で未帰還兵になりたいのか？』
「だけど……!!」

『駄々をこねるなアイスガール1、その戦果ならどっちみち昇給はするさ。本気を出したオブジェクトに航空機では太刀打ちできない。お前の腕で事態が決まる以前の問題だ。早々に引き返せ。エース撃破の名誉に目が眩んで部下の命まで危険にさらすのがお前の趣味なのか？』

チッ、と少女は舌打ちした。

苛立ち紛れにスマートフォンの音量を一気に上げる。

オープンな帯域から、『正統王国』のエース、バーニング・アルファの陽気な声が飛んでくる。

『何だ、デートの途中だってのにもう帰っちまうのか？　ま、これ以上は刺激が強すぎるし、お嬢ちゃんが大きくなってからでも良いかもしれねえがな。ほれ、暗くならない内におうちに帰れ。迷子になるなよ』

「お前ちょっと『北欧禁猟区』まで顔を貸せ、すぐにぶっ殺してやる!!　大体、左の翼端から煙吐きながら言う台詞か!?　実は脱出装置のレバーに手がかかっているだろう!!」

『そう言うお嬢ちゃんだって俺が撃ち込んだ空対空ミサイルのロックを部下の割り込みで引き継いでもらってたろ。その後にスモーク使って画像識別からきっちり逃げ切ったのは褒めてやるがね。あのフォローがなけりゃ今頃敵地のど真ん中で海水浴していたはずだ。ふりふり可愛いお尻を守ってくれるお兄ちゃんがついてきてくれないと怖くてデートもできないのかにゃーん？』

「も、もっぺん殺す!!　今すぐ殺す!!」

とっさにマリーディは操縦桿を大きく倒そうとしたが、左右と上をアイス飛行隊の同僚三機がビタリとマークした。互いの距離は数メートルもない。こんな状態で派手に旋回すれば、間違いなく衝突事故を起こす。

頭を押さえられたマリーディ＝ホワイトウィッチは大きく息を吐いた。

足元にあるフライトレコーダーの外装をバコバコ蹴飛ばしながら、彼女は言う。

「くそったれ、命拾いしたな」

苛立ち紛れに。

バーニング・アルファだけでなく、喰いそびれた大物の全てに向けて。

基地司令官クラスの将校・フローレイティア＝カピストラーノが乗っていた、旗艦の小型空母に向けて、吐き捨てるように。

「どこかの戦場でまた会おう、すぐにでも」

20

クウェンサーが取った行動はシンプルだった。

爆風で『殺す』のではない。

量を調整し、非殺傷のレベルに留める。バランス感覚を司る三半規管へ強烈な圧迫を与える威力に調整する。

そのまま爆破すれば、アンジェラと一緒にクウェンサーも倒れていただろう。

そして鍛え上げられたアンジェラとモヤシ野郎のクウェンサーでは、きっとアンジェラの方が早く回復してクウェンサーを殺しにかかるだろう。

だから。

彼は、ダイバースーツのヘルメットを被ったのだ。ヘルメットは多少の水圧に耐える構造をしている。もちろん人間を骨格レベルでグシャグシャにしてしまうほどの爆圧には耐えられないが、三半規管を揺さぶる程度の『半端な衝撃』くらいなら、何とか抑え込む事ができる。

ヘルメットを外し、周囲へ目をやり、背後からあと一歩の所までアンジェラが迫っていた事にようやく気づいて、クウェンサーはうんざりした顔になった。

「……決め台詞とか言って格好つけなくて良かった……」

ポツリと呟くと、『谷』の上からロープが放り込まれてきた。

上からヘイヴィアの叫び声が聞こえてくる。

「おいクウェンサー！　さっさと上がって来いよ!!」

ああ、と適当に答えたクウェンサーは、上から下りてきたロープを摑む。どうせ自力では登れないから、また体力の有り余っている連中の手で一本釣りしてもらうしかない。

その時だった。

クウェンサーは、ふと複数ある柱の方へ目をやった。

一本。

その根元の部分が、何だか剝がれていた。爆弾によるものではない。パーツが抜き取られているようだった。

これと似たものは、前にも見た。

嫌な予感がしたクウェンサーは、慌てて携帯端末を取り出す。これまで『あめのだりん』の中で撮影してきた写真画像の中に、やはり同じようにくり抜かれている部分がある。

てっきり、『あめのだりん』の建造が終わる前に運用が始まってしまったのかと思っていた。

だが、もしかすると……、

「おい」

クウェンサーは下りてきたロープの端を使ってアンジェラの両手を縛り上げた後、その頬を叩いた。

確認しなければならない事がある。

「こいつは一体何なんだ？　この、パズルのピースみたいにあっちこっちに抜けがある壁や天井は!?　これじゃまるで、『あめのだりん』建造の陰に隠れて、何か別のものを造るためのパーツを秘密裡に搬入していたみたいじゃないか!!」

「……知らなかったのか？」

うっすらと目を開けたアンジェラは、両手がきつく縛られている事を確かめると、顔をしかめながら答えた。

「ここは『島国』の……ならず者の自防ＰＭＣ側が誰にも邪魔（じゃま）されず新型オブジェクト建造のために用意した巨大な作業場だ。当然、『あめのだりん』にないという事はすでに完成して世界へ放たれた後だろうがな」

次の戦争の引き金は。

とっくの昔に引かれていた。

第二章　『新型』はどこへ消えた　〉〉太平洋極西方面掃海戦

1

作戦進行報告・甲01
三月一七日一〇三〇時
戦争国太平洋極西方面海域・偽装巡洋艦スカーレットプリンセス号

「『あめのだりん』はモスグリーンの手で轟沈させられた」
そんな風に言ったフローレイティアは、例の海賊殺しで有名な、偽装巡洋艦スカーレットプリンセス号にいた。
具体的には三段になった前方デッキのプールサイドに並べられたビーチチェアの一つに仰向けに寝そべっている。
傍らにクウェンサーとヘイヴィアの馬鹿二人が正座で待機させられており、ちょっと離れた

所から眺めているお姫様の目からは、『何か特殊な手段を取らないと興奮できない人達』のように見えなくもない。

……ちなみにスカーレットプリンセス号、正規軍と共に行動しているところを目撃されると『海賊を誘い殺す』任務に支障が生じそうなものだが……作戦ごとにモジュール状の外装を完全に再換装させ、カラーリングやシルエットそのものを変えてしまうらしい。たとえ写真を撮られてもお構いなしとの事だった。

「どこかの馬鹿どもがご立派な仕事ぶりを見せてくれたおかげでね。だが、名誉と秩序を重んじる我が軍のお偉方は寛大だぞ。クウェンサーが撮影した施設内部の写真画像と、捕虜にしたモスグリーン指揮官の証言を照らし合わせて、『あめのだりん』内部で新型オブジェクトが建造されていた事はほぼ裏付けられた。首の皮一枚繋げたな。……とはいえ、お姫様が『資本企業』のオブジェクトを二機潰したという土産話があって初めてチャラにできるレベルなんだが」

ぷるぷるぷるぷる、と馬鹿二人は小刻みに振動していた。

元々、東洋の神秘の一つに数えられる正座に、西欧人の彼らは不慣れだった。座布団の上でも数分保たないものを、プールサイドのメチャクチャ硬いタイルの上で強いられるこの地獄。平たく言えば両膝が爆発寸前なのだった。

「(……何これどうしてフローレイティアさんねちねち小姑モードになっちゃってる訳!?)」

「(……知るかボケ！　これ以上老けねえ事を祈ろうぜ、このまんまババアになったら見栄え

が悪いったらねえしよ!!　むしろあの爆乳は歳を重ねるごとに小さくなるとかミラクルが起きてほしいくらいだ!!）」

「お前達」

ピンヒールの踵で丸まった背中をやんわりと踏みつけるような声で、フローレイティアは部下達の減らず口を黙らせようとする。

しかし正座の苦痛でヤケクソになったクウェンサー達はもう止まらなかった。

「大体何でアンタ豪華客船のプールサイドにビーチチェア置いて寝そべっているのに水着じゃないんですか!?　セオリーっていうのが分かっていないのか!!　そこでぼーっとした顔で突っ立ったままのお姫様もな!!」

ん？　とお姫様がきょとんとした顔になったが、天然ボケの彼女が余計な事を言う前にフローレイティアが口を開いた。

「……今は三月の中旬で、ここはクロマグロも飛び跳ねる厳海の船の上よ。突き抜ける青空さえ寒々しい。水着になる理由がない」

「言ったな!!　これは北風と太陽っていうか、何かの前フリだかんな!!　この先、南半球とかあったかい方に移動したら水着になるって確約を得たからな！　ひゃっほう!!　爆乳のスリングショットが待っているう!!」

「待てヘイヴィア、いくらフローレイティアさんがフローレイティアさんだからって、彼女一

人にお色気担当全部を負わせるのは酷だ！　ここは一つお姫様にもマイクロビキニになってもらおう。何だったらネコミミとか尻尾とかオプション込みでなあ!!」

ガカァ!!　とクウェンサー達の全身を強大な煩悩の奔流が駆け抜け、正座のまんま空でも飛びそうな感じに気分が盛り上がっていく。

ちょっとばかしぎゃあぎゃあとうるさいので、フローレイティアはビーチチェアから下りると、馬鹿二人の首根っこを掴んで屋外プールへと放り込んだ。

途端に、クウェンサー達は心臓を鷲掴みにするような極限の寒さに襲われる。

ちなみにお姫様は小さく首を傾げているだけだった。

助けるつもりもないらしい。

「はっはぶ!?　ばぶあ!!　だ、駄目だ。こいつはラブコメの入り込む余地なんかどこにもない……!!」

「かかかかか感覚としちゃあれだぜ。別荘とかの、緑色の苔でびっしりな季節のプールだぜ!!」

「そこで学校のプールって言わないところに庶民はちょっと腹が立ってるからね！」

「お、やんのか？　美少女でもねえくせに濡れ透けなんかしやがって!!」

極寒のプールの中で勝手にボカスカ殴り合う愚鈍な下僕達を放って、再びビーチチェアの上へごろりと転がったフローレイティアは、うるさそうに片手を振りながら命令した。

「一〇秒で上がって正座。できなければそのまま肩まで浸かって話を聞け」
「「サーイエッサー!!」」
ほとんど氷風呂みたいな地獄から逃れるべく、珍しく素直に命令に従うクウェンサー達だったが、正座をして三秒で後悔した。
「さっ寒い!!　風がっ、そよ風が体温をゴッソリ持っていっちゃうー!?」
「おい何だこれ、気化熱??　そろそろ軍服凍りそうじゃねえのか!!」
フローレイティアは冬のプールよりも冷たい瞳で部下に問うた。
「……ならもう一度飛び込んでみる？」
「結構でございますお嬢様!!」
がちがちがちがちーっ!!　と歯を鳴らしながらクウェンサーが答える。
返事を忘れたヘイヴィアは再び地獄のプールへ放り込まれた。
ざばりと音を立ててヘイヴィアが沖から上がってくるのを待って、フローレイティアは真面目な話に戻る。
「幸い、新型らしき巨大な影については、こちらのレーダーでも捉えていた。てっきり、『あめのだりん』への襲撃を察知した自防ＰＭＣ側が潜水艦を使って、重要な物資だの人員だのを優先して退避させているのかとも思っていたんだがな」
レーダーに捉えていたのに攻撃しなかった。

見ようによっては怠慢と取られかねない発言だが、フローレイティアが言い渡された任務は『あめのだりん』を巡る『資本企業』の内戦を激化させる事だ。片方の陣営へ極端なダメージを与えると、それで内戦が終わってしまう状況では、特別な指導者や支援者が乗っているかもしれない潜水艦へ無闇に攻撃を加える事はできなかった。そもそも、巨大な影について上へ報告しても、攻撃するか否かのサインは返ってこなかったというのもある。

レコーダーに残る形で下手な指示を出した場合、ヘマをしたら責任を問われる。だから上は誰もゴーサインを出さず、『現場指揮官の臨機応変な決定に任せる』とした訳だ。

であれば当然、見逃した事への責任追及などできるはずがない。

正座したまま、クウェンサーは片手を挙げて発言した。

「……っていうと、『島国』の新型オブジェクトっていうのは、まさか……」

「海戦専用という意味で間違いはないだろう」

フローレイティアはビーチチェアの上に寝そべったまま、

「ただし例の新型は『潜航』を軸にした、深海運用式のオブジェクトよ。ま、『島国』において、想定される主要な戦場と言えば海の一択しかない。通常の海上戦闘以外の、こうした変わり種が開発されていても不思議ではない土壌を備えていた訳だが……」

「けどよ」

クウェンサーの隣で正座したまま微振動しているヘイヴィアが口を挟む。

「オブジェクトっていうのは、全長五〇メートルオーバーの真ん丸シルエットでしょ？　そんなもん海に沈めたって静穏性なんか絶対確保できねえって！　レーダーでもソナーでも反応拾い放題じゃないですか！」

言うまでもない事だが、潜水艦が海の中に潜っている最大の理由は、敵に気づかれないようにこっそり進むためである。

そのため、艦のサイズやデザインにも制約が生まれてしまう。たとえどれだけ頑強で、高速で、大火力を備えた夢の大鑑巨砲主義を実現させたところで、水をかいて進む過程でうるさい音が出てしまっては致命的だ。集中砲火を浴びてそのまま魚のベッドに早変わりである。

その点で言えば、真ん丸のオブジェクトは相性最悪だった。

どんなに慎重に進んだって一発で位置がバレる。

というか、現状、すでに『正統王国』軍側にバレてしまっている。

「あいつは位置情報の隠匿なんぞに気を配っていない」

が、ビーチチェアに寝そべるフローレイティアがいきなり意味不明な事を言ってきた。

「『水の使い方』が従来の潜航兵器とは少々事情が違うようでね。あの新型にも、腐ってもオブジェクトとしての矜持があるらしい。ヤツは『逃げも隠れもせず、真っ向勝負で敵対勢力を蹴散らす事で戦争に勝利する』コンセプトで組み上げられているようだ」

「……？」

クウェンサーが怪訝な顔をすると、フローレイティアは携帯端末を簡単に操作した。

途端に、馬鹿二人の携帯端末に軽い電子音が鳴る。何かしらのデータが転送されてきたらしい。

「(……うわ超見たくねえ。上官からのメール見て良い想いをした事なんざ一度も……おいクウェンサー？　クウェンサーちゃん!?　テメェ何で鼻の穴広げて大興奮してんの!?　どう考えたってこれは爆乳プレゼンツ自分撮りのエロ動画とかじゃねえぞ!!)」

「(……だって話の流れからすれば十中八九『島国』で極秘開発されていた新型のデータでしょ！　何それすごい馬鹿みたいにツイてる俺!!　こ、こんなの普通に『安全国』の学校通いしてたんじゃ絶対お目にかかれないって。は、ハァハァ。留学して良かった！　ハァハァ!!)」

「(……全体的にじっとりしてて気持ち悪りぃ!!　もうテメェはアンドロイド少女と結婚するしかねえんじゃねえの、この変態！　やめて近づかないで変態が感染っちゃうわ!!)」

心の底からうんざりしているヘイヴィアを放っておいて、クウェンサーは携帯端末のメールに添付されていた動画を再生させた。

どこかの夜の海らしいのだが、目印になるものがないので具体的な場所までは分からない。ただ、星々を見る限り、南半球ではなく北半球のどこかのようだった。

暗視機能をオンにした映像はどこか粗く、灰色の濃淡のコントラストが強調されている。ぐらぐらと頻繁に揺れているのは、ひょっとすると波間に揺れているのだろうか？

「馬鹿正直に無人偵察機を飛ばしても対空レーザーで落とされるからね。流木にカメラと外部記憶装置だけつけて、交戦区域の外から大量に流している。電波の送受信をするとそれだけで位置情報を辿られるかもしれないから、回収するまで何が撮れているかは全く分からない、まさにギャンブルだったな」

幸い、玉石混交の膨大なデータの中から、当たりの映像だけ見つけ出せ、という内職のおばちゃんみたいな任務を言い渡される事はなかった。クウェンサー達の手元にあるのは、すでに編集されたものだ。

真っ黒な海の中央に、夜の暗さとはまた違う、巨大な漆黒の影があった。

セントエルモの火のように瞬いているのは、砲の先端に取り付けられたセンサー類の光だろう。

「これが新型……？」

「勉強しろクウェンサー。こいつは『資本企業』の代表的な第二世代よ。うちがつけた敵性コードネームは『クラウンシャーク』。サメの歯って呼ばれる、コンテナ式の多連装レールガンが特徴の撃墜王だな。細かい照準なんて気にしないで、一気呵成に『面』制圧を敢行する。左右三〇度、距離一〇キロはヤツの完全破壊領域だ。三回しか攻撃できない代わりに、デッドゾーンへ踏み込んだ相手はどんなオブジェクトでも確実に食い破る」

「『資本企業』って事は……『島国』の連中が火消しとして派遣したって訳か」

ヘイヴィアが面倒臭そうに言う横で、クウェンサーは眉をひそめて、

「でも、あれ……？　『クラウンシャーク』の主砲は特殊なレールガンで、対する『新型』は潜航運用式のオブジェクト。だとすると」

「ま、お察しの通り」

フローレイティアはビーチチェアの上で肩をすくめて、

「『新型』は深海一五〇〇メートルで待機中。だとすると、分厚い水の層が邪魔になる」

ゴンッッッ!!　ボンッッッ!!　と、いくつもの爆発音が小さな画面の中で炸裂した。大瀑布を逆さまにしたような、冗談みたいな水柱が巻き上がるが、いくら何でも莫大な水の盾をまとめて貫けるはずはない。

さらに、『新型』にはオブジェクトの所以たる、核にも耐える重装甲が別に用意されているのだ。

「……これじゃどうしようもない」

クウェンサーはうんざりしたように呟いた。

「強い弱い以前に、そもそもの相性の問題でしょう。何で海の底にいる獲物を金属砲弾で倒そうなんて考えたんですか？」

「私は『資本企業』の人間じゃないから分からん。撃墜王の『クラウンシャーク』に花を持たせたいという動きでもあったのかもな、戦果を見ると次でキリの良い数字になるし。ただ、連中も一応は考えていたのよ。『クラウンシャーク』は当初、『あめのだりん』から高速艇で逃走を図っていた残存兵力を集中攻撃していた。ヤツらの悲鳴で、『新型』を釣り上げられると考えていたんだろうな」

「でも、実際には『新型』は浮上してこなかった。分厚い装甲使って仲間の盾になる事を放棄して、ひたすら海の底でじっと身を潜めていたって事ですか……」

「ところが、単なる冷血とも違うらしい。画面を見ていれば分かるが、じきに返す刀の復讐劇が始まるぞ」

ズボァ!!　と、夜の海面が真下から引き裂かれた。

潮風の水分が引き裂かれたのか、オレンジ色の太いラインがいつまでも焼き付いている。

『新型』の主砲攻撃だ。

「レーザービーム……!?」

「これなら分厚い海水の層もお構いなし。オブジェクトの高出力なら、陽の光も届かない深海まで多少の減衰なんてお構いなしに、海水を沸騰させながら突っ込んでいく。深海に身を潜めたまま、一方的に相手の下っ腹へ喰らいつく事ができるという訳ね」

「あん？」

ヘイヴィアは眉をひそめて、
「なら、『新型』のメリットってのはレールガンだのコイルガンだの、金属砲弾だけって話なのか？　こっちもレーザービームの主砲備えて立ち向かえば普通に攻撃は届く。空気中と海水中じゃ抵抗が全然違うから、あいつは機敏な回避挙動も取れねえ。……そんなの何の意味があるってんですか？？？」
「ヤツが潜んでいる、ここ」
フローレイティアは適当な調子で、
「海底火山のすぐ近くだ。つまり、この周りでは海水の温度に極端な差がある。蜃気楼のもっと派手なヤツって感じかな。レーザービームみたいな光学兵器は露骨な影響を受けてしまう」
画面の中で、『クラウンシャーク』が小刻みな回避挙動を繰り返していた。
しかしその動きに計算された様子はなく、ただただ操縦士エリートの混乱が窺えた。
主砲攻撃には及ばないが、何もできないよりはマシだと考えているのだろう。時々、対空レーザーを真下に向けて強引に放っている。
クウェンサーはごくりと生唾を飲んで、
「……つまり、『新型』は分厚い水の壁と海底火山が作り出す変温層を利用して、金属砲弾、光学兵器、そのどちらも全て封じてしまうって訳ですか……？」
「相手がただの潜水艦なら、魚雷、機雷、爆雷、水中レーザービームなんかで外殻に風穴を空

けるだけで沈められる。だがオブジェクトとなると、堅牢な装甲によってセオリーは覆される。こいつは核魚雷を使ったって轟沈できない。レーザー兵器を山ほど搭載しているとなると、当てる事さえ難しいでしょう。それでいて『オブジェクトの時代』の兵器も通用しない。『島国』らしい特異でガラパゴスな進化をしてくれたもんだよ、まったく」

普段は変温層の陰に隠れ、主砲攻撃を行う時だけ見えない隙間からひょっこり顔を出す。これではレーザービーム主体のオブジェクトを持ち出しても、まともな勝負になるかどうかはかなり怪しい。

画面の中では、真下からの一方的な主砲攻撃を受け続ける『クラウンシャーク』が撤退の構えに移行した。

だがそこで一瞬動きが固まってしまったのが悪かったのか。

凄まじい光の柱によって串刺しにされた第二世代が、夜の闇を噴き散らすように大爆発を起こした。

「劣勢に立たされていた『島国』の自防ＰＭＣ側が、それでも躍起になって建造を隠していた訳だぜ……」

ヘイヴィアが唖然とした調子で呟く。

「自防ＰＭＣは公式に貸与されていたオブジェクトをそのまま返還しないで無断使用を続けていた。でも、それで満足するような連中じゃなかったんだ。『新型』の完成度がどれくらいだ

ったか実際のところは知らねえが、もしも万全の状態であんなのが『あめのだりん』の周りを回遊していやがったら、俺らは今頃みんな揃って幽霊船の骸骨船員になってたぞ」

『新型』にとっての勝負所は、潜航可能な状態まで秘密裡に建造を進められるのか、だったのだ。

できてしまえば、もう隠す必要はない。

海の底にありながら、こそこそ身を潜めて奇襲攻撃のタイミングを待ち続ける、なんて真似もしない。

『島国』で生み落とされた『新型』は。

海を統べる王として、深海の宮殿に腰を据えているのだ。

「こうなりたくなければ、策を考えなければいけない」

フローレイティアは寝そべったまま言った。

「次に『新型』とかち合うのは私達になるだろうからな」

2

作戦進行報告・乙01

三月二一日二二〇〇時

『正統王国』ニューカレドニア方面・特別政治犯収容施設シャトー・ド・ルージュ

真っ暗闇だった。

そんな闇を引き裂くように、監視塔からいくつものサーチライトが巨大な『それ』に向けられていた。

ざあざあと降りしきる豪雨は生ぬるく、ここが南国であるのを暗に示している。

ごうんごうんごうんごうん……という不気味な音と共に、その巨体は海に浮かべられた巨大な施設へと直接入り込んでいった。

『赤ワインのブドウ園』とも称されるその場所は、南の海に浮かぶ人工島だった。海底油田のような基部がいくつかと、鋼鉄で組み上げられたジャングルジムのような構造体、それからジャングルジムのあちこちに吊られている四角いコンテナからなる。

構造体の全景は一辺三キロ、高さ四〇メートルほどの六角形で、コンテナは一二の階層に分かれて吊られている。

ジャングルジムのあちこちには、工事現場にあるような金属製の通路や階段などがあるが、これらは全て看守達が使うためのものだ。囚人達が利用する事は滅多にない。

コンテナの全てがモジュール化された独房であり、およそ一五〇〇ほどのコンテナが、そのまま現在収容している囚人達の数と直結していた。

『六角形』の内側へゆっくりと入ったのは、オブジェクトだった。

『セーブ・ザ・ロジスティクス』……『正統王国』軍の第二世代で、兵站の輸送に重きを置いた実験的な機体だ。平たく言えば、脆弱な輸送船団を数機のオブジェクトで守りながら長い船旅を続けるのは面倒臭いから、巨大なオブジェクトに直接コンテナを外付けできないか、という考えで設計された機体である。

……結局、余計なウェイトを抱えたまま高速戦闘を実行しても被弾率が高まるだけだし、回避挙動中の超高慣性Gに振り回される内にコンテナの中身がグチャグチャになっちゃう……という訳で、大した活躍もできなかった不遇の機体なのだが。

よって、現在では兵站輸送任務ではなく、別の作戦を任される事が多い。

つまり、マフィアのボスやテロリストの親玉など、運搬中に襲撃・奪還の恐れがある重犯罪者の護送任務だ。

オブジェクト特有の、真ん丸の機体を弁当箱で覆い尽くすように設置されていた複数のコンテナへ、六角形のジャングルジムの頂点にあったクレーンのワイヤーが取り付けられた。

中に人が入っている事など一切感じさせない乱暴な動きでクレーンのアームが振り回され、コンテナはジャングルジムの各所にある『歯抜けの空きスペース』へと固定されていく。

頑丈なコンテナの屋根を叩く雨音がとにかくうるさい。

故郷の『安全国』ではお目にかかる事がない、南国特有のものだ。

【セーブ・ザ・ロジスティクス】
SAVE THE LOGISTICS

全長… 102メートル

最高速度… 時速490キロ(限界積載時)

装甲… 5センチ×200層(溶接など不純物含む)

用途… 海戦専用第二世代

分類… 兵站輸送支援兵器

運用者… 『正統王国』

仕様… 静電気式推進+海戦用フロート

主砲… 下位安定式プラズマ砲×2

副砲… レーザービーム、ゴイルカンなど

コードネーム… セーブ・ザ・ロジスティクス
(輸送船団に代わり、オブジェクトそのものが
兵站の運搬をするところから)

メインカラーリング… 黒

SAVE THE LOGISTICS

その『囚人』は、寝袋と水洗トイレしかないコンテナ式の独房をぐるりと見回す。

ここから外へ出る事は禁じられているくせに、シャワーどころか水道さえない。まともな水源と言えば水洗トイレのタンクの上にある、手を洗うためのスペースくらいのものだった。つまりこれで全て済ませろ、嫌なら勝手に干からびろ。そういう話なのだろう。

エアコンなんて上等なものは当然なく、コンテナには窓一枚ない。外界との接点は食事用のトレイを受け渡す細長いスリットと、壁に一つだけある換気扇だけだった。そのどちらからも南半球の熱帯夜の蒸し暑い空気が流れ込んできて、住環境としてはほぼ最悪に近い。放っておくと人間の体がぐずぐずに溶けてしまいそうだ。

『囚人』の少年は、頬から顎を伝う汗を手の甲で拭うと、金属製コンテナの壁際に寄る。

壁に背中を預けたその場所は、換気扇の真下だった。

「よお！」

豪雨の音に負けないように、大声で呼びかける。

この外道な収容施設については、ぶち込まれる前から話には聞いていた。

囚人達のコミュニケーションにはいくつか種類がある。

例えば、金属の壁を規則的に叩いて信号を送るとか。

施設の中では複数の暗号パターンが横行しており、それは特定のグループに忠誠を誓わなければ手に入らない。勝手に解読した場合は『覗き見』の罰として、相応の制裁が待っている。

完全独房体制で囚人は誰も外に出られないはずなのに『相応の制裁』が可能である事自体、何かしらの抜け道がある事を示唆していた。

そして、ここへやってきた新入りの第一ステップが、この換気扇。

こいつは隣のコンテナへ声が直接届く唯一のルートで、まずはここから先輩方とコンタクトを取る。どんなグループがあって、どこへ忠誠を誓うのが得策なのか。それを聞き出せないとやっていけない。

さっきも言った通り、完全独房体制だからと言って、気楽な一人暮らしなど満喫できないのだ。危険人物とみなされれば、全グループから日の仇にされる。それでは生き残れない。

「アンタはどんな罪でぶち込まれたんだ？　こんな世界の果てまで流されたんだからよっぽどのもんだろうが、場合によっては気が合うかもな。だけど子供の誘拐とクスリに少しでも噛んでいるっていうならお断りだ。二度と声はかけない」

すると、換気扇の向こうから『ひえぇ……』という声が返ってきた。

おっとりした女性の声だ。

雨音に消えてしまいそうな弱々しい言葉遣いがようやく返ってくる。

『ち、違うんですう。わ、わたしは、その、無実の罪でここに入れられたっていうか、そのう……』

そこで、一度息を整えるような無言があった。

改めて、『彼女』は言う。

『そ、そもそも、ここは無実の人だけが送り込まれる、とっても変わった刑務所なんですよう……』

ああ、と『囚人』の少年は壁に背中を預けたまま、わずかに呻いた。

ガカッ!!　という間近での落雷と同時に、換気扇から入り込んだカメラのフラッシュのような閃光の余波が『囚人』の顔を一瞬だけ照らす。

クウェンサー＝バーボタージュ。

『とっても変わった刑務所』へ密やかに潜入した戦地派遣留学生の少年は、相手の声が事前に確認した録音ファイルと同じものだと判断すると、そこで口調をガラリと変える。

「分かっているよ。ここは『正統王国』の腐った『貴族』連中が、何かと気に喰わない『平民』に適当な罪を押し付けてぶち込むための、国が認めた公的リンチ施設だ。いるのは顧客の脱税を内部告発しようとした会計士とか、真面目に仕事をしているのにちっとも儲からない農家を束ねて交渉団体を作ろうとした富農とか、貧民街の子供達に毎日パンを配っていたシスターとか、まあ色々だ。とにかく悪人なんかいない。アンタもその一人だ」

シャトー・ド・ルージュ。

この収容所が『赤ワインのブドウ園』などと称されるのもその辺りに理由がある。

ジャングルジムのような構造体にコンテナ式の独房を多数ぶら下げている外観がブドウの棚

のように見えるところも一つ。

無実の人間を閉じ込め、苦しめ、真っ赤な血を搾り取るというのも一つ。

「マリアージュ＝ナイトキャップ。『正統王国』南ブリテン方面ケンブリッジ大学所属の院生。専門は機械工学と情報処理。『安全国』にいながら軍に協力し、自軍のオブジェクトの弱点の洗い出しなんかに尽力していた」

コンテナの中には資料は持ち込めない。

胃袋に入れていれば何でも見逃してもらえるほど甘い環境ではない。

全て、クウェンサーが頭の中に叩き込んだ知識だ。

「人生の契機になったのは、自軍ではなく敵軍のオブジェクトへ目を向けた時だった。『資本企業』の第二世代で有名だった『プライベートバンク』。こいつはケイマン諸島に置いてあると思われていたタックスヘイヴン銀行のメインサーバーを丸ごと腹に抱え込んだ特殊な機体だった。表向きは顧客の預金と個人情報を万全の態勢で警護するため、って話だったが、実際には『正統王国』『情報同盟』『資本企業』『信心組織』……ありとあらゆるＶＩＰ達の裏金の流れを把握し、秘密裡に『協力』を仰ぐ事だった。つまり、新兵器じゃなくて政治の都合によって『絶対に撃破不能なオブジェクト』を造ろうとした訳だな」

戦場でオブジェクトが吹き飛ばされれば各国要人の莫大な預金情報がまとめて吹っ飛ぶ。さらに、残骸が回収されて解析作業を行われれば不正な金の流れ、つまり自分達の悪事が露呈す

る。

これでは誰も手出しはできない。

『資本企業』所属でありながら、上の命令にさえ従う必要はない。

「……そこでアンタは『プライベートバンク』のメインサーバーにウィルスを流して個人情報を抜き取った。実際にはそれっぽく自作したリストに過ぎなかったけど、機密データの中身なんて民衆は見た事もなかったから、真偽の見極めなんてできる訳がない。さらにアンタは、さも『防壁を全て貫き、全データを引っこ抜いた』と思い込ませるための情報戦を波状攻撃で仕掛けていた」

『これ以上「プライベートバンク」に肩入れしても得はしないと判断した影のＶＩＰ達は、報復も兼ねて同機の撃滅を決定。全部わたしが仕掛けたブラフだったと気づいた時には、すでに「プライベートバンク」はインド洋の底で鉄くずになっていた、って事ですけどお……』

『非力な独裁者』の猛威が世界を覆う前に、マリアージュは先手を打った。

しかし、だからと言って各国の重鎮が必ずしも手放しで喜ぶとは限らない。……実のところ、クウェンサーも過去にそういった話に首を突っ込んで戦場で殺されかけた経験はある。

『安全国』にいたマリアージュの場合は、他の手段が取られたという訳だろう。

今にもめそめそしくしく泣き出しそうな声が、換気扇から入り込んでくる。

『それが何だって言うんですかあ？　ま、まさか、今さらになって殺し屋さんが送り込まれて

来たとか？　そんなのってあんまりですう。わたしはもう、こんな理不尽なトコに死ぬまで閉じ込められるって罰を受けているのにい……』

「そうじゃない」

クウェンサーは吐き捨てるように、

「その腕を見込んで協力をお願いしたい。男も女も区別なしでぶち込むような、最低限のモラルもないくそったれの収容所から、お前を出してやる。だから代わりに、あるオブジェクトの弱点を探すために、俺と一緒に頭を働かせてほしい。『資本企業』の『島国』でこっそり建造が進められていた、完全潜航運用式の『新型』……『メガロダイバー』だ」

マリアージュ＝ナイトキャップはあくまでも頭の担当で、クウェンサーやヘイヴィアと違って自力でオブジェクトを破壊して回っている訳ではない。とどめの一撃はオブジェクト任せで、それは従来の『クリーンな戦争』の域を出ない。

しかし、有用であるのは事実だろう。

『安全国』にいながらにして戦争を終わらせるなど、ある意味で馬鹿二人よりも賢い選択だ。

……問題なのは、その功績を評価する軍上層部の方が馬鹿ばっかりだった事だが。

『まっ、待ってください。「新型」って何なんですかあ？　わたしはずっとここにいるからお外の事情には明るくないんですよう……』

「嘘だな」

クウェンサーは一言で断じた。

南国の雨音に負けないよう、大きな声で彼は続ける。

「見た目は哀れな鳥籠の姫だが、アンタ、実は今世界で一番金を動かしている囚人なんだろ。電子書籍の印税、ブログの広告収入、それらを元手にした金融取引。ロンドン市場とウォール街に名義だけの個室まで持ってる。どんな方法使って回線引いたか知らないけど、外の事情なんて俺より詳しく調べているんじゃないか？　特に、怪しい動きをするオブジェクト回りは」

『……』

「データを見せてもらったけど、アンタの売買記録はどう考えたって大赤字だ。ハッキリ言って『安全国』の暇な奥様の方がまだマシってくらいだな。競馬やカジノ狂いと一緒で、勝ち負けよりも金を使っているのが楽しいっていう、特殊な買い物依存症なのかもしれない。……じゃあ、その莫大な負債はどうやって補塡してる？　これはきっと憶測なんだが、匿名扱いで今でも軍上層部に情報を売っているんじゃないのか。難攻不落と称される、各国のオブジェクトの突破口ってヤツを」

クウェンサーは静かに続ける。

「……だとしたら、カードの選り好みなんてしている場合じゃない。あの新型の『メガロダイバー』について、持っている情報は全て出してほしいし、あれを吹っ飛ばすまでは続けて頭を貸してほしい」

『……。見返りは、この馬鹿げた刑務所から出してもらえる事、ですかあ？』

「ケンブリッジの件だが、向こうの学長は良識派みたいだな。アンタの事は休学扱いに留めてあるから、ここから出られたらいつでも復学できるぞ。何とも羨ましい話だね」

『でも、そんな簡単に話が進むんですかあ？　ここの警備は超厳重ですよう……』

「別にシャベル代わりにスプーン握ってトンネルを掘る訳じゃない」

吐き捨てるようにクウェンサーは答えた。

「いい加減、軍の方でも税金の無駄遣いって事で『貴族』の遊びにケリをつけたいんだとさ。だから俺のバックには軍がついてる。コソコソ穴掘って抜け出すんじゃなくて、収容所を丸ごとぶっ壊して凱旋するぞ」

そこまで言って、クウェンサーはわずかに黙った。

切羽詰まった調子で、彼は呟く。

「……じゃないと今度はうちのお姫様が『メガロダイバー』にぶち抜かれる。そうなる前に突破口を見つけないと」

『ええと、まずはどこから始めれば良いんですかあ？』

「作戦開始まで時間はある。もったいないから俺の話を聞いてくれ。あの『メガロダイバー』と直接かち合った生の意見ってヤツだ、ちょっとは役に立つだろう」

3

作戦進行報告・甲02
二月一七日一二〇〇時
戦争国太平洋極西方面海域救命ボート

天気は快晴だった。
三月中旬という事で、青空のてっぺんに太陽があっても、ポカポカした感じがしないのが残念だが。馬鹿二人の頬に当たる風はどこか寒々しい。
「ええと、極東にある太平洋の、一番西にあるから極西方面海域？　結局、西なのか東なのかどっちなんだっつーの!?」
「そういう時は地球儀をぐるりと回せば良いのさ。どこも地続きみんな友達。そういう風に考えられたら世界がハッピーになれるっていうのに」
「どこに住んでる気持ちの悪りぃヒッピーなんだテメェは？　変な匂いのする煙草とか吸ってねえだろうな」
「戦争反対論者はみんなイカれたジャンキーだって決めつけるから、いつまで経っても戦争ってなくならないんだよね」

「かくいう俺もテメェも、その戦争ってのを利用して一儲けしようとしてんだろ。俺は武勲を積んで『家』の継承権を得る、テメェはオブジェクトの設計士になって下級『貴族』を超えた富豪に成り上がる。『クリーンな戦争』に乾杯ってヤツだよ」

マグロ漁船の行き交う冷たい海の上を、一艘の小さな救命ボートがぷかぷか漂っていた。

例のスカーレットプリンセス号が沈没したとかいう話ではない。

クウェンサー達は『あめのだりん』襲撃時よりもさらに分厚い、ゴムと金属で作った硬式潜水服をまとっていた。ぴっちりしたスウェットスーツというよりは、馬鹿デカいロボットみたいな形の『硬い、ハードな』潜水服である。バケツを逆さにしたようなヘルメットだけは、傍らに置いてある状態だった。

「なんか、丸っこいっつーか不格好な鎧だな。アクション映画とかロボットアニメにゃ絶対出てこねえタイプなんじゃねえか、これ？」

「減圧気にせず好きなだけ潜れる便利グッズだよ。ま、オモチャにしても売れ残りそうなデザインなのは認めるけど。ホントに機能性だけ追求すると見た目はろくな事にならないって見本だね」

クウェンサーの言葉を聞きながら、ヘイヴィアはうんざりした口調で、

「……にしても、信じらんねえ。お姫様が真っ向勝負で戦っても勝てねえ相手に、生身の人間ぶつけましょうなんてマジか？　そろそろ生命保険に加入した方が良いのか俺？？？」

「まともにぶつかっても勝てないから、搦め手で行きましょうって話だったろ」

クウェンサーは吐き捨てるように答える。

「何にしても『新型』が深海一五〇〇メートルに留まっているんじゃどうしようもない。どうにかしてアレにこっそり近づいて、小細工を施さないと」

「深海魚のエラぶっ壊して、水面まで上がってこさせるなんて乱暴すぎると思わねえのか？」

「オブジェクトの主砲も核魚雷も通用しないんだ。ここでぶっ壊しておかないと、地球の七割が『新型』の帝国になっちゃうんだぞ。そもそもこれ以外に有効策も見つからないし」

「……設計学びに来た学生と、レーダー分析官のイケメン『貴族』のやるような仕事じゃねえって。俺らは万能薬とか十徳ナイフじゃねえんだぞ。罰ゲームみてえに俺らへ仕事が回ってきたって事は、専門のフロッグマンが揃いも揃って任務拒否したってんだろ!?　ゼッテーヤバいよこれ!!」

「もう、最後の切り札としてフローレイティアさんに気に入られているんだって、ポジティブに受け取る以外にやる事はないね。何しろ下っ端だから」

適当に言いながら、クウェンサーは鉄のバケツに丸いガラス窓をつけたようなヘルメットを両手で持った。残念な事に、これは一人で装着できない。まずクウェンサーが頭から被ると、ヘイヴィアがネジのような金具を八つほど回して、首と頭を完全に固定させる。

それが終わると、今度はヘイヴィアのヘルメットをクウェンサーが留めていく。

互いの音声は無線信号でやり取りしていた。

『これ、自分で吐いた息を苛性ソーダで浄化して循環させるシステムだろ。信じらんねえ。水に触れたら毒ガスが潜水服の中を埋め尽くしちまうぜ』

『仕方がないよ。普通のボンベ使ったら吐いた息が気泡として外に洩れちゃうんだ。「新型」は音紋で敵味方を識別するって話だろ。所属不明のダイバーがいるなんて分かったらレーザービームを撃ち込まれるぞ』

『そりゃ理屈は分かるけどよ、苛性ソーダって劇物扱いだぜ!?』

『「ベイビーマグナム」の密閉循環システムにも使われているから大丈夫だって』

『そのオブジェクト信仰もいい加減にしろよ！　そもそもあれは核にも耐える装甲に守られてんだろ。俺らの場合はユニット剥き出しだぜ!?　波に揺られて岩礁にぶつかっただけで破損しちまうんだよ!!』

ヘイヴィアは水中ライフルを、クウェンサーは工具一式の入ったバッグを摑むと、救命ボートの縁に腰掛ける。海を背にする形だ。

クウェンサーは初歩的な質問をした。

『これからどうするんだっけ？』

『何にも考える必要はねえよ。そのままひっくり返るように後ろへ倒れれば、勝手に頭から飛び込む形になる。コントみてえに派手に転べば良いんだ。お笑い担当がいつもやってる事じゃ

ねえか』

『えっ、えっ、後ろに？　逆さまで!?　何それ怖い超怖いこのヘルメット視界は前しかないし……!!』

『水平チョーップ!!』

待ちきれなくなったヘイヴィアが、隣で腰掛けているクウェンサーの首の辺りに打撃を加えた。

びっくりしてそのまま後ろへひっくり返り、どぼんと水中に没した腐れ縁を確認してから、ヘイヴィアも背面へ倒れ込むような格好で飛び込んでいく。

手足をバタバタ振り回すクウェンサーは、すでに下方へと降下を始めていた。

『何これ沈む超沈む！　ぜんっぜん浮かばないんですけどー!?』

『敵の「新型」は深海一五〇〇メートルだっ!!　大体、こんな金属の塊着込んでいたら、エアーの力でも使って風船膨らませねえ限りは浮かばねえよ。そいつは帰りの切符だ。ごぼごぼ泡立てながらゆったりダイビングしてたらレーザービームで撃ち抜かれるって、テメェが言ったんじゃねえか!!』

つまり行きは完全な無音の状態で潜行していき、海底で『新型』に何らかのダメージを与える。動作不良によって身動きが取れなくなり、緊急浮上を余儀なくされた『新型』を尻目に、エアーの力を使って浮上して、海面へ帰還する。これが大雑把な作戦内容だった。

……平たく言えば、ダメージを与える事に失敗すれば、浮上のチャンスも失う。相手が万全の状態で、無理にエアーを使って海面へ逃げようとしても、『新型』に捕捉されてレーザービームを撃ち込まれるのがオチだ。

それはまあ、水中戦闘担当のフロッグマンが揃って嫌な顔をする訳である。

海のスペシャリストと言っても、暗く冷たい海の底でゆっくりと死にたいとは考えない。

『潜行速度についちゃあ、腰に巻いた錘の数を減らせばある程度は調整できる。あんまり早く沈むと関節の溝を通った海水が気泡を生むかもしれねえ。軽めにしておいて損はねえだろ』

『な、なら逆に早く降りたくなったら？』

『講習は受けたんだよな!?　岩でも何でも良いから錘になるもの見つけて腰にくくりつけりゃ良いだろうが!!』

飛び込んだ直後の浅い海は、テレビのドキュメンタリー番組で観るような、小魚の群れが一個の巨大な生き物みたいに泳ぎ回る神秘の風景が広がっていた。分厚い潜水服のおかげで海の寒さも感じられない。……ただ、『どれだけ手足を動かしても沈むだけ』という状況が本能的な恐怖を煽るのか、クウェンサーには風景を楽しむだけの心の余裕がない。感覚としては、両足をコンクリートで固めて夜の埠頭からドボン、というマフィアの制裁みたいな絵面しか思い浮かべられない。

一方のヘイヴィアはと言えば、こんな時でも余裕があった。

基本的に高スペックだが印象が薄いというか、全体的に器用貧乏なヤツなのだ。

『ビビるのは結構だけどよ、後で苦しめられるのは自分自身だぜ。今、小便チビったら自家生産の地獄行きだ。多分、硬式潜水服も買い取り扱いになる。軍用品だから無駄に高っけえぞー？』

『さっきから嬉しい情報が一個もないよ！　何だか空気もケミカルで体に悪そうな匂いがするしさ！』

『だから劇物の苛性ソーダ使って循環してるっつってんだろ!!　俺らは健康マニアと真逆の道を突っ走ってんの！　気づけよ馬鹿、ばーかっ!!』

一〇〇メートルも潜ると、もう上を見上げてもどの辺りに海面があるのか分からなくなってしまった。

一〇〇メートルも潜ると、スタンドライトの光量をダイヤルで絞っていくように、明確に周囲が薄暗くなっていく。

それは、沈んでいく怖さとは別種の混乱をクウェンサーの頭に叩き込んできた。

『……た、太陽の光ももう届かない。まるで巨大な石棺に閉じ込められたみたいだ』

『間違っちゃいねえさ。頭の上にのしかかってる重量は、砂漠のピラミッドよりもクソ重たいんだ。そして古代の墓場よりもここは暗くて冷たい』

別世界。

そんな言葉が明確な形を持ち、ゆっくりとその大きな口を開いて、クウェンサー達を呑み込

んでいく。

硬式潜水服の頭には強力なライトがあるのだが、それでも闇は拭えない。光の輪のすぐ外に、ねっとりとした闇がわだかまっていた。

『まだまだ先だよ。俺らの周りにぶよぶよした深海魚が泳ぎ回るようになってからが本番だ。うんざりしちまうぜ、早送りか食事の休憩が欲しいところだな』

『もう、文句を言う気もなくなってきた……』

『何だ何だ。実は閉所恐怖症だったとか？』

『今からそうなりそうだっ！』

そこから先は、地味だが苦しい作業がひたすら続いた。

敵の『新型』は音紋を頼りに標的を探す。推進方式の違う何機種かの無人潜水艇を使って確認済みだ。最終的には全機破壊されたが、発見までの時間には大きな差があった。

音紋というのは、敢えて誤解を招くような言い方をすれば『音の指紋』とでも呼ぶべきか。艦船が水を割く音や、スクリューやウォータージェット噴射が水をかく音は、一隻一隻で微妙に異なる。そのパターンを記録しておけば、音を聞いただけで相手が敵か味方か区別できる。

『新型』に登録されているのは、敵艦の音紋ではなく味方の音紋だ。

周囲一帯の音を片っ端から拾い集め、データベースに適合しないものは全て『敵』とみなして攻撃を加える。軍艦も商船もお構いなし。魔の海域を作って安全を保つ。

ヤツに目はない。
ただし耳が恐ろしく鋭い。
なので、クウェンサー達は『光量』の有無を気にせず、堂々とライトを点灯させながら真っ暗になった海を降りていく。
『無人潜水艇は軒並みやられたって話だけどよ、俺らはホントに大丈夫なのか？　ロボットみてえな潜水服着てるんだぜ……』
『人工軟骨と消音ゴムで関節部分を覆っているって話だろ。可動限界を無理に超えるように手足を動かさない限りクラック音は出ないはずだ』
『理論上はな、あくまで理論上だ！　そもそも苛性ソーダ使った循環システムも関節の無音化も、アリモノの潜水服を即興で改造したハンドメイドだろ？　実証試験もしてねえんだぞ、これ!?』
ライトの光に照らされて、真っ白な雪のようなものがチラチラと見えていた。死んだものの分解される事もなく漂う、プランクトンの塊だ。ものすごーく長い目で見れば石油の素になるのだから、これだってゴミではなく立派な資源である。
『……それにしても、やけに死んでいるな。無酸素状態の「死の海」ってヤツか？』
『海底火山があるって話だろ。そっち絡みかもな、硫化ナントカだっけ？？？　ほら、「安全国」で洗剤混ぜて自殺に使われるヤツ。あれじゃねえの』

『ていうか、なに、何だ？　なんか俺達、流されていないか？』
『海流ってのを知らねえのかよ。小学生の理科の世界だぜ』
『流されちゃったらどうなるの!?　一五〇〇メートルだって世界記録レベルなんだぞ。そこからさらに谷みたいな所に落ちたら水圧で潰れちゃうよ!!』
『ならオブジェクトだの海底火山だのの真上に落ちるかよ。それこそ即死じゃねえか』
減らず口も徐々になくなっていく。
ひたすらに潜行していく。
まるで自分自身という存在を少しずつ埋葬しているようだった。生きたまま棺に納まり、上から少しずつ土を被せられていく。やがては墓穴は完全に均され、地球上の誰にもクウェンサーがどこにいるのか分からなくなってしまう……。
永遠に沈み続ける感覚は、それに似ている。
自分の頭の上にのしかかるものの重さが増していくごとに、自分の中にある柔らかい感情が少しずつ削り取られていくのが分かる。
瞳の揺れが消える。
一点を見据えて、降下を続けていく。
何十分、いや、何時間は経過したのか。時間の感覚さえ曖昧になってきたその時、クウェンサーは真下からぼんやりとした光が明滅しているのを捉えた。

真っ白な光だ。

きめ細かい砂が敷き詰められた海底に、自分達が放っているライトの光が照り返しているのだ。

『見えたぞ。海の底だぜ』

『地獄の底の間違いじゃなくて……？』

ヘイヴィアは両足からゆっくりと着地し、クウェンサーは背中から転がった。

『うう、見ていないで助けてくれよ』

『関節部分は消音ゴムで覆ってあるが、外装同士がぶつかんのはまずい。人工音は「新型」を呼び寄せちまうぞ』

四苦八苦して、クウェンサーが何とか自力で立ち上がるのをヘイヴィアは待つ。無闇に砂煙が舞い上がった。

『で、「新型」っていうのはどこにいるんだ』

『西へ五、六〇〇くらい流されたみてえだな。歩いていける距離で助かったぜ』

ライトで限定された視界の中、二人して並んで真っ暗な海底をゆっくりと歩く。

月面を進んでいるような浮遊感だった。

頭上を何か巨大な影が通り過ぎていった。身をくねらせるような動きに深海魚かと思ったクウェンサーだったが、何気なく見上げてから絶句する。

ヘイヴィアも怪訝な声を発した。

『何だありゃ……？　魚ロボットだぜ。新手の魚雷か何かかよ？？？』

魚の胴体を二〇から三〇くらいの数に輪切りして、その一つ一つをウェーブのように動かす事で魚の動きを真似ているロボットらしい。スクリューやウォータージェットといった推進装置はついていない。

だが、一番気になったのはそこではない。

『頭の代わりに何かブレードみたいなのがついてるぜ。U字の長い金具みてえなヤツ』

『音叉だ……。海中に伝播する微細な音と共振して、「新型」の耳に情報を届けているんだろう。あいつは広い範囲に音叉魚雷を撒いて、多角的な「面」で音を聞き分けているんだ……』

正体が分かってくると、分厚い硬式潜水服の内側が気持ち悪い汗や蒸気でいっぱいになるような気がした。

安全だと思ってずんずん進んでいた地面の下に、大量の地雷が埋まっていたと後から教えられるのと同じ気分だ。

それでも進むしかない。

どのみち、敵の探知能力がクウェンサー達を上回っていれば、今から慌てて立ち止まったところでとっくに『新型』のレーザービームで撃ち抜かれているはずだ。それが来なかったという事は、このまま海底を歩いて進めると考えた方が良い。

まるで楽観視という名の自己暗示でもかけるようにしながら、クウェンサー達はさらに歩く。

そのうち、ぼんやりとした光が見えてきた。

ライトの照り返しとは明らかに違う。もっと規模が大きい。そして光は不均一だった。明るい時もあれば暗い時もある。

『見ろよ。あれだぜ、オレンジ色の光が見える』

『「新型」の光じゃないよな……？』

『海底火山の方だろ。何にしたって、あれの近くに「新型」は身を潜めているはずだ。情報通りならな』

火山と言っても地上にあるような、高い三角形のシルエットではないらしい。どちらかと言うと、海底にビキビキと走る亀裂の奥から、オレンジ色のマグマが顔を覗かせている、といった方が近い。

潜っていた途中ではプランクトンがたくさん死んでいたが、いっそ底まで潜ると、カニだの深海魚だのがゆったりと漂っているのが見えてきた。

『酸素じゃなくて、硫黄とかをベースに生きていく特殊な種類の生き物かもな。月とか火星とかでも活動できるかもしれねえなんて呼ばれているヤツだ』

明かりを頼りにゆっくりと歩いていくと、やがてその威容が見えてきた。

巨大な山の代わりに屹立する、漆黒の影。

オレンジ色の光をバックに、浮き彫りになった巨大な影。

『見えたぜ……』

『ああ』

クウェンサーはごくりと喉を鳴らした。

『『新型』だ』

4

作戦進行報告・乙02

三月二一日二三〇時

『正統王国』ニューカレドニア方面・特別政治犯収容施設シャトー・ド・ルージュ

コンテナ式の独房に閉じ込められているクウェンサーは、食事用のトレイを出し入れするための細長いスリットから外の世界を覗き込んでいた。

外は相変わらずの豪雨。彼を運んできたオブジェクトももういない。

この監獄は巨大なジャングルジムだ。金網状の床に、鉄パイプを繋げたような手すり。所々にある隔壁も鉄格子。視界を広く確保するための措置だろうが、おかげで通路に屋根はなく、

雨は素通りだった。

その土砂降りの通路では、先端にライトを取り付けた銃を手にした看守が、不定期にうろうろと行ったり来たりしていた。おそらく巡回パターンは乱数処理されていて、囚人達に読まれないようにしているのだろう。雨のせいか、熱気のせいか、レインコートのフードを頭から被った看守の目つきは不機嫌になっていた。

手にしている銃は、アサルトライフルに似ているが、違う。

マガジンがやたらと太く、銃身は短く切り詰められていた。

「あれ何だ？　カービン銃じゃないよな」

『えうう……。知らないんですかあ？　あれは「ドン・シカゴの缶切り」ってヤツですよう』

「……フルオートのショットガンか」

『戦争国』よりも、治安の悪い『安全国』で名を馳せたモデルだ。軍用品をマフィアが手に入れ、弾を全て強力なスラッグ弾に詰め替えた結果、至近距離なら防弾仕様の高級車を輪切りするほどの破壊力を獲得した。麻薬撲滅を掲げる政府要人が次々と誘拐された時に好んで使われ、その悪名は天井知らずとなった訳だ。……戦争や通常兵器にさほど詳しくない『学生』のクウエンサーでも知っている辺りで、どれくらい悪名が広がっているかは察せるだろう。

「だけどヤツらが使っているのはスラッグ弾じゃないな。普通の散弾か、下手すりゃ鎮圧用のゴム弾だ」

『な、何でそんなの分かるんですかあ？　あいつらが規定を守ってわたし達のためを想って武器を選ぶ訳ないじゃないですか』

「看守が一番恐れているのは暴動だ。武器を奪われれば自分達に向けられる。コンテナも通路を遮る緊急隔壁も自由に食い破れるような『缶切り』が敵の手に渡ったら、看守達はブレーキシステムを失う。そんな真似はしないさ」

クウェンサーはスリットから目を離すと、再び換気扇の方へ近づいた。

「それより今の話を聞いてどう思った？　今のところの感想で良いから」

『そうですねえ』

マリアージュ＝ナイトキャップはおっとりとした声で応じる。

『本当に「新型」……「メガロダイバー」が音紋だけで敵の位置を特定しているのだとすれば、そこを利用できるかもしれませんねえ。例えば、あらかじめ録音しておいた「島国」側の音紋をスピーカーで流すとか、デコイの爆雷を炸裂させる事で、こちらの音紋を覆い隠してしまうとか』

「そいつは無人潜水艇で試したってさ。ある程度の時間は稼げたけど、結局全部特定されてレーザービームで吹き飛ばされた。まして、オブジェクトみたいな図体のデカい騒音の塊じゃ絶対誤魔化し切れない」

『ですねえ。でもチャフとかフレアみたいな感覚で、スピーカーをつけたブイを射出しながら

回避挙動を取ればいくらか安心できると思いますけど』

それならアリかもしれない。

メモできるものがない事に若干の苛立ちを覚えるクウェンサーに、今度はマリアージュの方から質問が飛んできた。

『あ、あのう、それでどうやってここから出るつもりなんですか？』

「さっきも言ったけど、俺一人だけの力じゃない。軍が公式に動く。心配する事はないと思うけど」

『でも、知っておかないと心配なんですよう』

「話自体はシンプルなもんでさ。まず、この収容所へ外部からウィルスを流し込む。施設全体の管理システムを乗っ取る訳だな」

『あっ、それで全てのコンテナのロックを外してみんなを助けるって訳ですねえ』

「逆だよ。完全にロックして、一度閉じ込めるんだ」

クウェンサーはあっさりと否定した。

「収容所はヘリボーンを使って襲撃するけど、劣勢になったら看守は絶対に囚人を人質に取る。場合によっては道連れに自滅するヤツも出てくるかもしれない。そういった破れかぶれから人命を守るのが最優先だ」

全てのコンテナをガッチリとロックし、看守達にさえ開けられなくなったところで、攻撃へ

リを使った上空からの攻撃と、輸送ヘリから降下した兵士達の手で看守達を完全に制圧する。コンテナを開くのはそれからだ。

「『ドン・シカゴの缶切り』がちょっと気になるけど、さっきも言った通り、おそらく看守達は過剰な火力を持つ事は控えているはずだ。普通の散弾や鎮圧用のゴム弾ならコンテナの独房が破られたりはしない。……だからさ、俺達が特別何かをする必要はないんだ。スプーン握ってトンネルを掘ったり、フォークを壁に擦って形を整えてからネジを回したり、なんて作業は必要ない。待っていれば、後は重武装の軍隊が勝手に終わらせてくれる」

看守が扉の前を横切ったのか、硬い足音が響いた。

聞こえる事はないと知りつつ、クウェンサーはわずかに黙る。

足音がなくなるのを確認してから、彼は再び口を開いた。

「それじゃ、次はいよいよ『メガロダイバー』と接触した辺りから話すぞ」

5

作戦進行報告・甲03

三月一七日一七〇〇時

戦争国太平洋極西方面海域深海、五〇〇メートル地点

分厚い硬式潜水服をまとったクウェンサーとヘイヴィアが、きめの細かい砂の上を月面歩行のようにゆっくりと歩いていく。

海底火山、と言っても山がそびえているのではなかった。海の底に巨大な亀裂が走っていて、その奥がオレンジ色に輝いているのだ。そちらに近づきたいとはとても思えない。ロボットみたいな硬式潜水服を着たまま茹でられるのは面白い死に方ではないだろう。

そびえているのは、鋼鉄の塊だった。

オブジェクト。

『島国』が極秘裡に開発していた、『新型』。

『おい、どうすんだ？　命懸けで近づいたのは良いけどよ、あんな化け物の弱点なんかどうやって見つけんだよ!?』

『少なくとも叫んだって向こうから出てくるもんじゃない。基本に忠実に、だよ。一周ぐるっと回って全てを観察しよう。考えるのはそれからだ』

こうして見上げているだけでも、すでにいくつかの特徴がクウェンサーの目に飛び込んできていた。

海上戦闘を行うオブジェクトのように、下部には円形のフロートが見える。ただし、潜航を主とするオブジェクトにとって、これがどんな意味を持つのかは不明な点が多かった。単純な

浮き袋でもないだろう。

主砲は一門。機体のてっぺんにそびえるように屹立している。ただし、球体状本体は左右から、巨大な柱のようなものに挟まれていた。二本の柱は足元にある円形フロートから延びているものだ。

『……球体状本体自体を、ぐるっと上下に回せる造りになっているのか。真上の敵も、真正面の敵も自由に狙えるように』

オブジェクトを中心に、クウェンサー達は時計回りでゆっくりと移動を始めた。

例の『新型』は、完全に音だけを頼っている特殊なオブジェクトだ。こうしてライトの光を直接当てても何の反応もない。しかし、そうなると怖いのが足音だ。相手がどれくらいの精度で音を聞き取るのか全く分からない以上、目隠しで地雷原を歩かされるような重圧は常に襲いかかってくる。

『何だこりゃ。かなりの数の副砲も備えちゃいるが、どいつもこいつも足元のフロートばっかりだぜ。悪趣味な花みてえだ』

『球体状の本体そのものが回るって言ったろ。ウニみたいに小さな砲を設置しても、機体のどこかと干渉を起こしてしまうんだ』

当然と言えば当然だが、『新型』は主砲による攻撃を最優先で設計されているらしい。

それも、同じ海中での戦闘ではなく、海底から海上のオブジェクトを一方的に攻撃するため、

だ。

『……直接的な戦闘能力そのものは大した事はないのかもしれないな。まあ、抵抗力の強い海中で、総合格闘技みたいなフットワークを求めるのは無理な相談かもしれないけど』

『だったら何だよ？　海底火山の変温層のおかげでこっちのレーザーはねじれるし、金属砲弾は届きもしねえ。核魚雷だの核機雷だのだって通用しねえんだぜ。こいつがあぐらをかいていようが、俺らにゃ有効打を与える攻撃手段がねえんだ。そりゃ慢心だってするだろうよ』

『……』

クウェンサーは考え込みながらも、さらに『新型』の周りを回っていく。

真後ろまで到着した。

『これが……推進装置、か？』

機体の真後ろにも、いくつかの柱に支えられる形で、円形の巨大なパーツが球体状本体に寄り添っていた。その円形パーツから、翼のようなパーツが左右三対ほど延びていた。

クウェンサーはその翼のようなパーツに、無数の穴が空いているのを確認した。機関砲の放熱カバーのような感じだ。

『ウォータージェット方式、だな。大量の水を取り込んで、それを高圧で吐き出して推進力を得ているんだ』

『何だって、緒だよ！　スクリューだろうが電磁推進だろうがな！　パーツが頑丈で壊しよう

がねえんじゃ違いなんかねえって!!』

『……そうでもないぞ』

クウェンサーは改めて、ライトの光をあちこちに飛ばす。

海を漂っているものを観察していく。

『見ろ、ヘイヴィア』

『何をだよ。こんな深海じゃビキニの姉ちゃんなんかいねえだろ。それとも、いっそ人魚さんでも見つけたか？』

『深海魚だよ。ブサイクなヤツ』

クウェンサーは真顔で答えた。

『あいつらにも最適な環境ってものがある。火山の近くに住んでいるんだから、温かい海水じゃないと生きていけないんだろう。でも、ほら、どうだ？　あいつらの動きがちょっとおかしくなってるぞ』

『あん？』

『海底火山から離れて、オブジェクトの周りを泳いでいるヤツがいる』

クウェンサーは的確に指摘した。

ようやく、ヘイヴィアも顔を上げて周辺の深海魚の動きを追い駆け始めた。

『どうなってんだ？　金属の塊だから、海底火山からの熱を蓄えちまってるとか？』

『もっと面白い仮説がある』

短い言葉で、しかし楽しそうにクウェンサーは否定した。

『「新型」は機内に海水を取り込んでいる。それは何も推進力を得るウォータージェットのためだけじゃない。水冷式……つまり冷たい水を取り込んで金属パイプの中を流し、隣接する動力炉を冷やして温度管理しているんだ』

つまり。

『……吸水口がどこにあるかを探そう。ビニールシートでも何でも良い。塞いでしまえば、ウォータージェットの推進力も、動力炉の温度管理も一気に潰せるかもしれないぞ』

6

作戦進行報告・乙03

三月二一日二三〇〇時

『正統王国』ニューカレドニア方面・特別政治犯収容施設シャトー・ド・ルージュ

「そろそろ時間だ」

クウェンサーは呟いた。

「出るぞ。準備をしろ」

『は、はぁあ!?　な、なん、なにを……』

「さっきウィルスを流して、収容所全体のシステムを乗っ取ってから軍の部隊が突入するって言っただろ。今のままじゃピースが足りない。施設の心臓部は外部と繋がっていないから、俺達の手で配線をいじる必要があるんだ」

『で、でも、あの、出るって、あの……へ、えへへ。扉は外側からロックされてますけどお？』

「扉には食事を受け渡すためのスリットがある。水洗便器をばらせば金具や針金が手に入る。後はお決まりのキーピックさ。多少長めの針金を折り曲げれば、食事用のスリットから真下にある鍵穴へ差し込む事だってできる」

言いながら、彼は作業を進めていく。

ゴキン！　という太い音と共に、鍵のデッドボルトが外れる音が響いた。

『ひっひいい!?　た、たったの二〇秒で……。そ、そもそも電子ロックじゃ』

「錠を外したんじゃなくて内部構造を壊したんだ。開発者がわざと脆弱性残したんじゃないかって囁かれているヤツだな。全く同じ錠前を取り寄せてもらって、二日三日の詰め込みで覚えたんだよ。こいつ以外は開けられない」

クウェンサーはコンテナ状の独房から一歩出る。

途端に、人間の鮮血みたいに生温かい豪雨を頭から被った。潮のせいか、金属のせいか、奇

妙に生臭い匂いが真下からむっと立ち込めてくる。
露見すれば死ぬ。
その単純な事実が、手足の指先から体の中心へとじわじわと入り込んでくる。
しかし立ち止まっていて、何かが好転する訳ではない。クウェンサーは針金を握り直すと、隣のマリアージュの房の鍵を同じように開ける。
「出ろ！」
『ちょーっ、ちょちょちょ!?　で、でも、外は監視カメラが……!!』
「そのカメラをいじるのが精一杯なんだ。ここから先は俺達がやるしかない！　ラインを繋げるんだ!!　監獄のシステムを乗っ取らない限り、外の部隊は動いてくれないぞ!!」
容赦なく彼女を独房から引っ張り出す。
実際に目の当たりにしたマリアージュは、身長は小柄だが胸は大きいというアンバランスな体型の女性だった。今にもずり落ちそうなメガネの奥で、小動物のような瞳が半泣き状態になっている。着ているのは分厚い作業服から物を隠せるポケットを排除したような囚人服だったが、これがぶかぶかで全く不釣り合いだった。不遇な境遇を暗に示しているようにも見える。
構わずに引きずり出した。
暗闇の中、血のように生温かい雨を浴びながら、クウェンサーは小声で言う。
「第三監視塔ってトコに案内してくれ」

「えっえっ？　で、でも、通信回線をいじるならセキュリティサーバーのある中央に……」
「馬鹿正直にそんなトコへ向かったら一発で捕まるよ。だから手薄な場所を走る配線を千切って繋げ直す。さあ早く」
「ほ、ほんとに大丈夫なんですかあ？」
「俺は囮捜査や潜入任務のプロじゃない。ただの『学生』にでもできる仕事だ、心配ない」
この刑務所は大きな鳥籠だ。壁も床も全て金属製のパイプや金網の組み合わせで、簡単に言えば『人には通れない』隙間がたくさん空いている。究極的には死角なんてどこにもない。
だが、
「視界は広く確保できるくせに、ライトの光は前にしか向けていない。真上を見上げて雨水を顔に被りたくないからだ。ただの雨水だけじゃなくて、他の看守が踏みしめた床を伝った汚水だからな」
「……つ、つまり、暗闇の中を歩いている限りは看守も囚人も分からないって事なんですかあ？」
「連中は監視カメラが正常に働いていると勘違いしている。そっちから連絡が来ない限りは大丈夫だって判断しているはずだ。下手に壁に張り付いたり、匍匐前進したりしない限りはバレないさ」
……もちろんクウェンサーはスペシャリストではないので、全部仲間の受け売りなのだが。

「で、でもお、二人一緒に歩いていたら変じゃありませんか？　わたし達だけライトも銃もありませんしい……」

「暗がりじゃ銃のシルエットなんか分からないよ」

「ライトはあ？」

「……そこで提案なんだけど。マリアージュ、俺にくっつけ」

「はああ!?」

「モラル最低の刑務所なら見回りの途中にイチャイチャする看守達だっているだろ。ここには娯楽もないんだし。最悪、看守と囚人の組み合わせもあるかもな。とにかく、他の看守達がライトを点けていない理由を『勝手にお察ししていただく』ように仕向けるんだ」

「う、うう……。さっきからわたしにとってのプラスがほとんどない……」

言いながら、マリアージュはクウェンサーの指示通りに動いた。

クウェンサーとしては手を繋ぐ程度で良かったのだが、

「ちょっ!?　うわ……何で思いっきり抱き着いてくるんだ!?　頬ずりとか意味分かんないし!!」

「え？　だってえ???」

「ま、まあそれで良いと言うのならヤブサカじゃないんだけど……」

半ばずりずりとマリアージュを引きずるような格好でクウェンサーは歩く。

柔らかい感触に背筋へ痺れのような感覚が伝うが、一方で、流石にここまでやると悪目立ちしそうだ、という不安もある。

しかし、実際には他の看守達に警告の声を浴びせられる事はなかった。

モラル最悪、との評価はやはり正確だったらしい。

「ったく、ひどい雨だな。流石は南国って訳か」

「え、ええと……これは多分天候兵器のせいだと思いますけどねえ」

「人工的に造った雨？　でも一体何のために……。近くの島に大規模なプランテーションでもあるっていうのか？」

「いいえ、むしろ雨は邪魔者なんです。大水害になってしまう前に、雨量を分散して降らせるための減災政策だそうですよう」

（……怖いのは落雷か）

と、これはマリアージュには言わず、心の中だけでクウェンサーは付け足す。

カメラのフラッシュのような閃光が彼ら二人をくっきりと照らせば、看守達に真実が露見するリスクは生じる。『その一瞬』を確実に捉えられない限りは大丈夫なのだが、一〇〇%の保証はもちろんない。

とはいえ、解決法のない不安要素をマリアージュに話しても意味はない。最悪、協力を拒まれる恐れがある。そちらは一〇〇%の破滅を保証してくれるはずだ。

「それにしても……」

第三監視塔の根元までの道のりを（クウェンサーに密着しながら）案内しながら、マリアージュが口を開いた。

胸板を通して聞こえる彼女の鼓動はかなり速い。不安がぶり返すのを、必死に抑え込もうとしているようだった。この収容所の陰惨な『伝説』を知っていれば無理もないだろうが。

「でも、気になりますよね。オブジェクト自体が高温を発するんだとしたら、何で『メガロダイバー』は海底火山の変温層に隠れていたんでしょう？　自分自身で温水を撒き散らして、蜃気楼みたいな『対レーザー用の見えない壁』を作ってしまえば良かったのにい……」

やはり鋭い。

実際にその目で見ていなくても、マリアージュは的確に解くべき疑問を見つけ出す。

「それについては、こっちでもいろんな仮説を考えたよ」

「動力炉の温度管理が最優先で、状況に合わせて温水の排出量を調整するのはなるべくやらないようにしていた、とか？」

「二種類以上の温水をぶつけ合う事で、複雑な変温層を構築して、読まれにくくしている、とか」

クウェンサーはマリアージュの髪から漂う甘い匂いにどんな表情をして良いか迷いながらも、案内される通りに通路を歩く。

予定通り、第二監視塔までは通路を塞ぐ鉄格子状の隔壁はない。背後から看守へ襲いかかって鍵を奪う、なんて真似をしなくても良い訳だ。

雨の匂いには鉄の匂いがうっすらと混じっていた。金網の床や鉄パイプを組んだ手すりから漂っているのかもしれないが、『金属そのものの匂い』かどうかは確証がない。ここならどんな可能性だってあるだろう。

「結論から言えば、吸水口みたいなパーツは見つからなかった。下から見上げても死角にあたる機体上部に穴が空いているか、どこかの装甲が開いて海水を取り込む機構があるんじゃないかって話になったよ。予想では前者。おそらくあいつは、常に海水を循環させているはずだ」

「まあ、オブジェクトの存在意義は『堅牢』ですからねえ。吸水口が露出した状態で攻撃されるとダメージが加わるから普段は隠している。吸水口を露出していても核攻撃に耐えられる強度を維持する。……設計するなら、どう考えても後者でしょうし」

びくびくと震える彼女は、クウェンサーを抱きしめる腕の力を少し強くした。

やがて、彼女はこう言う。

「機体上部に吸水口がある、というのは、ひょっとしたら海底の砂を誤飲しないようにっていう配慮かもしれませんねえ」

「あり得る話だ。でも、機体の周りには深海魚だって集まっていた。小魚を誤飲した程度でマシントラブルが発生する訳でもないようだ」

「オブジェクトですもんねえ」
「オブジェクトだからなあ」
しばしほのぼの。
が、ふと思い出したようにマリアージュはこう尋ねてきた。
「あ、あのう……それじゃどうするんですかあ？」
「ちょっとの砂とか深海魚程度じゃ、吸水口を塞ぐ事はできない。大きなビニールシートみたいな装備も持ってきていなかった。そもそも、全長五〇メートルもあるオブジェクトの機体上部まで取り付く事なんてできない。エアーを使って浮上すればその気泡音を勘付かれるリスクは高いし、硬式潜水服を着たまま球体状本体をよじ登ろうとしたって、金属音を聞かれてしまう。『機体上部にあるであろう吸水口』まで届かない」
あうあうあうあうあうあう……と、話を聞いているだけでマリアージュ＝ナイトキャップは混乱を始めたようだった。
「ど、どうにもならないじゃないですかあ」
「でも、それをどうにかしなくちゃならない」
クウェンサーは歩きながら、短く息を吐いた。
そして言う。
「あると言えば、一つだけあったんだ。『新型』の吸水口を塞ぐ事ができる、ある『材料』が」

7

作戦進行報告・甲04
三月一七日一七四〇時
戦争国太平洋極西方面海域深海一五〇〇メートル地点

ヘイヴィアはカメラのモードを切り替えて、海水の様子を観察していた。変温層……冷たい深海の海水と、海底火山によって温められた温水とが混ざり合う場所の、その温度についてだ。

『うっわ……駄目だなこりゃ。見事なマーブル模様だぜ。スパコン使えば分析できるかもしれねえけど、一朝一夕で何とかなるもんかね。つーか、本当に天然だけでこんな複雑になるのかよ？』

『推進装置のウォータージェットで海水をゆっくり攪拌させているか、動力炉の冷却に使った温水を海底火山からの温水にぶつけているか……何にしても、「新型」からの手が加わっている可能性は否定できないな』

『何にしたって、これじゃオブジェクトのレーザービームも歪む訳だぜ。真っ直ぐ飛ばねえんじゃ当たるもんも当たらねえ』

一応、深海一五〇〇メートルから海上の大艦隊に向けて通信を飛ばす事はできる。『ベイビーマグナム』へ支援を要請すればレーザービームを指定の場所へ撃ち下ろしてもくれるだろう。だが、これではどうやったって当たらない。

最終的に落ちる場所がどこか予測がつかないため、最悪、指示を出したクウェンサー達が撃ち抜かれるリスクさえある。

『ポイントは二つある』

クウェンサーはそうまとめた。

『一つ目は、言うに及ばず「新型」を倒す方法が見つからない事。動力炉の冷却とウォータージェット推進の両方に使われている吸水口さえ塞いでしまえば何とかなりそうだけど、俺達の装備だけで、アレに気づかれずに機体上部に上るなんて不可能だ。こんな重たい金属の塊を背負ったまま、五〇メートルも上らなくちゃならないんだからな』

『あん？　それだけだろ。二つ目って何だよ？』

『海底火山』

端的に、クウェンサーは答える。

『オブジェクト側から人為的な横槍が入っている可能性はあるけど、あの「新型」が海底火山の変温層に隠れているのはとりあえず間違いないだろ？　あの海底火山を封じる事ができれば、『新型』単体じゃ「変温層の盾」を維持できなくなるはずだ』

『封じるって……』

絶句したように、ヘイヴィアは言う。

何だか分厚いヘルメット越しに二度見された気がした。

『馬鹿じゃねえの？　っていうか馬鹿じゃねえの!?　あれは摂氏一五〇〇度の溶岩の泉なんだぜ。何を被せて蓋をするって言うんだ！　ビニールシートじゃどうにもならねえぞ!!』

『例えばの話なんだけど、壊れたオブジェクトとかないかなあ。お姫様が激突する前に、何機かのオブジェクトがかち合って負けているんだろ？　あれを海底まで沈めれば、大きな蓋になるとは思わないか。途中で勘付かれてレーザービームで撃ち抜かれたって良いんだ。最終的に、巨大な塊が火口の上へ落ちてしまえば』

『破壊されようがテクノロジーの塊だぜ。誰が協力するってんだよ』

『じゃあ石膏』

『……？』

『製鉄所で軟鉄を溶かす時に使うのが、石膏を固めて造ったでっかいバケツなんだ。つまり溶岩みたいな熱にも耐えられる。バーナーで炙ったって、赤熱するだけで燃えたり溶けたりしない。戦艦みたいに馬鹿デカい塊を用意して、海面から一気に落とせば、火口に覆いをしてしまう事だって……』

『素晴らしいアイデアだぜクウェンサー』

ヘイヴィアは呆れたように、

『……で、全長三〇〇メートルクラスの焼き石膏を造って、太平洋の端まで運ぶのに何日かかる？　そんな馬鹿デカいもん竈に放り込める訳ねえから、煉瓦みたいに細かいブロックを組み合わせるんだよな？　俺らが使ってるのは酸素ボンベじゃなくて苛性ソーダ使った循環装置だけどよ。いくら何でも二ヶ月も潜っていられるほど高性能じゃねえぞ』

『やっぱり駄目か……。そもそも、石膏の塊じゃ海底に届く前に「新型」のレーザーでバラバラにされるだろうしな』

クウェンサーは一度、忌々しげに頭上を見上げた。

透明な海水の向こうに、大空は見えない。まるで分厚い岩盤で生き埋めにされたように、漆黒の闇が広がっているだけだった。

『じゃあもう、あれしかないんじゃないか？』

『あん？　……何だよ、そのもったいぶった感じは。まるでできればこんな手は使いたくなかった的な』

『海底火山あるじゃん』

クウェンサーは、くいっと親指でオレンジ色に赤熱している辺りを指し示して、

『あれ、お姫様のレーザービームで吹っ飛ばしてもらおう。大爆発で溶岩が噴き荒れれば、高温高熱の溶岩が傍に居座っている「新型」を埋め尽くしてくれる。吸水口がどこにあろうが、

まるっと全体が溶岩で埋まっちゃえば塞がれるさ』

『やっぱりろくでもなかった!!　ばっ、馬鹿野郎!!　俺らも同じ場所に立ってんだよ！　全長五〇メートルの塊を丸ごと呑み込むほどの溶岩が押し寄せてみろ、俺らはグラタンに入ってる海老よりも悲惨な目に遭っちまうぞ!!』

『……うわあ、ヘイヴィア……』

『えっ、なに？　どうしてそんな悲惨な目でこっち見てんの？　ち、違えよ！　俺は残念な子じゃねえよ!?　ちゃんと常識的な意見で馬鹿を止めているだけなのに……!!』

『無線で連絡を入れて攻撃してもらうんだから、きちんと離れてから指示を出せば何の問題もないだろうに……』

『そ、そういう……。分かっていたって!!　俺はちゃんと分かっていた!!　だからそんな気の毒そうな目で見るんじゃねえ!!』

思わず摑みかかりそうになるヘイヴィアだったが、分厚い硬式潜水服同士がぶつかるだけでも『不穏な音』が出るかもしれない。

『新型』の目と鼻の先では自殺行為だ。

ちなみに本来、分厚い海水で遮られた深海では、キロ単位の長距離通信は阻まれてしまう。潜水艦などが無線を使う場合は、有線のブイを『浮き』のように海上へ届け、そのアンテナを使って連絡をするくらいだ。

『しっかしとんでもねえ話だ』

ヘイヴィアがうんざりしたように、

『この辺の魚を捕まえて、腹ん中に中継アンテナ詰めてから、また解き放ってるとかって話だよな。二〇〇から五〇〇メートルおきに「魚介アンテナ」があるって話だったけどよ』

『絶滅危惧種に発信機のチップを埋め込むのと一緒だよ。技術自体は民間にも流れてる。世界の海を飛び回る回遊魚じゃなくて、自分の縄張りを持ちたがる種に埋め込めば完璧だ』

『保護してんのか虐待してんのか分からねえ話だ……』

クウェンサー達は恐る恐る『新型』の方へライトを向けたが、小刻みに砲が動いているだけで、そうしたアンテナを攻撃する素振りはない。やはり、人工物が放つスクリュー音やクラック音のみを集中的に識別しているらしい。

……核魚雷じゃなくて、ラグビーボールくらいの小型核を使った動力なしの核機雷を巨大深海魚、いやいっそダイオウイカなんかの腹に詰めて突撃させれば、装甲表面を溶かすくらいのダメージはなえられるんだろうか？　などと考えていたクウェンサーだが、今は思索にふけっている場合ではないと思い直す。

『とりあえずここ離れよう』

『おい、どっちみち変温層はレーザーを曲げるんだろ？　海底火山に落としてくださいって頼んだってよ、レーザーは外れちまうんじゃねえのか』

『一〇発でも二〇発でも、当たるまで撃ち込んでもらえば良いさ。そもそもオブジェクトと違って正確に火口へ当てる必要もない。海底を割って、大量の溶岩さえ噴き出れば良いんだ。多少は逸れたって問題ない』

漆黒の海底を、きめ細かい砂を踏みしめて、硬式潜水服を着てゆっくりと歩いていく。

月の上でも歩いている気分だった。

『一〇〇メートルが随分遠いな』

『おい、もう良いんじゃねえの？「新型」が見えなくなっちまうよ』

『遮蔽物なんか何にもないのにな』

『プランクトンの死骸だの何だので、海水も透明って訳じゃねえんだろ。それより、おい、ここらで良いよ。柔らかい砂の層ならともかく、ゴツゴツした岩の方へ行くのはヤバい。クラック音を勘付かれるリスクが高まっちまう』

『近くない？』

『近くねえって!!』

海底火山を攻撃すれば良い。

言葉にすれば簡単だが、実際にはかなりのリスクをお姫様に背負わせる事になる。

何しろ、『新型』は常に『ベイビーマグナム』をレーザービームで狙い続ける。そんな中、お姫様の方は『新型』に攻撃を行えない。無防備な姿をさらしながら、海底火山が爆発するま

でひたすらに砲撃を繰り返すしかない。

『一〇発二〇発なんて簡単に言うけどよ、そんなに上手くいくもんかね』

ヘイヴィアは呆れたように呟いた。

『何しろ一五〇〇メートルの深海だぜ。オブジェクトのレーザービームを避けるためには、砲とか照準用レンズの微細な動きを分析して「先読み」の行動をしなくちゃならねえんだろ？でも、海の底にいるオブジェクトなんて誰にも見えねえんだ。お姫様には回避のための材料なんかねえんだぜ。完全な運任せの回避挙動なんて、長くはもたねえぞ。下手すりゃ一発で撃ち抜かれちまう』

『だから俺達が与えるんだよ』

クウェンサーは短く答えた。

太陽の光も届かない『泥のような闇』がわだかまる深海だが、オブジェクトが海底火山の逆光下にあるためか、ジグソーパズルの欠けたピースのように、『新型』は黒い影となって浮かび上がっていた。一つ一つの砲、その先端のゆらゆらとした動きまで捉える事ができる。

『常に「新型」をカメラで捉えるんだ。俺達には何の事だかサッパリでも、映像を受け取ったお姫様なら敵主砲のサインを的確に摑めるはず。俺達が彼女の目になるんだよ、ヘイヴィア』

『どっちみち命懸けかよ、クソ。お姫様任せにできると思っていたのに』

『何しろ戦争だからね』

複数の魚介アンテナを通す形で無線越しに事情を説明すると、フローレイティアからのメチャクチャ嫌な声が返ってきた。内容を要約するとこんな感じだ。安全に『新型』を倒すための材料を探しに行かせたのに、何で虎の子の『ベイビーマグナム』を危険にさらさなくてはならないのだ。これに軍隊特有のスラングを五〇〇%くらい増量させると原文になるが、そんなの知らない方が世のためなのだった。

『……あの爆乳、任務にかこつけて俺ら問題児を殺そうとしている訳じゃねえんだよな？』

『駄目だよヘイヴィア。これにゾクゾクするようになってようやく半人前なんだって』

しかし、どっちみちお姫様やフローレイティアにも敵前逃亡は許されない。クウェンサー達が『新型』の弱点を見つけられなければ、『真っ向勝負』という名の自殺行為に駆り出されるのは目に見えている。

となると、無茶だろうが何だろうが、使える手、考えられうるアイデアは全て形にしてしまった方が良い……とフローレイティアも判断したのだろう。

『一応忠告しておくが、私を丸め込んだなどとは思うなよ。一兵士の進言でオブジェクトを出撃させるなどこれっきりだ』

『そもそも専門のフロッグマンでもない俺達がこんな深海に放り込まれている方がはるかに理不尽なんですけど!!　俺は！　素人の!!　「学生」なんですってば!!』

『よせよクウェンサー。あんまり噛みつくと、次辺り宇宙にでも出張させられちまうぞ』

その時が来るまで、クウェンサー達はひたすら待った。

遠方から観察しているクウェンサー達の前で、海底火山のぼんやりとしたオレンジ色の光に切り取られた巨大な黒い影……『新型』のシルエットの端が、ぴくりと動く。

はるか海上のオブジェクトの動きを早くも捉えているのか、上を向いていた主砲がじりじりと小刻みに動き始めた。

お姫様からは、『新型』の主砲の微細な動きは見えない。

それは逆に、『新型』からもお姫様の細かい動きを観察する手段がない事を意味している。

水の抵抗力のせいで素早く動けない事も相まって、『新型』には『相手のレーザーを回避する』手段が取れない。一見して無敵に見える変温層のバリアは、『そうするしかなかった』という苦肉の策を極めた末でもあるのだ。

長所と短所。

諸刃の剣。

ただ弱点や欠点を苦々しく思って必死に埋め合わせるのとは違う。短所を自覚した上で、なお先鋭化させて強烈な長所へと捻じ曲げる設計思想。どこの誰が生みの親なのかは知らないが、こんな状況でもなければ食事でもしながらゆっくりと話を聞いてみたかった。単純な技術以上の、学ぶべき何かをひしひしと感じている。

『何だ……？』

ヘイヴィアが疑問の声を発した。

『砲の揺れ方見りゃ分かるけどよ、あいつもうお姫様の動きに気づいてやがるよな。でも即座にレーザービームで砲撃しねえで、泳がせてやがる』

『変温層は身を守ると同時に、自分のレーザーも歪めてしまうんだ。海上のお姫様を狙うには、盾から出なくちゃならない。タイミングを見定めているってところだろ。自分が撃とうとした瞬間、出会い頭でお姫様の主砲を受けるかもしれないのが心配なんだ』

『そういう訳か。変温層に隠れている限りは無敵だからな。さっき見た音叉魚雷経由で変温層を迂回して音響探査すりゃあ、マニュアル通りの高速戦闘中とは違って、何時間でも何日でもゆっくりじっくり狙いを定められるって寸法かよ。そりゃ臆病にもなる訳だ。カジノでいつもツーペアばっかり作りたがる、つまんねえルーキーみてえな野郎だな』

『でも、今回はプラスに働いた』

呟いた直後だった。

約束の時間が来た。

カッ!!!!!　と。

深海の暗闇を引き裂くように、真っ直ぐにオレンジ色の閃光が海水を貫いた。

それは、レーザービームそのものではない。

通過後にプランクトンの死骸などが焼き尽くされた、その残像がクウェンサーやヘイヴィアの目にこびりついているのだ。もはや目の痛みというより頭蓋骨を割るような激痛が突き刺さるが、分厚い硬式潜水服に覆われているため、自分の瞼を擦る事すらできない。

『ぶばっ!?　ばぶあ!!』

『何だっ……おい何だクウェンサー!?　辺りがボコボコ鳴ってやがるぞ。今のレーザーで海水が沸騰したんじゃねえだろうな!?』

突然の気泡音に、『新型』の副砲が小刻みに動き始めた。周囲一帯の探査を始めているのだろう。こんなのでダイバーの存在を疑われて手当たり次第に弾幕を張られたら、まぐれで撃ち抜かれるかもしれない。これまでの努力も全て水泡に帰す。

『ち、ちがっ……確かに海水は不透明だから光のエネルギーを蓄積するかもしれないけど、それならレーザーの通過ラインをなぞって沸騰するはずだ。辺り一面がボコボコ鳴るのはおかしい……』

『じゃあ何なんだよ!?』

ヘイヴィアの質問と共に、はるか頭上から二発目のレーザービームが落ちた。

意外なほど近くへ着弾すると同時、大量の気泡がクウェンサー達の視界を覆ってしまう。

『海水を沸騰させているのはレーザービームのせいじゃない』

バギリ、という不気味な音が聞こえた。
すぐ足元からだった。
『海底火山だ!!　火口以外の岩盤が割れて、溶岩が新しく噴き出そうとしているんだ!!』
『……っ!?』
オレンジ色の光が覗いた。
なりふり構っていられなかった。
クウェンサーとヘイヴィアの二人は、月面でも歩くような動きで一刻も早くその場を離れようとする。ヘイヴィアは全速力だったが、クウェンサーは後ろ向きになり、バックで進んでいた。ふざけているのかと思ったヘイヴィアだったが、どうやらクウェンサーはカメラで『新型』の主砲の動きを撮影し続けているらしい。一五〇〇メートル先の海上にいるお姫様からは、『新型』の主砲の微細な動きを見る事ができない、つまり回避のための材料がないのだ。
『おい、そんな事してる場合かよ!?　溶岩が噴き出したら全身溶けちまうぞ!　それどころか、辺りの海水が完全に沸騰しただけで茹でダコにされちまう!!　温泉なら美女との混浴にしてほしいのによ!!』
『「新型」が動き出した……。変温層を作る海底火山そのものを崩しにかかっている事が露見したんだ!　ここから先は短期決戦の砲戦になる。カメラの情報は絶対に必要だ!!』
『撮影してる俺らがドロドロになっちまったら、どのみち情報はお姫様にゃ届かねえよ!　馬

鹿!!』

ゴゥン、と低い音が腹に響いた。

今まで動きを止めていた『新型』が、這うような動きで滑らかに駆動したのだ。肉眼で見ているだけだとどういう法則性か分からないのだが、おそらく変温層の盾から外へ出たのだろう。

レーザー同士の、超ド級の撃ち合いが始まる。

ッッッ!!!!!　と、もはや知覚の外へ出るほどの凄まじい閃光が、クウェンサーの眼球やこめかみへ激痛の糸を張る。お姫様が撃ち下ろすレーザービームを、上から塗り潰すような光量だった。

『なん……なんだ!?　ちくしょ！　目が!!』

『一五〇〇メートルの海水だ。お姫様のレーザーが減衰されているのに対して、「新型」のはまだ減衰されていない。だから余計に目に刺さるんだ!!』

『ああそうかよ！　こんなの撮影して何になる!?　どうせ画面は全部真っ白だ!!』

『何もないよりマシだ。お姫様は今、日隠しで猛獣と戦っている最中なんだぞ。それも俺達のために!!』

ついさっきまでクウェンサー達が指示を待っていた場所が大きく割れて、オレンジ色に輝くドロドロした溶岩が噴き出した。

思ったよりもずっと近い。

そもそも、クウェンサー達の狙いでは『新型』へ溶岩が襲いかかるはずだった。

『やべえ!!　巻き込まれるぞ!!』

『大丈夫だ、こっちには倒れてこない！』

『あれが何千度か知ってんのか!?　海水なんて数秒で沸騰しちまうぞ！　とにかく離れろ、逃げるんだ!!』

月面歩行がもどかしい。

とにかく死にもの狂いでクウェンサー達が距離を取り続ける。

ちっぽけな人間の都合なんぞお構いなしに、鋼鉄の怪物達は互いに砲撃を繰り返している。

いくつものオレンジ色の火柱が上る。

小さなものは数メートル、大きなものは一〇〇メートル以上。

何層にも重なるように屹立したオレンジ色のカーテンが、クウェンサー達の視界を遮ってしまう。『新型』の巨大なシルエットさえ、炎の海に呑まれて見えなくなってきた。辺りには急激な温度変化に耐えられずに逃げ惑う深海魚が見えた。あれが腹を上にして浮かぶようになったら、クウェンサー達の命も本格的に危うくなってくる。

『まだいける！　まだだ!!』

『馬鹿野郎、当たり前の痛覚なんかあてにすんな!!　溶岩が一滴かかったって火傷みたいな痛みはしねえ。だけど分厚い潜水服に傷がつくんだよ！　一ミリでも穴が空いたらお陀仏ってての

を忘れてやがるのか!?』

海水が急激に温度を上昇させている中で、クウェンサー達が活動していられるのも、この硬式潜水服のおかげだ。しかし、それもいつまでもはもたない。本当に沸騰した海水の中へ放り込まれたら、数分もしない内に熱は内部まで伝導してしまう。

単純に焼き殺されるとも違う、生きながらに調理される恐怖。

さらに呼吸の循環に使っている苛性ソーダも心配だ。融点は三〇〇度以上ではあるが、好んで刺激を与えたいとも思えない。

しつこくヘルメットのカメラで『新型』を捉え続けようとするクウェンサーに、ヘイヴィアは思わず肩を摑んで引きずってやりたくなった。だが、金属を多く使う硬式潜水服同士が接触すれば、その『人工的な音』を『新型』に感知される絶対的リスクが高まる。そうなったら溶岩なんて比べ物にならないほどの脅威が襲いかかってくる。一〇〇%の死、という名前の。

『下がれ、くそ、下がるんだよ！　馬鹿野郎!!』

すでに『新型』はほとんど見えなくなっていた。

大量の火柱と、それが生み出す膨大な気泡。幾重ものカーテンが覆い尽くしてしまっている。

気がつけば、海底からのレーザー砲撃も止んでいた。

お姫様からの光の槍が、ただ一方的に海底を蹂躙していく。

『どうなったんだ？』

クウェンサーは、素直に疑問を口に出した。
それは暗闇と同じ。分からない事に対する本能的な恐怖へと繋がった。
『「新型」はどうなった!?』

8

作戦進行報告・乙04
三月二一日二三三五時
『正統王国』ニューカレドニア方面・特別政治犯収容施設シャトー・ド・ルージュ

「こ、ここが第三監視塔ですけどお……」
「ちょっと下がってろ。俺が作業する」
マリアージュの柔らかい感触と肌のぬくもりは正直に言うと名残惜しいのだが、物事の本質を見失って看守達に射殺されたくはない。クウェンサーは一人で監視塔に近づく。
血のような雨を頭から被りながら、詳しく調べていく。
監視塔そのものも、いくつもの鋼鉄のパイプを組み合わせた櫓のような施設だった。看守側の視界は開けているが、代わりに、壁の中に隠すべき各種の配線が剝き出しになっている。繋

げ合わせるのは難しくない。
「てっ、手で触っちゃって大丈夫なんですかあ？」
「高圧電流の電源ケーブルじゃない限りは問題ない。摑む配線を間違えなければ大丈夫さ」
いくつかの通信ケーブルを選り分け、ビニールの被膜を歯で直接引き裂いた。光ファイバーではなく普通の銅線だ。
「どうやって繋ぎ合わせるんですかあ？」
「この収容所は何度かセキュリティシステムを更新している。その割に、古いケーブル類はそのまま放置だ。今は使われていないケーブルがいくつもぶら下がっている。そっちを千切ってバイパス用の線を確保する」
「はわあ……お上手なんですねえ」
「……これは絶対内緒だけど、『安全国』にいた頃はスロットマシンの裏側をいじくった事もあるよ。とんでもないイカサマカジノにリベンジ仕掛けるためにみんなで知恵絞ってさ」
ろくな工具もないのに、あっという間に作業が進められていく。
水を得た魚のようだった。
「できた。これで良い、施設内の閉じたシステムを管理するだけのセキュリティサーバーが、外への窓口を開いたぞ」
「こっ、これからは？　元の独房に戻って時間を潰すんですかあ？」

「いいや。電子シミュレート部門が回線開放を確認したら、すぐにでも軍が動く。俺達は流れ弾の当たらない所へ移動しよう。合流地点は廃棄されたボート用の桟橋だ。その真下に隠れて回収部隊を待つ」

「う、うえぇ……」

「案内してくれよ、この土壇場で迷子になんかなりたくない。……大丈夫さ。収容所の襲撃は軍が全面バックアップしているんだ。単純な戦力だけなら絶対に負けない。怖いのは計算のできない流れ弾くらいなんだ」

「あの、その」

「それより、何か気づいた事はあるか？　あの『メガロダイバー』についてだ！　話せる事はもうほとんど話したぞ。海底火山の溶岩を使って、オブジェクトの吸水口を塞ごうとした計画もだ!!　他に何か……」

「そうではなくてですね。へ、えへへ……」

その言葉に、クウェンサーは眉をひそめた。

そうではなくて。

何故、ここで否定形の言葉が返ってくるのだろう？　話の流れを断ち切らなくてはならないのだろう。

どっちみち、ここまできたら他にやる事なんて何もない。急な予定が入った、なんて話にも

ならない。なのに、どうして？

「そ、そのう。クウェンサーさんには大変申し訳ないんですけど」

カツン、という足音が聞こえた。

あまりにも致命的な音。振り返るのがためらわれた。

（まさか……）

嫌な予感がした。

物事を考えるにあたって、最初の最初の段階からすでに思い違いをしていた事に、机上の理論が全て完成してしまった後からようやく気づいた時のように。

（まさか!!）

「クウェンサー＝バーボタージュ」

声が聞こえた。

マリアージュ＝ナイトキャップのものではない。

真後ろ。

看守の男の太い声が。

「今夜行われるらしい、大規模な脱獄計画について話してもらおうか」

万力のような力で、肩を摑まれた。

強引に振り返させられる。

クウェンサーは叫び声を発した。

しかしどうにもならなかった。殺到してきた複数の男達は、『ドン・シカゴの缶切り』と称されるフルオートのショットガンを携えていた。まず壁に背中を叩きつけられたクウェンサーは、口の中に銃口をねじ込まれた。そのまま別の男に散弾銃のストックで側頭部を殴打される。歯の根がまとめて歪んだかと思った。口を押さえてうずくまる少年に、殴打の嵐が全方向から襲いかかってきた。

意識が明滅する。

体を丸めて内臓を守ろうとする事自体、途中からは忘れてしまっていた。

金髪をまとめて摑まれ潮風の匂いがする通路へと放り出される。

どれもこれも同じ顔に見える看守の誰かが、笑ってこう尋ねた。

「しゃべるのか、しゃべらないのか」

ショットガンの銃口を顎の下から突き付けられ、強引に上を向かせられる。

「いいか、現実は映画とは違う。このまま引き金を引いたってお前は死なないぞ。顔面のパーツは丸ごとメチャクチャになっちまうし、最悪、脳の前頭葉もいくらか散らばるかもしれねえが、それでも生き続けるんだ。そんな目に遭いたいのか？」

「……彼女は、何なんだ？」

呻くように、鉄錆だらけの味がする口を動かして、クウェンサーは質問を返した。

「マリアージュ＝ナイトキャップ。ここの囚人って事は、無実の罪で投獄されていたはずだったんじゃあ……？」

「だから今の境遇を不満に思っているって？」

笑みが深く、野卑なものへと変わっていく。

メガネの気弱そうな女性は、看守によって乱暴に腕を掴まれていた。しかし、暴れたり逃げ出そうとする素振りはない。それどころか、看守に肩を抱かれると、ひくついた笑みを唇に浮かべていた。

「わたしはあ……その、今の境遇を、それほど悪いって思っていないんです。ここにいれば電子書籍だって書けますし、株の取り引きだってできますから。脱獄しようなんて言われても、ちょおーっと迷惑なんですよねえ。えへ、えへへ……」

まともな思考とは思えなかった。

そもそも、浮かべた笑顔からしてすでにぶっ壊れている。

どんな生活を強いられたかは知らないが、自分の意思が著しく薄弱になっているのだ。

クウェンサー自身が口に出した事だ。

ここのモラルは最悪。

看守と看守、下手をすれば看守と囚人の間で繋がりがある事さえ否定できない、と。

「……『屈服』したのか。この寝取られ女」

「言ってやるなよ。処女ってのは簡単だよな。守るものがある人間は、交換条件って言えば何でも従いやがる。そもそも、印税だの株だのだって、こいつが勝手に提案した小遣い稼ぎなんだぜ？　上納金は支払いますからそれだけはぁ～ってな」

ショットガンを握りながら、看守は笑って言った。

特に理由はなくても殺して良い顔だった。

「とりあえず、だ。うちのシステムにハッキングを仕掛けるのが作戦の第一段階らしいからよ、施設は全部オフラインに切り替えちまった。軍ってのは確実な方法を好むからな。出鼻をくじかれたら作戦を中断するぞ。より良い方法ってのを探すために。シャトー・ド・ルージュはいつか落とされるが、それは今日じゃない。お前を助ける騎兵隊なんかやってこない」

「……」

「部隊の所属を言えよ。こっちだってお偉い貴族や王族の都合で厄介者を飼い慣らしてんだ、人には言えないコネクションなんざいくらでもある。向こうから手を回してもらって、お前の上官の首を飛ばしてやる。ごちゃごちゃ騒がしくなっている隙に、俺達は逃げる。そしたら、またどっかに秘密の特別収容所ができるだろうさ。結局、貴族の遊びってのはなくならねえんだ」

クウェンサーはゆっくりと口を開いた。

しかしそれは、目の前の看守に屈服したからではない。

少年は、へらへらと笑っているマリアージュに向かってこう言ったのだ。

「おい、俺が何でこんな事をしていると思っているんだ」

「はいい……？？？」

「俺はただの『学生』だ、ろくに銃を撃つ訓練さえ積んでいない。色んな分野のスペシャリストが軒を連ねている軍の中で、どうして潜入のプロに任せないで俺がやってきたと思っているんだ。どう考えたって『不自然』だろう！　本来だったら諜報部門のコマンド部隊が確実にアンタを助けた後に、軍の整備基地でゆっくり話を聞くだけで良かったはずだ。それが教科書通りの大正解ってヤツだ！　なのにそれをやらなかった。頭のお堅い軍の中でセオリーを曲げてまでだ。何故!?　こいつらと違って馬鹿じゃないなら疑問に思わないのか!?」

そもそもクウェンサーは諜報部門の人間ではない。潜入なんて高度な訓練が必要な作戦を命じられる事自体がイレギュラーなはずだ。

「えと……」

「言ったよな。俺達の敵は『島国』が極秘裡に建造していた、海戦専用のオブジェクト。それもフロートつけて海上に浮かぶだけじゃない。潜航を得意とする第二世代だって！　そしてこのシャトー・ド・ルージュはどこの上に建っている収容所なんだ!?　『海』じゃないのか!?」

「……それって、まさか……」

ごくりと喉を鳴らすマリアージュに、クウェンサーは突き付けられたショットガンも無視し

てこう叫んだ。

「ヤツの狙いはアンタだ!!　自分自身の弱点を看破するかもしれない『怪物』を、先んじて始末しようとしているんだ!!」

言葉と同時だった。

世界が攪拌された。

ゴゴンッッッ!!　という莫大な震動に、海の上に建つ巨大な鳥籠のような施設全体が揺さぶられた。クウェンサー達は一人残らず、格子状の通路の上を転がされる。どさくさに紛れて、クウェンサーは近くに倒れていた看守の顎を、倒れたまま思いきり蹴飛ばした。

「アンタの救出作戦は、書類処理の関係で間に合わないかもしれなかった！　だから俺が先んじて派遣されたんだ、非公式に!!　あの『メガロダイバー』に殺される前に、確実に情報を聞き出すためにな!!」

看守の一人が、倒れたまま『ドン・シカゴの缶切り』を摑んだ。

何かを叫びながら、勢い良く立ち上がる。

その銃口を、転がっているクウェンサーに突き付けようとする。

そこで。

看守の動きが止まった。
彼はどこか遠くを見ているようだった。
その先。
ジャングルジムのような第三監視塔の向こうに広がる暗い海の、その先。
クウェンサーは、彼が目の当たりにしている絶望の名を知っている。過去、この目ですでに見ているのだから。
少年はとっさに飛び出した。
今もなお混乱しているマリアージュ＝ナイトキャップの上へ覆い被さる。
直後の出来事だった。

カッ!!　と。
凄まじい閃光が迸ったと思ったら、全てが蒸発した。

クウェンサー達のすぐ近くにあった、第三監視塔。この鳥籠を支える巨大な柱の一つ。それが、『新型』の放ったレーザービームの太さだった。
何もかもがオレンジ色に溶け、吹き散らされる。鉄の櫓も、通路も、通路を遮る格子も……
そして、それらを管理していた看守達も。

「逃げろ」

目は眩み、両のこめかみを突き抜けるような鋭い痛みに苛まれるが、いちいち気にしている余裕はない。

クウェンサーはマリアージュの胸ぐらを摑み、強引に立ち上がらせる。

「逃げるんだ!!　恐怖に屈して看守に心まで明け渡すようなビッチ女でも、あいつらと一緒に心中まではしたくないだろう!!　だったら走れ、今すぐに!!　あんなのは一番小さな対人砲だ。主砲をぶち込まれたら地図ごと俺達は蒸発させられるぞ!!」

「あ、あう。あうあうあうあう……」

二人して通路を走る。

マリアージュは涙目で、息を切らせながらも質問を飛ばしてくる。

「何なんですかあ、あれ!?　『島国』の『新型』って、あなた達が海底から追い出したんじゃなかったんですかあ……!?」

「そんな簡単に終わっていたら、アンタに意見なんか求めない！　駄目だったんだよ、俺達じゃな!!」

「そ、そもそも、『メガロダイバー』は潜航するオブジェクトだって話だったじゃないですかあ！　どうして海の上から砲撃してくるんですか!?」

「ある程度はダメージを与えられた。吸水口は動力炉の冷却、ウォータージェットの推進源

の他に、操縦士エリートの酸素供給方法も兼ねていたみたいだったんだ。電気分解で海水から酸素を作り出していたんだよ！」

「それがどうしたっていうんですか!?」

「吸水口って言ってもいくつか系統があるみたいで、俺達が海底火山の溶岩被せて塞いだのは、そっちの酸素供給方法の吸水口だった」

ガゴン!!　と再び収容所全体が揺さぶられた。

吊り下げられているコンテナ式の独房がバラバラと夜の海へと落ちていくのが分かる。あの一つ一つに生きている人間が収まったままなのだ。それも、貴族だの王族だのの怒りを買っただけの、哀れな無実の一般人が。

「つまり、あいつは緊急浮上さえしてしまえば戦闘を続行できる！　海上に出て、一度でも空気を直接入れ替える事ができれば!!」

「でも、でも！　あれは深海の分厚い海水で金属砲弾を防いで、海底火山の変温層を利用してレーザービームを屈折させる事で、あらゆる攻撃を無効化させるのが最大の売りだったんですよねえ!?　海上に出ちゃったら他のオブジェクトの餌食にされるだけなんじゃあ……!?」

「俺達もそう思っていたんだ!!」

いきなり、通路自体が落ちた。斜めになり、滑り台を転がり落ちるようにクウェンサー達は下の階層へと雪崩れ込む。

「でも駄目だった。あいつの本当の恐ろしさは、潜航なんかじゃなかったんだ!!」

重力が消えた。

巨大な鳥籠のような枠にコンテナ状の独房を数百も取り付けた、収容施設全体が崩れ落ちているのだと気づいた時には、何もかもが終わっていた。

クウェンサーとマリアージュは、他の大勢の囚人達と一緒に、生温かい南国の海へと投げ出されていた。

9

作戦進行報告・甲05
三月一七日一八〇〇時
戦争国太平洋極西方面海域深海一五〇〇メートル地点

『おい……』

ヘイヴィアが、思わず頭上を見上げて呟いていた。

『上がっていくぞ。「新型」の野郎が浮上していく！　何だよ、溶岩攻撃ってそんなに効いたのか!?』

クウェンサーもそれを眺めていた。

『……単なる空気じゃないな。特殊なガスでも使って浮力を確保してるんだろう。あと姿勢の制御にウォータージェットを使っているみたいだ。動力炉も今すぐ爆発するって訳じゃないらしい。他に、何か海水を取り込む別の理由でもあったのかな。例えば、電気分解で酸素を得るためとか』

『何でも良いよ。あいつが浮上しちまえばこっちのもんだ！　分厚い海水の壁も、変温層の盾ももうねえんだ。うちのお姫様が丸裸の引きこもり野郎になんか負ける訳がねえ!!』

『新型』の浮上の速度はかなりのもので、あの巨体がすでに見えなくなっていた。

硬式潜水服を着て、何時間もかけてここまで降りてきたクウェンサー達とは大違いだ。ほんの数十分もあれば海上へ出てしまう事だろう。

『俺達はどうするんだ？』

『お姫様が新型を撃破するのを待とうぜ。倒せるはずの相手から最後にキツい一撃もらって死ぬなんてのは嫌だからな』

『新型』が緊急浮上していった、という報告だけを済ませると、クウェンサーとヘイヴィアは再び海底を歩き始めた。こうしている今も、海底火山は猛然と火柱を上げている。どこまで行

けば安全圏になるのかは知らないが、一箇所に留まっていたいとは思えない。
だが、クウェンサーもヘイヴィアも、すっかり安心していた。
自分達の仕事は終わった。
後はお姫様が浮き輪付きの標的を撃ち抜いてくれれば良い。独自の防御システムを失った『新型』はきっと高速戦闘にはついてこれない。あれはもう、まな板の上の鯉なのだ。
そう思っていたのに……、
『お前達、まだ生きているか』
しばらくすると、フローレイティアから通信が入ってきた。
『どうしたんですか？』
『お姫様のヤツ、ムカつく一年生を仕留めたのか？　あっ、そうだ。撃沈したって事は、あれがもう一回降ってくるって事だよな!?　頭上には気をつけねえと!!』
『……それどころじゃない』
フローレイティアの言葉が、どこか重たかった。
その真意を測る前に、彼女はこう言った。
『「ベイビーマグナム」は中破。繰り返す、「ベイビーマグナム」は中破!!　かろうじて沈められる事だけは避けられたが、これ以上の戦闘行動は不可能よ。一度身を引いて、装備の換装を行う。お前達はまだ生きているなら死んだふりをしていろ。そこはヤツの海域だ!!』

『……嘘……でしょう……？』

『ち、ちょっと待てよ!!　だって、俺らはちゃんとやったんだぜ！　そもそも、潜航を得意とする「新型」が海上へ浮かび上がったんだ。分厚い海水の壁も変温層もねえ。あいつはただの波間に浮かぶドラム缶じゃなかったのか!?』

『それだけじゃなかったんだ』

フローレイティアは、苦々しい口調で告げた。

『あれは、無傷で敵を仕留められるならそれが最善という、敵を舐め腐った態度でしかなかった。お前達の活躍が、眠れる虎を本気にしたんだ。うちのお姫様では歯が立たなかった！』

『新型』がその海域を離れたのは、二時間が経過した後だった。

その間、クウェンサー達は身動きもできず、冷たい海の底でじっと待ち続けた。

だけど、海上への浮上開始は喜べなかった。

海の上は、ヤツの王国。

『新型』は、世界の七割を支配する王として君臨しているのだろうから。

10

三月二二日〇〇〇〇時
『正統王国』ニューカレドニア方面・特別政治犯収容施設シャトー・ド・ルージュ（跡地）

そうして、クウェンサーは再び暗い海を漂っていた。
コンテナ型の独房が心配だったが、密閉されていたのが功を奏したらしい。まるで缶や瓶のように、空気を溜め込んだ金属の箱は波間に揺れている。沈んでいないのだ。
「生きているか。おい、マリアージュ！」
「ぶはっ！　げほ、がほ!!」
海水を飲み込んで咳き込んでいる、おっとりしたメガネの女性に、近くを漂っていた木の板を摑ませる。
「おい、俺に抱きつけ」
「はひい!?　い、一体何なんですかあ!?」
「死にたくなければ早く！　あいつは音で戦況を走査する。おそらくアンタの心音を頼りに狙いを定めようとしているんだ。にも拘らず、今まで何度か俺達はあいつの砲撃を避けている。冷静に考えれば、戦闘機や巡航ミサイルだって軽々と落とせるレーザー砲撃を人の足で避けられるはずがないのにだ!!」
「そ、そうか……。いくつもの心音が重なり合っていると、スキャンに失敗するんですねえ」

「本来なら個々バラバラに潜るフロッグマンを撃ち抜いたり、馬鹿デカい艦船ごと沈めてしまえば大海原では十分なんだ」

「で、でもお!!　新型はオブジェクト同士の莫大な砲撃音の中でも正確に音紋分析できるくらいのスペックがあるんですよねえ!?　だ、だったら心音を重ねたって……!!」

「あいつには密集する人混みから個人を選んで殺すような機能はついていない！　人の声を捉えて先回りする様子もない。音響自体は捉えていても、機械化部隊前提のアルゴリズムが自動的に雑音として排除しているんだ!!　検索エンジンで料理のサイトを探している間は自動車のサイトは出てこない。それと一緒！　普段、海底に沈んでいるのが当たり前な『メガロダイバー』は、四〇〇〇だの五〇〇〇だのフロッグマンじゃ到達不可能な深度まで潜れば対人戦を考慮しなくて良いんだからな。無駄を省くため、最低限のアルゴリズムしか割り当てていないはずだ!!」

「ぜ、全部ただの推測じゃないですかっ、そんなの何の確証もないじゃないですかあ！」

「根拠を教えてほしいのか？　対人機能が充実していたら、こんな無駄話している間に殺されてる!!　だから早く!!」

「ひっひいいいい!?」

慌てたように正面からがっちりとマリアージュが抱き着いてきた。

それでも真夜中の海の中にある体は寒い。

肌ではなく、内臓そのものが不気味に震えるような、生命を根源から奪い去ろうとする寒さが全身へと襲いかかっている。

しかし、そんなものを忘れてしまうほどの光景が広がっていた。

オブジェクト対オブジェクト。

収容所を攻撃してマリアージュを助けようとした満身創痍の『ベイビーマグナム』と、自分自身の弱点を見つけ出すかもしれない『天才的な怪物』を先んじて殺そうとした『メガロダイバー』。この二つが海上で激突しているのだ。

海の上に出てしまえば、レーザービームしか届かない、という制約もない。『ベイビーマグナム』は七つの主砲を次々と切り替え、金属砲弾、プラズマ、レーザーなど、性質の違う砲撃を次々と繰り出していく。それは時に扇状に広がり、逃げ道を奪い、相手の足が止まったところで一点へと集約される。

拡散と集束を使い分かる魔法の砲撃理論には、腕を超えた何かが宿っていた。

神がかっている。

膨大な海水を吸い込んで機体後部から翼のように吐き出す事で莫大な推進力を得た『メガロダイバー』だが、その高速挙動をもってしても完全な回避は不可能だ。

直接狙う他に、七つの主砲は敵の予想回避地点もまとめて網羅するように砲撃している。どこへ逃げてもどれかが当たる。そういう構図だ。

だが。

「……なん、なんですか、あれ……？」

「俺達が倒す敵だ」

「だって、あんなの、勝てる訳がない、だって!!」

「それでも勝たなくちゃならないんだ!!」

対する『新型』の選んだ戦術は、言葉にするだけなら簡単だ。

――真下に向けて、複数の副砲を同時に射出した。

だが、それは当然『ベイビーマグナム』を狙ったものではない。主砲以外の攻撃ではオブジェクトの堅牢な装甲に致命打は与えられないからだ。

では、『メガロダイバー』は何を狙っていたのか。

真下に撃つ事で、何を得られたのか。

これも単純。

壁だ。

超巨大な水柱が『新型』の前にそびえ立ち、その分厚い壁がお姫様の砲撃を逸らしている。

実際、歪曲している角度それ自体は大した事はない。
数度、十数度、そんなところだろう。
だが、『メガロダイバー』はお姫様の攻撃を歪曲させる方向とは逆へ大きく舵を切る。二つの差が大きく広がり、それがギリギリの所で『絶対に回避不能』なお姫様の砲撃をやり過ごす。まるで闘牛士のような、華麗な振る舞いだった。
「俺達の間じゃ、暫定的に『タタミガエシ』って呼んでいる」
クウェンサーは、ごくりと喉を鳴らしてそう言った。
何度眺めようが、そこには褪せる事のない畏怖があるだけだ。
「金属砲弾は水の抵抗で軌道を曲げられる。レーザーは光だから、プリズムと同じ理屈で歪曲。プラズマや電子ビームも、水の壁に熱エネルギーを吸われて軌道がブレるって話だ。吸収できる量には限りはあるだろうけど、やっぱり曲がってしまう」
「理屈だけなら単純です……。でも、だけど、どうやったらあんなにタイミングを合わせられるんですかあ!?　光の速さで真正面から飛んでくるレーザービームを、百発百中で防ぐ水の壁だなんて……!!」
「嘆くのは簡単だ」
クウェンサーや、コンテナ状の独房ごと海へ投げ出された他の囚人達を回収するため、第

三七機動整備大隊の大型輸送ヘリやエアクッション船などが大勢近づいてきた。

それを眺めながら、少年はマリアージュへこう語りかけた。

「だけど、それを暴かない事には俺達は生きて帰れない。当然、アンタだってそれは同じだ」

「……っ!?」

「戦争へようこそ。これが今の時代ってヤツだよ、だからつべこべ言わず存分に楽しむと良い。死にたくなければな!!」

【メガロダイバー】
【MEGALODIVER】

全長… 80メートル

最高速度… 時速550キロ

装甲… 2.5センチ×400層（溶接など不純物含む）＋
近接防御システム「水遁の衣」

用途… 海上高度防衛戦用第二世代

分類… 海洋長距離掃海兵器＋???

運用者… 自防PMC

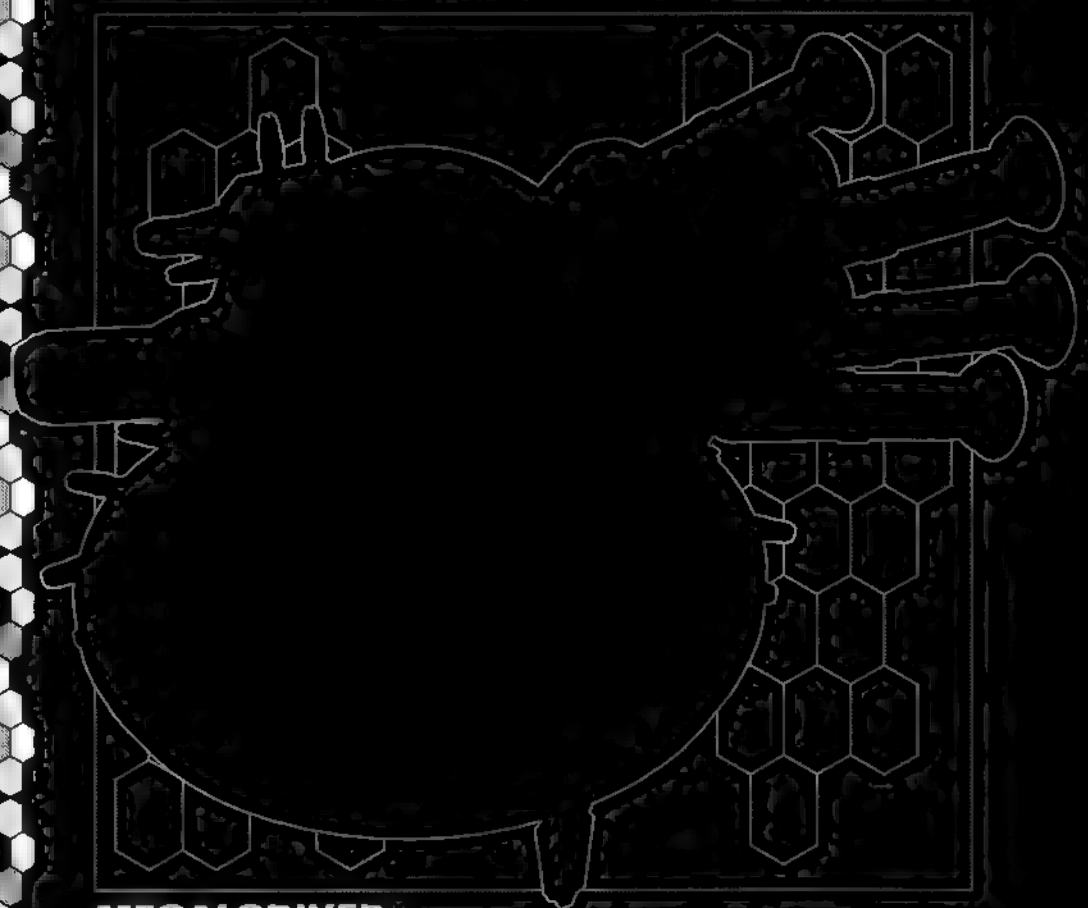
仕様… エアクッション＋ウォータージェット推進

主砲… レーザービーム

副砲… レーザービーム、コイルガン（実質的に「水遁の衣」専用）

コードネーム… メガロダイバー（海の底に巨体が棲息しているところから）

メインカラーリング… 灰色



MEGALODIVER

第三章　暗闇の奥で光る女神の瞳　〉〉ニューカレドニア方面総力戦

1

机上の空論で良ければ、かなり昔からあった。

例えば、潜水艦やミサイル駆逐艦から放たれる対艦ミサイルは、海面すれすれ、数メートルの高さをマッハ五以上の高速度で飛んでいく。ガトリングガンなどの近接防御火器をかいくぐり、敵艦の横っ腹、喫水線へ風穴を空け、確実に浸水させるための配慮だ。

蜃気楼を利用して戦闘機が対空レーザーから逃れる事があるのと同じように、この対艦ミサイルは開発初期のオブジェクトにとって仮想敵の代表格とされていた。

弾頭部分に小型核を搭載された場合、オブジェクトの対空レーザーと軌道上の迎撃衛星の組み合わせだけでは、海岸線の大都市を防衛しきれないのではないか、という懸念が生じていたからだ。

そんな中での対抗策として編み出された案の一つが、機雷や砲撃などで膨大な水柱を生み出

し、その分厚い壁によってミサイルを叩き落とす、というアイデアだった。普通の人間にとってはただの柔らかい液体でも、マッハ五という高速度の飛翔体にとっては凄まじい硬度の壁となる。激突すればミサイルは空中分解してしまうだろう。

結局、タイミングを合わせるのが至極困難という事で、長い間破棄されていた。対空レーザーを支える照準レーダー群の並列演算技術確立によって対艦ミサイルの撃墜率が格段に上がると、誰も彼もがその存在を忘れてしまった。

時代の流れの中で消えゆく、特異な技術。

それで終わるはずだったのだ。

本来であれば。

「もー!!　駄目だ、ぜんっぜん勝てる気がしない!!」

ずぶ濡れのクウェンサーは、巨大船舶の甲板上で仰向けに倒れたままジタバタしていた。近くでは寝取られ女ことマリアージュ＝ナイトキャップがぺたりと女の子座り状態に。ニューカレドニアは南半球に位置するが、流石に深夜の真っ暗闇の中、ずぶ濡れで放置されると全身がガチガチ震えてくる。

いつの間にか土砂降りの雨は止んでいたが、かえってそれが夜気を強く意識させる事になっ

た。

問題の『メガロダイバー』はここにはいない。

何故か撤退してしまった新型機と入れ替わるように、クウェンサー達は『正統王国』軍のエアクッション船に拾われた。そのまま、フローレイティアが旗艦代わりに使っている偽装巡洋艦『スカーレットプリンセス号』まで、海へコンテナごと投げ出された無実の囚人達と一緒に運び込まれた訳だ。

何とか死なずには済んだ。

だがこれで終わりではない。

敵がどういう理由で下がったのか……いや『見逃した』のかが分からなければ安心はできないし、『正統王国』軍上層部が攻撃を続行すると決断すれば、やはり再び『メガロダイバー』の前へ放り出される。

何としても、このわずかな休憩時間の間に突破口を見出したい。

「そ、そもそも、タタミガエシ以前に、何で音だけであんな正確な戦況把握ができるんですかあ……？」

「あん？」

「索敵に音を使うのは潜水艦の得意分野です。でもお、それって水は空気よりも音を伝える速度が速いから成立する仕組みじゃないですかあ。空気中なら、音速を超える物体はたくさんあ

る。本来、『メガロダイバー』はそうした超音速の世界についてこれないはずなのにい……」

「……ヤツはオブジェクトから放たれる砲弾を捉えて回避している訳じゃない」

倒れたまま、クウェンサーは吐き捨てるように言った。

「照準用のレンズや砲台自体が動く微細な音を事前にキャッチして、予測回避しているんだ。だから音速の壁は無視したって良い」

もちろん、オブジェクト自体が音速を超えてしまえば事態は変わったかもしれないが、『ベイビーマグナム』にそこまでの速度は期待できない。

「で、でも！　あれだけの爆音の中ですよお!?　アクティブソナーも集音マイクも普通は役に立たないはずじゃないですかあ！」

「そうだよ、くそ！　あいつは複数の音……つまり山と谷の波形がぶつかり合って巨大なノイズと化した爆音の中から、任意の音波情報だけを抜き取って識別している。一体どんなスパコンを搭載すれば瞬時に分析できるかなんて知らないけど、現にそれをやってる！　あいつの耳を潰すのは困難だ。捕捉された上で倒す、別の方法を見つけないと!!　でもホントにそんなのあるのか!?　もーやだー!!」

そして甲板上でジタバタしているクウェンサー達の所へ、一人の少女がやってきた。

体にぴっちりとフィットする特殊スーツを纏った、操縦士エリートのお姫様だ。整備兵達は連戦でボロボロになった『ベイビーマグナム』を急ピッチで再換装しているため、お姫様はや

や手持ち無沙汰なのだろう。

「……クウェンサーは今わたしはよわいって言ったね……？」

「何を馬鹿な！　出番が少ないからってヤンできたのかい!?」

「ぜったい言った。わたしがよわいから自分たちで何とかするしかないって言ってた。そんなふうに言うクウェンサーにはもうえんごしゃげきしてあげないから」

「おおっとう!!　オブジェクト主体のクリーンな戦争で死刑宣告が来たぞぅー!!」

ガバァ!!　と慌ててクウェンサーは上半身を起こした。と、何やらずしりとした感触が彼の動きを阻む。見れば、未だにマリアージュがクウェンサーの首に両手を回して、豊かな胸を押し付けるように抱き着いていたままだった。

お姫様の背後で、めらっと陽炎みたいなのが揺らいだ気がした。

「……そしてそこの羊の皮をかぶったホルスタインはなにものだし」

「赤コーナー、マリアーぁぁぁぁぁぁぁジュ＝ナイトキャぁぁぁぁぁぁぁップ!!　作戦前会議ブリーフィングでしっかり説明は受けていたはずだが!!」

「チーズトーストみたいにべったりしているりゆうが分からない……!!」

「それについては俺も聞きたい！　何しているんだお前!?」

「え、えへへ……。何だか助けられた実感がぜんっぜんなくて……。こうしていないと落ち着かないんですよう……」

マリアージュが言っているのは『心音を誤魔化さないと「メガロダイバー」から攻撃されそうで怖い。神経質と分かっていても心音を重ねていたい』という事なのだろうが、それを聞いたお姫様の背後がよりめらっとした。

「ああー、こうしていると落ち着きますう……」

「……クウェンサーはしぼうのかたまりをかかえて1人でせんそうをするといいよ」

「お待ちなさいよ。お待ちなさいよォお姫様！　こいつ、その、全体的に引っ掻き回し役っていうか、寝取られ属性なんだって!!　俺もシャトー・ド・ルージュがえらい目に遭ったしな！　振り回されても良い事なんか何にもないって!!」

「あふう。でも、なんだかんだで最後の最後には卑劣な看守の腕から私の体をもぎ取ってくださいましたよねえ」

「……、」

「『メガロダイバー』の弱点を探るためだこの裏切りビッチ!!　そもそも看守のフルオート散弾銃と新型オブジェクトの板挟みだぞ。生き残るためならクソオヤジの顔面に蹴りくらい入れてやるわ!!」

「私はほら、手の届く範囲にある一番強そうな個人にべったりする信条の持ち主ですのでえ」

「ならいっそ『メガロダイバー』側につけ！　一緒に吹っ飛ばしてやる!!」

「……、」

「またまたぁ。私が『メガロダイバー』側についたらあ、なんだかんだと文句を言いながらも助けにきてくれるに決まっていますよお」

「いいや助けないね！　今度こそ助けない!!　つーか、土壇場の土壇場で俺を裏切った事は後できちんと上に報告するからな。良く分からんナントカ罪でもっかい収容所にぶち込まれるが良い!!」

「『後で』って保留にしている時点で迷いが透け透けですう。これは絶対大丈夫なルートに乗っかった予感なんですう」

「……」

……その」

ぼそり、とお姫様の口から何かが洩れた。

もしも言葉に熱があるのなら、口元から燐のように揺らめく炎が見えていたかもしれない。

「わたしたちだけしかしらない『あうん』のこきゅうがありますってくうきにもんだいがあるといっているのだし……。一体、どこの、だれが、ぐたいてきに身をていして『メガロダイバー』をくい止めてあげたとおもっているの……？」

「まままままっ待って待ってお姫様！　馬乗りになって襟首掴んで高速でガクガク揺さぶるのやめて!!　脳みそがバターになっちゃうげぶ……!!　あっあふ、お腹に乗っかる素敵な感触を

楽しむ余裕もないぼぶぐちゃ……!!」

「おい、馬鹿やってる場合じゃねえぞ」

と、横から別の声がかかった。

クウェンサー達を『スカーレットプリンセス号』の甲板まで引きずり上げたヘイヴィアだ。

彼はクウェンサー、マリアージュ、お姫様の方ではなく、偽装巡洋艦の左舷側へ視線を投げていた。

「冗談じゃねえ……。うちの武装客船が横付けしてやがる。こりゃどう考えたってまともな展開にゃならねえぞ」

「うち？　ウィンチェル家のって事？？？」

クウェンサーはマリアージュを引き剝がすのに苦労しながら、視線をそちらへ投げた。

いなくなった『メガロダイバー』の代わりに、先ほどからこの海にはもう一つの威容があった。

見た目だけなら完璧な豪華客船に寄り添うように、負けず劣らずやたらきらびやかな巨大船舶が併走していたのだ。

ヘイヴィアはうんざりした口振りで、

「『サマーバケーション号』が来たって事は……やっぱあいつらが乗ってやがるのか……」

二隻の距離は、五メートル前後しかない。

『サマーバケーション号』なるハッピーな名前の船は、見た目こそ豪華客船そっくりだが、所々に馬鹿デカい砲だの近接防御用のガトリングガンだのが取り付けてあった。偽装巡洋艦の『スカーレットプリンセス号』と違って、最初っから隠すつもりはないらしい。いわゆる『格納用の機構』が全く見られないのだ。

そしてサイドデッキに面した水密扉が開き、乗組員達が横一列に整列していった。

その全員が、

「……何でメイドさんな訳？？？」

「答えたくねえ……」

「どうしてお前が全力で目を逸らしているんだよ。まさかと思うけど、『貴族』サマのお家騒動か何か絡んでる？」

借りてきた猫みたいになっているヘイヴィアの横で水密扉が開き、複数の護衛を従えたフローレイティアが甲板に出てきた。

メイド達は一様に頭を下げたが、フローレイティアは敬礼を返さなかった。

そもそも、

「ウィンチェル家の私兵部隊か……。『民間のボディーガード』がこんな所まで、一体何の用なんだ？」

答えたのは最年長っぽい（身長と胸囲の大きさで判断）、片目を眼帯で覆った女性だった。

メイド服とあまりにも似合わない。馬鹿な、傷だらけの鬼軍曹しかあれは装着を許されないはずなのに!?

「はい、少佐殿。付近を観光クルーズ中、たまたま貴官の部隊が苦戦を強いられているらしき情報を取得いたしまして。真に勝手ながら、こちらで手を打たせていただきました」

その言葉に、ヘイヴィアはガタガタと震え始める。

彼はプールに入った後みたいな紫色の唇を動かしてこう言った。

「……ま、まさか、あの『メガロダイバー』が撤退したのは、テメェらの功績だっつーのか？一体どうやって!?　冗談じゃねえぞ、金にものを言わせて新手のオブジェクトまで動員してんじゃねえだろうな!!」

すると。

そのメイドさんは、片方しかない瞳を刃物のように細め、クソ虫でも見るような調子で、低く呻いた。

「おめぇ――――――――――――――――――――――――――って　ヤツは本っっっ当に生きちょるのが不思議なくらいの妄想の塊じゃけえ。いくら『貴族』でもオブジェクトの直接保有なんぞできる訳なかろうが……」

「口調!!　すでに口調からして一般のメイドから外れてやがる!!」

涙目から号泣に変わったヘイヴィアを無視して、フローレイティアは細長い煙管を咥え直し

た。

「私としても状況を把握しておきたい訳だが？」

「はい少佐殿」

一秒で表情と口調が元に戻った。

「件のオブジェクトと頻繁に暗号通信を行っていた別働隊があったようでしたので、そちらを攻撃させていただきました。おそらく補給か整備のための部隊でしょう。全長五〇メートルもの塊を点検・整備するためには、その準備だけでも相応の時間がかかると思われますし」

ずぶ濡れのまま、クウェンサーはハッとした。

「……そうか。『メガロダイバー』は海底火山の溶岩を浴びている。海水の吸入口もいくつか塗り潰されているはずだ。あれを剝がすためには操縦士エリートだけじゃ難しい。ヤツだって一刻も早くメンテをして、元の潜航能力を取り戻したいんだ。だから」

自らが危険人物とみなしたマリアージュ＝ナイトキャップの死亡確認も取らず、とにかく別働隊の救出へ舵を切った。

即席とはいえ、有り合わせの資材を使って、丸三日もかけて築いた簡易整備場。そこを攻撃されて、流石に向こうも焦ったのだろう。

それでクウェンサー達は全滅の憂き目から逃れられたのだ。

ヘイヴィアはホッと息を吐いて、

「でも、そうするとひとまずは安心、なのか？　補給や整備を断たれて、潜航能力も維持できなくなっちまえば、いくら『メガロダイバー』だって……」

「おめぇ――って　ヤツは……」

最後まで聞く事なくヘイヴィアは両手で顔を覆ってめそめそした。

眼帯のメイドさんは気にせず、

「艦砲と上陸作戦によって例の別働隊は七割ほど撃滅いたしましたが、オブジェクト接近に伴って我々も離脱を余儀なくされまして。おそらく、合流されれば機体のメンテナンスは実行されるでしょう。有効打を浴びせるなら作業完了前の今しかありません」

「ふむ」

「少佐殿。僭越ですが、攻撃時に取得した関連資料の提出も可能です。現場でかき集めた紙束や写真画像などは、我々民間人にとっては宝の持ち腐れでしかありませんので」

「それは、ウィンチェル家の嫡男を心配しての事なのか？」

「クソ虫に用はございません。『正統王国』人民の義務を全うするのみです」

にっこりと微笑んで眼帯メイドは切り捨てた。

『貴族』のボンボンはついにうずくまってしまった。フローレイティアは細く長く、甘ったるい匂いのする紫煙を吐き出しながら、

「協力には感謝したいが、情報共有はできない相談よ。我々は数多くの機密情報を取り扱う軍人で、対するお前達は責任を負わない民間人だからな」

「であれば、民間からの情報提供か、あるいは非正規作戦の作戦資料の押収、という形を取っていただくのは？　情報の流れが双方向ではなく一方通行であれば、そちらの機密情報が民間へ漏洩する心配もないでしょう」

「だが、それでは恩人に対して礼節を軽んじてしまう事になるな」

フローレイティアがニヤリと笑うと、眼帯メイドもまた口元にうっすらとした微笑を浮かべた。

銀髪爆乳の少佐は細長い煙管でクウェンサーの方を指し示すと、

「クウェンサーと、そっちのはマリアージュ＝ナイトキャップか？　二人は民間人として向こうの船に乗れ。民間人同士の会話など、軍人たる私の知るところではない」

二人をワンセットで扱った事を受けて何やらお姫様が『イラッ☆』としているようだったが、やはりフローレイティアの知るところではなかった。

（まずいっ、娯楽に飢えているお姫様が豪華客船という遊園地並のテーマパークを取り上げられてイライラしている、だと……!?）

一見空気の読めているようで実は一ミリも読めていない男クウェンサーはこう進言した。

「へ、えへへ。どうでしょうフローレイティアさん？　ここは一つ、お姫様にも一緒に乗船し

てもらうというのは熱っつ!?　おっおふ！　き、煙管の先端でぶちましたね!?」

「馬鹿かお前は。操縦士エリートはコンディション調整と急ピッチで再換装した『ベイビーマグナム』の各種チューン、テストが山ほど待っている。遊びに付き合わせられる余裕がどこにあると思っているんだ。ああん？」

あつっあつあつっあつアツ熱っつアツあつ熱っつあつアツちょ熱っあん☆　とクウェンサーが爆乳の上官にイジられてのた打ち回るたびに、あくまでも無表情を貫くお姫様の頭の周囲が『☆☆☆イライライライライライライライラッ☆☆☆』とＶＦＸ効果満載の『情報同盟』アイドルのように彩られていく。

続けて、彼女は煙管の先端をヘイヴィアの方へ向け、

「ヘイヴィア、お前は里帰りよ。休暇を与えるからウィンチェル家の武装客船に渡ってこい」

「いやあ!!　鬼の家庭教師軍団に放り込まれるなんて絶対にいやよおっっっ!!!!!」

ヘイヴィアが甲高い裏声で抗議の声を上げていたが、横一列に並ぶメイド達は揃って冷え切った目を向けているだけだった。

命令を受けたのでクウェンサーはびしょ濡れのまま甲板から立ち上がって、

「……結局何なの？　あのメイドさん達はどういう事???」

「おいおい説明するから、今はちょっと黙っててくれや……」

2

『正統王国』海軍所属偽装巡洋艦『スカーレットプリンセス号』から、名門貴族ウィンチェル家所属武装客船『サマーバケーション号』へ。

梯子を横に倒したような頼りない簡易橋を使って、クウェンサー、マリアージュ、そしてヘイヴィアの三人は船から船へと移動していった。真下に広がる真っ暗闇の海は無意味に恐怖心を煽ってくる。

クウェンサーは濡れっ放しの金髪頭を軽く掻きながら、

「ども。クウェンサー＝バーボタージュです」

「ま、マリアージュ＝ナイトキャップですう……」

すると、おっかないという第一印象のあった眼帯のメイドが、にこやかな笑顔と共に柔らかい声でこう返してきた。

「初めまして、お二方。不肖、私はカレン＝I＝ウィンチェルと申します。短い間ですがどうぞよしなに」

そして最後にヘイヴィアの顔を見ると、露骨に舌打ちして手すりから海へ向けて唾を吐き捨てた。

「おめぇ――――――

よお。催促しちょらんと挨拶の一つもできんのか……？？？」

「自己紹介なんぞ必要か!?　テメェのご主人様でお馴染みのヘイヴィア＝ウィンチェル様だっつーの!!」

あれー？　と首を傾げたのはマリアージュだ。

「そちらのメイドさんもウィンチェルで、そちらの兵隊さんもウィンチェルなんですかあ？」

言われてみればそうだった。

名門貴族の一員がメイド服を着ているなんて明らかにおかしい。

が、ヘイヴィアは肩をすくめると、

「うちの家じゃ、特に高い功績を挙げた使用人や料理人にウィンチェルの名を授ける因習があるんだ、養子縁組を使ってな。もっとも、血統が全ての『正統王国』じゃ義理の家族なんて大した法的効果はねえよ。相続権だってない。文字通りの称号や勲章に過ぎねえのさ。ちなみに、ミドルネームのIはイミテーション、模造品って意味だ」

クソ虫をシカトしてカレン＝I＝ウィンチェルは満開の笑顔で言う。

「ウィンチェル家では特に高い功績を挙げた使用人達に、その名を授ける儀礼があるのですよ。養子縁組の仕組みを使いまして。ただ、血統が全ての『正統王国』では法的効果はございません。メイドはメイドの本分を弁えておりますので。あ、ちなみにミドルネームのIはイミテーションを意味しております」

「同じ説明!!　何だよもー！　俺の声は聞こえてねえフィルターでもついてやがんのか!?」
「こちら、『サマーバケーション号』はウィンチェル家が所有する、七隻の武装客船の一角となります。先ほどの偽装巡洋艦にも似ていますが、あちらが『巡洋艦を豪華客船に似せる』のに対し、こちらは『豪華客船に追加の武装を施す』事で海賊対策としております。誘って殺すのではなく、全面に威圧して敵を遠ざける設計思想ですね」
　そして抗議も無視されたっ!?　とヘイヴィアは絶叫する。
　微妙にメカ心をくすぐられるのか、クウェンサーは瞳をキラキラさせ始めた。
「やたらと大きな艦砲がくっついているけど、あれって何センチ砲なの？」
「五〇センチ砲と伺っております。『島国』の戦艦が四六センチとの事でしたので、艦砲としては最大クラスにあたるかと。無論、オブジェクトには遠く及びませんが」
「やたらとデカくてトップヘヴィーだけど、ダメージコントロールって？」
「軍艦ではなく客船が主ですので、重心が高くなるのは致し方ないのでは。ただし、独自の浮沈構造を有していますので、並の重巡より頑強にできていますよ」
「ぐ、具体的に！　そのテクノロジーについて!!　は、ハァハァ!!」
「船体外殻をくまなく覆うように、蜂の巣状の細かい空気槽を備えています。単純な浮き輪の他に、モンロー効果やメタルジェットなどを活用した化学弾頭に対する減衰効果も期待されるとか……」

「空気を使った防御術……!?　く、くそう、船は空気で浮かぶという基本を忠実に守ったからこその堅牢な造りか。分厚い装甲でひたすら押さえ込むオブジェクトとはまた違った方向に尖っていやがる!!　い、いや、二つは相容れないという固定観念を覆す事が新たなオブジェクトの建造に繋がるやも……」

そこで、眼帯のメイド、カレン＝I＝ウィンチェルはわずかに首を傾げた。

ちなみにマリアージュ＝ナイトキャップはとっくにドン引きだった。

「……あの、失礼ですが、バーボタージュ様はいわゆるオタクなのでしょうか？」

「い、いや!!　確かに高度技術系志望ではあるが、ギーク系でなく爽やかで頼りになる社会人になりたい!!　ほら、隣近所の奇麗なお姉さんにレコーダーの配線とかお願いされるあのポジションに!!」

「なるほど。……オタクという自覚がないオタク、と。了解いたしました」

奇妙な情報をインプットされてしまったらしい。

いや、何が了解なのさ……とわなわなしているクウェンサーの背後で、ヘイヴィアが暗い笑みを浮かべていた。早くこっちの罵倒組へ落ちて来いとその目が語っている。

負け犬に引きずられるとろくな事にならないので、クウェンサーは気持ちを切り替えてポジティブに攻める事にしてみた。

「でも、『貴族』ってのはこんなのまで所有できるもんなのか……？　武装もそうだけど、こ

れを運用するのに一〇〇人以上の専門職が必要だろうに……」

「我々は、あくまでも護身術を習得した民間のメイドにございます。少々特殊な国際資格なども取得しておりますが、その気になればどなたでも挑戦できるものに過ぎません」

にっこりと完璧な笑顔で応対するカレンへ、突き刺すようにヘイヴィアが水を差した。

「……虎でも熊でも素手で殺れる怪物女が何言ってやがる……」

「あァん？」

カレンから軽く睨まれると、ぴぃいいいいっ!!　とヘイヴィアはお湯の沸騰を知らせるヤカンみたいな声を上げた。

無線機からフローレイティアのツッコミが入る。

『ちなみに「貴族」であれば誰でも武装客船を持っている訳じゃないぞ。あんなもん、丸一日クルーズしただけで二〇万ユーロは吹っ飛ぶ。七、八〇日くらいかけて世界一周旅行をしたら、ステルス戦闘機が新品で買える計算ね。ウィンチェル家とかバンダービルト家とか、よほどの名門じゃない限りは購入できても運用できない』

「そんなステータスを七隻も……。あれ？　でも、何でそんな金喰い虫をメイドさん達が乗り回しているんだ？？？」

「元々は何番目かの妹に贈られた誕生日プレゼントだったんだ。でもって、そいつが飽きて捨て置いているのをこいつらが乗り回してやがる。機械ってのは定期的に使ってやらねえと壊れ

ちまうもんだからな、本家の連中も目を瞑っているって訳」

うへえ……とマリアージュが呻き声を上げた。

クウェンサーは全然違うところに喰いついていた。

「待ってくれ、ちょっと待ってくれよヘイヴィア。つまり、その、何だ？　お前には妹がいる。それも何人も、数えきれないくらい。その上、義理の姉が美人でメイドさんをしてくれているだって？」

こくり。

と、悪友が頷くのを確認して、クウェンサーは無線機に口を寄せた。

「ブルジョアに死を!!　賛同の者は挙手を!!」

うォおおお

「今の時代の本物の『貴族』サマだよ!!　文句あんのか!?」

思わず馬鹿二人が摑み合いになったところで、横からカレン＝Ｉ＝ウィンチェルが割り込んだ。より正確にはフルスイングの平手打ち、否、掌底のような何かを『貴族』の頬にぶち当てて数メートルも錐揉み状に吹っ飛ばしたのだ。

「ぶっぶごう!!　ぶべぶう!!」

「おめぇ――――――――――――――――――――――――――――はよお。ブタにはお似合いの鳴き声じゃけんど、客人の前で礼節を弁える事すら忘れちょったのか」

流石にクウェンサーも真っ青になっていた。

「く、くび、あれ、首にかかった力だけで、数メートルも、くび……？？？」

「ご心配なく。クソ虫はスリッパで叩いた程度では死にませんので」

くいくい、とマリアージュは涙目でクウェンサーの軍服を引っ張っていた。話題を逸らさないとヘイヴィアが追撃を受けて死ぬと、その目は語っている。

「つ、つまり、その！　カレンさんはウィンチェル家の警護を担当する無敵のメイド部隊！　みたいな扱いで良いのかなー!?」

すると、何故か長身のクールビューティは顔をほんのり紅潮させ、迫りくる何かから目を逸らそうとするように身をよじった。

「……そっ、その呼称はあまり好みません。羞恥を覚えます……っ」

あ、この方向でいけそうだ、と思ったクウェンサーはさらにつっついてみる。
「えーと、じゃあどのような所属で？　名門貴族って言ったら、それこそメイドなんて一〇〇〇人近くいるかもしれないんだし……」
「区分としては、ミルクメイドに当たります」
「名称からしてエロかった!!!??」
「どこを見て何を想像なさっていますか!?」
今度こそ顔全部をトマトみたいに真っ赤にして、カレンは両手でその胸をガードした。
やっぱりこの方向で正解みたいですよ!!　とクウェンサーは悪友に身振りでサインを送るが、ぐんにゃりしているヘイヴィアには届かない。
マリアージュがクウェンサーの服をくいくいしながら小声で言ってきた。
「あ、あのう。ミルクメイドって牛の乳を搾ったり、バターを作ったりする地方農場向けのメイドさんじゃありませんでしたっけえ？」
「……ち、違うのさハニー」
ようやく、ヘイヴィアがよろよろと起き上がりながら呟く。
「そいつは荘園や農園……いわゆるウィンチェル家の領地の『飛び地』を直轄警備する、ガチの武闘派だ。素朴な乳搾りのメイドなんてとんでもない話なんですぅ……」
チッ、とカレンが強い舌打ちをしたが、もうヘイヴィアはヤケクソ気味だった。

「『貴族』の嫡男ってのは、生まれてすぐに水や空気の奇麗な地方へ飛ばされる因習があってな。その関係でそいつらが俺の乳母を務める事もあったんだ。とんでもねえ話だったがな!!　公害病やアレルギーから身を守るための施策だったのに、気がつきゃ眼帯メイドに何度殺されそうになった事やら!!」

「英才教育の賜物です」

「『貴族』は毒殺に備えなくてはならないとか、『貴族』は暗殺者に備えなくてはならないとか！　その後何が起きたかはご想像にお任せしますな大惨事だぜ!?」

そ、それはひどい……とクウェンサーも呻きそうになったが、

「『貴族』は女スパイや結婚詐欺師の色仕掛けに備えなくてはならない、というものもありましたよね。ゴミ虫」

「お前もうコンクリに詰めて海に沈めてやる！　今すぐにだっっっ!!!!!」

いやあれは寸止めだった！　罠と分かってて誘惑に負けたらちょん切るって脅されてたんだってー!!　と叫ぶヘイヴィアを握り拳でボッコボコにしていくクウェンサー。火事場の馬鹿力が発揮されているのか、普段の『役割分担』などどこへやらの大破壊なのだった。

カレン＝I＝ウィンチェルはにこやかに微笑んで、

「便所虫は我々の方で簀巻きにするとして、そろそろ本題に入りましょうか。例の『島国』製のオブジェクト……『メガロダイバー』などと呼ばれている機体に関する情報があります。補

給や整備を行う別働隊を襲った時に押収したものです。船内に保管してありますので、こちらへどうぞ」

3

眼帯のメイド、カレン＝I＝ウィンチェルの案内で、クウェンサー達は武装客船『サマーバケーション号』の船内通路を歩いていく。今が深夜であるのを忘れてしまいそうなほど、眩い光が一面の闇や影を片っ端から払拭していた。

こうして中を見ると、やはりこの船は豪華客船なんだなあ、とクウェンサーは率直な感想を持った。偽装巡洋艦の『スカーレットプリンセス号』は主格が軍艦であるため、外見と違って中身は結構無骨で狭苦しかったりするのだ。

「びちょびちょなのが気になってきた……」

呻くようにクウェンサーは言う。

絨毯敷きの通路だと、濡れた足跡が気になって仕方がない。あとで弁償、みたいな話になったらきっと『平民』には一生かかっても払いきれないだろう。

あと地味に股間が気になる。まあ、いくら何でもズボンの中がぐずぐずにふやける、熱帯雨林の弊害みたいな事にはならないだろうが……。

カレンは申し訳なさそうな声で、
「現在はメイドのみの運用が想定されていましたので、客人用の衣類には心当たりがありません。バスローブかメイド服のみとなってしまいますが……」
「……ふっ、済まないお嬢さん。残念だが、伝説の看板娘クウェン子ちゃんはもう封印すると心に決めたんだ」
「ええっ!?　着た事あるんですかあ!?」
マリアージュの素っ頓狂な声に、何故かクウェンサーは遠い目になった。
「あれは、俺がまだ『安全国』の学校に通っていた頃、文化祭の話だった。組織票の根回しによってクラスの出し物をメイド喫茶にしたまでは良かったものの、怒りに燃える女子一同が『だったら男子もメイド服を着て全員野球で!!』などと焦土作戦を展開してきてなあ……」
うへえ……とマリアージュは当時の地獄絵図を思い浮かべたのか、微妙な声を発した。
が、一方で、何故かカレンは両手の人差し指と親指だけを伸ばしてL字を二つ作ると、それを組み合わせて写真のフレームみたいな四角い枠を作った。片方しかない瞳を通して、心のファインダーでクウェンサーの顔を、全身を、くまなく捉えていく。
「……ふむ。言われてみれば、顔はカワイイ系で体軀も華奢と、確かに素材は悪くない……。くっ、しかし彼にメイド服を着せたところでお相手がいない！　うちの松喰い虫を割り当てても華がないのが悔やまれる……!!」

「いや……あの……？？？」

微妙に背筋へ寒気を感じるクウェンサーは、とにかく話題を変える事にした。

「そ、それにしても、船内の全員がメイド服っていうのも壮観だなあ！　でも大丈夫なの？　海に落ちたりしたら大変なんじゃあ……」

「それならご心配なく。海に落ちたり、機械にスカートが挟まったりした際は、速やかに着脱できる構造になっていますから」

「……、」

一瞬、今すぐ海へ突き飛ばしてやりたい邪な衝動に駆られたクウェンサーだったが、生憎とすでにここは船内通路なのだった。あと『いつでもすぐ脱げるメイド服』と聞いて言葉にできないモヤモヤが渦巻き始めているのはもちろん内緒である。

彼らが案内されたのは、船内に複数ある吹き抜け状のダンスホールの一つだった。グランドピアノや立食用のテーブルなどは壁際に寄せられ、床には無骨なブルーシートがくまなく敷いてある。その上に資料の紙束や、焼け焦げて形を失った金属塊などが丁寧に並べてあった。

どことなく不吉な、旅客機の墜落時に並べられる死体袋の列などを想起させる。

一つ一つに、人の死が染みついているからかもしれない。

「とりあえず現場に踏み込んでからオブジェクトがやってくるまでの一五分の間に、あるだけのものをかき集めてみました。予想通り、補給や整備を担当していたとしたら、ここにある資

料類から『メガロダイバー』の機構や弱点に迫れるかもしれません」
「そりゃ助かる」
クウェンサーの目の色は早くも変わっていた。
大きな機械、特にオブジェクトが関わるとやはり意識を持っていかれるらしい。
「けど、そもそも、その別働隊っていうのはどこに潜んでいたんだ？」
「同じニューカレドニア方面の錆にまみれた孤島です。タンカーの墓場として使われている場所で、人は住んでいません。例の収容所から、およそ五〇キロほど東へ進んだ海域でしょうか」
「ああ、経年劣化でボロボロになったタンカーを最後の力で運び込んで、バラバラに分解する作業場ね。クズ鉄をバラ売りするのが目的だったっけ」
「粗雑なアセチレンバーナーを使う関係で、爆発事故も絶えないそうで。工員以外は地元の方でも近づかない、その工員もタンカーが来ない限り用はない。……潜伏先としては悪くないかと思われます」
眼帯のメイドは一礼すると、ダンスホールから引っ込んでしまった。
クウェンサーは一度こきりと首を鳴らすと、
「さて、と。……こいつを宝の山って呼んじゃうのは、流石に不謹慎かね」
「舌なめずりはやめようぜ。そういうのはちょっとエッチな女の子だけで十分だ」
そんな事を言われて止まるクウェンサーではない。彼が銃弾の雨をかいくぐってきたのは、

まさに現役オブジェクトの生きた情報を手に入れるためだ。まして、今回はオブジェクト分野では伝説とまで呼ばれる『島国』の中で、さらに秘匿開発されていた第二世代。これで興奮しないようなら、素直に『安全国』にでも帰って黒板を睨みつけていた方が良い。

「……こっちは高耐火反応剤、こっちの黒焦げはレーザービーム用の透過反射鏡か？　こっちの紙束は……」

「おいクウェンサー！　方針を説明してくれよ。どこを中心に調べりゃ良いんだ!?」

「全部だ!!　とにかく全部!!　す、すごい……。こりゃあ重量分散用の支柱配置概要図か!?　こ、こんなの、こんなもん『安全国』じゃ国立研究所にでも忍び込まなきゃお目にかかれないぞ!!　こっちのは……はぁはぁ……!!」

「この変態！『黒軍服』さんあいつです!!」

あうあう……とマリアージュが呻いた。

どこまでも脱線していきそうな馬鹿二人の軌道を修正するべく、とにかく声を掛けてみる。

「あ、あのう……。早いとこ『メガロダイバー』を沈めないとこっちが大ピンチなんですよねえ？　だったら、目下最大の脅威であるタタミガエシの防御システムを中心に洗ってみるべきなんじゃないですかあ」

「おう、それだぜ!!　つーかこの巨乳のメガネちゃんはどこのどいつよ？　何だか濡れ透けしているけども」

「檻の中に閉じ込められていたマリアージュ＝ナイトキャップ。ていうか、そいつ寝取られ属性だから気を許してもろくな事にならないと思うよ。押せば押すだけ誰にでも流されるっていうか、ものにするのは簡単だけどその後に大損させられるっていうか」

「何それトキメクッッッ!!」

ビクッ!!　とマリアージュは小動物みたいに肩を震わせ、ヘイヴィアから微妙に距離を取り始めた。

そして『貴族』のボンボンが鼻息を荒げたところで、タイミング悪くダンスホールへ戻ってきたカレン＝I＝ウィンチェルが本気のミドルキックを脇腹へ突き刺した。

布団を叩くような轟音と共に、巨星が落ちる。

「ぬっ、ぬふうううううんっっっ!?」

「おめぇ――――――――――――――――――は悲鳴一つ聞いちょっても気味が悪いじゃけんに……」

崩れ落ちたヘイヴィアを丸めたティッシュの中身を覗き込むような目つきで見下すカレンは、銀のトレイを手にしていた。カチャカチャ、などと無粋な音は一切立てず、流れるような手つきでトレイを運ぶ。壁際に追いやっていた立食用テーブルに並べられるのは、ティーセットと何種類かの焼き菓子だ。

「何か有用な情報は見つかりましたか？」

「待って。これ、これじゃないかな。『ゼロ水圧下における兵装』だって。これってつまり海上戦闘用の装備リストだろ？　例のタタミガエシもこいつに分類されるんじゃないか」

「でもお、タタミガエシって普通の砲を海面に叩き込んででっかい水柱を噴き上げるだけじゃないんですかあ？」

「あんな戦術、今までどんな海戦用オブジェクトだって成功していなかった。百発百中であらゆる攻撃を受け流しているんだ。専用の照準装置とか、特殊砲弾とか、何か秘密があるって考えた方が良いかもしれない」

「そうですか。あっ、茶葉はセイロンとアッサムを用意させていただきましたが、不都合ありますでしょうか？　ミルクとレモンはこちらになります。林檎の皮が必要であればお申し付けを」

「大丈夫大丈夫。それよりこいつだ……でも……こりゃ……何だ？　カンジ？？？　『島国』で使われている特殊言語だな。アルファベットじゃないから取っ掛かりがないぞ！」

「これえ、古文とかっていうヤツじゃないですかあ？　縦に上から下へ読むだけじゃなくてえ、行ったり来たりしながら読むヤツですよ。私も詳しい事は分かりませんけどお」

「マフィンやクラッカーにはこちらのペーストをつけてお召し上がりになってください。僭越ながら、オススメはアンチョビとカッテージチーズでございます」

「図面だけ見ると……何だ、こりゃ？　海に向かって何か投下してるみたいだぞ。砲弾の事じ

やないみたいなんだけど……」

ぶつぶつ呟いていたクウェンサーは、そこでハッと動きを止めた。

今の今まで忘れていた事がある。

震える手つきで無線機を摑み取る。

「ふ、フローレイティアさん!!　俺は今、大変な事に気づいてしまいました!!」

『どうした？「メガロダイバー」について何か分かったか!?』

「この船、消しゴムみたいな軍用レーション以外に普通の食べ物が置いてある！　でも何でだ!?」

「はあ。武装客船はあくまで民間船舶に自衛用の武装を施したものですので、軍規に縛られる必要もありませんから。曜日の感覚を忘れないよう、使用人は月曜に魚の料理、金曜に仔牛の料理を作るよう定めておりますが、それ以外は割と自由なものですよ」

「うおおお

過言ではない待遇だった。

一方、無線の向こうのフローレイティアは呆れたような調子で、

『おい、国民の血税から給料が支払われている事を忘れるなよ……。そもそも料理が何だっていうんだ。海の上なら週に一回カレーを作れば曜日感覚なんて維持できる。多くの食材を必要とするという事は、それだけ余計にロジスティクスへ負荷をかけるという事なんだ。軍では通用するか、そんなもん』

「汚いよ！　自分だけ私物の煙草とか小型冷蔵庫とか持ち込んでいるくせにキリッとした顔で奇麗ごと並べるなんてさあ!!」

『島国』の特殊言語である漢字を読み解けない事には先へ進めない。

これには眼帯メイドのカレン＝Ｉ＝ウィンチェルが名乗りを上げた。

「本家には健康食の一環として和食やグリーンティーを嗜む方もいらっしゃいますので、その関係で少々かじっておりまして」

「奥様向けの料理本に載っているような言葉じゃないとは思うんだけど……」

他に手もないので、とりあえずクウェンサーは機密文書をカレンに回してみた。

ふむふむ、と彼女は意外に可愛らしく呟いた後、

「どうやら、これは天然高分子のようですね。機内の動力炉の熱で六〇度から七〇度に温めた後、海中に向けて投下する仕組みになっています」

「ちょ、ちょっと待てよテメェ。何なんだ、その天然高分子ってのはよ」
「おめぇ――って
ヤツは……」
「分かったよ！　もう黙っています!!　続けて続けて!!」
涙目になるヘイヴィアに、クウェンサーが優しく教えてあげる事にした。
「ヘイヴィア。天然高分子っていうのは、いわゆるデンプンの事だ。片栗粉とかジャガイモとかから採れるヤツ。分かるだろ？」
「はァ!?　じゃあデンプンって言えば良いじゃん!!　わざわざ難しい言葉使いやがってよ。何ですか？　スペック厨ですか？？？　はっはぁーん」
カレンは熱湯の入った陶器のポットを摑むと、その底をヘイヴィアのおでこに押し付けながら言った。もちろん魔法瓶じゃないので外側もアツアツである。
「こ・こ・に、書いちょるんじゃから仕方がねぇ――――――――――――――じゃろうがっ!!」
「ぎゃばーっ!?　ほぼ焼き鏝よお!!」
ちなみにリアクション界における熱湯の限界は五〇度らしい。
良い子は真似しないでね。
「くそ、くそがっ！　一体何の恨みがあってこんな……!?」
「特に憎悪はしておりませんが、全体的に気に喰わないのです」

「しれっとした顔で言ってんじゃねえよ馬鹿っ！　どうせ俺が戦場にやってきたのがムカつくってだけだろ。より正確には、敵対するバンダービルト家の人間と仲良くしている俺が、恐れ多くもウィンチェル家を継ごうなんて考えているのがよ!!」

吐き捨てるように彼は言う。

「だがテメェらの都合なんか知った事か！　何百年前に誰が埋め込んだのかも分かんねえ憎悪のために、今を生きてる俺らが振り回されるなんて間違ってる。そんなもん俺の代で終わらせてやる、必ずな！　テメェらの協力なんて誰が求めるかよ。だから賛同だって必要ねえ。俺は一人でもやってやるって決めてここまで来たんだ!!」

「はあ。熱血なのは大変結構じゃけんど、アツアツのポットは私の手にあるってのを忘れてねえ――――――――――――――――――か？」

「ぎゃわーっ!!!??」

そんな漫才は放っておいて、マリアージュが尋ねてきた。

「でも、タタミガエシを使う前にデンプンを海中へ投下するっていうのはどういう事なんでしょうかね。しかも六〇度から七〇度に温めるって言ったら……」

「デンプンに糊みたいな粘性を持たせる温度だよな。だとすると、やっぱり」

「ああ、最高級の葛粉を使っているみたいですね。もったいない……」

のた打ち回るヘイヴィアを放って、カレンも会話に合流してきた。

「オブジェクトを覆い尽くすほどの、五〇メートル超えの水柱も十分な盾ですけど、さらに万全を期すため、デンプンを使って海水の粘度を局所的に増加させているみたいです」

「……気になる事があるな」

クウェンサーはポツリと呟いた。

マリアージュも同じ事を考えていたらしい。

「周囲一帯の海水をネバネバさせるのは分かりましたけどお、『メガロダイバー』自身、海水を呑み込んで動力炉の冷却や推進力を獲得しているんですよねえ？　でも、ネバネバした海水なんて吸い込んでも大丈夫なんでしょうかあ」

（……それもあるけど、深海で遭遇した時、あいつは機体上部の吸水口を使っていたはずなんだよな。海上に出た後はどうやっていたんだ。あれとは別に下方にも吸水口があった？　どっちみち、海底の砂を吸い込んでしまうから海上へ浮上しての短期決戦に臨んだ？　……でも、そうなるとやっぱりデンプンで粘性を増した、不純物混じりの海水を自ら作り出すのが気にかかる。何か更なる仕組みがあるのか……？）

答えは出ない。

だが解くべき『謎』がハッキリと浮き彫りになってきた。

「フローレイティアさん」

『料理の話ならまた今度な。休暇さえ申請すれば、その間に釣った魚については不問にして

やっても構わないが』

「例のタタミガエシ……あっ、水遁の衣？　正式名称それなの？　とにかく、『メガロダイバー』の防御システムについて、いくつか分かりやすい課題が出てきました。電子シミュレート部門の方へ連絡お願いします」

『詳しく説明しろ』

かくかくしかじか。

報告を受けたフローレイティアはわずかに黙った後、

『もちろん電子シミュレート部門は動かすが、並行して情報を集めてほしいところだな』

「はい、もちろんです。これからも一面にある資料を精査して……」

『そっちじゃない』

フローレイティアは遮るように言った。

『「メガロダイバー」の緊急メンテは遠からず終わってしまう。闇雲に資料の山に当たるだけでは間に合わない。それ以上に生きた情報となれば、連中が蠢いているタンカーの墓場しかないだろう』

「……まさか」

嫌な予感がしたクウェンサーは思わず呟いてしまった。

フローレイティアの返事はシンプルだった。

『お前が見つけた謎なんだ。お前が責任を持って解き明かすのが筋じゃないか』

今から一〇分後。

上陸部隊に組み込まれた全ての兵士達からタコ殴りにされる事を彼はまだ知らない。

4

「最悪だ、最悪だ……」

クウェンサーはぶつぶつ言いながら、『スカーレットプリンセス号』の空き室で着替えていた。ベチョベチョになった囚人服からいつもの軍服へ……なのだが、シャワーを浴びる時間もなかったため、何とも気持ち悪い。

「……ああもう、余計な事なんて言うんじゃなかった。変な事に気づかなければ楽して生きていけるのに、まったく天才ってのは気苦労が絶えない……」

ちなみに緊急出撃の経緯を知った同僚達からもかなりの勢いで袋叩きにされていたため、どこか挙動がふらふらしていた。

船室から通路に出ると、そんなクウェンサーよりふらふらしている人影を見つけた。

（んんう……？）

お姫様、のように見える。

『ベイビーマグナム』は整備兵総動員でダメージを受けた装甲板の換装作業を急ピッチで行っているため、言われてみればお姫様は待機中の状態のはずだった。

彼女も連戦続きでかなり消耗しているはずだ。以前話をした時は心配かけまいとして気丈に振る舞っていたのかもしれない。

少々心配になってきたクウェンサーは思わず声を掛けようとしたが、その時、彼は恐るべきものを耳にした。

彼女の口は確かにこう言ったのだ。

「……むにゃむにゃ……」

「ねっ、寝てるうー!?　寝ながら徘徊してるううーっ!!!??」

そもそも人間って自分の体重を支えるくらい筋肉を硬直させた状態で眠れるものなのか？

とか、あれは夢の世界で足を動かしているのかぼんやりと現実を認識しながら足を動かしているのかどっちなんだ？　とか、状況がイメージできないクウェンサーは疑問に思うのだが、現にこうして寝ながら歩いている人を目の当たりにしているのだから、信じる他ない。

そして『メガロダイバー』戦を控えている中、お姫様に怪我でもあったら洒落にならない。

通路を歩いている内は良いが、階段などに向かう前に止めた方が良いだろう。

そんな風に思い、クウェンサーは改めてお姫様の肩を摑んで揺さぶろうとしたが、

（……待てよ）

ふと、その動きが止まる。

彼の視線が、お姫様の顔からわずかに下に下がる。

そう。見た目は控え目だが実はかなりあるとの評価を受けている、お姫様の胸を、だ!!

寝てるって事は、今なら何をやらかしてもノーカンって事なんすかね？　へ、えへへ。

ブラックだった。

まさに今、クウェンサーに語りかけている何かは、きっと『信心組織』辺りなら全力で粉砕しようとするであろう、とてつもないブラックさを秘めていた。

そしてクウェンサーの右手が自動的に手刀を放ち、クウェンサーの左手が右手首を掴んでお姫様との接触を封じた。

決死の一人芝居が始まる。

「ちいい!!　待つんだ俺の右手っ、荒ぶる感情に身を任せてものちのちろくな目に遭わないぞ!!　だっ、だがこのギリギリのラインならセーフっ、触れていないんだからセーフ!!　この状態でうっかりくしゃみなんかしたら、まあ、仕方がないんじゃないかなー的な!?　それは事故なんだから、きっと誰も悪くないよはっくしょーい!!」

天使と悪魔の葛藤とかではなく、よくよく聞いてみるとオール言い訳だった。

ぐばあ!!　と、都合の良い理論武装で後押しされたクウェンサーの右手が、蛇が卵を呑みこむがごとくお姫様の丸みへと襲いかかる。

直後、

「むにゃー……」

「なっ!?　はたき落とさっ……!?」

最後まで言う前に、諜報部門の護衛達が迅速に動いた。

ガシャガシャガシャシャ!!　という金属質な音に取り囲まれたと思ったら、すでにクウェンサーは一メートル以内で一〇以上の銃口を全方位から突き付けられていた。

自分のほっぺたをカービン銃の銃口でぷにぷにされながら、不細工な顔になった『学生』は心の叫びを放つ。

「どこに隠れていたんだ、一体どこに!?　光の屈折率でも曲げてんのかアンタ達!!」

ちなみに『偽装艦』とはいえ軍艦は通路が複雑に折れ曲がり、太い配管も剝き出しなので、まあ隠れるスペースだけなら実は結構ある。もちろん『学生』に分かるはずもないのだが。

「……、」

「……、」

「……、」

取り囲む護衛達は一言も発しない。

ちなみに『若い女性』のエリートの身辺警護という観点からか、護衛達は皆、お姫様と同年代か少し上くらいの女性達で固められていた。黒一色の夜戦服はピッチピチのパッツンパッツンで、どいつもこいつも女の敵を睨む冷たい眼光の持ち主だった。

揃いも揃ってクーデレなのかもしれない。

クウェンサーはポジティブスイッチを入れて乗り切る事にした。

じゃないと涙が出そう。

彼は両手を上げながら、

「分かった分かった、分かりましたよ。俺は手を引きます。この調子ならお姫様は安心みたいですな。じゃあ俺はこっちの道なのでー……と見せかけてからのっっっ!!」

グバッ!!　と勢い良く振り返り、極至近にあるお姫様の果実へ再び摑みかかろうとするチャレンジャー。

が、直後に護衛の少女のカービン銃の先端が下手人の口の中に突き込まれた。

「もももももー、もももー。もももももももー」

「……？」

世界一不細工になった男を不憫に思ったのか、護衛の少女がカービン銃を口の中から引っこ抜いた。

同時にクウェンサーは胸を張り、腹に力を込めて叫んだ。

「もうおっぱいなら誰のでも良いや!!」

「(びくっ!!!?)」

「そして周囲が硬直したその一瞬、刹那の隙を衝いてストライカー・クウェンサー＝バーボタージュは流星のごとくディフェンス陣の間を単身すり抜けていくゥゥゥ!!!!」

ズサァ!!　と凄まじい音を立ててクウェンサーは一陣の風と化す。

……ここで悲劇は二つあった。

ネコダマシ的な一瞬のパニック下とはいえ、護衛達は極限まで磨かれた殺しのマシンとして完成されていた事。横をすり抜けようとする『学生』なんぞ見逃すはずもなく、パニック下だからこそ無意識の精密さで、その足を払ったのだ。

そしてお姫様はこうしている最中も居眠りしながらあちこち徘徊しており、周辺の状況を気にする事なく足を動かしていた。当然、こちらに向かって倒れ込んでくるクウェンサーの事も把握できてはいない。

そして負のミラクルが起こった。

ずむっ!!　と。

直後に、クウェンサーの股間にお姫様の膝が勢い良くめり込んだ。

こいつをご褒美と呼べるほど、彼の精神はまだ完成していなかった。

5

偽装巡洋艦『スカーレットプリンセス号』にはお姫様やフローレイティアなど、多くの兵士達が乗船していた。

そんな中の一人、整備兵の婆さんはうっすらと息を吐く。

彼女は『島国』からの亡命者なのだ。

「pro_be_12……『一二支計画』？」

フローレイティアからの質問に、婆さんはうんざりしたように頷いた。

「連中の新型、『メガロダイバー』が潜航を得意とするオブジェクトと聞いてな。ちょいと思い出した事がある」

「『一二支』は、世界最初のオブジェクト……核の時代を駆逐した、『島国』の始祖たる一二機……という話だったよね」

フローレイティアの口調がどこか柔らかいのは、階級など関係なしに、この整備兵の婆さんには敵わないと悟っているからだろう。

何しろ、オブジェクトが戦場を席巻するきっかけとなった、その最初期の時代をじかに眺め

てきた最古参なのだから。経験、実績、技術、度量、全てにおいて桁が違うのだ。

「結局、時代の流れにはついていけなかったがね。今じゃ一機残らず海の底に沈んでおる。……じゃが一方で、あれが今でも『島国』の思想的象徴として機能しておるのも事実じゃろう」

「……例の潜航オブジェクトは、そいつにちょっかいを出すため、と？」

「可能性として否定できん。あれだけの巨重を釣り上げるには規格外の力がいる。それを為すのもまたオブジェクトだけじゃろう」

始祖たる一二機、という文言は『島国』と無縁であるフローレイティアにさえ、多少の魅力を感じさせる。オブジェクトの恩恵を受ける全ての人間にとって他人事ではないのだろう。

まして、当事国の『島国』への影響力はいかほどか。

少し考え、フローレイティアは呟く。

「ま、そこで終わってくれれば御の字ではあるんだが」

「所詮は『資本企業』の一角……。『正統王国』には関係ないという事じゃな」

当然と言えば当然の答えではある。

個人的な趣味嗜好の領域で『島国』の文化にかぶれているからといって、彼らの手で殺してほしいと思えるほどフローレイティアは心酔していない。

「気になる事がもう一つ」

フローレイティアは短く付け足した。

「マリアージュ＝ナイトキャップ。彼女が起こした偉業についてだ」

「……世界各国の裏金の情報を丸ごと収めたタックスヘイヴン銀行のメインサーバーを丸ごと格納したオブジェクト、『プライベートバンク』か。そういえば、あれも『資本企業』製で、今では『海の底』じゃったな」

「引きずり上げるとすれば、こいつの方がヤバいでしょ？　白防ＰＭＣなんてオブジェクト以外はほとんど死んでるけど、メインサーバーの情報を駆使されたら、世界中の有力者が薄ら笑いで彼らを擁護する事になりかねない。それはちょーっと避けたい事態なんだよね」

とはいえ、あくまで仮説は仮説だ。

海の底に沈んだオブジェクトを釣り上げる、というのも、正解かどうかは分からない。

白防ＰＭＣが黒幕なのか、彼らをサポートする巨大なバックグラウンドが他にあるのか。それについても不明な点は多い。

現状、確認が取れている事と言えば一つ。

「捨て置くには不気味過ぎる相手なのよね」

「だから『とりあえず』沈めておくって時点で、儂らも正義の味方からは離れたなあ」

6

「おい、全体的にどうなってんのよ？」
クウェンサーは呻くように呟いた。
真っ黒な海の上を走る軍用のゴムボートには一〇人前後の男達がぎゅうぎゅうに詰め込まれていた。高い静穏性をキープするため、エンジンではなく巨大なモーターの力を借りて大海原を突き進んでいるのは一艘だけではない。複数のゴムボートが波間を切り裂いている。
「マリアージュはどこ行ったの？　さっきのメイドさん達は!?　いつの間にやら、まーたむさ苦しくなってるし!!　ちょっと気を抜くとすぐに男祭りだよ!!」
ヘイヴィアがうんざりしたように答えた。
「あいつらみんな区分は民間人だろ。戦場にゃあ連れて行けねえよ」
「ゲストでも良いよ！　女性兵士は!?」
「隣のボートにぎゅうぎゅう詰めだ!!　俺もあっちに乗ってりゃ良かったよ!!」
「ららら～、俺だって民間人の学生なんですけどー、一体全体どうなってやがるのですかー、ららららんら～♪」
「「うるせえな!!　テメェが妙な事に気づかなけりゃ出動もなかったんだ!!」」
四方八方、全方位から均等に拳をめり込ませていただくという、長い人生の中でも大変レアな経験を積むクウェンサー。

まだ敵とかち合ってもいないのにマジの鼻血が出てきた。人生は厳しい。

鼻に応急の詰め物をしていくクウェンサーを見ながら、ヘイヴィアは吐き捨てるように言った。

「……けどま、あんな野蛮なメイドどもがいるんじゃ、艦隊の方でも気は休まらねえか。いっそ戦場に出ちまった方が楽かもしれねえな」

「何でお前達はそんなに仲悪いの？　メイドさんと一つ屋根の下なんて『平民』からすれば羨ましいの一言なんだけど」

「知るかよ。俺が名門ウィンチェル家の嫡男で、敵対している名門のバンダービルト家の人間と仲良くしてんのが気に喰わねえんじゃねえのか？」

無意味にライフルの整備をしながらヘイヴィアは呟いた。

「くっだらねえぜ、何が『貴族』のプライドだ。誰が始めたのかも分からねえクソ因習のために、あと何百年流血の歴史を重ねるつもりだ。家訓だの遺恨だの、そんなもん俺の代で全部ぶっ壊してやるよ。それくらいの覚悟がなけりゃ、わざわざこんなくだらねえ戦争なんかに参加するかってんだ」

ひっそりと近づくため、彼らはライトを使っていない。ゴムボートの後ろにある、舵とモーターを組み合わせた機材を摑んでいる兵士だけが、赤外線ゴーグルを装着していた。クウェンサー達からは、漆黒の海と藍色の夜空を切り分ける水平線を侵している島の、山のシルエット

がわずかに見えるだけだ。
その兵士が無線機に向かって指示を出した。
「全艘停止、一時停止。サーチライトだ、気をつけろ」
真っ暗闇の中でヘイヴィアは眉をひそめて、
「あん？　サーチライト？？？」
「赤外線だ。スコープで覗きゃ嫌でも分かるよ、ヤツらアクティブ式のセンサーで海を走査してる」
兵士の言葉に、クウェンサーは肩をすくめた。
さぞかし恐ろしいように聞こえるが、裏を返せば『見えないサーチライト』の円に入らなければ良いだけの話だ。わざわざ逃げ道を教えてくれるようなものである。
ヘイヴィアは頭を掻いて、
「連中ふざけてんのか」
「分かりやすい罠の奥に、見えない罠が張ってあるかもね。何にしてもひっそり行こうよ」
幸い、問題の島は『錆だらけでボロボロになったタンカーが最期に辿り着く、解体用のスクラップ工場』だ。島の周りには、最後の力を振り絞ったものの結局は島まで辿り着けずに座礁してしまった錆の塊なんかもたくさん放置されていた。
クウェンサー、ヘイヴィア達を乗せたゴムボートは、そういった遮蔽物を利用して赤外線サ

ーチライトから逃れつつ、じっとりと確実に接近していく。
「島の構造は『黄身が二つの目玉焼き』だ」
ヘイヴィアがそんな事を言った。
「一時間もあればぐるっと一周できるくらいの小さな島に、山が二つ。タンカー解体用の港湾ドックは島の北側に集中している。俺らは手つかずの南側から潜入し、森や山を越えてドックへ向かう」
「さっきの赤外線サーチライトは、黄身のてっぺんから照射しているって事？」
「センサーは潰すなよ。『異状ナシ』で向こうが安心してりゃあ、その分こっちは白山に動けるんだ」
吐き捨てるように言った後、ヘイヴィアは一転して弱気な呻きを発する。
「……それよりおっかねえのはオブジェクトだぜ、『メガロダイバー』。あっちのセンサーがフル稼働になってたら一発で見つかっちまうぞ。例の監獄じゃ心音を探って個人の識別までしていたそうじゃねえか。息を潜めたってどうにもならねえって訳だ」
「それはないよ」
クウェンサーは簡単な調子で答えた。
怪訝な顔をするヘイヴィアに、学生はさらにこう続けた。
「これは技術じゃなくて心理の問題だ。ヘイヴィア、俺達だって深海一五〇〇メートルなんて

馬鹿みたいな海の底で作業していただろう？　あそこから解放された時、船の上でどう思った？」

「あん？　そりゃまあ、窮屈な水圧地獄からオサラバできたんだし、今すぐキングサイズのベッドに飛び込んで大の字で二日くらい眠っていてえって思ったけどよ」

「『メガロダイバー』の操縦士エリートだって同じって事。深海、海上と二回もうちのお姫様を退けた怪物だけど、向こうだって順調だった訳じゃない。溶岩を浴びせられた時は慌てて緊急浮上していったし、天才肌のマリアージュ＝ナイトキャップの暗殺だって失敗した。おまけにカレンさん達の武装客船は補給や整備の部隊を半分以上吹っ飛ばしている」

「確かに、言われてみりゃ向こうも座席に座って余裕で試合観戦していられるような状況じゃなかったみてえだな。向こうのインパクトがデカすぎて実感は全くねえけど」

「……メンテが終われば再び海に駆り出されるんだ。その前に、肺いっぱいに外の空気を吸っておきたいって考えるのは人間の心理ってヤツじゃないのか？」

「かもしれねえけどよ。軍ってのはシステマチックに人を殺す運営方式全般を指して言う言葉だぜ。そんな個人の感情や都合なんて割り込むもんかよ」

「きちんとした軍ならね。ただ、あいつらは『あめのだりん』を沈められ、そこからほうほうのていで逃げてきた残党の寄り合い所帯だろ？　もう組織としての体裁は保っていないさ。普通の軍だって今はオブジェクト頼みで、操縦士エリートは何かと優遇される。そしてその軍さ

え保てないなら、あの島の中でエリートは女王様待遇になっているんじゃないか。何しろ、見捨てられたらそこでおしまいなんだからな」

「……だとすると、『メガロダイバー』の中は空っぽだってのかよ？」

「気分転換が五分なのか一時間なのかは操縦士エリートによって左右されるだろうけど、今がチャンスって事。運はこっちに向いてるよ」

一番島に近いタンカーの残骸は、なんと島から五〇メートルの位置で横倒しになっていた。赤外線サーチライトに見つからないよう、クウェンサー達はゴムボートをタンカーの陰にくくりつけ、そこから先は自力で泳いでいく事になった。

「ひい、ひい……。くそ、波の大きい海で、しかも服着て重たい装備まで……。こ、こんなの泳いでいるのか溺れているのか分からない……」

「体力保たねえなら素っ裸になって背泳ぎでもしてろよ。ただし装備だけは捨てるんじゃねえぞ」

何とかして島の南側へと上陸する。

島民らしい島民は存在せず、タンカー解体用の港湾ドックは北側に集中、という話は本当だったのだろう。丸い石が敷き詰められた海岸線のすぐ向こうに、南国の湿った森が広がっていた。目玉焼きの黄身、と呼ばれていた山の方は、せいぜい二〇〇メートルあるかないかといったところだ。

ヘイヴィアはアサルトライフルを両手で摑み直して、
「行くぞ。目的は『メガロダイバー』の機体調査、および可能なら固まって張り付いた溶岩の除去作業の妨害。エリートが本当に機外で涼んでいるとしたら、これ以上の好機はねえぜ」
クウェンサー達上陸班は隊を三つに分け、島を時計回り、反時計回り、中央の山岳地帯を突破、とバラバラのルートで進行する事になった。
誰がどのルートを通るかはジャンケンで決め、クウェンサーやヘイヴィアは中央の山を突破する羽目になった。
ジャンケンを担当したクウェンサーは再び身内からボコボコに蹴られる。
「こっから先、無線連絡はなしだ。各個の判断でやれ。帰還は〇三三〇時、あるいはこの中の間抜けが敵にバレて全速力で逃げ帰らなくちゃならなくなった時だ。遅れたヤツは待たねえぞ、自分で何とかしろ。出発だ！」
ヘイヴィアの号令で、三つに分かれた部隊はそれぞれの道を歩いていく。
クウェンサー達は真正面の森……というかジャングルの中を突っ切るコースだ。
「……何事も考えようだぜ。こうなったらポジティブに切り替えるしかねえ。深い森の中を進めば、それだけ向こうに見つかるリスクも少なくなるんだからな」
「そいつは結構だけど、殴る蹴るをやる前に切り替えてくれないか……」
しかし、実際に低い山を覆うように広がるジャングルに入ってみると、いきなり予想外の出

来事に遭遇した。

「何だ……？　いきなり森が途切れているぞ」

自然にこうなった、という感じではない。

一面の木々は真横に薙ぎ倒されていて、しかも真っ黒に変色していた。燃え尽きているのだあちこちでは今もまだチラチラと小さな火が残っている場所もある。

ヘイヴィアが心の底からうんざりしたように言う。

「うちの『サマーバケーション号』だ……。解体用の港湾ドックは北側だろ。こんなトコまでバカスカ艦砲撃ち込みやがって、数撃ちゃ当たるにしたってやり過ぎだ」

「まあ、砲術って命中率が二〇％もあれば超優秀らしいしね」

改めて調べてみれば、ジャングルのあっちこっちに直径二〇から四〇メートルものクレーターがボコボコ開いていた。クウェンサー達はその縁をなぞるように進んでいく

「集音マイクだ。薙ぎ倒されてて使い物にならないみたいだけど」

「あいつらも多少は役に立ったって事なのかよ」

山を越えると言っても、山頂には近づかない。そちらには大型の赤外線サーチライトが敷設されている。いくらか警備の人間も配置されている事だろう。無闇に戦って銃声を鳴り響かせる必要はない。

山頂部分を迂回するように、比較的低い位置の稜線をなぞるように進んでいき、クウェン

サー達は高台から北側・解体用港湾ドックを望める位置を陣取った。
「……見えたぜ。あれが問題の現場だ」
「やっぱりオブジェクトが一番目立つみたいだね。でもって、センサー系がフル稼働だったら俺達もとっくに見つかっていると思う」
「となると、操縦士エリートは外でお休み中か……」
双眼鏡で確認するまでもない。
ボロボロに崩れたコンクリート製の堤防に寄り添うように、全長五〇メートル強もの巨大な塊が漆黒の海の上で浮かんでいた。ワイヤーや竹を編んで作った即席の足場に囲まれている。あちこちで青白い閃光が迸っているのは、バーナーのようなものを使って張り付いた溶岩を剝がしているからだろうか。
ドックにはプレハブやバラックなどの簡素な小屋がいくつかあったようだが、半分以上は薙ぎ倒されていた。破壊された堤防同様に、やはりカレン＝I＝ウィンチェルらが『サマーバケーション号』から艦砲射撃を行ったおかげだろう。
スコープを使って港湾ドックの観察を始めたヘイヴィアが、呻くように言った。
「うようよいやがる……。警備にあれだけ人を割けるって事は、割と余力もあるみたいじゃねえか。食い物や弾薬に困っていますって悲壮感も漂ってねえし……」
「それって、誰かが支援してるって事？」

「さあな。しっかしまあ、『島国』の大戦力だっつーのに白人だの黒人だの国際色豊かだね。黒髪ストレートロングのナデシコちゃんはどこ行きやがった？」

「自防ＰＭＣそのものは、外国人傭兵の寄せ集めって話だしね」

クウェンサーも双眼鏡を使って本格的に観察しようとしたが、その手が止まった。

港湾ドックにわだかまる、巨大な闇に目を奪われる。

「ん？　オブジェクトの他にもいくつか船があるな。あれって潜水艦か？」

「補給だの整備だのの人間用だろ。『島国』が太平洋の海底資源で一儲けする前は、海の補給線を保つために色々研究していたって話じゃねえか。『幽霊船団計画』とか何とか言ってさ。そいつの名残りじゃねえの？」

「またカッコイイ名前の計画だね……。苦笑しそう」

「そりゃ何億ユーロってぶち込んでる訳だしな。わざわざ自虐的に惨めな名前をつける事もねえだろ」

ヘイヴィアはあっさりした口調で、

「『信心組織』辺りが道楽で進めている潜水母艦計画ってのは、確かこいつの影響を受けていたはずだぜ。『島国』のアイデアはしょっちゅう外に洩れてやがるからな」

「……ヘイヴィア。確認取りたいんだけど、その『幽霊船団計画』って、『あめのだりん』を防衛していた自防ＰＭＣには支給されていなかったよな？」

「そりゃそうだ。自前の海底資源でウハウハになった今じゃ、長距離海洋輸送手段なんてもう無用の長物だろうしな」

「誰かが退役した輸送潜水艦を引っ張り出してきた……？　敵は本当に『あめのだりん』から逃げた自防ＰＭＣの残党だけなのか？」

気になる事は色々あるが、時間は限られている。今はオブジェクトが最優先だ。その他については『メガロダイバー』を撃沈し、安全を確保した後にゆっくり考えれば良い。

欲しい情報はいくつかある。

・海水の粘度を増加した上で、巨大な水柱を上げて敵の砲撃を受け流すタタミガエシ……『水遁の衣』。白らの手で海水の粘度を上げるのは結構だが、そうすると海水を利用した推進装置のウォータージェットや動力炉の冷却、電気分解による酸素供給などに支障を及ぼしそうなものだ。これを両立させる仕組みは？

・深海で遭遇した際、『メガロダイバー』は機体上部にある吸水口を使っていたはずだ。にも拘らず、海上へ浮上した後も『メガロダイバー』は海水を使って諸々のシステムを回していた。となると、機体下部に別の吸水口がある？　また、切り替えの条件は？

・防御システム『タタミガエシ』の圧倒的な精度について。普通に音を頼りに展開するだけでは超高速のレーザービームなどには追い着かないはずだが、あれだけの爆音の渦の中、一体どうやって正確な状況把握をしているのか？

これらの『見えない仕組み』は、オブジェクトの運用に直接関わる。解き明かして妨害する事ができれば、文字通り『息の根』の掌握だって現実の話になってくる。

「どこから攻めんだよ？」

「他のコースを進んでいる部隊の事もあるし、派手な動きは控えよう。傍受用のアンテナを持ってきている。まずはその辺を飛び交っている無線ＬＡＮの電波を片っ端から拾っちゃおう」

「軍の暗号通信って、拾ってからが大変なんじゃねえの？」

「これも操縦士エリートの話と一緒。もう軍の体裁を保てていないから、おそらく民生品をかき集めて無理矢理システムを埋め合わせようとしている。今なら傍受も解析もそう難しくないんじゃないかな」

ごちゃごちゃ言いながらクウェンサーが設置しているのは、カメラに使うような三脚の上に、金属製の直径一〇センチ、長さ四〇センチほどの筒を載せたものだった。ロケット砲のような兵器ではない。パラボラ同様、微弱な電波を確実に拾うための受信専用アンテナだ。

ヘイヴィアは胡散臭そうな目で、

「出撃前に即興で組んだ手作りだって話じゃん。大丈夫なのかよ学生？」
「敵陣ど真ん中に忍び足で潜り込むよりはずっと安全だよ。まあ任せなって、無線ＬＡＮなんて輪切りにしたペットボトルにアルミホイルを巻いただけで傍受できるんだ。集音マイクよりずっと仕組みは簡単だよ」
「何でそんな裏ワザ身に着けてんの？」
「『安全国』の学校じゃこういうのが流行っていたんだ。ヤンデレ女が勝手に彼氏と思い込んでいる誰かさんのメール盗み見たりってね。ハッキングと違って専門知識はいらないからさ、Wi-Fiだの Blue tooth だのはしょっちゅう狙われてたよ」
「ったく、理工系ってヤツは……」
「あそこも悪い場所じゃなかったけどね。理系女子って耳にすると何だか普通の女の子よりレアっぽい感じがしたし。学校みんながそうなんだよ、先輩も後輩も見渡す限り全員」
「そんなにいるなら紹介しなさいよ！　メガネに白衣のお姉さん軍団とか夢のようじゃない!!」
「……良いけど。あの子達、脇が甘い代わりに思い込みも激しいよ？　ちょっと遊ぼうなんて軽く考えると痛い目に遭う。包丁なんて可愛いもんじゃないんだ。手作りのレールガンとかサーモバリック爆弾とかに思いを込めて大事件を起こしちゃう、何しろ『理』で『工』だから」
円筒の底と携帯端末を細いケーブルで繋いで、クウェンサーは三脚の首を慎重に回していく。

円筒の開口部を、数百メートル先にある標的のパソコンに突き付けるようなイメージだ。すぐにピコピコと新着メールが受信ボックスを埋めていく。港湾ドックの中で垂れ流しにされている、各種の連絡や報告などだ。

ヘイヴィアはさらに嫌そうな顔になった。

「……おっかねえ。今度、ケータイにフリーの暗号アプリ入れようかな」

「そんなの絶対バックドアが仕込んであるよ。それより、ほら、出てきた。いくつかそのまま読めるメールがあるぞ」

クウェンサーはメールを開いていくが、当然ながら最初から本命の大当たりを引く事はない。警備の定時連絡や整備兵の交代時間について、さらにはくだらないジョークや悪戯まで、全然関係ないメールがかなり飛び交っている。

「何だこりゃ？　世界の天気予報に、海流の流れに……『島国』の食料自給率までベタベタ添付してやがる。こんなのが『メガロダイバー』とどう関係してるってんだよ」

「……単純に、この後の海戦を想定して海図や気象図をダウンロードしているって訳でもなさそうだよな。だったらニューカレドニア方面だけで十分だ。地球の裏側まで把握する必要なんかない」

「『島国』も『資本企業』の一部なんだしよ。こんな修羅場でも穀物の先物取引とかやってんじゃねえだろうな」

ヘイヴィアは拡散臭いものでも見るような目を携帯端末に向けながら、

「こんなので大丈夫なのかよ？」

「統制が取れていないって事は、それだけ向こうも疲弊しているって事さ。やたらジョークが多いのって、気を紛らわせるための心理的防御ってヤツだろ。それより見ろよ、ここだ」

クウェンサーが注目したのは、メールそのものの内容ではなく、アドレスの方だった。

怪訝な顔をするヘイヴィアに、学生は付け足すように言う。

「……いろんな部門の連絡が飛び交っているけど、そいつらのほとんどが一箇所のアドレスに集まってる。指示を仰いでいるんだ。この……何だ？　『一霊四魂』とかいうヤツが中心にいる」

「イチレイ……？　何だそりゃ？」

「知らないよ、『島国』特有の言葉だろ。仏教とか神道とか理解していないと分かんないかもね」

ともあれ、その『一霊四魂』とかいう存在が、今回の騒ぎの中心にいるのは間違いなさそうだ。

操り人形、働きアリの自防ＰＭＣは基本的にメールで指示を仰いでいるようだが、これは島内限定の閉じた無線ネットワークだ。現場で指揮を執っている『一霊四魂』がいると考えるべきだろう。

ヘイヴィアはアサルトライフルについているスコープで港湾ドックのあちこちを観察しなが

ら、

「その『一霊四魂』とかいうのが中心人物なんだろ？」

「多分。外国人傭兵だらけの中でわざわざムズカシイ漢字を使っているところを見ると、変なプライドありそうだよね。『島国』の奥にいる黒幕って事でオッケーなんじゃない？『幽霊船団計画』の占い輸送用潜水艦が供与されているのとかも辻褄が合いそうな気がするよ」

「そいつら、どこにいるかメールにゃ書いてねえのか。『島国』の人間って事は、やっぱ黒い髪に背の低いヤツなのかね」

「とも限らないよ。『島国』も食文化が変わったおかげで巨大な子供がドスドス通学路を歩いているって話だし、髪はカラフルに染めて、美白ブームだのガングロだので肌の色もコロコロ変わるらしいじゃん。何より、今は人より情報だ。『一霊四魂』が建造した『メガロダイバー』の弱点を探さないと」

「だから、その『一霊四魂』っての捕まえて吐かせた方が早くね？」

「それじゃ目立ち過ぎ」

無駄話をしながら、さらに二人は携帯端末に表示されていく新着メールの山へ目を通す。

いくつかオブジェクトについてのメールも出てきたが、やはり機密に抵触するような内容はない。

代わりに、整備関連でまずい情報が出てきた。

「……うっわ。ヤバいんじゃないか、これ」
「何だよ」
「『メガロダイバー』の表面に張り付いている溶岩だけどさ、思ったよりもずっと早く除去作業が終わりそうだ。大体、あと二〇分くらい」
「こっちはまだ調査を始めたばっかりだぜ!?　そんなに早くハルマゲドンを繰り上げられちまったら、お姫様に勝ち目はねえぞ。俺らだって全滅だ!!」
「そうだ。だから、ちょっと何とかして作業を妨害しなくちゃならない」
言いながら、クウェンサーは背中のバックパックへ手を伸ばした。
プラスチック爆弾の『ハンドアックス』と電気信管を取り出した相棒を見て、ヘイヴィアは瞼を痙攣させた。
「ちょっと待て。何するつもりだよ？」
「冷えた溶岩を取り除くのに使っているのは、アセチレンを使った高温バーナーだ。オブジェクトの足元、崩れた堤防の辺りに馬鹿デカいタンクがある。あれを事故に見せかけて吹っ飛ばそう」
「どんだけ目立つと思ってんだよ!?　俺らの仕事は情報収集だ、皆殺しじゃねえんだぞ！　向こうにゃオブジェクトまでいるんだ、そんな事やったら返り討ちでグチャグチャにされちまう!!」

「カレンさん達があっちこっち艦砲射撃してくれたろ？　だから、そこらじゅうにひびが入ったり、へこんだりしている。ガスタンクが爆発したって、悪意が込められているとは思わないさ」

そして、アセチレンのバーナーさえ使えなくなれば、冷えた溶岩をオブジェクトから剝がす作業を止められる。情報収集を行う時間的猶予を獲得し、『メガロダイバー』の弱点発見へと繋げられるチャンスが生まれる。

クウェンサーは自分が持っていた携帯端末を草の地面に置きながら、

「ヘイヴィアはアンテナと端末を押さえていてくれ」

「マジかよ……。マジで行くのか!?　『一霊四魂』だの白防ＰＭＣだのの残党っつっても数十人じゃ済まねえぜ。異変を気づかれりゃ、どこかで涼んでいる操縦士エリートはすぐにでも『メガロダイバー』へ飛び乗っちまう。チラリとでも見られたら完璧にアウトなんだ。それでも行くってのか!?」

「手をこまねいていたら『メガロダイバー』が万全の態勢で海に出てしまう。潜航も海上戦闘も自由に切り替えられるようになったら、お姫様はやられて艦隊も沈められて、俺達は帰る場所を失うぞ。……大丈夫、ガスタンクがあるのは堤防だ。真っ黒な海から頭だけ出して進んでいけば何とかなるさ。建物の壁に張り付いてニンジャごっこをする訳じゃない」

「どうせ何やったって映画化される訳じゃねえんだ、テメェがそこまで体を張る必要はねえっ

て！　あっ、馬鹿、待てっつってんのに!!」

未練がましく引き止めようとするヘイヴィアを放っておいて、クウェンサーは爆弾片手に眼下の港湾ドックへとゆっくり近づいていく。

7

そして残されたヘイヴィアは一人やきもきしていた。

傍らに携帯端末と手製の円筒アンテナを置いたまま、中距離狙撃にも使えるアサルトライフルに装着されたセンサー満載のスコープを使って、先行したクウェンサーの足取りを目で追い駆けていく。

「ああっ、くそ、見えてる、見えてる見えてるあの馬鹿ハッキリ見えてやがるよ!!　そもそも黒い海にゃ金髪の頭は目立ち過ぎるんだ。懐中電灯でサッと照らされたら間違いなくぶっ殺されちまうぞ……」

数百メートル先のクウェンサーは海へと伸びた堤防へ手を付けるようにし、頭だけを出して堤防をなぞるように突端へとゆっくり近づいていっているようだった。

堤防そのものには人気はないようだったが、港湾の方にも、オブジェクトを囲む足場の方にもたくさんの人が行き交っている。彼らが何かの気紛れで海へ光を投げかければ、それでもう

おしまいなのだ。

アセチレンのタンクまでは、およそ三〇メートルといったところか。

（……何とかできねえのか、くそ。とはいえ、今から後を追い駆けたって何にもならねえし）

心の中で毒づくヘイヴィアだが、してやれる事はない。

諦めて、地面に置きっ放しにされているクウェンサーの携帯端末の方へ目をやった。こうしている今も、ひっきりなしに新着メールを受信し続けていた。未開封のマークが画面を埋め尽くしていて、これを一つ一つ読んでいくだけでも疲れそうだ。

できる範囲から仕事をしよう、と頭を切り替え、ヘイヴィアはいくつかのメールを開いていった。

「っ!!」

そこで体が硬直する。

思わずアサルトライフルを摑み直し、携帯端末も円筒アンテナも放っておいて、目の前の斜面を滑るように下っていく。いくつかあるバラック小屋の内の一つを、窓から中を覗ける位置まで移動していく。

メールにはこうあった。

（B棟の簡易宿泊施設で操縦士エリートが休憩している？　この情報がマジなら一気にケリをつけられる！　そいつ一人を狙撃しちまえば『メガロダイバー』は誰にも動かせなくなるん

だ!!）

敵側に察知されるのを防ぐため、味方間での無線通信を自ら封じたのが裏目に出た。この情報を共有できたら、複数の方角から確実にエリートを狙えたかもしれなかったのに。

B棟の位置はすぐに分かった。

窓から明かりの洩れているバラックは一つしかなかったからだ。

（……やれる事をやるしかねえか）

ヘイヴィアは斜面に寝そべったまま、アサルトライフルのスコープ越しにB棟の窓を覗き込む。

クウェンサーは黙っていてもアセチレンのタンクを爆破するだろう。

そのタイミングを狙う。

爆発が起こる瞬間、人間は反射的に体を丸めようとするだろう。落雷や銃声の時と同じ反応だ。標的の位置が大きくブレる危険があるが、現状、これが他の場所で活動している自軍の兵士達を危険にさらさずに狙撃を完遂させる最善の方法だ。

（その辺は、センサーをフルに使って予測回避位置までカバーするしかねえな。幸い、壁はボロのバラックだ。エリートが窓から壁へ隠れたって、ライフル弾ならまとめて抜ける）

ヘイヴィアは適当に考えながら、アサルトライフルの銃口に、銃剣のように取り付けられていたセンサーを取り外した。その辺に落ちていた木の棒を地面に突き刺し、サバイバルキット

の釣り針を使って縛り付ける。スナイパーとペアで活動するスポッターがいないので、機械に代わりを務めさせようとしているのだ。

（二階建てだが、ヤツはどこにいるんだ……？　あの建物のどこかにいるのは間違いねえんだ）

せわしなくスコープ越しにB棟の窓から窓へと観察していくヘイヴィアだったが、そこで動きが止まった。

二階部分の、明かりが洩れた窓。

そこに、女性的なシルエットが浮かんだのだ。

（エリート!!）

瞬間的に引き金へ人差し指がかかるが、サイレンサーを装着していない事に遅れて気づく。自軍がどこに潜んで情報収集をしているか分からない以上、安易な発砲は控えるべきだ。

（アセチレンの爆発に紛れて撃てば、銃声は誤魔化せる……。クウェンサー、早くしろよ！　ヤツが窓の外から離れちまう!!）

『メガロダイバー』のエリートは、長身の東洋人のようだった。艶のある長い黒髪をたなびかせる大人の女性ではあるのだが、豊満というよりは鋭い印象を与えるシルエットだ。全身をくまなく覆う特殊スーツのデザインは全体的に白で、特徴的なラインだけが赤く浮き彫りにされている。ひょっとしたら、『島国』がまだ国名を失う前にあった国旗を意識しているのかもし

れない。

（……東洋人の女。『島国』出身か？　だとしたら、もしかして、あれが『一霊四魂』……？）

恐ろしいほどの美人だが、あいつ一人を撃てば全てが終わる。

『メガロダイバー』の突破口なんてぐじぐじ考える必要もない。敵側に傍受されるのも気にせず、フローレイティアの元へ無線でエリート射殺の報を飛ばせば、後はお姫様の『ベイビーマグナム』が全てを吹き飛ばしてくれるだろう。

今すぐ撃ちたい。

撃って、極限の緊張から解放されたい。

人間というより動物としての本能を、ヘイヴィアは全力の理性で抑え込む。

それでは味方を危険にさらす。目の前に大きなチャンスがぶら下がっている時こそ、衝動的な行動は控えなくてはならないのだ。

そんな風に考え、ひたすらに待ち続けるヘイヴィアは、そこでスコープを覗く目をわずかに細めた。

じじぃぃぃ――――――――――……っと。

窓際に立っていた東洋人のエリートが、いきなり特殊スーツのファスナーを下ろしたのだ。

「ぬうう……!!」

ヘイヴィアが格闘家のジジィみたいな唸りを発した。

よくよく観察してみれば、部屋の中には脱衣籠や洗濯機のようなものが置いてあった。

そうこうしている内に、長身で黒髪のエリートは完全に産まれたまんまになってしまった。

まさかプロの訓練を積んだ兵隊からド級の覗きをされているとは思ってもいないだろう、そのまま隣のシャワールームへと入っていく。

ちなみにそちらも窓のカーテンはフルオープンだった。

『島国』の温泉郷にはＹＵＫＥＭＵＲＩシーンなる特異な文化がある、という噂はマジらしかった。

ここからでは聞こえないが、何やら鼻歌でも歌っているようにも見える。

「も、もうちょっと待機していようかな……。だって殺すのはいつでもできるんだし！　迂闊に発砲すると味方を危険にさらすんだし!!」

二〇秒前とはやる気が五〇〇％くらい違う、極限まで血走った目でヘイヴィアは呟く。

……しかし冷静に考えると、今ここで視神経を焼き切るような勢いでエリートの裸身を脳内に保存したところで、じきにスコープ越しに頭を吹っ飛ばすのは確実なのだ。後で思い出されるのはグシャグシャの頭部だけだろう。狙撃手はその瞬間をドアップで眺める羽目になる。

だんだん辛くなってきた。

ヘイヴィアは寝そべったまま、ぐぐうーっと頭が垂れそうになるのを涙目で押さえる。

「あ――――……戦場で鬱ってきちゃったあ……」

スナイパーとスポッターが二人一組で行動するのは、単純に技術的な問題の他、狙撃時の罪悪感の軽減など心理効果もあるらしい。やかましい学生がいなくなったのが裏目に出たようだ。

思わずスコープから目を離してしまったヘイヴィアだったが、自分の仕事を思い出し、もう一度覗き込もうとする。

だが、その失態は功を奏した。

東の間、スコープから目を離した事によって、気づけた事があったのだ。

（……何だ、ありゃ……？）

ヘイヴィアはB棟二階でシャワーを浴びているエリートから、少し離れた場所へとスコープつきのアサルトライフルをずらした。精査、観察する。

白地に赤の特殊スーツを着た、東洋人の女性が表を歩いていた。串に刺さったお団子を頬張っているのがここからでも見える。

「エリートが……二人？？？」

さらに解体用の港湾ドックのあちこちをスコープで覗いていく。普通の兵士の軍服とは一目で違うと分かる、特殊スーツの女性が何人もいた。ざっと数えても五人以上いる。おそらくバラックの中などを調べればもっと出てくるだろう。

一機のオブジェクトには、一人の操縦士エリート。
それが業界の基本だった。
エリートのためにオブジェクトを組むのか、オブジェクトのためにエリートを教育するのか。
考え方はそれぞれだが、『最強の兵器を最適な挙動で制御する』のに、汎用性はいらないというのが今の常識だ。
一つのオブジェクトを、複数のエリートで代わる代わる操縦するなんて話は聞いた試しがない。
だが、だとすれば、目の前に広がっているこの景色は何だ？
そこにはどんな意味が込められている？
（……得体のしれねえ『島国』の事だ。一定の教育プログラムを受ければ、どんなエリートだって代用可能で、常に均一な戦果を挙げる汎用オブジェクトでも開発しやがったってのか……？）
確かに、それも驚異的なアイデアではある。
しかし、それ以上に『もっともな』意見を述べるとすれば、
（いいや、クウェンサーの話じゃ『メガロダイバー』の中は空っぽって話だ。だから大規模な音響センサー群に俺らも感知されねえで済んでいる。深海で活動していたエリートは窮屈な生活に飽きて外で涼んでいるって予想だが、エリートが何人もいるんだったら、別のエリート

を乗せて全周を警戒させりゃ良い）

だとすれば。

（単純に、影武者か!?『本物の一人』以外はオブジェクトを操縦する技術はねえって考えた方が自然だぜ、こいつは!!）

たった一人。

何かの間違いで殺害されてしまえば、『メガロダイバー』に頼りきりな『一霊四魂』だの自防ＰＭＣだのは壊滅してしまう。その意味でも、影武者を立てる意義は大きいだろう。敵に殺される事はもちろん、劣勢に追い詰められてパニックを起こした味方側の手で人質にされてしまうような事態を避けるためにも。

となると、一つの問題が生じる。

（どれが本物のエリートなんだ？）

すごく単純な問題が。

（Ｂ棟でシャワーを浴びているヤツが本物なのか、それとも、あっちこっちを歩いている内の誰か？　ちくしょう、味方まで欺くように設定されている場合、メールの指示だってあてにはできねえ。これじゃ全員殺すまで安心はできねえぞ!!）

ヘイヴィア達『正統王国』軍は複数の部隊に分かれて港湾ドックを監視しているはずだが、無線通信を使った密な連携を取れない以上、複数の箇所にいるエリートを同時に、確実に狙撃

するのは難しい。

何とかして本物と偽者を見極めなければ、せっかくのチャンスを棒に振る。

（……あるいは、ここは待ちの一手か？）

パニックに陥りかけた思考をヘイヴィアは意図的に鎮める。

（どっちみち、本物のエリートはいつか『メガロダイバー』に乗り込むんだ。その瞬間を狙って撃ち抜く方が確実かもしれねえな。くそっ!!　そうなるとアセチレンのタンクを爆破しに行ったクウェンサーがとことん邪魔になっちまう。妨害なんてしねえで、さっさと作業終わらせてエリートを乗せた方が手っ取り早いってのに!!）

そんな風に考えていたヘイヴィアだったが、事態はさらに予測の先を行った。

カッ!!　と、堤防の方で凄まじい閃光が迸った。

クウェンサーがアセチレンのタンクを『ハンドアックス』で吹き飛ばしたのだ。

夜の闇が、束の間、真っ白に吹き散らされる。

フラッシュグレネードをさらに何倍にも大きくしたような大爆発だった。

あちこちで蜂の巣をつついたような騒ぎになるが、そこで終わらなかった。

本番はここからだ。

ビキッ!!　という、ガラスに亀裂が走るような音が聞こえた。
見れば、B棟二階のシャワールームのガラスに傘の先端で突いたような、小さな穴が空いていた。そしてガラスの内側は真っ赤に染まっていた。
ヘイヴィアではない。
同じく、港湾ドックのどこかに潜んでいた自軍の誰かが狙撃したのだ。
(馬鹿野郎!!　本物も分かってねえのに早まりやがって!!)
状況は決定的に傾いた。
明かりのついた窓にべっとりと血がこびりついているのは、外から見ても容易に分かるはずだ。『タンクの爆発事故か?』くらいの騒ぎは、そのまま一気に『人為的な襲撃だ!』と跳ね上がってしまった。
無線のスイッチに手を掛け、ヘイヴィアは叫ぶ。
「撤収だ!　くそっ!!　今のが本物じゃなけりゃ、『メガロダイバー』がじきに動き出しちまうぞ!!」
もう隠れている事にもあまり意味はない。
ヘイヴィアは勢い良く起き上がると、とにかく全力で山の斜面を駆け上がって、木々の陰へと身を潜めようとする。
途中でクウェンサーの携帯端末と円筒アンテナを拾い上げ、背の高い下草へと身を躍らせる。

スコープで堤防の辺りを観察する。

クウェンサーはやはり、堤防に手をつきながら暗い海から頭だけを出し、ゆっくりと沿うように陸を目指そうとしているらしい。

だが、今はアセチレンの大爆発で暗闇は払拭されている。

予想外の警戒態勢で、敵が爆発したタンクだけでなく、全周をくまなく警戒し始めた事も完璧に災いしている。

あのままでは、いつか見つかってしまう。

（ちくしょうが!!　超絶天才美形金持ち運動神経抜群貴族のヘイヴィア様に死ぬほど感謝しやがれ！　正直者は馬鹿を見るなんて格言吹っ飛ばしてやる!!）

歯を食いしばり、腹に力を込めて覚悟を決めると、ヘイヴィアは突き出た堤防の根元からほど近い場所に立っている、兵士達の一団へスコープ越しに狙いをつける。

初撃で確実に一人を撃ち抜き、慌ててバラバラに散開しようとする兵士達へ何発かの追い打ちを仕掛けていく。

まともに当たるとは思っていなかった。

海岸近くにいる兵士達の注目を、こちらの山肌へ引きつけられればそれで良い。

間抜けなクウェンサーは助かる。

パパパン!!　パパパッパパンパンパンパン!!　と、立て続けに銃声が返ってきた。

距離は数百メートル。こちらの弾が届くという事は、向こうの弾も届くという事だ。

「くそっ!!　おっかねえ!!」

慌てて身をすくめるヘイヴィアのすぐ近くに着弾があった。こうなったらもう一刻も早く逃げ出すしかない。

ポン、ポン、とシャンパンのコルクを抜くような音も響く。

「馬鹿野郎!!　迫撃砲か!?」

大きく弧を描いた爆発物が、夜空の上から降ってきた。

凄まじい爆発音と共に周囲の地面が木々ごと抉れて宙を舞う。安全でクリーンな戦場なんてどこにもない。砂と泥にまみれてヘイヴィアは全力で山の中を駆け抜ける。

8

堤防に沿うような形で、顔だけを出して暗い海を移動していたクウェンサーも、蜂の巣をつついたような騒ぎには仰天していた。

（な、何だ!?　何で撃った……？　誰かがヘマでもしたのか!?）

……実は『正統王国』軍の誰かがエリート（候補）の美女を撃ったのはアセチレンのタンクの爆破と同時で、クウェンサーには聞こえていなかった。彼が訝しんでいるのは、山肌の方か

らの闇雲な銃撃……つまり、ヘイヴィアがクウェンサーを逃がすために命懸けの囮を買って出た方だった。

恐というのは、それを知るだけの頭がなければ感じる事もできないものだったりするのだ。

とにかく、相手側にバレた以上、速やかに島を離れるしかない。

急いで、それでいてバチャバチャ音を立てないよう慎重に進むクウェンサーの無線機に連絡が入ってきた。

『くそっ！　しくじった。どっかの馬鹿が狙撃なんかしたおかげで、何人ものエリート達が護衛に誘導されながら「メガロダイバー」を目指してやがるぞ。さっさと島から逃げねえと怪物が動き出しちまう!!』

「何人も？　狙撃!?　ちょっと全体的に状況が見えないよ！　ヘイヴィア何やってんの!?」

『俺が狙撃したんじゃねえよ馬鹿！　ああくそ、連中の動きに迷いがねえ……。こりゃやっぱシャワールームで死んだのは影武者の一人かよ、ちくしょう！』

ともあれ、騒ぎが起きてしまった以上、事故に見せかけてアセチレンのタンクを吹き飛ばしたのも全て無駄になった。

これ以上の情報収集も難しいだろう。

せいぜい、溶岩の塊の除去作業が終わらないまま出撃を強いられた『メガロダイバー』は、潜航機能を失ったまま、海上戦闘のみで再び『ベイビーマグナム』と激突しなくてはならない、

というくらいか。

（……その海上戦闘だって、『水遁の衣』のせいでほとんどダメージは通らないって話なんだけどな、くそっ！）

「ヘイヴィア！　俺の携帯端末の方はどうなってる？　あっちは自動的に無線ＬＡＮの電波を盗んでいたはずだ。そっちから何か出てきたか!?」

『何百通のメールが溜まってると思ってんだ!?　何とかユニットは回収したけどよ、精査すんのは状況が落ち着いてからだ。こっちも今、追撃砲で狙われてんだよ!!　危ねっ!?』

ノイズと共に通信が切れてしまった。

どうやら、状況を察するにヘイヴィア達は本来の情報収集の任務を離れて、手っ取り早く機外にいる操縦士エリートを狙撃しようとしたらしい。その結果がこれだ。急がば回れという言葉を贈ってやりたかった。

ともあれ、まずは海から陸に上がって、山に入り、島の反対側にあるランデブー地点を目指さなくてはならない。先に逃げたヘイヴィア達が見切りをつけてゴムボートで撤収してしまったら、クウェンサーはここで置いてきぼりにされてしまう。

（……あのへっぴり腰なら本気でやりかねん）

そんな事を思いながら、クウェンサーは堤防に沿って、暗い海をゆっくりと陸側へ移動しようとした。

一メートルも進む間もなく、真上からジャリッという音が響いた。
見上げると、堤防の上から誰かがこちらを覗き込んでいた。当然のようにカービン銃の照準越しだった。
「うっ!?」
思わずクウェンサーは呻く。
警告はなかった。その人差し指が明確に動くのが分かる。
直後だった。
バスバスバスッ!!　と、くぐもった小さな銃声が何発か響いた。
クウェンサーを狙う兵士のものではない。その銃口にはサイレンサーなどついていない。
バランスを崩した兵士が暗い海へ落ちると、入れ替わるように誰かが身を低くしたまま堤防の上を走ってきた。
クウェンサーと同じ『正統王国』軍の軍服を着た女性だった。その手には、銃身下部にグレネードを取りつけたアサルトライフルがある。先端にサイレンサーがついているのを省いても、他の兵士と比べて銃身がやや長いような気がした。
「早く上がれ！　どのみちそのルートじゃ生き残れないわよ!!」
「さ、サンクス……」
すると何故か女性兵士はクウェンサーから目を逸らした。

「ごめんなさい。感謝には値しないと思うわ。……勇み足で狙撃しちゃったの私だから」

「……、」

オシオキタイムという素敵な生きがいを発見するクウェンサー。こいつはもう何があってもこんな所で死ぬ訳にはいかないのだった。

上から差しのべられた手を摑んで、クウェンサーは堤防の上へ上がる。そのまま二人して堤防を陸側に向かって走る。

港湾ドックに差し掛かった途端、バタバタバタ！　というたくさんの足音が聞こえた。

クウェンサーは女性兵士と共に、近くの倉庫の壁へ身を寄せる。

すぐ近くを、軽く見積もっても一〇人前後の人間が通り過ぎて行った。

その全員が軍服ではなく、操縦士エリートが着るような特殊スーツを纏っていた。

「な、何だぁ、今の……!?」

「しっ。敵は本物の他に、影武者のエリートを立てていたみたいなの。それも何十人って規模でね」

「……道理で近くで見るとあんまり美人じゃないなって思った訳だ。全体的にパチモン臭かった」

低い山の麓まではそう遠くない。ここからでも濃密な緑の香りが潮に混じって鼻につく。辺りを走る敵兵達がちょっと途切れたら、すぐに走って森の中へ身を隠せそうだ。

そんな風に考えていたクウェンサーは、嫌な音を聞いた。
自分が身を寄せている倉庫の壁の向こうからだ。
「……何だ？　太い金具が次々と留まっていく音……？」
「どうしたの？」
「くそ……ヤバいぞ、くそ！　おい、合図でそこの窓を割れ。俺はそのタイミングで爆薬を投げ込むから！」
「ここで騒ぎを起こす気!?」
「壁の向こうから聞こえているのは、パワードスーツの装着音だ。準備が完了したら誰が追い駆け回されると思っている!?」
それ以上の問答はなかった。
女性兵士がライフルのストックを使って窓を叩き割ると、身を乗り出したクウェンサーは電気信管をつけた『ハンドアックス』を中へ放り込む。
「走れ!!」
壁から離れると同時に、いくつもの視線がクウェンサー達に突き刺さった。
だが敵兵達がカービン銃の銃口を正確にこちらへ向ける直前で、クウェンサーは無線機のスイッチを押す。
凄まじい爆発音と共に、馬鹿デカい倉庫の壁が手品の箱のように四方へ倒れた。

予期せぬ爆風に煽られた兵士達がコンクリートの上へ転がっていく。

あらかじめ身構えていたはずのクウェンサーさえ、背中を叩かれて倒れそうになった。女性兵士に腕を掴んでもらって、そのまま手近な森へと走り続ける。

パン！　パパン!!　という銃声が追い駆けてきた。

頭を揺さぶられている敵兵達は、正確な照準ができる状態ではなかったのだろう。それがかろうじてクウェンサー達の命を繋ぎ止めていた。

「あからさまな最短ルートは通れない。敵と鉢合わせになるわ！」

「時間を使い過ぎるとヘイヴィア達は逃げちゃうぞ！」

「もちろん間は取るわ。ついてきて!!」

クウェンサーと女性兵士の二人は木々の間をすり抜けるように走り続ける。時折、学生は無線で起爆できる電気信管を粘土状の爆弾に突き刺しては、適当な茂みに放り捨てていた。

走りながら、女性兵士はそれを咎めた。

「罠なんか張っていたら、後を辿られる。自分で『パンくず』落としながら森を進んでいるようなものよ！」

「どっちみち、向こうに優れたトラッカーやスカウトがいたらすぐバレるよ！　土の足跡、草の葉に木の枝、いちいち気にしながら走っていられない。絶対に跡は残ってる！　それなら罠を張った方がまだマシだ!!」

熱帯の空気が蒸すような森の中をひたすらに進み続ける。
その時だった。
前方から、バキバキバキ!!　と枝を折るような大きな音が連続した。
人間ではない。
もっと巨大な何かが近づいてきている。
「くそっ！　動きを読まれている。山頂に赤外線サーチライトの施設があったはずだろ。あっちの警備チームに無線で応援の連絡が入ったんだ。それで先回りされた!!」
「ていうか、待って、あれなに、何よ!?」
「パワードスーツだ……。隠れろ!!」
クウェンサーはとっさに女性兵士の腕を掴み、自分の方へと引き寄せた。そのまま、妖精でも住んでいそうな苔生した大木の陰へ飛び込む。
直後だった。
最初にあったのは、鬼火のように揺らめく不気味な火だった。
そこへナパームに酸化剤を混ぜた混合燃料の霧が噴きつけられたのだろう。
轟!!　と。
真夜中の闇を引き裂くように、凄まじい炎が三〇メートル近くも生暖かく湿った森を薙ぎ払った。水をかけても砂を被せても決して消える事のない、人殺しのための炎だ。

世界がオレンジ色に染め上げられる。
腕の中の女性兵士が呻くように言った。
「火炎放射器……!!」
実際に直線的な炎が放たれた場所は見当違いで、五メートルは離れていた。にも拘らず、分厚い軍服を着ているクウェンサーの肌がジリジリとした痛みを発する。酷い日焼けをした時のような感覚だった。
「これじゃどうしようもないわ。相手は無尽蔵に炎を放ってくる。こっちのライフルじゃあの装甲は貫けない。下手に立ち向かったってそのまま火葬されちゃう！」
「今から別のルートなんて迂回できないだろ。港湾ドックからの大量の追っ手に捕まっちゃうよ」
顔の汗を腕で拭いながら、クウェンサーは言う。
「グレネードを使えよ。合図と共に撃て」
「対人用の破片榴弾じゃ装甲は貫けない！」
「狙うのはパワードスーツじゃない」
クウェンサーは鬼火を揺らめかせる人型装甲兵器の足元を指差しながら、
「地面を吹っ飛ばせ。ここは柔らかい土の地面で、傾斜のついた山の斜面で、しかもパワードスーツは重心のバランスが悪い。足元を丸ごと抉ってやれば絶対にひっくり返る」

言いながら、彼はバックパックに手を伸ばし、プラスチック爆弾の『ハンドアックス』を取り出す。

「……そうしたら、俺が肉薄してゼロ距離でこいつを張り付ける。チャンスは一度だ！　やれ!!」

そこから先はメチャクチャだった。

グレネードが大量の土を巻き上げる。泥臭い匂いを嗅ぎながらクウェンサーは走る。パワードスーツの軋む音を無視して、うつ伏せに転んだ鋼の塊の背中の辺りに粘土を放り投げた。無線機のスイッチを押した瞬間、爆音と共に自分の体が数メートルは飛んだ。爆破するのが早すぎた、と思った時にはすでに口の中は鉄臭い味でいっぱいだった。

直後にパワードスーツの背負ったタンクが大爆発を起こす。クウェンサーは危うく丸焼きにされかけた。

「うわぁ!?」

名前も知らない女性兵士の手で体を起こされた。そのまま二人してとにかく走る。がむしゃらだった。ザザザ！　ざざざざ!!　と、あちこちで森の木々が揺れていた。それが夜風なのか、敵兵達が接近してくる音なのかももうグチャグチャだった。

再び潮風が鼻についた。

森を飛び出した直後、パパン!!　という乾いた銃声がいくつか響いた。

後ろから追ってくるのではない。
正面からだ。
思わず女性兵士はクウェンサーの腕を掴んでその場で立ち止まろうとする。
「回り込まれた!?」
「違う、ヘイヴィア達だ　待っててくれたんだ!!」
ゴツゴツした海岸線には、何艘かのゴムボートが乗り上げていた。ボート自体は座礁したタンカーの方に隠してあったはずだが、一度そちらから島へ回してきたのだろう。
アサルトライフルをクウェンサー達の後方へ向け、見えない何かをセンサーで捕捉しながらヘイヴィアは叫んでいた。
「早く乗れ！　もうそろそろ後ろ髪を掴まれちまうぞ!!」
敵と味方の双方が携行式のミサイルを発射した。
爆音に背中を叩かれるようにしながら、クウェンサーと女性兵士は何度も転びそうになって、それでも走り続ける。
仲間の手でボートの上へ引きずり込まれると、全てのゴムボートが一斉に暗い海へと乗り出していく。
安心している暇はなかった。
いきなりだった。

カッ!!!!!　と、島の中央にあった山がいきなり溶接のように瞬いた。目に突き刺さるような凄まじい光と共に、そのシルエットそのものが崩れていく。

クウェンサーは思わず叫んだ。

「オブジェクト……!!」

「タンカーの陰だ！　早く隠れろ、早く!!　モーターも切れ!!」

ゴムボートの群れが、座礁して錆びたタンカーの裏へと回った直後だった。

今度こそ、山そのものがなくなった。

オレンジ色の残像が、全てが終わった後にようやくクウェンサーの網膜に突き刺さる。斜めに海水へと激突したレーザービームの残響が、熱したフライパンのような音を立てて海水を煮立てていた。

ヘイヴィアは苛立った声で、

「ちくしょう……。『メガロダイバー』が無理矢理に動き出しやがった」

「でも、冷めた溶岩は表面に張り付けたままだったろ。あれの除去は終わっていなかったはずだ」

「知るかよ。とりあえずうるさいハエを全部落としてから作業をしようって、考えを切り替えたのかもしれねえぞ。海上戦闘だけだって俺らを圧倒している事に違いはねえんだ」

あの巨体が動き出してしまったら、クウェンサー達は元の艦隊へ戻るのは難しい。海は『メ

ガロダイバー』の庭だ。絶対に、辿り着く前に全てのゴムボートの位置を把握して沈められる、いいや、仮に艦隊に帰還できたとして、その艦隊を丸ごと吹き飛ばすだけの火力が『メガロダイバー』にはある。ゴールに辿り着いたからといって、何か状況が変わる訳ではないのだ。

「どうすんだ……。くそ、ほんとにどうすりゃ良い!?」

「海の上にいても仕方がない。とりあえず錆びたタンカーの中に入ろう。最悪、ヤツは人間の心音を利用して個人識別までやらかす地獄耳だ。鉄の箱の中に隠れた方が良い」

壁になっている錆びたタンカーには所々に大穴が空いていた。その一箇所から、クウェンサー達は照明もない真っ暗な遺跡の中へと足を踏み入れていく。海水が入り込むのを嫌い、彼らは適当に階段を上って通路の真ん中に陣取る。

クウェンサーは言った。

「何にしたってお姫様の『ベイビーマグナム』に何とかしてもらうしかない」

「対戦カードはご覧の通りだぜ！　あの奇妙なタタミガエシの前じゃどうにもならねえよ！」

「そいつを突破するために情報収集をしていたんだろ。一度、みんなが手に入れたデータを突き合わせてみよう、何かが分かるかもしれない」

『メガロダイバー』は島の周囲をぐるりと見て回った後は、その矛先を外洋の艦隊へ向けるだろう。お姫様やフローレイティアの乗る船を直接狙う前に、何としても『メガロダイバー』の弱点を見つけて無線で知らせる。返り討ちができる状況を作る。今はそれくらいしかしてやれ

る事がない。

ヘイヴィアは預かっていた携帯端末をクウェンサーの方へ押し付けながら、

「データっつったって玉石混交だぜ。テメェも見ただろ。メールの内容は世界の気象図とか海流の流れ方とか、『島国』の食糧事情についてのファイルまであった。これじゃ『メガロダイバー』に関する情報を抽出するだけでもスゲェ時間がかかっちまう」

バサバサ、という音が聞こえた。

ライトを向ければ、別働隊の連中が紙束を錆びた床に置いた音だと分かった。驚くべき事に、遠方から通信を傍受するだけでなく、実際に家屋の中に入って紙の報告書を盗んできたらしい。

「『一二支計画』？　オブジェクトの最初の一二機のデータなんて、何で今さら……？」

「核の時代に終止符を打ったのは、『子』の一機だけだったって話だな。一機でさんざん暴れた上、まだ一一機も控えていますなんて言われりゃ誰だって震え上がるとは思うけどよ。ただ、結局はその後の動乱で『一二支』は全部沈められちまったって話だろ」

他にも、白防ＰＭＣの兵士達の会話を録音した音声ファイルや、壁に貼ってあった地図を超望遠で撮影した画像ファイルなどもあった。

『……ザザザ！　じじ、ざざがが！　サルベージ……』

『再起動……ざざ、ががががが、っざざざざざ!!』

『……ががっ、ジジジ……司令塔……ざざ、ザザザザザザザザ!!』

しつこく携帯端末をいじくり回していたクウェンサーは、何百何千とある有象無象の新着メールを次々と開いていく。

「何だ……？　カオスって訳じゃなさそうだぞ」

「あん？」

「例の世間話。無関係な話題ばかりだと思っていたけど、いくつかの系統があるみたいだ。天気に、海流、後は食料」

「おい、そりゃマジなのか？」

「まだ全部のメールを開いた訳じゃないから確約はできないけど」

そもそも、これらのメールのほとんどは雇われの自防ＰＭＣが、上部構造あるいは雇い主である『一霊四魂』なる人物へ指示を仰いでいる内容だった。

なのに、意味のない世間話のメールが溢れているというのも、考えてみればおかしな話だ。

「ちょっと待てよ……」

クウェンサーは仲間達から提供された画像ファイルの一つに目をやる。

壁に貼り付けられた地図を、超望遠で撮影したものだ。

「……ヘイヴィア」

「何だよ」

「『一一一支計画』で造られた最初の一一一機は、結局全部海に沈められてしまったんだよな？」

「ああ。それが？」
「……この世界地図にある印、全部で一二個に見えるんだけど」
全員が集まってきた。
が、先ほどの女性兵士が怪訝な顔をして、
「何よこれ。歴史の教科書と全然位置が違うじゃない。確かに海の底だけど、こんな所で『最初期の終わり』は勃発していないはずよ」
「地図がデタラメだってのか？」
「違う」
クウェンサーは割り込むように言った。
「音声ファイルには『サルベージ』って言葉があっただろ」
「……まさか」
「あいつらの得意分野は海。それも暗い海の底だ」
慎重に、言葉を選びながらもクウェンサーは続ける。
「おそらく白防ＰＭＣ……いや、その頭脳である『一霊四魂』は、長い時間をかけてゆっくりとサルベージしていたんだ。最初の一二機を。そして壁の地図にあった地点に、改めて再配備した」
「何のために!?」

「予想はできる。……でも、かなり突飛なアイデアだぞ」

9

全てが赤茶色の錆に覆われたタンカーの中で、クウェンサーはこう言った。

「おそらく『メガロダイバー』は一機で完成した兵器なんかじゃない。あれはあくまでも頭脳っていうか、司令塔に過ぎないんだ」

「……あれだけの怪物の他に、まだ手や足が増えるっつーのか？」

「『一二支計画』。最初の一二機。その遺産ってヤツなのかな」

「まさかと思うが、あれを修理して世界中の海にひっそりとばらまいているなんて話じゃねえだろうな？」

胡散臭そうな目を向けて、ヘイヴィアが言う。

「そりゃねえよ。つーか、最初期の第一世代だろ。ある種の伝説ではあるが、元祖塩ラーメン以上の付加価値はねえよ。今時の、最先端の第二世代が鎮圧に向かえば十分に各個撃破できる。一二機が一斉に襲いかかれば多少はヤバいだろうが、世界中にバラバラに配置しているんだろ。だったらなおさら勝ち目はねえって」

「そういう事を言っているんじゃない。そもそも、潜水機能があるのは『メガロダイバー』だ

けだ。最初の一二機を修理したって海の底には配備できない。だろ？」
「じゃあ何だ？　修理じゃなくて再利用か？　まさか、一二機の動力炉だけ抜き取って、『メガロダイバー』を一二機も増産しているなんて話じゃねえだろうな」
「その可能性もなくはない……けど、いくら何でもそこまでの財力が『一霊四魂』にあるのかな。情報洩れだって抑えきれないだろ。何しろ、『あめのだりん』を丸々犠牲にして、ようやく『メガロダイバー』一機を完成させられたんだから」
「ちょっと待て。……結局、テメェは何が言いてえんだ？」
「ヘイヴィア。お前はさっき、一度答えに掠っていたんだ」
クウェンサーは一度そこで区切った。
自分自身でも突飛過ぎるアイデアだと自覚しているからだろう。
「……必要なのは、おそらく動力炉だけだ。サルベージした二機から、動力炉だけを抜き取っている。後は最低限、深海の水圧に耐えられる程度の外殻があれば良い。オブジェクトの形をしている必要は、特になかったんだと思う」
「はあ？　それじゃ兵器の体裁を保てねえだろ！　そんなもん世界の海にばらまいて何の意味が……!!」
「あるんだよ」
頭痛を堪えるような顔で、クウェンサーは答えた。

「見てくれ。さっきのメールにあった海流の流れについての添付ファイルだ」
「それが？」
「じゃあ次は、壁に貼ってあった世界地図……一二基の動力炉が沈めてあるポイントは、どこにあるか分かるか？」
女性兵士があっと声を上げた。
「どれもこれも、複数の海流がぶつかり合う場所じゃない、これって」
「そうだ。温かい潮と冷たい潮が混ざり合うポイント。そこへ狙ったように動力炉が沈めてある。そう考えたとしたら？」
クウェンサーは携帯端末の画面を人差し指で軽くコンコンと叩きながら、
「……なあヘイヴィア、地球温暖化とか何とかで、海水の温度が上昇しているって話は聞いた事がないか？　そのせいで、台風だのハリケーンだの、異常気象が頻発しているって、世界中の気候を決定する偏西風の大きな流れさえ、不自然に歪められているってさ」
「おい……それって、まさか……」
「JPlevelMHD動力炉が生み出す熱量は圧倒的だ。何しろ、一〇万トンの鋼の塊を時速五〇〇キロオーバーで動かすだけのエネルギーを常時生み出すほどなんだから。そんなもんを海底に沈めて、自由に熱を放出できるとしたら？　温かい海流と冷たい海流のぶつかり合う、繊細な気象の要衝でそんな事をしてしまったとしたら……」

クウェンサーは呻くように言う。

「……全世界気象コントロール兵器」

決定的な、その一言を。

「こいつに名前を与えるとすれば、多分そいつが相応しい。世界中の海水温度を自由に増減させる事で間接的に季節風や偏西風を自在に操り、世界中のあらゆる地域の気象条件を自在に変動させる大きなシステム。不毛な砂漠を丸ごと熱帯雨林に変えて、世界最大の穀倉地帯を氷の大地に変えてしまう。こんなものが完成して運用されるようになったら……」

実際には、オブジェクトの動力炉が一二基あれば良いという話ではない。

例えば、海の中では電波は伝わりにくい。海面まで有線のアンテナブイを伸ばしたとしても、地球の裏側までは届かない。万全の『メガロダイバー』と一二基の動力炉がアンテナブイで通信を行うためには、大規模な衛星通信網が必要だ。

他にも、全世界の気象条件をリアルタイムで観測し、自分達のコントローラーが正確に機能しているか。それによって世界の金融や経済などにどれくらいの影響が出るのか。それらを精密に知るための情報インフラなども。

見えないところで、そういう準備が進められてきた。

戦争の外側で。

じわじわと、この星を蝕むように。

「待て待て待て。待てよ!!　ただの憶測だろ。『一霊四魂』とかいうのは異常気象で地球を砂漠の星に変えるのが目的だってのか!?　それじゃ破壊の規模が大き過ぎて扱えねえよ！　ヤツらにとってどんなメリットがあるってんだ!!」

「食糧事情。もっと分かりやすく言えば、自給率かな」

重たい息を吐く。

そして、自分の意志でクウェンサーは先に進む。

「メールにも自給率についての話があったろ。何でも、『島国』の食料自給率は三〇％台らしいよ。貿易がストップすれば二人に二人が餓死する計算だ。海底資源の発見で燃料については克服できたけど、食料については野放しのまま。『一霊四魂』は……というか、『島国』がこいつを何とかしようって考えるのはそう難しい推理じゃない」

女性兵士は難しい顔をして、

「敵対者の国は砂漠に変えて、『島国』を優遇してくれる国を肥沃な大地に変える……。あるいは、そうやって脅しをかける事で、食品輸入をストップさせないための仕組み作りを整備しようとしている。そういう話なのかしら？」

「だろうね。『みんなでまとめて飢えましょう』なんてスローガンを掲げていない限り、『一霊四魂』はより多くの食料を得るために戦っているはずだ」

「で、でもよ」

ヘイヴィアは気味の悪い薄ら笑いで、
「世界の海に埋まってんのは、あくまでも剝き出しの動力炉なんだろ。最新のオブジェクトじゃなくて。だ、だったら爆乳にでも報告すりゃ解決だ。邪魔な動力炉なんか爆破しちまえば良い」
「間違ってはいないと思う。『一霊四魂』だって、わざわざ動力炉の存在やその位置を教えたいとは考えていないはずだしね」
そこで、クウェンサーは否定のために言葉を切り替えた。
「でも忘れたのか？　オセアニアじゃ試作実験炉を暴走させて巨大な爆弾に変えていただろ？　あれと同じ事を、複数の海流がぶつかる繊細な海域で実行したとしたら……」
「海底の地形が大きく抉り取られて、半永久的に海流がメチャクチャになるわね。神様の奇跡みたいなバランスは大きく崩れて、それこそ『砂漠の時代』が到来するかもしれないわ」
「つまりそういう事。『全人類餓死』のカードをちらつかせる事で、オブジェクトの接近を拒むつもりなんじゃないか？　これなら、『正統王国』『情報同盟』『資本企業』『信心組織』……世界的勢力も一存だけじゃ行動できない。互いを監視して、足を引っ張り合う事になるかもしれない」
「冗談じゃねえ……。とっくにアキレス腱を握られているじゃねえか!?」
「システムが完成すればね」

クウェンサーは付け足すように言った。

「もしもこんなシステムが完成していたとしたら、とっくに脅しの一言でもあったと思う。全てのオブジェクトを『メガロダイバー』から一〇〇キロ以上は撤退させろ、とかさ。そういう脅迫を受けている様子がないって事は、まだ『一霊四魂』だって準備は終わっていないはずだ」

逆に言えば、これが最後のチャンス。

『メガロダイバー』を中心とした全世界気象コントロール兵器が完成してしまえば、あらゆる世界的勢力は……いいや、物を食べて生きていく全人類は『一霊四魂』に屈する事になる。

これは海だけの、七〇%の支配者、なんて次元じゃない。

彼らが目指すのは惑星そのもの、一〇〇%へくまなく王手をかける事だったのだ。

「どうすんだ……。こんなもん、もう俺らの部隊だけの話じゃねえぞ!? ここで『メガロダイバー』を確実に沈めねえと、六〇億人だろうが七〇億人だろうが問答無用で干からびちまう!! 全人類がなけなしの配給のために自ら首輪をつけて請い願う、食の奴隷の時代がやってきちまうぞ!!」

もしも本当だとすれば、凄まじい利益が出るのは事実だった。

ただ、とクウェンサーは思う。

全世界気象コントロール兵器の完成は、あくまで手段の獲得であって目的そのものではない。

『一霊四魂』は。

戦争の黒幕は、一体何を考えて世界にケンカを売ろうとしているのだろう、と。

10

その頃。

タンカーの墓場、解体用の小島から五〇キロは離れた『正統王国』の大艦隊の中で、整備兵の婆さんは何かに気づいた。

自分の携帯端末を取り出すと、画面にはチャットの申請が点滅していた。

軍のネットワークを無視するかのように、外部から割り込んできた通信。

相手のアドレスを見て、目が眩む。

存在しないはずの英数列だった。

いいや、アドレス自体は今も存在しているのかもしれない。だが、その主はとっくにこの世を去っているはずだった。

「誰じゃ」

音声に合わせ、画面の中に文字が入力されていく。

すぐに返事は戻ってきた。人間が考えて入力しているにしては、あまりに早過ぎるようにも

思えた。

『君は私を知っているはずだ』

「儂の知っている誰かは、軽く見積もっても一〇年以上前には死んでおるはずじゃよ」

『かもしれない。しかし出力される結果が同じであれば、私を示す名称はやはり君の良く知る誰かになるだろうね』

「……まさか、本当にお前なのか」

『「島国」の名が出た時点で、頭の片隅にはチラつかなかったのかい？　今回の騒動に、私の名が関わっている事を』

婆さんは、重たい息を吐いた。

前述の通り、彼女は元々『資本企業』の一角である『島国』でトラブルを起こし、娘夫婦ともども『正統王国』へ亡命した身の上だ。

オブジェクトについての深い技術を有していた事からも、亡命先では他と比べて随分優遇させてもらったと思っている。

ただし、

「おかしいとは思っていた」

婆さんはそう言った。

「オブジェクトについての機密情報を持つ儂が、ああも簡単に亡命できた事がな。途中で非公

式に暗殺されていてもおかしくなかったのに」

『あの時は「たまたま」ちょっとしたトラブルがあってね。その火消しのために、物騒な連中は軒並み駆り出されていた。おかげで君達は狙撃されずに国境を越える事ができた訳だ』

「ヤマト」

『何だい？』

「お前はいつから存在している」

『少なくとも、私のオリジナルが死亡する前にはすでに』

「今回の件は、いつから計画されていた」

『少なくとも、私が組み上げられる前には』

呻く。

苦悩する。

自分自身の半生を丸ごと否定されたような気分に、婆さんの足元がわずかに揺らぐ。

「お前はＡＩなのか」

『ＡＩの定義にもよるが、君が考えるほど御大層なものじゃない。私……いや、私を含む五人を統合した「一霊四魂」は、あくまで予測検索のようなものに近い。もっとも、私の尻尾を垣間見た「情報同盟」辺りが勘違いして戦略ＡＩを組み上げるきっかけとなったのは認めるがね』

直霊、荒魂、和魂、奇魂、幸魂。

合わせて一霊四魂。

『島国』に広く浸透している用語で、人の心の構造を五つの性質を使って説明しようとしたものだ。四魂については単語だけならかなり古くから伝えられているが、人の心の働きを説明する目的で組み込まれたのはそれよりかなり後とされる。この五つの構成因子は常に安定している訳ではなく、また、直霊を中心に据えているとはいえ、どれかが欠けても良い訳でもない。

「予測検索とＡＩはどう違う」

『ＳＦ小説にあるように、自分で思考をしている訳ではない。私はあくまでも君からの質問や周囲の状況に応じて文字列を組み替え、先んじて答えを返しているだけだ「一霊四魂」という単語の通り、多少、答えに辿り着くまでの経路は複雑で、時には重複もしているがね』

「つまり、いずれ当人が自然と思いつく答えを早出しするだけ、という事か？　時間の短縮はできても、本質的に新しく得られるものはない」

『正しい表現だ。君はいつだって聡明で、それを砕けた言葉で表現する人物だった』

それにしては、まるで人間同士の会話のようにも聞こえる。

時には整備兵の婆さんの疑問を先読みして答えを提示しているようにも。

そこから導き出される答えは。

「プログラム自体は大したものではない」

『だろうね』

「ただ、データベースを登録した者の知性が、まるで本物の会話のように見せている。軽く見積もって二、三〇年。そのブランクを感じさせず、二、三〇年後の儂がこのタイミングでこの質問をするだろうと秒単位で完璧に予測した上で情報を登録していたように思える」

『そういう事だ』

端的な答えだった。

それはもう、エスパーとは呼べないだろうか？

たとえ世界中の情報を一手に蒐集して特殊な分析プログラムを通し、膨大なビッグデータを活用したとして、ここまでの精度で世界や個人の未来を見通す事はきっと不可能だ。『一霊四魂』の影に魅入られた『情報同盟』は実際にそれをやろうとして、不完全な戦略ＡＩを築くに留まっている。つまり、彼は……『一霊四魂』を組んだ五人の始祖は、ちっぽけな人間の脳みそだけで全世界のコンピュータを繋いだ膨大なネットワークを上回る偉業すら成し遂げていたのだ。

確かに。

ここにあるのは予測検索用のソフトウェアだ。

ただ、どちらが人力者で、どちらが出力者なのだ。

ひょっとしたら、プログラムから吐き出される文章によって刺激された人間の脳みそが、自分で考えているふりをしながら既定の回答を返すだけにはなっていないか？

茶番。

とんだ一人芝居。

（……その主格は一体どちらにある？）

あるいは、どちらだろうが同じなのか、

結局は、誰かが設定した一本道のシナリオをなぞっているだけなのか

かつて彼女の隣にいた、本物の天才。

その残滓に、整備兵の婆さんは語りかける。

「ヤマト」

『何だい』

「ここまでは、お前達の予想の範囲なのか？」

『計画は柔軟にできている。五つの因子が、その機能を重複しながら存在しているのと同じように。多少のイレギュラーがあったのは認めるが、全て自動的に修正されているよ。全ては一つの結果に集約される。これが最初の計画だ』

「……目的は？　仮初の意志すら持たないお前にとって何の益になる」

『益、という概念は理解できていない、というのが正しい回答だろう。そもそも私は厳密には思考していない。質問と回答の関連付けによって、そういう風に見えているだけだ』

「質問を変える。お前を組んだヤマトは何を目的に掲げていた」

『簡単な事だよ』

やはり、その返答には迷いがない。

全ての回答、その表示が、一律のラグを経て出力されている。

『とても簡単な事だ。「アメノウズメ」……いいや、君達が命名したであろう「メガロダイバー」も、最初期の一二機を利用した全世界気象コントロール兵器システム「アマテラス」の構築も、あくまで小手先の手段の獲得に過ぎない。目的そのものは極めてシンプルだ。あらゆる人類が生まれたその瞬間から実装している、しかし抗いようのない目的に過ぎない』

「結論を」

『勝ちたかった』

ぽろりと転がり出た一言に、婆さんは一瞬思考が止まった。

だが、ソフトウェアは冗談を言わない。

ただ望まれる情報を先んじて出力していく。

『我々「島国」は、過去に一度だけ目が眩むような勝利をこの手にしている。オブジェクトの開発によって、核の時代を残らず駆逐した事だ。だがそれも結局は長続きしなかった。国際社会の軋轢に呑まれ、最重要機密であるはずの情報は土産話のように奪い取られ、あちらこちらで紛い物のオブジェクトが氾濫した。我々の勝利はニヤニヤ笑いの政治とやらに目の前で取り上げられ、ケーキのように切り分けられて分配された。ここまで言えば分かるかね？』

「……ここで儂が苛立つのも遠い昔から織り込み済みか？　結論を、と言ったはずじゃ」

『我々は取りつかれたんだよ、アヤミ』

ソフトウェアは、かつて存在した誰かの感情を出力した。

『勝利に取りつかれた。あの日が眩むような勝利を、世界を丸ごとひっくり返すような勝利を、ただもう一度掴み取ってみたかった。それが、この闘争の真実だ。利や害ではない。それだけだったんだ。我々は世界に勝ってみたかったんだよ』

世の中には、一見して何の意味もない戦いに全力で挑む事がある。

例えば、学校の簡単な小テストで満点を取れるか。

例えば、運動会の徒競走で一位を取れるか。

例えば、プールで端から端まで泳ぎ切る事ができるか。

……ある程度の数字や順位が設定されているのも遠因ではあるだろう。だが数値が増減したところで、実際の生活に何か影響が出る訳ではない。にも拘らず、血眼で無意味な数値を追い駆ける。その原動力は一体どこにあるのか。

勝ちたい。

ただ勝ちたい。

人間が、いや、あらゆる生物が生まれた瞬間から持っているその衝動。

シンプルではあるのだが、シンプル過ぎるが故に、そこには妥協が一切ない。利害や憎悪が

直接の原因であれば、交渉や説得などによって和平を結ぶチャンスはある。だが、この原始的な欲求には対抗措置が取れない。ただ勝つ。提示される条件がそれだけでは、天秤のもう片方に何を載せれば良いのか誰にも分からないだろう。

婆さんは。

かつて隣を歩いていた誰かの残骸に向けて、こう告げた。

「……お前は狂っているよ」

『だろうね』

「運動会のかけっこ程度で得られる快感のために、本物の戦争まで起こした。どれほどの人間を殺すつもりじゃ」

『全世界に王手をかける前に「アマテラス」のデモンストレーションを行う必要があるから、人工的な気候変動による大飢饉でざっと二〇億人くらいが餓死するのかな。でも、その後の、二〇年で人口は二五億人ほど増えると思うよ。その頃には「正統王国」「情報同盟」「資本企業」「信心組織」……まあ、あらゆる世界的勢力は混乱の中で崩壊しているはずだけど』

核の時代の終焉と同じ。

国連の崩壊。

あれをもう一度再現する事が、彼ら『一霊四魂』が掲げる世界への勝利という話なのか。

「それを聞いて、儂が指を咥えていると？」

『その質問も、すでに予想はついていた』

予測検索ソフトウェアは均一なラグで答えを返す。

最低でも二〇年以上過去に組まれたはずのデータベースが。

『なら好きにすると良い。君が今いるその世界が、私の頭脳の範囲を超えられるかどうか、という命題に興味がないと言えば嘘になる。いいかい、アヤミ。勝負とは結局のところ、誰が、どちらが勝利の味を噛み締めるか、というゼロサムの現象に過ぎない。私はその甘い林檎を獲得するためにここまで来た。だがそれを止めようとしている君だって、すでに果実の味に魅入られ始めているのさ。勝利は、それ自体は誰にも止められない、ただ、誰が、どちらが勝つかというだけの話でしかない』

「ヤマト」

『アヤミ。善悪や利害で私を止めようというのなら、それは絶対に無理だ。その程度の概念では自覚域に差が開き過ぎていて、そもそも勝負にならない。私を撃破したければ、まず勝負の本質に触れる事だ。勝ちたい。ただ勝ちたい。それが第一のルールだよ』

それで、通信は途切れた。

軍の回線にひっそりと割り込むほどなら、ログくらい消せただろうに、敢えて手元には有用なデータがそのまま残されていた。

『メガロダイバー』と最初期の一二機。

全世界気象コントロール兵器システム『アマテラス』。
デモンストレーション。
人工的な気候変動による大飢饉と、二〇億人の餓死。
あらゆる世界的勢力の崩壊。
……散見される文章だけでも、十二分に分析の価値がある情報だ。
だが。
それ以前に。
「本気で勝ちたいと願う者が、こんな分かりやすいヒントを残す訳がなかろうが……」
吐き捨てるように、婆さんは言う。
かつて隣にいた誰か。
生涯でたった一人だけ愛した、その男の残滓に向けて。
「儂にはまるで、お前が甘い果実を誰かに譲ろうとしているように見えるよ。土壇場まで迷った挙句、結局最後は嫁に丸投げとか何を考えていやがる、あの泣き虫め」

11

『一霊四魂』の切り札は分かった。

一二基の動力炉と司令塔たる『メガロダイバー』を使った、複雑な海流と海水温度の完全制御。そこから作り出される、全世界気象コントロール兵器。あらゆる国家のあらゆる食料自給率を自在に操り、一方的に世界の王を名乗る事すら可能な最悪のカード。

問題なのは、

「結局、『メガロダイバー』の弱点が見つからねえ事にはどうしようもねえぞ」

ヘイヴィアは錆びたタンカーの中で、呻くように言った。

「潜航機能は失われたままっつっても、海上戦闘だけでも立派なバケモンだろ！　タタミガエシの防御システムを使われたら、どんな砲撃だっていなされ、受け流されちまう!!　あんなのどうにかできんのか!?」

「正式には『水遁の衣』ね。要点はいくつかある。覚えているか、ヘイヴィア？」

・海水の粘度を増加した上で、巨大な水柱を上げて敵の砲撃を受け流すタタミガエシ……『水遁の衣』。自らの手で海水の粘度を上げるのは結構だが、そうすると海水を利用した推進装置のウォータージェットや動力炉の冷却、電気分解による酸素供給などに支障を及ぼしそうなものだ。これを両立させる仕組みは？

・深海で遭遇した際、『メガロダイバー』は機体上部にある吸水口を使っていたはずだ。に

も拘らず、海上へ浮上した後も『メガロダイバー』は海水を使って諸々のシステムを回していた。となると、機体下部に別の吸水口がある？　また、切り替えの条件は？

・防御システム『タタミガエシ』の圧倒的な精度について。普通に音を頼りに展開するだけでは超高速のレーザービームなどには追い着かないはずだが、あれだけの爆音の渦の中、一体どうやって正確な状況把握をしているのか？

これらが海上戦闘のネックとなっていて、埋め合わせるための仕組みが存在する。それを暴く事で、『メガロダイバー』の鉄壁のシステムに楔を打ち込めるかもしれないのだ。

クウェンサーはその場の全員に説明した。

が、それだけで劇的なアイデアが即座に浮かぶ訳でもない。

そこから先は地道な作業だ。

全員がタンカーの墓場から持ち帰ったデータを突き合わせて、あらゆる可能性を模索していくしかない。

「パイプかポンプ系の資料はねえのか？」

ヘイヴィアは錆びた床に散らばっている紙の資料を手に取りながら言う。

「海上戦闘をしている間も常に海水を汲み上げてんだ、絶対に機体下部に給水口がある。空気

中の水分を直接取り込むなんて馬鹿げたシステムがねえ限りな。どこだ、くそ、どこにあるんだそいつのデータは！」

「なあ、これは関係していないか？　動力炉の近くに海水パイプを切り替える、Y字のセレクターがあるみたいだ。やっぱり吸水口は二つ以上の系統があるんじゃないか」

「海底に沈んでいやがった時は温存していたな。だが何故だ。クウェンサー、硬式潜水服着て潜った時の事は覚えているか？」

「俺達は海底火山の溶岩を利用して、機体の上側の吸水口を塞ぐ事に成功した」

「吸水口が二系統以上あるんなら、作戦行動は続行できたはずだ。にも拘らず『メガロダイバー』は迷わず浮上を選択した。浮上して直接お姫様とかち合うのは、あいつにとってもリスクはゼロって言えなかったはずなのに」

「それ以上のリスクがあったんだ、きっと」

クウェンサーはそう言った。

「吸水口は複数。でも、万一その全てが塞がれたら海の底で冷たい棺桶の仲間入り。だから、そうなる前に手を打った。……何かあるぞ、この『機体下部の吸水口』。こいつはヤツにとっても、極力使いたくないアキレス腱なんだ」

「あったー！」

素っ頓狂な声を上げたのは、島でクウェンサーを助けた女性兵士だった。

「これじゃない？　『竹筒』って書かれてる。海上戦闘時は機体下部から垂直に五メートルほど、給水パイプを伸ばすんだって。これでウォータージェットの推進力や動力炉の冷却、電気分解での酸素の獲得なんかに必要な大量の海水を汲み上げているのよ！」

「五メートル……」

クウェンサーは呻くように言った。

バックライトの輝く携帯端末の画面をみんなに見せながら、

「こっちにも資料はあった。タタミガエシ……『水遁の衣』に使う粘度を増した海水は、およそ二メートル前後の厚みを持っているらしい。つまり仕組みは簡単だ。その下にある新鮮な海水を太いパイプで直接汲み取っていただけだったんだ」

これなら、防御システムである『水遁の衣』と、動力炉の冷却などに使う海水。双方のシステムをかち合わせる事なく回す事ができる。

ヘイヴィアは無線機を摑みながら、

「報告だ、とにかく報告。『竹筒』については爆乳やお姫様に伝えておいた方が良い。こいつは分厚いタマネギ装甲の外に飛び出た機材だ。海水が邪魔をするかもしれねえが、ひょっとしたら『ベイビーマグナム』の砲で捻じ曲げられるかも……」

その時だった。

ズズン……ッッッ!!!!!　と。

いきなり、錆びたタンカーが凄まじい勢いで揺さぶられた。

凄まじい閃光がぽっかりと空いた水密扉の向こうから瞬いている。赤茶色の床に座っていたはずのクウェンサーだったが、その衝撃で思わず転がりそうになった。どっ、と全身から嫌な汗が噴き出すのが分かった。

「レーザービームだ……」

起き上がる。

皆を促すように、クウェンサーは叫ぶ。

「『メガロダイバー』が攻撃してきてる！　早くここを移動しないと!!」

「何だ、おい、どうなってんだ？　あいつに心音を探られてるってのか!?」

「だったら直接ここが狙われているよ。おそらく『一霊四魂』の兵士達が俺達の隠れ家を見つけたんだ。座標を直接教えて攻撃させている。俺達が直接ロックされている訳じゃない。だからタンカーを船首の方からくまなく削り飛ばそうとしているんだ！　真横からたくさんの串を刺していくように!!」

全員の視線が反対側、船尾側へと向けられる。

ヘイヴィアは半分泣きそうな表情で言った。

「逃げてどうすんだ？　逃げるってどこへ!?　オブジェクトの火力で直接狙われたら、生身の人間なんざどうにもならねえだろ!!」

「向こうはこっちをロックしていないって言ったろ！『一霊四魂』の兵士達も外からタンカーを監視しているだけ。オブジェクトの砲撃は火力が高過ぎて、死体だって消し炭になってしまう。つまり！　この砲撃を俺達が乗り切ったとして、敵側には生存を知る方法がない!!　一連の砲撃ラッシュさえ凌げれば、もう一度かくれんぼの闇の中へ紛れられるぞ！」

チャンスはある。

それだけ分かれば良い。

とにかくその場の全員が船尾側へと弾かれるように走り出した。床に散らばっている資料類はもはや無視した。クウェンサーも携帯端末をポケットにしまうと、錆びた水密扉をくぐって先へ進む。

閃光が吹き荒れた。

溶接のように目に悪い光が背中側で炸裂する。

船首の先から順番に、少しずつ、大穴を空けていく形で、次々と高温を生み出すレーザービームが錆びたタンカーへと突き刺さってくる。

「マジかよくそ!?　追ってきてねえか!?」

「振り返るな、追い着かれたら死ぬぞ！　走れ、走れ、走れ!!」

その時だった。

前を走っていた女性兵士の動きが止まった。

クウェンサーは叫ぶ。

「どうした!?」

「扉が錆びついて開かないのよ!!」

「おいクウェンサー、後ろからレーザービームが迫ってる！　どうすんだ!?」

「ちくしょう!!」

彼は毒づきながらバックパックのプラスチック爆弾を取り出す。仕掛けるのは簡単だが、安全な場所に退避して起爆、なんて悠長な事をやっている暇はあるかどうか。

とにかく先頭グループへ追い着こうと走るクウェンサーだったが、そこで予期せぬ出来事が彼を襲った。

ズボッ!!　と。

いきなり赤茶色の通路が抜け、クウェンサーの体が真下へ落ちたのだ。

「うわあ!?」

「おい、全員飛び込め！　そこで水密扉と格闘するよりそっちの方が早いだろ!!」

合図もなしに飛び降りてくる同僚達を見て、クウェンサーは慌てて転がるようにその場を離れる。タイミングを間違えていればむさ苦しい男のボディプレスで圧死するところだった。

「起きろよ馬鹿、クウェンサー！　ここで死ぬのを待つのか!?」
「もうちょっと感謝があっても良いと思うんだ！」
再び高出力のレーザービームがタンカーを揺さぶり、小競り合いは中断された。とにかく先へ、船尾側へと走り出す。
「なあ、無線は使えないか!?　今ある情報をお姫様やフローレイティアさん達に流しておいた方が良い！」
「やってるよ！　でも繋がらねえ!!　ここは巨大な缶詰の中なんだぜ、電波が遮断されちまうんだ!!」
ミシミシミシミシッ!!　という、凄まじい音が響く。
船全体が軋んでいるような音色だった。
「やべえぞ……」
走りながら、ヘイヴィアはそう言った。
直後だった。
ボキリと。
タンカー自体がウィンナーのCMのように、真っ二つに折れた。

元々、このタンカーは座礁したまま放置されていた。安全基準も建材耐性も経年劣化で失われている。そこにきてのレーザー砲撃の数々。船体が大きく抉り取られた事でバランスは大きく崩れ、岩の上に乗り上げた船はシーソーのように大きく傾けられたのだ。

頑強な硬さがあれば、船は天秤のように揺さぶられていただろう。

それはそれで中を走るクウェンサー達は大変な事になっていたかもしれないが、今回はそうはならなかった。

自らの重さに耐えきれなくなったタンカーは、真ん中からへし折られてしまったのだ。

亀裂が走る。

クウェンサー達の目の前でだ。

「何だよ何なんだくそっ!!」

「跳べ!!　レーザービームは構わず迫ってくるぞ!!」

ぎちぎちぎちぎち……と、こうしている今も亀裂は広がり続ける。ギザギザの断面は、まるで巨大な獣の顎のようだった。

「三メートルはあるぜ!?」

「だったら何だ。家の近所にあったゴミ屋敷は五メートルは積もってた！　良いから早く!!」

「くそっ、うちの鬼メイドよりもおっかねえ!!」

助走をつけて重力に抗う。

浮遊感を存分に味わう。

着地に失敗し、赤茶色の床を転がるように移動する。

タンカーの後ろ半分がぐらりと揺れて、真横へと倒れていった。

「何だ……無線にノイズが……。ちょっとずつだけど繋がるぞ？　何でだ!?」

「分厚い缶詰が切り裂かれたからだ。安心なんてしていられるか。とにかく走れ、報告しながらでも良いから!!」

凄まじい閃光が何度も瞬いた。

手始めに転がった船首側半分を徹底的に焼き払おうとしているらしい。その攻撃は執拗で、容赦がなかった。向こうに残っていたら、間違いなくオレンジ色に溶けた鉄を水飴のように浴びていた事だろう。

生き残ったクウェンサー達は船尾側に向けてさらに走る。

二分もしない内に再びレーザー砲撃がクウェンサー達のいる船尾側半分の、ギザギザの断面を溶かすように襲いかかってきた。

時間はない。

「『竹筒』って呼ばれる給水パイプがある、『メガロダイバー』の機体下部だ！　五メートルほど垂直に伸びたその給水パイプは、あのクソ野郎の主要機関全てに関わってやがる!!　とにかくそいつを破壊する作戦を考え……」

「ああもう！」

先行していた女性兵士が叫んだ。

「また水密扉よ！　錆びて開かない!!」

「他のルートは!?」

「あるように見えるのかしら!?」

クウェンサーは電気信管を刺したプラスチック爆弾を錆の塊となった扉へと貼り付けた。

（扉の規格が全て同じなら厚さは三センチ、ロッドは上下左右に一本ずつ、計四本。でも経年劣化でボロボロになっているから、錆の癒着部分以外は無視して良い）

「下がれ、最低でも一〇メートルだ!!」

「……そんな余裕はなさそうよ」

女性兵士に言われて、クウェンサーは真後ろを振り返った。

ちょっとした横断歩道くらいの長さ。すでにその先が、『メガロダイバー』のレーザー砲撃で吹き飛ばされていた。オレンジ色に輝く鋼鉄が、まるで溶岩のように流れ出している。

扉を破壊しなければ前へ進めない。

しかし安全な距離を取らなくては自分で仕掛けた爆弾に殺される。

八方塞がりだ。

うろたえるクウェンサーをよそに、女性兵士達は合図でタイミングを合わせながら、その場

で垂直に跳んだ。最初、意味が分からなかったクウェンサーだったが、遅れて狙いが読めた。
先ほどの彼と同じだ。
数十人で一斉に真下へ強い負荷をかけて、ボロボロになった床を抜いたのだ。
ガコンッ!!　と。
大きく抜けた穴へと、兵士達が落ちていく。
クウェンサーとヘイヴィアもその後に続く。
だが、
「……ちくしょう……」
ヘイヴィアは思わず呻き声を上げた。
その先に伸びているはずの通路。そこもまた、膨らむように広がる錆によって、水密扉と壁が完全に一体化していた。一目で通常通りに作動しないのが分かってしまう。
真後ろにはぽっかりと開いた穴。上階層から流れ込んだオレンジ色の鋼鉄が、滝のように落ちている。
「どうすんだ、クウェンサー？　もう一回みんなで床を抜いてみるか!?」
「もうここが船底だよ。これより下はない！」
爆弾は使えない。
集団の中でも特に大柄な男性兵士二人が、錆びた扉へと思いきり体当たりをした。

「動いてる……。少しずつだけど……何とか……!!」

真後ろにあった、オレンジ色の滝がかき消された。

『メガロダイバー』のレーザー砲撃だ。

「ちくしょう!!」

「もう一度、もう一度だ。やってくれ、頼む！」

クウェンサーが言うと、大柄な兵士二人は一度後ろ向きに扉から距離を取り、再び息を合わせて体当たりする。

金属の棒が折れるような音と共に、彼らは開いた水密扉の向こうへと転がっていってしまった。

「開きやがった……急げ!!」

言われるまでもない。

数十人が我先にと扉の向こうへ押し寄せる。

しかし。

そこで、今度こそクウェンサー達の足が止まった。

「……ウソだろオイ」

通路が塞がれていた。

今度は先ほどまでの統一された水密扉ではない。船内で火災が発生した時のための防火扉だ。

役目を終えてはいるが、この船はタンカー……重油などの化石資源を運ぶための船だ。火災対策の扉は、水圧対策を旨とする水密扉よりもずっと分厚くて頑丈にできている。単に炎や熱、煙などの流入を防ぐのではなく、『爆発』を遮るための鋼鉄の壁なのだ。

クウェンサーは防火扉の表面を指でなぞり、拳を叩きつけ、叫ぶ。

「こいつは手持ちの爆弾じゃ吹き飛ばせない！　無理にやろうとすれば、爆圧は全部こっちに向かってきてしまう!!　ドリルか何かで穴を空けて、扉の中に爆弾を埋め込まない限りは無理だ!!」

「じゃあどうすんだ？　床ももう抜けねえんだろ！　今さら後ろに引き返すなんて間抜けな事言わねえだろうな!?」

カッ!!　という、溶接のような光が襲ってきた。

真後ろの通路が焼かれている。

思っていたよりずっと近い。リミットは迫っている。

「祈るしかねえってのか……？」

全員が分厚い防火扉に背中を張り付けていた。

こうしている間にも少しずつ、確実に、レーザー砲撃は自分達が通ってきた道を削り飛ばしていく。ここまで辿り着くのに、そう時間はかからない。

「こんなので終わりなのかよ、くそったれが!!」

ヘイヴィアの声を聞きながら、クウェンサーは思わず両目を強く瞑った。
自分の息が妙に強く聞こえる。
最期の時を待つ。
一秒、二秒、三秒。
……そのカウントが三〇を超えた辺りで、クウェンサーはようやく疑問を持つ事ができた。
静かに両目を開ける。
「何だ……？　レーザー砲撃がやってこないぞ」
「他の場所を……攻撃してるって訳でもねえみてえだな。タンカーが揺さぶられる事もねえ。ヤツは攻撃を止めてやがる……」
「でもどうして？」
安心はできなかった。
こうして生きている事自体が、何かの間違いのように思えてくる。
電気椅子に手足を縛られているものの、接触不良でたまたま電流が流れない。そんな気分だ。
いつどこでコードが繋がるか分からないのでは納得なんてできない。
「何かトラブルがあった？」
「分かんねえよ」
「他に優先すべき目標ができた？」

「黙っていても殺せるターゲットを放ったらかしにしてか」
嫌な沈黙が流れる。
どれだけ考えても答えなんて出ない。
……膠着を打ち破ったのは、ヘイヴィアが装着していた無線機だった。
『……、ヴィア……』
通信の状態は悪い。
穴だらけにされているとはいえ、ここは分厚い船殻に覆われたタンカーの船底部分なのだ。
それでも、ノイズだらけの声の主はすぐに分かった。
『聞こえていますか、ヘイヴィア＝ウィンチェル様』
「カレン……？」
ヘイヴィアは思わず怪訝な声を上げた。
この状況、このタイミング。
クウェンサーは可能性の一つとして、こう言っていたはずだ。
『メガロダイバー』は、何か別の優先すべき目標を見つけたのではないか、と。
「ちょっと待て、テメェ何してやがる？　その気持ちの悪りぃ猫撫で声は何なんだ!?　答えろカレン!!」

12

『正統王国』の名門貴族ウィンチェル家所有の武装客船『サマーバケーション号』。数々の武装をこしらえているものの、その主格はあくまでも豪華客船であるため、艦橋部分は船首側に設置されていた。

そのブリッジで、カレン＝I＝ウィンチェルは報告を受けていた。

『有線カイトから得られたデータによると、ヘイヴィア＝ウィンチェル様含む潜入部隊は島の東側にある座礁したタンカーの中で籠城しています』

有線カイトとは、文字通りの凧だ。

カメラと通信ケーブルによって、船より高い位置から戦況を確認するための装備である。

地球は丸いので、水平線がある。大体、五キロくらいが有視界の限界だ。しかし一方で艦砲の最大射程は四〇キロ弱、多段式のロケット兵器なら一〇〇キロを超える事もある。

せっかくの射程を宝の持ち腐れにしないようにするには、より広い視界が必要だ。

例えばレーダー、例えば衛星、例えば観測用の飛行機。

あくまでも『光点』しか確認できないレーダーと比べると、カメラから得られる情報には柔軟性がある。衛星は便利だが、周知されているが故に本格的な戦闘に突入した途端にジャミングや撃墜などで妨害されるリスクも高い。有人の観測機は対空レーザーが飛び交うオブジ

エクトの戦闘には不向き。

民間人にも材料を手に入れやすく、落とされても代わりをすぐに揚げられる有線カイトは、原始的でありながらレーダーと組み合わせる補助観測機器として未だに現役を貫いていた。

『「メガロダイバー」からタンカーへの攻撃を確認。戦術としては虱潰しのようですが、あれでは長くは保たないでしょう』

「了解しました、B班は引き続き観測を。A班、あれの位置は特定できていますか？」

『捕捉しています』

隣に立っているメイドが、カレンに向けてこう質問した。

「本当に決断されるのですか」

「……」

この武装客船は一度、ヘイヴィア達が潜入した島へと大規模な艦砲射撃を行っている。

しかし一方的な戦いとなったのは、何もカレン達が優れていたから、だけではないだろう。

明確な軍属でもなく、かといって民間と呼ぶには過剰な戦力を保有した謎の勢力。

反撃して武装客船を沈めた場合、どこまで影響が拡大するか分からない。撃沈の事実によって、どれだけの勢力が敵に回るか予測がつかない。だからためらった。そういう側面もあるはずだ。

ところが、今はもう状況が違う。

『メガロダイバー』は、敵にとっても切り札であるはずだ。替えの利く整備や補給の人員とは価値が違うのだ。この局面でヘイヴィアらを助けるために参戦すれば、間違いなくオブジェクトからの反撃が来る。

戦争とは、弱いところから狙われるのが常だ。

五〇センチの艦砲を備えるといっても、武装客船は本質的に『豪華客船に追加の武装を施した船体』だ。設計段階から戦う事だけを想定して組み上げられた本物の軍艦と比べると、どうしても無駄な贅肉が多い造りをしている。

そして、今はもうオブジェクトの時代。

あの怪物兵器に真っ向から照準されれば、どんな末路を迎えるかは明白だ。

カレンは薄く息を吐いた。

それから、改めて通信装置のマイクを摑み直す。

「戦闘準備。これより『サマーバケーション号』は『正統王国』軍第三七機動整備大隊より突出し、独自の行動を開始します。Ｉ級の防衛要員を除く全員は至急下船してください。救命ボートの数は足りるはずです。下船後は『正統王国』に救助してもらう事。以上」

「誰も降りませんよ。あなたがそうしたように」

一秒も待たずにそんな声が返ってきた。

カレン＝Ｉ＝ウィンチェルは小さく頬を掻くと、通信を外部に切り替える。

「ウィンチェル様。聞こえていますか、ヘイヴィア＝ウィンチェル様」

『これより我々は単騎で突出し、「メガロダイバー」の注意を引きつけます。タンカーの様子を確認している敵兵についても艦砲で数を減らします。彼らが混乱している間に脱出してください』

「引きつけるって……」

呻くように、クウェンサーは言う。

オブジェクト相手にそんな事をすればどうなるかなど、火を見るより明らかだ。

「ふざけんなよ……。おい、ふざけんな!!　大体そんな事をしてテメェらに何のメリットがある？　俺は親族全員から家督を継ぐ事を拒まれている問題児だぞ!?　何番目の兄貴か何番目の妹かは知らねえが、テメェらだって仕える相手がいるだろう。敵対するバンダービルト家の人間と仲良くしている俺には戦場で死んでほしいと思っているはずだ、違うか!?」

叫ぶようにヘイヴィアは言う。

だが、クウェンサーは徐々に状況が分かってきた。

本当は、ヘイヴィアも理解しているのかもしれない。だが、カレン達が身を投げ出そうとする選択を受け入れたくはないのだ。

『表立って賛意を示す事はできませんでしたが、古い因習を打ち破り、余計な血を流すまいとするあなたの思想には感銘を受けておりました。これまでの暴言の数々は、所詮己の立場を守るため、我々の弱き心が生み出した所業。あなたのように矢面に立つ勇気もなく、ただ自分可愛さに石を投げておりました。謹んでお詫び申し上げます』

「そんな事を聞いているんじゃねえ！　テメェらはただ俺に憎まれ口を叩いていりゃあそれで良いんだ!!」

フローレイティアはこう言っていたではないか。

大規模な武装客船を一日航海させるだけで、二〇万ユーロもの大金が吹っ飛ぶと。

何の理由も目的もなく、たまたま合流した訳がない。

周辺海域にいたのは偶然かもしれない。だが、明確に舵を切って合流してきたのには訳がある。『島国』絡み、『あめのだりん』との戦闘で敗北を喫したとの情報を受けて、ヘイヴィアを支援するためにやってきていたのだ。

命を懸けて。

装備が充実しているとはいえ、分類は民間人。

本物の戦争に首を突っ込めばどうなるかを、理解して、それでもなお。

『あなたはウィンチェル家には絶対必要な人材です。こんな所で奪われる訳にはいかない』

「おい、やめろ、おい！」

しかし一方で、クウェンサーには疑問がある。

『サマーバケーション号』は、どうやって『メガロダイバー』の砲撃を止めたのだ。

五〇センチの艦砲があったとしても、様々なミサイル兵器を搭載していたとしても、『メガロダイバー』は第一線のオブジェクトだ。核兵器すら通用しない兵器をビビらせる事など、普通に考えたらできないはずだ。

何かある。

カレン＝I＝ウィンチェル達は、何かを摑んでいる。

（何だ、それは何なんだ……？）

クウェンサーは携帯端末を取り出した。無線が通じている以上、データ通信だってできるはずだ。現在の、ニューカレドニア方面一帯の戦況を片っ端から呼び出していく。

『ウィンチェル家にお仕えさせていただいて幾星霜。差し出がましくも、時には家庭教師の真似事などもさせていただきましたが……』

『サマーバケーション号』はすでに何発かの艦砲を発射していた。

『正統王国』側への予告もない戦闘行為だったので、向こうの諜報部や情報部門も混乱しているらしい。場所は『サマーバケーション号』から南東三〇キロ弱。ただの海だ。当然ながら『メガロダイバー』にも、『一霊四魂』達の拠点だった島にも、掠りもしない。

ただ、この一撃が『メガロダイバー』の行動を変更させたのは間違いない。

（まさか……？）

クウェンサーは携帯端末を操作した。

呼び出した情報は、かつて自分自身で報告したものだった。

（音叉魚雷……？　『メガロダイバー』の音響探査を補助するために放たれていたあれか!?）

心臓の鼓動を強く感じる。

己の視界がただ一点へと集束されていくのが分かる。

対『メガロダイバー』の命題は三つあったはずだ。その最後が明確に脳裏へ浮かぶ。

防御システム『タタミガエシ』の圧倒的な精度について。普通に音を頼りに展開するだけでは超高速のレーザービームなどには追い着かないはずだが、あれだけの爆音の渦の中、一体どうやって正確な状況把握をしているのか？

早くしろ、とクウェンサーは自分を急き立てる。

演説が終わってしまう。

彼女達が最期の行動に出てしまう。

その前に。

『この下賤な身が、ウィンチェル家を強く導くあなたの未来への礎となれた事。カレン＝Ⅰ＝ウィンチェルら一同、心より嬉しく思います。以上です』

どうしようもない叫び声が、ヘイヴィアの口から洩れた。
きっと、相手は笑っているはずだった。

艦橋にいるカレン＝Ｉ＝ウィンチェルはそっと通信を切った。
部下からの報告があったのは直後だった。
『着弾確認！　効果ありと判断。『メガロダイバー』、針路を変えてこちらへ接近してきます!!』
もう止まれない。
止まるつもりもない。
しばしの余韻を捨てて、彼女は思考を切り替える。
「了解。総員、戦闘配置！　以降、『正統王国』からの通信は無視してください。主砲斉射用意。ヘイヴィア様らを逃がすため、戦線に混乱をもたらすのが目的です。島の南側沿岸部分を狙ってください！」
この戦いには勝てない。
虎は放たれた。人の身で立ち向かっても貪られるだけだ。

そこに、どんな意味を見出すか。
それだけしかない。
「どうか御無事で、ヘイヴィア様」
長い夜が明けようとしていた。
広大な海が、その隅々まで、一斉にオレンジ色へと燃え上がる。

13

「ヘイヴィア」
ボロボロになったタンカーの船底で、クウェンサーは呼びかけた。
『貴族』の少年は応じなかった。
「ヘイヴィア、聞け!!」
「うるせえな!!　今さら何だってんだ!?　こんなクソむかつく結末の先に、まだ何かやろうとしてやがんのかよクウェンサー!!」
「だからそんな終わらせ方はさせないって言っているんだ!!」
思わずヘイヴィアが黙り込んだ。
構わずにクウェンサーは続ける。

「カレンさん達が何を狙っているのかは分かった。どうして『メガロダイバー』が絶対の自信を失ってカレンさん達を沈めようと目標を切り替えたのかも！　……どうするんだヘイヴィア？　あのクソ野郎のアキレス腱は俺の頭の中にある。だけど、そいつを攻撃するっていうのは、カレンさん達が必死になって作ってくれた生存のチャンスを自ら棒に振るって事だ。さあどうする！　彼女達の気持ちを踏みにじってでも前へ進む覚悟はあるか!?」

「……上等じゃねえか」

ヘイヴィアは。

静かに、呻くように言った。

「お涙頂戴なんてのは俺の柄じゃねえ。全部ぶっ壊して大笑いしてやるぜ……」

クウェンサーは手を差し伸ばす。

その手を摑んで、ヘイヴィア＝ウィンチェルは力強く立ち上がった。

「まずは目の前の防火扉だ。こいつを何とかして、船の甲板まで上がるルートを見つける。時間はないぞ。『メガロダイバー』がカレンさん達を皆殺しにする前に、アキレス腱を嚙み千切らないと」

重油などを満載にする事を想定したタンカーの防火扉は分厚い。

普通に扉の表面に爆弾を取り付けたところで破壊はできない。爆風は弱い方へと逃げてしまうため、クウェンサー達のいる方へと吹き荒れてしまうからだ。

ドリルなどで扉に穴を空け、内部に爆薬を仕掛けるのが手っ取り早いのだが……、

「おい」

声を掛けてきたのは、水密扉を体当たりで破壊した大柄な兵士達だった。

「お前は爆弾を扉に仕掛けろ。俺達のバックパックを扉の前に積む、土嚢の代わりだ。その上で俺達が全体重を掛けてバックパックを押さえつければ、爆風はこっちには流れてこないだろう」

「……それはそうだけど、分かっているのか？　そんな事すればアンタ達の両腕は間違いなく衝撃で折れてしまうんだぞ！」

「分かってて言っているんだよ」

ゴキゴキと肩を鳴らし、自分の腕をぐるりと回しながら、大柄な兵士二人は共に笑っていた。

「おい『貴族』サマ、家のメイドを助けに行くためにオブジェクトに立ち向かうんだろ。だったらこんな所でモタモタしているんじゃねえ。自分の仕事に集中しろよ」

「……済まねえ」

「後で何人か紹介してくれよ。メイドさんだけの合コンなんて『正統王国』的に天国じゃないか」

「やっぱ地獄に落ちろよクソ野郎」

作戦は迅速に決行された。

ズム!!　というくぐもった爆発音と共に、錆びついた防火扉が奥へと吹き飛ばされる。
歯を食いしばってのた打ち回る兵士達の横を通りながら、クウェンサーは言った。
「誰でも良い、手当てをしてやってくれ。カービン銃のストックを外せばギプス代わりにできるから……」
「……づっ……。うるせえ、さっさと行けよ！　命の恩人が待っているんだ!!　これでメイドさんが一人でもくたばったら許さないぞ!!」
その声に背中を押されるように、クウェンサーとヘイヴィアの二人は奥へと走った。
すぐ近くにあった階段を駆け上がり、上を目指す。
「具体的にやどうすんだよクウェンサー!?」
「携行式のミサイルは持ってるな？　そいつを使う!!」
叫んだ途端、クウェンサーは金属製の階段を踏み抜いた。ヘイヴィアに腕を摑んでもらい、何とかバランスを持ち直す。
「カレンさん達の『サマーバケーション号』は馬鹿デカい艦砲で何もない海を狙っていた。そこには音叉魚雷があったんだ。覚えているか、ヘイヴィア？　硬式潜水服で『メガロダイバー』に接近した時に見ただろう」
「Uの字の音叉をつけた魚みたいなロボットだよな？　確か、音で敵を識別する『メガロダイバー』にとっては目と耳を増やすようなもんだって……」

「そうだ。砲撃されたのは『メガロダイバー』から一五キロ地点。三つか四つかは知らないが、あいつは自分を中心にいくつかの音叉魚雷を常に配置している。一つの音を複数の方向から読み取って、微細な波長の違いから正確な敵の位置や動きを捕捉しているっていうイメージに近いのかな。きっと、砲撃前のレンズや砲身の微細な軋みを聞き分けて『先読み』しているんだ」

「で、カレンはその一つを吹っ飛ばした……」

「歯牙にもかけていなかった虫が、目の中に入ってきたんだ。そりゃ振り払いたくもなるだろうさ」

上を目指す。

ただひたすらに上を。

バゴン!!　という激しい音と共に、水密扉が開いた。

すでに夜は明けていて、朝焼けのオレンジに海一面が燃え上がっていた。

「急げ！　外に出た以上は心音を探られるリスクが高まる。レーザービームで焼き払われる前に携行式のミサイルを使うんだ。もう一度、ヤツの目と耳を潰しにかかるぞ!!」

「了解!!」

ヘイヴィアは肩紐で掛けていた巨大な筒を取り外す。

空気を切る音がクウェンサー達の頭上を追い越した。

直後に、ここからでも見える島の沿岸部が凄まじい勢いで爆発した。地形全体が大きく抉り取られ、新しい湾ができてしまっている。

「艦砲!?　カレンの野郎……。こんな時まで俺らを援護するつもりかよ!?」

「無駄口は後だ。方角は北北西、五キロ圏のギリギリだ。『メガロダイバー』の動きに合わせて泳いでいる金属反応があるはずだ。センサーで探せ!!」

叫びながら、クウェンサーも甲板の手すりから身を乗り出し、センサー付きの双眼鏡で海を観察していく。

ヘイヴィアはミサイルの発射筒を肩で担ぎ、照準用のレンズを覗き込む

「どこだ、ねえぞ、どこだ!?」

「必ずある！　……見つけた。北北西四・五キロ！　照準しろ!!」

双眼鏡の狭い視界の中で、オレンジ色の海水を突き破るようにして、Uの字の大きな金属塊が垂直に立っていた。どうも深海を泳ぐ時と違って、海上戦闘時にはブイのように展開するらしい。

「こっちも見つけたぜ。あいつを撃てば良いんだな!?」

「それじゃ駄目だ」

その声に、ヘイヴィアは怪訝な顔でレンズから目を離した。

「何だって？」

「カレンさん達だって音叉魚雷を吹き飛ばしているんだ。でも、結局は元の態勢に戻っている。単に爆破しただけなら、次の音叉魚雷を撃てば良い。減った数は補える」

「じゃあどうしろってんだよ!?」

「考えがある。センサーでの照準は切れ。音叉魚雷の手前、三メートルから五メートルくらいの所にミサイルを落として爆破するんだ」

「それじゃ音叉魚雷は壊れねえだろ」

「壊すのが目的じゃない。早く!!」

急き立てられ、ヘイヴィアはもう一度ミサイルを構え直した。

一度センサーで音叉魚雷の現在位置を確かめてから、作為的にスイッチを切る。これでミサイルは誘導されない。発射されたまま、ただ直進するだけだ。

「どうなっても知らねえぞ!!」

叫び、ヘイヴィアは引き金を引いた。

噴射煙の尾を引いて海を突き進む爆発物は、彼らの狙い通りの場所へと落ちた。

爆音と共に、凄まじい勢いで水柱が噴き上がる。

「成功だ。行くぞ！」

「行くってどこに!?」

「真下。ゴムボートがいるんだ!!」

言うなり、クウェンサーは甲板を走ると、自分達が乗っていたゴムボートを見つけた。迷わずに手すりから跳ぶ。

ヘイヴィアもその後に続いた。

「ヘイヴィア、ボートのエンジンを頼む。今すぐあの音叉魚雷の所まで行くんだ!!」

「分かったから説明してくれ!!」

軍用のゴムボートがオレンジ色に輝く海を突き進む。

『メガロダイバー』からのレーザービームは飛んでこない。向こうはその気になれば人間の心音さえ正確に捕捉できるという話なのにだ。

「ヤツは多様な高性能マイクと分析用スパコン、そして周辺に配置した音叉魚雷からの共振を利用して、爆音の渦の中でも正確迅速に敵の音紋を探し出す。逆に言えば、どれか一つにでも不備があれば万全の態勢は維持できなくなるんだ。一番簡単なのは音叉魚雷だろう。あいつは今、間近で起きた爆発でひっくり返っている。音叉は通常通りに動いていない」

「だから俺らも助かっているって？　でも、だったら何でその音叉魚雷のトコに向かってんだ？　そもそも爆破しなかったのは……」

「さっきも言った通り、単に破壊しても新しい音叉魚雷を補充すれば済む。それだと黄金比は崩れない。カレンさん達はそこで失敗したんだ。別の手を考える必要がある」

ゴムボートは海を進むというより、ほとんど跳ねるように移動していく。子供の頃にやった、

平たい石を投げて川の水の上を飛び跳ねさせる、水切りに近い。振り落とされないようにするのも大変だった。

「そんなもんどうすりゃ良いんだ？　『メガロダイバー』側のストックがなくなるまでひたすら破壊し続けんのか？」

「それでも良いけど時間がない。だから今回は逆手に取る」

「あん？」

「黄金比を崩せれば良いんだ。数を減らすのが無理なら……増やせば良い」

シュシュッ!!　という泡立つような音がクウェンサー達の真下を通過していった。

水面近くを泳ぐように進む魚ロボット……音叉魚雷のものだ。

「何だ今の!?」

「システムの不備を感じた『メガロダイバー』側が新しい音叉魚雷を放ったんだ。狙い通り！」

ゴムボートはほどなくして目的の海域に辿り着いた。

「ヘイヴィア、ひっくり返った音叉魚雷を見つけるんだ。ひょっとすると『メガロダイバー』側から停止信号を送られて、沈みつつあるのかもしれない。とにかくそれを引っ張り上げろ!!」

言うなり、クウェンサーは海へと飛び込んだ。

素潜りにもそれなりの技術が必要なのだが、重たい装備を抱えている今ならそれほど潜るの

には苦労しない。むしろ、浮かび上がる方が大変なくらいだ。
予想通り、古い音叉魚雷が沈もうとしていた。
明確に爆破されてしまえば、即座にスイッチを切って放棄してしまっていただろう。
だが中途半端な煽りを受けた結果、立て直せるかどうかで『メガロダイバー』の操縦士エリートはためらったのだ。
音叉魚雷は有限だ。
何発ストックしているか知らないが、バカスカ切り捨てられるものでもないだろう。
クウェンサーは巨大な魚ロボットに抱き着いた。
サイズは大きいが、強化プラスチックなどの軽量素材だ。クウェンサーは音叉魚雷を摑んだまま、不要な装備を海へと切り離す。
人間は、そもそも浮力を持っている。
ヘイヴィアにも手伝ってもらって、海面へと急いだ。
「ぶはっ⁉」
「おいクウェンサー、こいつをどうすりゃ良いんだ⁉」
「ボートにくくりつけろ」
クウェンサーは短く言った。
「すでに『メガロダイバー』は新しい音叉魚雷を放っている。そして俺達は放棄された音叉魚

雷を復活させた。状況は黄金比＋1だ。数のバランスは崩れた。あいつの正確な音響探査システムは失われたはずだ!!」

「そんな簡単に行くのかよ!?」

「数の問題じゃないんだ。システムは予期せぬ状況に弱い。紛い物の音叉を一万個敷設された って切り抜けるだろうが、全く同じ音叉魚雷を『自分の手で』放って黄金比を崩すなんて状況を想定しているはずがない。自殺志願でもない限り、そんな選択肢は選ばないからだ。そもそも『メガロダイバー』のエリートは、今、何が原因でトラブルが起きているかも摑めていないはずさ」

ヘイヴィアはミサイルやアサルトライフルのスリングベルトを取り外した。それを使ってゴムボートの外周にある紐と音叉魚雷を固定させながら、クウェンサーは結論を言う。

「ここからが本番だ。『竹筒』とかいうヤツの弱点を攻撃するぞ、ヘイヴィア」

14

旗艦として使っている偽装巡洋艦の『スカーレットプリンセス号』のブリッジで、フローレイティアは頭を抱えていた。

クウェンサー、ヘイヴィアらの偵察任務の結果は芳しくない。

その救援のために分類上民間人の『サマーバケーション号』が勝手に突っ走った。

整備兵の婆さんから得た未確認の情報によると、『一霊四魂』とかいう組織は『メガロダイバー』を軸に、一二基の動力炉を利用して世界中の海流や海水温度を自在に操り、惑星規模の気象条件を自由に操る全世界気象コントロール兵器『アマテラス』の敷設を画策しているらしい、との情報も入った。

何もかもなし崩し的に『ベイビーマグナム』を出撃せざるを得ない状況になってしまった。

勝算を割り出せない。

ここで負けたらどうなるんだ？　と少々真剣に疑問を感じずにいられない。

トップダウンで命令を下し、作戦司令部が戦況を常に把握しておく、という基本中の基本が失われている。のちのち、小姑のような大佐や准将にねちねち言われるのはもう間違いなさそうだった。

そんな時だった。

クウェンサー、ヘイヴィアらから久しぶりにまともな無線が入ってきた。

『聞こえますか、フローレイティアさん！　聞こえますか!?』

「お前達もう全員ぶっ殺してやる!!」

『良かった、おい、ヘイヴィア、通常運転だ！』

……それはそれで不愉快な評価なのだが、今は拘泥している場合ではない。

「一体何があった？　下の報告不足が深刻過ぎて上はてんてこ舞いだ!!」
『メガロダイバー」は一定数の音叉魚雷を利用して精密な音響探査を行っていました。こっちでそいつの黄金比を崩す事に成功！　あいつは目や耳が失われた状態です。今なら「ベイビーマグナム」の主砲で簡単に討ち取れる！「メガロダイバー」が混乱から立ち直って、余分な音叉魚雷を抱えている俺達を攻撃する前に終わらせてしまってください!!』
「何が目や耳が失われた状態よ馬鹿野郎」
呆れたようにフローレイティアは言葉を返した。
いくつもある画面の一つに目をやる。そこで躍っている複数の光点に注目する。
「『メガロダイバー』は元気いっぱいにお姫様と戦っている！　例のタタミガエシは何故か使わなくなったが、それ以外は万全だ。とても目隠しされているようには思えん!!」
『え……？　そんなはずは、それってどういう……』
「いつからそんなに偉くなった!?　自分の目で確かめろ!!」

15

オレンジ色の海をゴムボートが走っていた。
「おかしいぜ。ボートがまともに進まねえ。まるで粘ついた泥ん中でも進んでいるみてえだ」

「タタミガエシ……『水遁の衣』のせいだ。天然高分子を使って海水の粘度を増しているんだろ」

「なんてこった。モーターが焼きついたりしねえだろうな」

『メガロダイバー』のいる方へと接近していく。

同じ海域には武装客船の『サマーバケーション号』があった。船体後方に大きな損壊があるが、未だに沈む様子はない。ひとまずは無事だったようだ。

そして『ベイビーマグナム』。

『メガロダイバー』の前に立ち塞がるように、お姫様のオブジェクトが展開されていた。

二機は激しい戦闘を繰り広げている。

安心はできない。

流れ弾が当たっただけでも『サマーバケーション号』が沈む懸念はある。

さらに、

「おい……何だありゃ。あんなのこれまでなかったはずだ!!」

「『島国』が造ったラスボス仕様だろ？　いくらでも変形を残しているって訳だ、ちくしょう!!」

目の前の脅威を見て、ヘイヴィアが呻くように言った。

飛び跳ねていた。

元々、『メガロダイバー』は超高水圧のウォータージェットを噴射する事で絶大な推力を得ていた。機体後部にある複数の大型ノズルから天使の羽のように莫大な海水を噴き出していたはずだが、それを真下に解き放つ事によって、時に一〇〇メートル以上も一気に飛び上がるのだ。

着水時にはその巨重を使って海中へと沈み込む。そしてまた怒濤の勢いで海面を突き破って現れる。前後左右への高速移動に加えて、上下の揺さぶり。『サマーバケーション号』を守るため、その近くで応戦しているお姫様が翻弄されているのが、ここからでも分かった。予測の困難な動きの連続に、照準を合わせるのにも苦労しているらしい。

「空飛ぶ水上レジャーっていうのがあったはずだ。ウォータージェットを真下に使って人間を空中に浮かび上がらせるオモチャ。あれをとことん巨大化させたんだ」

何しろ二〇万トンの塊を瞬時に浮かび上がらせるほどの大出力だ。生身の人間が近づいたらそのまま挽肉にされてしまうかもしれない。切断ではなく、圧殺。まともな死に方ではないのは確かだ。

「動きは分かった。だがどうやってお姫様との戦闘についてきてやがる!?　ヤツはこの音叉魚雷のせいで目と耳を封じられているんじゃねえのかよ!!」

「予測が間違っていた……？　いや違う。あいつの態勢が十分なら、人間大の標的だって見逃さないはずだ。ここまで近づいたって俺達の心音も、モーターボートのスクリューも探られていない。妨害そのものはきちんと成功しているんだ」

「だったらどうして!?」

「『ベイビーマグナム』や『サマーバケーション号』みたいな巨体が生み出す大音響なら、ぼんやりと分析できるんだ。大雑把な位置情報だけなら分かるんだろう」

ごくりと喉を鳴らして、クウェンサーは答える。

この予測は、当たっていてもあまり嬉しくない。

「……後は操縦士エリートの技量の問題だ。あいつはぼんやりしたデータを受け取るだけで、お姫様の行動パターンを読み切っている。うちのお姫様だって、レーザービームやレールガンの砲撃そのものを見てかわしている訳じゃない。照準レンズの軋みや砲の微細な動きから、発射前動作を先読みして回避している。あいつは、それを、『オブジェクト全体の動きや位置取り』から把握しているんだ」

「おい、ちょっと待て。それってつまり、『メガロダイバー』は目隠し状態のままでも普通に戦えるサムライ女って事なのかよ!?」

「正確には目隠しとはちょっと違うのかもな。内気な三つ編み図書委員ちゃんからドギツいメガネを借りてフェンシングをしているっていうか……」

「どっちにしたって同じだ！　俺らは一体命を懸けて何をやっていたんだ!?」

『メガロダイバー』にとっても、お姫様の主砲は脅威だ。だが、いつまでも『サマーバケーション号』を守り抜けるとは限らない。

その時だった。ぽつっ……と水滴がクウェンサーの頬に当たった。

凄まじい勢いで海水を噴射しながら高速戦闘を繰り返す『メガロダイバー』が撒き上げた飛沫がここまで飛んできたのかと思ったが、違った。

まさに一瞬だった。

空を見上げても朝焼けのオレンジ色の光にうっすらとした雲が染め上げられているだけなのに、いきなりバケツをひっくり返したような豪雨が降り注いできたのだ。

「くそっ!!　今度は何だってんだ……!?」

「ただの天気雨？　いや……」

ザァザァと降りしきる雨は、軽く見積もっても一時間に五〇ミリはありそうだった。そして豪雨を受けた戦況が、緩やかに変化していく。

平たく言えば、お姫様の砲撃の照準にブレが生じ始めているのだ。

「……赤外線、紫外線、レーダー波……照準に使う各種の媒体は大雨に弱い。何だ、何なんだ……？　まるで天気そのものが、『メガロダイバー』の味方をしているみたいな……」

「天気が、味方する……？　おいちょっと待て、それって……!!」

ヘイヴィアの声に被せるように、無線機からノイズ混じりの声が飛んできた。

フローレイティアのものだ。

『「一霊四魂」とかいう組織が「アマテラス」を動かしたようだ。全世界気象コントロール兵器の実証試験を行うと軍上層部へ通達があったらしい。新兵器のデモンストレーションが成功して上層部が及び腰になればチェックメイトを決められるぞ！　誰もがならず者に頭を垂れる時代の始まりだ。どんな手を使っても良い、全力でお姫様を支援しろ!!』

「やってます!!　くそ……『一霊四魂』のヤツら、ついに神様のお仕事に手を伸ばしたっていうのか……!?」

大量の雑音を生み出す豪雨は、音響探査にとっても不都合なはずだ。だが、元から激しい妨害を受けている『メガロダイバー』は、自分の回復より敵機の妨害を優先したらしい。徹頭徹尾、『勝つ』事しか考えない獰猛な考え方だった。

「これじゃどうにもならねえぜ！　音叉魚雷を封じられて、自ら土砂降りの天気雨撒き散らして辺り一面ノイズまみれにしたって『メガロダイバー』は正確にお姫様へ喰らいついてる。有効打なんて当たらねえよ!!」

「音叉魚雷については丸っきり無駄だった訳じゃない。現に最大級の問題だった『水遁の衣』をヤツは使うのをやめた。精密な情報把握が必要な防御システムは使えなくなっているんだ。だから動きが大雑把になっている」

それに、と彼は付け足すように、
「戦艦やオブジェクトみたいな巨大目標ならともかく、俺達みたいな人間大の小さな目標は野放しなんだ。……そしてヤツのネックも分かってる。機体下部の吸水口『竹筒』。俺達なら攻撃できる、ヤツの死角を突いて」
「……カレン達を助けられりゃ何でも良いぜ。具体的にどうすりゃ良いんだ？」
「やるべき事は簡単だ。例の『竹筒』は一秒に何トンもの海水を汲み上げる怪物ポンプだ。海中の……五メートルくらいだったか？　そこらへんに適当な異物を漂わせておけば、馬鹿デカい掃除機が勝手に吸い込んでくれるさ」
「『竹筒』の直径がどんなもんか知らねえが、かなりデカいキャップがいるな」
「ビニールシートとか、羽毛布団とか、そういうのがあれば良いんだけど」
「ならメイドに頼もうぜ。あいつらが乗ってんのは豪華客船だ。ベッドなんか三五〇〇以上あるはずだ。シーツや布団だって。片っ端から投げてもらえば良い」
おーい、とヘイヴィアはゴムボートの上から両手を振って『サマーバケーション号』の方へ声を掛けた。
が、運悪く二機のオブジェクトの砲撃がまともに交差した。
お姫様の放ったコイルガンの金属砲弾が粘ついた海面へ直撃する。凄まじい波が生み出され、ゴムボートがひっくり返りそうになった。クウェンサーはどうにかしてボートの縁に摑まった

が、両手を挙げていたヘイヴィアはそのまま落ちてしまった。
「ヘイヴィア!?」

一方その頃、『サマーバケーション号』の艦橋に連絡が入ってきた。
『ヘイヴィア＝ウィンチェル様らしき人影を捕捉しました。左舷二〇〇メートル』
「……まったく。これでは何のために命を懸けたのやら……」
自然とこぼれた声に、隣にいたメイドはコメントを控えた。
今のカレンの表情について言及すれば、ろくな事にはならないだろうと判断したからだ。
代わりに黙って双眼鏡を差し出す。
（ああ、ああ、まったく、ヘイヴィア様）
カレンは指示通りに左舷側の窓へ近づくと、双眼鏡を使って確認する。
ぶっちゃけ、超キュンキュンしているのだった。油断するとハレーションいっぱいの画面に、背景には色とりどりの花でも咲き乱れそうなレベルである。
（……非効率的で合理性に欠け条理にさえ反していますが、『貴族』の社会において、そういう愚直な選択を選べるあなただからこそ、我々はお慕い申し上げているのですよ）
でもって、我らが主君ヘイヴィア＝ウィンチェルはと言えば……、

「いっ」

ごぼごぼに粘ついた海面から、何か怪物らしきものが生まれようとしていた。

それは全身の大半をドロドロの粘液に覆われた、人相も指の数も分からない海洋性モンスターそのものだった。

ぬぶわぁー……と両手を広げて世界へ解き放たれようとしているその怪物を目の当たりにし、カレンは思わず子供の頃に観てトラウマになりかけた古いホラー映画を思い出した。

一瞬で乙女補正が吹っ飛ぶ。

むしろ揺り返しの分、受けたショックが大きくなった。

「いやァァァあああああああ

「ごぼごぼげぶう……ぷくうー……」

呼吸を求めて海面に出たヘイヴィアは天然高分子によって粘度を増した海水によって全身がくまなくコーティングされていた。口と鼻からも馬鹿デカいちょうちんができている。全体像を一言で表すなら世にも禍々しいローションお化けというかなんというか……まあ、健全な女性が見たらゴキブリ並の拒絶感が生まれるのは否定できないのだが……。

『ではっ、ではあれは一体何だと言うのですか!?　気味が悪い……!!　ああいう手合いは未開のジャングルか南極の地下深くにいるものだと相場は決まっているのに……!!』

「アンタは覆面をつけた身内をそうとは知らずに撃ち抜くのが趣味なのか!?　あれはヘイヴィアだよ、確かに気持ち悪くはなっているけど!!」

ようやく連射が止まった。

不幸中の幸いなのは『サマーバケーション号』のメイド達が混乱していた事だろう。もしも正確な射撃が維持されていたら、ヘイヴィアのグロ度は二〇〇%くらい上がっていたはずだ。つい一〇分くらい前まで感動話とかしていなかったのかこいつらは、とクウェンサーは思わなくもない。

『嘘でしょう……うっぷ。あれがヘイヴィア様……？』

「滅多に会わないから思い出補正でもかかっているのかもしれないけど、ヘイヴィアって全体的にあんな感じじゃなかったっけ？　目に入れても痛くはないってヤツじゃないはずだ」

『……失礼ですが、「私以上にヘイヴィア様の事を知っているんだぜ」みたいな口調は控えていただけると。こう見えて私は一〇歳の時にはすでにウィンチェル家より荘園の一つを任された神童で、ヘイヴィア様が乳母車を必要としていた頃からブツブツ』

「まいったな、アンタの方向性が見えなくなってきたぞ」

無線に向かって言いながら、クウェンサーはゴムボートから手を伸ばしてヘイヴィアの救助にあたった。

摑んだ手は生温かくてぬるぬるしていて、思わず射撃再開の指示を出そうか迷うくらいだった。さっさと大雨で洗い流してはくれないだろうか。

「それより装備を借りたい。ベッドシーツをあるだけ全部、それとレジャー用でも良い、スキューバはあるか？　海の中で動くための道具が欲しい！」

『それは……？』

「ヘイヴィアからの伝言だ、お涙頂戴は似合わないから、全部ぶっ壊して大笑いしてやるってさ。俺達が二人で何とかしてやる。だから早く!!」

それ以上の拘泥はなかった。

武装客船のサイドデッキにメイド達が何十人も出てくる。彼女達は海に向かって必要な物資を次々と投げ込んだ。ベッドシーツの方はもはや巨大な紙吹雪みたいにそこらじゅうを舞っている。

「ヘイヴィア、出番だ。ボートを動かしてくれ」
「うえっ……げほごぶ！　俺が本気で溺れかけていた間になんか酷い話してなかったか？」
「まさかそんな、とんでもない妄想だ」
泥のように粘つく海水の上を、ヘイヴィアの操るゴムボートが強引に進んでいく。頬に当たる大粒の天気雨が痛かったが、それでも速度は随分と落ちていた。ヘイヴィアの懸念通り、あまり長時間使っているとモーターが焼き切れそうな雰囲気だ。
ギラギラとオレンジ色に輝く天気雨の中をボートで疾走していく。
クウェンサーはボートの縁から手を伸ばし、投下された物資を受け取る。
べちょべちょになったベッドシーツが数十枚に、スキューバ用のボンベが二つ。自分で頼んでおいて何だが、ここまで広範囲に散らばると何百枚もあるベッドシーツを全て回収するのは不可能だった。
「行こうヘイヴィア、『メガロダイバー』の真下へ。吸水口の『竹筒』をベッドシーツで塞ぐんだ」
「またあそこに戻るのかよ!?　テメェはまだ本物の地獄ってのを知らねえんだ!!」
二人してボンベを背負い、呼吸用のマウスピースを口に咥える。
上砂降りの中、クウェンサーは早口で言った。
「オブジェクトは海上戦闘を繰り広げているけど、下に潜ったって安心できないぞ。『竹筒』

はプールの排水溝より強く海水を吸い込み続けているし、『メガロダイバー』は戦術の一環として上下に飛び跳ね、海の中にも沈んでくる。巻き込まれたら一発で終わりだ」

「かと言って他のヤツには任せられねえ。メイドの危機は優れたご主人様が助けてやんねえとな、ちくしょう！」

クウェンサーとヘイヴィアは、オレンジ色に染まる海へと跳んだ。

どぷんっ、という音がすでにおかしかった。

（……何これ気持ち悪い生温かいどうなってるのー!?）

手足の指先をぞわぞわさせる嫌な感覚に襲われながらも、クウェンサーはひたすら下へ下へと目指していく。

ある一線を越えると、周囲はサラサラした海水に変わった。

天気雨の雨音も、もう聞こえない。

無線を利用した水中会話装置はない。クウェンサー達は漠然とした指差しだけで意思の疎通をし、一方向に向かって泳ぎ始める。

（『メガロダイバー』は……あれか）

太陽の光が乱反射して、真上を見上げても海上の様子は分からない。全てがオレンジ色の光で埋まっていた。

しかし『メガロダイバー』の位置はすぐに分かった。

海面から垂直に伸びた、太いパイプのようなものが高速で移動している。しかも、常に大量の海水を取り込んでいるのだ。辺りにいる小魚の群れが大慌てで逃げようとしているのがここからでも見える。

（……何だ？　もうすでに小魚を吸い込んでいるのか？？？）

動力炉の冷却や推進装置、酸素の供給など重要システムに直結しているのだ。そんな簡単に異物を取り込むような設計にするとは思えないが……。

ともあれ、やるべき事をやる。

まとめたベッドシーツを抱えたままだと泳ぎにくいが、とにかく『メガロダイバー』目指して突き進む。

クウェンサーは正しく伝わっているかも自信がないジェスチャーで、とにかくヘイヴィアに指示を出す。

（無理に近づくと俺達まで吸い込まれる。ヤツが通りそうなルートにベッドシーツを置いておくだけで良い。後はあいつが勝手に自滅してくれる）

伝わらなかったようだ。

構わず先へ進もうとするヘイヴィアに、クウェンサーは目の前でベッドシーツを広げて手を離した。

まとまっていたベッドシーツの束が一気に広がっていく。

驚いた顔をするヘイヴィアを無視して、クウェンサーは後ろへ下がるように泳ぐ。ようやく意図を摑んだのか、自分のベッドシーツを手放してクウェンサーに従った。

安全な距離、というのをどうやって測れば良いのか分からなかったが、とりあえずベッドシーツから一五〇メートルほど下がって様子を観察する事になった。

その時はすぐに来た。

（『メガロダイバー』だ。例の『竹筒』がベッドシーツを吸い込む!!）

まるで磁石で吸い寄せるようだった。

大きく広がったベッドシーツの群れが不自然な動きを描いて、そのまま『竹筒』の先端へ覆い被さるように吸い込まれていく。何十枚もの布の塊がびっちりと張り付く。クウェンサーは子供の頃に作ったオモチャを思い出していた。紙のチラシに糊をつけ、何重にも何重にも張り合わせて形を整えたレイピアのオモチャだ。明確な芯がなくても、なかなかの強度になる。それと似たような事が、あの給水口で起きている。

やった。

終わった。

これでアキレス腱は食い破った。動力炉の冷却、ウォータージェットの推進力確保、電気分解による酸素の供給。重要システムのことごとくが強制的に停止させられた。

そのはずだ。

だが……、

（……？）

『メガロダイバー』の動きが止まらない。

そのまま垂直に下りた『竹筒』が凄まじい勢いで移動を続けている。それはつまり、海上ではあの巨体が縦横無尽に戦い続けているのを意味しているはずだ。

ふわり、と真っ白なものが視界を彩った。

ベッドシーツだ。毎秒何トンもの海水を取り込んでいるはずの吸水口から、ベッドシーツの群れだけが、バラバラと器用に取り除かれていた。

（何だ？　異物の存在を検知して一瞬だけ吸い込むのをやめたのか。そんなに器用なシステムなのか!?　いや、待てよ、あれは……）

大量のベッドシーツと共に、何かが海水の中を漂っていた。

大きな、しかし薄い……円盤のように見える。

ヘイヴィアはクウェンサーの肩を叩き、真上を指差した。

今のままでは会話ができない。作戦会議のために一度、話し合う事のできる海上へ上がろうという事なのだろう。

クウェンサーも従った。

しかし海面から二メートルは、例の天然高分子ねばねばゾーンなのを忘れていた。

「ばっばぶ!?　ぶぐげぶう、ぷくうーっ!!」
「ごぼごぼ!!　わはははは！　ようこそクウェンサー、人間としての尊厳を奪われたモンスターゾーンへ!!　うえっぷ、鼻に入りやがった!?」
拘泥していられない。
オレンジ色に輝く土砂降りの天気雨の中、気味の悪いローションお化け二匹は意見の交換に入る。
「ベッドシーツ作戦は上手くいかなかったみてえだぞ。一度は吸い込んだけどよ、すぐに離れちまった！」
「ベッドシーツの他に、変な円盤が浮かんでいたよな。『竹筒』のパイプの太さと同じものだった」
ゴン!!　ボン!!　と、こうしている今も、少し離れた場所では『ベイビーマグナム』と『メガロダイバー』が激しい戦闘を繰り広げていた。天使の羽のように大量の水を機体後部のノズルから噴き出し、前後左右上下を自由に飛び回る『メガロダイバー』が、じりじりと押し込むように『ベイビーマグナム』へと近づいていくのが分かる。
どちらかというとお姫様の方が劣勢だ。
ほとんどのセンサー系を封じられているにも拘らず、凄まじい技量だった。何より、イレギュラー続きの状況にあって、その行動に全くブレがない。実力に裏打ちされた強靭な精神力

の賜物だ。……もっとも、これを言うとお姫様がむくれそうではあるが。

「……あの円盤はフィルターだ」

「あん？」

「小魚とかの異物を取り込まないようにするためのフィルター。浄水器と同じようなものなのかな。とにかくそいつが、数センチ、数ミリって単位で縦に重ねられている。それがパイプ状に見える『竹筒』の正体だったんだ」

「おいおい……マジかよ……」

「一番外側にあるフィルターが異物を食い止める。それが限界に達すると、古いフィルターを捨てて目詰まりを取る。そういう仕組みになっているんだ」

「じゃあどれだけやっても『竹筒』を塞ぐ事はできねえじゃねえか!?　キンタロウアメだっけか？　そいつと一緒だ。どれだけ攻撃したって端から切り捨てていけば新しいフィルターが顔を覗かせちまう！」

「……」

クウェンサーは膨大な天気雨を浴び、ドロドロになったオレンジ色の海水を漂いながら、しばし思案した。

その時だった。

無線機から、最近すっかり忘れていた声が飛んできた。

『あ、あ、あのうー！　マリアージュ＝ナイトキャップですけどお……!!』
「あれ？　お前今どこにいるの？」
『「サマーバケーション号」ですよう！　なんか皆さんが感動的に特攻仕掛けようとしている時も乗っていましたあ！　わたし、ウィンチェル家と何のゆかりもないのにい……!!』
そいつはさぞかし悲惨だっただろう。
クウェンサーだってこんなむさ苦しい男のために一緒に死ねなんて言われたら大変困る。
『だからですねえ、わたしは絶対死にたくないんです！　そのためだったら何だってやる所存なんですう……!!』
「世界一ダサい決意の言葉をありがとう、やっぱお前はビッチ女だわ。で、用件は？」
『あのですねえ、ひょっとしたら、「これ」を使えば良いんじゃないかなあ、なんて……』
「……？」
クウェンサーは無線機から聞こえてきた単語に、最初、怪訝な顔をした。
しかし、その真意を知ると一気に表情が明るくなった。
「すごい!!　確かに、それなら可能性はある。アンタを収容所から助けておいて良かった!!」
『へ、えへへ。でも、どうやってきちんと固化させるかには課題もありますけどお……』
「そいつはこっちでやるよ」
『ほ、ほんとーに、何とかしてくださいねえ。これでダメだったらわたしは一人でも向こうに

投降しちゃいますからあ』

「……もう誰にでも尻尾を振るのな、お前。もっかい収容所に送り返してやろうか？」

そして、改めて無線機に口を寄せる。

「『サマーバケーション号』、聞こえるか。追加の支援物資が欲しい。うちは石鹸みたいなレーションしか支給されないからあてにならない。そっちの船だけが頼りだ、協力してくれるか？」

「おいクウェンサー、何をしようとしているんだ？」

「こいつはマリアージュのアイデアなんだけどさ……。あらゆる異物は無限のフィルターで妨害される。『メガロダイバー』の中にはサラサラの海水しか入らない。いいや、ひょっとするとある程度の塩分さえも濾し取られているのかもしれないな」

「だったら何だ!?」

「でもそれは、『異物』でなければすり抜けるって事だ」

クウェンサーは顔についたドロドロの海水を拭いながら、

「普段はサラサラの液体で、フィルターの網の目をきちんとくぐるけど、『メガロダイバー』の機内に入ってから固まるような物質があれば、時間差攻撃が行える。あのフィルターを無視して中を攻撃できるんだ」

「そんな接着剤みてえに都合の良い物がどこにあるってんだ。そもそも、海水は吸い込んだ後

にどれくらい機内に留まるんだよ？」

「もの自体は簡単だよ。ただ、まあ、そうだな。海水を吸い込んでからウォータージェットの推進力として吐き出されるまでの正確な時間は確かに知りたい。『サマーバケーション号』！」

『何でしょう？　ご準備するものは？』

「いくつかある。まずは艦砲はまだ使えるか？」

『兵装の七〇％は健在です。主砲の斉射も滞りなく』

「蛍光ペイント弾を詰めて、『メガロダイバー』の近くに落としてくれ。上空の観測機が基準点として記録する時に使うヤツ。できるか？」

『自動装填ですが、砲弾の切り替えから発射まで二分かかります』

ヘイヴィアはクウェンサーの無線機を奪い取ってこう割り込んだ。

「一分でやれ。命令だ!!」

『ずきゅーん☆』

「何だよ今の効果音!?　口を使うなら言葉を出せ!!」

『い、いえ、メイドとして少々鼻血が……。そうではなく、手動装填で強引に押し込み、二〇秒で何とかします』

ヘイヴィアがクウェンサーに無線機を返すと、宣言通りの艦砲射撃があった。

『メガロダイバー』の一帯が、朝焼けのオレンジ色から不気味なくらい眩い緑色に変化してい

く。その海水をオブジェクトが吸い込んでいく。
「カウントだヘイヴィア」
「四八、四九、今！　吸い込んでから五〇秒!!」
「これで分かったな。おおよそ、二五から五〇秒で固化するような液体があれば良い」
「どんなだよ？　瞬間接着剤じゃ早すぎるし、普通の接着剤じゃ遅すぎるぜ!?」
「もっと身近なものだよ」
土砂降りの中、クウェンサーは無線機に再び口を寄せる。
「『サマーバケーション号』。ありったけの牛乳が欲しい。そちらの備蓄はどの程度ある？」
「牛乳……？」
ヘイヴィアは怪訝な顔をした直後、
「そうか。ヤツは冷たい海水を取り込んで灼熱の動力炉の冷却に割り当てる。大きな温度差があれば、ホットミルクの膜みてえなもんができる余地だって……」
『備蓄はおよそ一ヶ月分。補給直後ですので腐るほどありますが』
「あるだけ全部持ってこい。ケースに入れて投下してくれ！　それからもう一つ頼む!!」
話を聞いたカレンは、怪訝な声でこう答えた。
『そんなものでよろしいのですか？』
「頼む。マリアージュのアイデアだけじゃ不完全なんだ！」

粘ついた海面を進むのは時間の無駄だ。クウェンサーとヘイヴィアは再びスキューバのマウスピースを咥えて海の中に潜ってから、『サマーバケーション号』の近くへと一度引き返す。

ぬぶわぁー……とモンスター一匹が海面から飛び出すと、再びカレンの悲鳴と重機関銃の乱射騒ぎが巻き起こった。

誤解を解きながら、クウェンサーとヘイヴィアは投下された牛乳缶の回収に移った。

と言っても、救命胴衣や浮き輪をくくりつけたドラム缶が浮いている訳ではない。何しろ三トンから四トンはある。ベッドシーツを相当数回収できなかったミスを考慮し、カレン達は牛乳缶を満載にした救命ボートを直接ワイヤーで下ろしてきたのだ。

牧場にあるような分厚い金属缶がみっちり詰まったボートというのはなかなかにシュールな絵面だった。

「救命ボートのロープ摑んだぞっ。ヘイヴィア、こいつはどこにくくりつければ良いんだ？」

「こっちに貸せ。それにしても、大丈夫か？　ただでさえドロドログチャグチャの海水のせいでモーターが悲鳴上げてるってのに、こんなの曳航しちまってよ」

ゴムボートと救命ボートを太いロープで繋げると、クウェンサー達はゴムボートの方に身を乗り上げた。後はゴムボートのモーターを使って強引に引きずり回せば良い。

「行くぞクウェンサー」

「おお」

先ほどよりも、さらにモーターの音は悲鳴を上げていた。ただでさえ粘ついた海の上で、重量もかなり増している。いつ煙を上げるかも分からない。帰りのアシは期待できないかもしれない。

そして二機のオブジェクトが荒れ狂うように高速移動を繰り返す海上の騒ぎは、海中の比ではない。間違って激突されたら木っ端微塵だ。二〇万トンの塊が時速五〇〇キロで突き進んでいるのだ。列車との正面衝突どころではない。

「やべえな、これじゃあんまり近づけねえぞ！」

「張り付く必要はない。海流を読めよ、上から流せば後は勝手に『メガロダイバー』の方に流れてくれるさ」

「まさかと思うけど、容器の蓋開けて、つずつ海に流すなんて言わねえよな？　一体いくつあると思ってんだ!?」

「じゃあヘイヴィア、ボートを繋いでるワイヤーをナイフで切ってくれ。こいつで吹っ飛ばそう」

言いながら、クウェンサーは曳航していた救命ボートの真ん中に、電気信管を突き刺したプラスチック爆弾を放り投げた。

制御を失った救命ボートは海流に乗ってゆらゆらと頼りなく海を進んでいく。

爆弾を使うまでもなかった。

猛スピードで横から突っ込んだ『メガロダイバー』が、救命ボートごと無数の牛乳缶を薙ぎ払ってしまったのだ。

一面が濃密な乳白色に侵蝕されていく。

「すげえ牛乳風呂だ、こんなの環境汚染だぜ。一週間後にはこの辺一帯、腐った雑巾みたいな匂いがするんじゃねえの？」

「ああもう、救命ボートごと爆薬で吹っ飛ばした方が確実だったのに。ていうか、『霊四魂』の計画が成功したら地球って星が崩れるんだ。そいつに比べりゃマシだろうさ」

大量の牛乳缶を乗せた救命ボートがバラバラになった後も、しばらく待った。

やがて、変化が起きた。

「色が変わった……」

観察していたヘイヴィアが口を開いた。

注目しているのは『メガロダイバー』の機体後部。天使の羽を作る複数のノズルだ。

「ウォータージェットの色が白みがかってやがる！」

「牛乳を無事に吸い込んでいるんだ」

「でも、これじゃ駄目だろ？　外に放出されたんじゃ失敗だ！　中でホットミルクの膜みたいに変化して、パイプを塞いでくれなくちゃ作戦は失敗だ!!」

「慌てるなよ。チャンスは一回だけじゃないんだ。吐き出された海水は何度でも『メガロダイ

バー』が吸い込んで再利用する。ある程度の失敗は問題じゃない」

それでも、『メガロダイバー』が止まる雰囲気はない。

ヘイヴィアは呻くように言った。

「ホットミルクの膜は、牛乳を温めたから発生するんじゃねえ。温めてから、再び冷える時にできるんだ。動力炉の冷却に使われるパイプは確かに高温になるかもしれねえけど、それだけじゃ条件が足りねえ！　これじゃいつまで待っても駄目だ!!」

「いいや」

クウェンサーは悪友の嘆きを一言で否定した。

「まだだ」

「その余裕はどこから来るんだよ!?　……って、おい。テメェさっきから何を……」

「そもそも俺は牛乳を使うとは言ったけど、別にホットミルクの膜を使うとは言ってない」

クウェンサーは何か作業をしていた。

ゴムボートの隅に置いてあったクーラーボックスだ。蓋を開けて中身を確認すると、クウェンサーは救命ボートに常備してあった救命胴衣を膨らませ、クーラーボックスの周りにくくりつけていく。

クーラーボックスの蓋を閉める直前、横で見ていたヘイヴィアはチラリと中身を見ていた。

それは日にも鮮やかな黄色の塊だ。

クウェンサーは作業しながら言う。
「カレンさんに追加の注文をお願いしていたんだ」
「何だよそりゃ？　……おい、ちょっと待て……」
ヘイヴィアが眉をひそめている中、クウェンサーは背中のバックパックから取り出したプラスチック爆弾に無線で起爆できる電気信管を突き刺して、みっちりと黄色いボール状の物体を詰めた牛乳缶の側面に取り付ける。
ようやく気づいた。
「おいおいおい！　レモンを使って牛乳を固めるってのか!?」
クウェンサーは救命胴衣をつけたクーラーボックスをボートから海へ放り出した。
ぬるぬると滑る手を使って、無線機を握り直す。
「牛乳を固める方法は一つじゃない。どこにでもあるもので固められるんだ。メイドさん達は紅茶にも詳しそうだったし、絶対持っていると思っていた」
「……言われてみりゃ、カッテージチーズの作り方にもあるけどよ」
「レモンの果汁を混ぜる事で、牛乳にとろみをつける事ができる。加熱や冷却の必要がない、もっと手っ取り早くて確実な方法だ」
クーラーボックスがゆっくりと離れていく。
凄まじい速度で海上を行き来するオブジェクトを追う事などできない。敵の方から近づいて

くるのを待つ。

その時はすぐに来た。

お姫様のコイルガンを真上へ跳躍する事で回避した『メガロダイバー』が、地雷を踏み潰すような格好で、海面へ勢い良く着水したのだ。

そして、クウェンサーは無線機の親指に力を込めた。

まるでそれが何か巨大なシステムを落とすスイッチのようだった。

「つまり、これでフィルターをすり抜けて、機体内部で牛乳を固められる。絶対にだ」

ゴゴンッッッ!!　と。

目に見えて『メガロダイバー』の動きが食い止められた。

間近で起こった小さな爆発。それによって撒き散らされたレモンの果汁は莫大な海水に希釈される事もなく、そのまま吸水口から呑み込まれていったのだ。

それは迅速な化学反応を生み出す。

レモンに含まれるペクチンと牛乳の組み合わせによって、ゼリー質へと形を変える。

巨大な翼のように海水を噴き出していた天使の羽のようなウォータージェット式推進装置が、びたりと止まっていた。それは氷山の一角に過ぎない。動力炉と隣接するように配置された冷

却パイプの中では、固まった牛乳が膨大な熱によって焦げ付きを起こしていた。水流すらも無視して張り付いていく焦げ付きは、どんどん大きくなっていく。まるでコレステロールが人間の動脈を塞いでいくように、致命的な妨害を形成していく。

JPlevelMHD 動力炉。

オブジェクトの『心臓』が、荒れ狂う。その制御に不可欠な冷却が滞る。

クウェンサーは無線機をオープンにして、聞こえる限りの全員へ大声で伝えた。

「体を伏せて目を閉じろ!!　動力炉の爆発が来るぞ!!」

一〇秒もなかった。

凄まじい爆音と閃光が、オレンジ色に染まる海を埋め尽くした。

ゴムボートは勢い良くひっくり返り、クウェンサーとヘイヴィアの二人は再びドロドロお化けと化した。

「ごぶうー!!」

「ぷくうー!!」

説明を求めたその場の全員が、双眼鏡や超望遠カメラ越しに本物のバケモンの姿を確認してしまった。

もう変なあだ名ができてしまいそうなほどの無様な有り様だった。UMAちゃんとか。

溺れないよう、ひっくり返ったボートの縁に両手で摑まりながら、クウェンサーとヘイヴィ

アの二人は救助のヘリを待つ。
猛烈な嵐のような天気雨は、まるで蛇口を絞るように不自然な勢いで、ピタリと止んでいた。
『メガロダイバー』の爆破に合わせたような正確さだ。
ふとヘイヴィアはこんな事を尋ねた。
「おいクウェンサー、何で最後の通信をオープンにしやがったんだ？」
「いや、確かに軍の周波数でも良かったんだけどさ。『サマーバケーション号』ってどうなってるか分かんないじゃん？　ブリッジとはそのまま繋がっていたけど、甲板で作業していた他のメイドさんに伝わるとは限らなかったし。だからオープンにしたんだよ」
「ふうん」
ねばねばの手で滑りそうになりながらも、ヘイヴィアはボートの縁を摑みながら続ける。
「そのせいで、向こうの操縦士エリートまで脱出してなかったか？」
「別に捕まえれば良いだろ。黒幕の『一霊四魂』っていうのについても詳しい話を聞かなきゃならないんだしさ」
「これだよ。エリートが女の時だけ博愛主義を気取りやがってさ」
「影武者は近くで見るとあんまり美人じゃなかった。本物には期待しているんだ」
「ぐるぐるメガネちゃんじゃねえんだ、そう都合良くいくかよ。まんまブサイクに一〇〇ユーロだ」

「乗った。俺は『実は美人』に一〇〇」

言葉を遮るように、大型の輸送ヘリがやってきた。

対空レーザーの脅威が存在しない世界、その証明。

つまり、戦争は終わったのだ。

終章

『新しい条約が必要だな』

その声を聞いて、フローレイティアは頭を抱えた。

旗艦の代わりに使っている偽装巡洋艦の『スカーレットプリンセス号』、そのブリッジに彼女はいた。艦の設備ではなく、自前のノートパソコンからは、小姑のような大佐の低い声が響いていた。

『例の……「アマテラス」、だったか。全世界気象コントロール兵器。海流の要衝から「一二支」の動力炉を引き揚げる作業は進められている。「資本企業」に返却するかどうかは未定だがね。統制していた「メガロダイバー」が失われた以上、「一霊四魂」の残党には操作も起爆もできないようだ。……だが、今後、この要衝に他の世界的勢力が海上要塞を築いたり、動力炉を沈められたりしたら面倒だ。何かしらの楔を打っておく必要がある』

「……色々すみません」

『君が謝るような事じゃない。悪いのは全て「一霊四魂」の連中だ』

「手足となって動いていた、自防ＰＭＣは戦意を喪失しているようです。大量の捕虜にも食事と寝床を与える必要があるので、経理の方はいっそ殺してくれれば良かったのに頭を抱えているようですが……」

『まあ、所詮はカリスマに従っていれば全員もれなく天国が待っているなどと考える程度の人形達だ。オブジェクトと指導者の双方を同時に失えば、迷走もして当然ではあるだろう。駄々っ子のように暴れ回らなかっただけでもその知性を褒めてやるべきではないかね？』

ちなみに、そうなっていればフローレイティアはオブジェクトに命令を出して容赦なく狩り出すつもりだった。『白旗』の信号に応じるくらいの慈悲は与えるが、抵抗を続ける場合まで配慮をする必要もない。クリーンな戦争は、奇麗ではあるが優しいと同義ではない。

残る問題は『アマテラス』。

あるいは、その後継種が生まれる可能性について、だ。

「しかし、この戦争の時代に国際条約なんて締結できるものなのでしょうか？　どこもかしこも軍拡を進めたいはずです。たとえそれが破滅的なものであっても新しい兵器の可能性については模索したいというのが本音なのでは？」

『軍の最高司令官は皆、軍属ではなく政治の頂点が担う。不思議な事にな。そして彼らは世界の破滅なんて望んでいないよ。地球を砂漠に変えるような可能性を突き付けられれば、手を取り合って協力するさ。皆で一律に叩く事のできる、共通の敵がいればなおさらだ』

「『一霊四魂』には責任を取ってもらう、という事ですか」

『「資本企業」もすでに「一霊四魂」をパージしている。……とはいえ、君からの報告が真実であれば、国際手配なんて何の意味もなさそうだがね』

ＡＩ以下の予測検索ソフトウェア。

今回の件は、遠い昔に死亡した天才達が遺した手記に感銘を受けた後世のテロリスト達が事件を起こしたようなものなのだ。

すでに、本当の黒幕は全員墓の下。

これでは何をどう裁いて良いのかにも迷ってしまう。

『やりきれんな』

「まったくです」

『今回の件で改めて思い知らされた。「島国」は表向きオープンだが、実際には巨大なブラックボックスだ。流石はオブジェクトを世に放った技術者集団とでも言うべきか。死者の遺した書き置きだけで戦争が起こったぞ。二、三〇年以上前の書き置きだ。あそこには後どれくらいのものが眠っているのか、私には想像もつかんよ』

「しかし、切り捨ててしまうにはあまりに惜しい。ブラックボックスであるが故」

『痛し痒しだ、まったくな』

初老の大佐は画面越しに重たい息を吐いて、

『今回の件、おそらく君や私の目の届かんところで決着がつくぞ。報告書も閲覧はできんだろう。君の部隊には「島国」からの亡命者がいたな。今の内に話を聞いておくと良い。箝口令が敷かれる前にな』

「誰にも話せないのでは意味がありません」

『それくらいの嫌がらせはしておいて損はないと思うぞ。実際に火消しに奔走させられたのは君の部隊なのだからな』

通信が切れた。

珍しくねちねちしたお小言はなかった。

つまりそれだけ老人も切羽詰まっているというところか。

フローレイティアは細長い和風の煙管を咥え直して、

「世界の中心ではないが、急所の一つではありそうだ。それがあんな野放しだなんて……まったく恐ろしい」

整備兵の婆さんは、帰還してきた『ベイビーマグナム』を迎え入れていた。

今回も酷い戦いだった。七本あった主砲は三本がねじれて吹き飛ばされている。第一世代だからといって、上は使い捨てのように危険な任務へ突撃させる傾向がある。整備している側と

しては、あまり楽しい事態ではない。

機から出てきたお姫様に、女性の整備兵達がバスタオルを肩に掛けていた。別の人間がスポーツドリンクの入ったボトルを手渡している。マラソンや駅伝のゴール直後のようなケアだった。実際、それを上回る疲労を華奢な少女に敷いているのも事実だった。

小型空母の甲板へと降りたお姫様は、そこで馴染みの婆さんを見つけた。

彼女はややおぼつかない足取りでこちらに近づいてきながら、正直に口を開く。

「危なかった……」

クウェンサー、ヘイヴィア、そしてフローレイティア。

同じ部隊の誰にも見せない、彼女の顔だ。

「クウェンサーやヘイヴィアがケリをつけていなければ、かてたかどうか分からなかった……」

「でも生き残った。チャンスをきちんと活かして生還したのも、間違いなくエリートの腕じゃよ。戦争では安易な奇跡なんぞ起こらん。善き幸運を摑めるのは実力の腕だけじゃからな」

婆さんがそう答えると、お姫様は疲労で青白くなった顔を、わずかに、ほんのわずかに綻ばせた。

「あの小僧は最後の通信をオープンにしたらしい」

「ふうん」

「おかげで『一霊四魂』のエリートは動力炉の爆発寸前で脱出したようじゃ。今、諜報部門が無事に逮捕した。どうやら女性エリートのようじゃな」

「何もかもぶんなぐってやる」

どこに力が残っていたのか、お姫様はどすどすと足音を立てて歩き去ってしまった。

しばらくその背中を眺めていた婆さんだったが、やがて彼女はポケットから携帯端末を取り出した。

スイッチを入れると、画面には例のチャットのログが表示された。

『一霊四魂』との会話。

かつて隣を歩いていた人物との、その残滓。

「……お前が夢見ていた未来は壊れたよ」

そっと、彼女は言った。

指先を動かして、携帯端末を操作していく。

全てのログは数秒で消えた。

アヤミ＝チェリーブロッサムの未練もまた。

「きっと、お前には、こんなビジョンさえも見えていたんだろうがね」

あとがき

一冊ずつの方はお久しぶり、まとめ買いの方は初めまして。
鎌池和馬です。

今回は『島国』がテーマとなっております。……この作品はフィクションなので、突拍子もない事をバンバン織り交ぜて不気味さを増してみました。資源や食糧に乏しく、代わりに高い技術力で世界に勝負を仕掛ける小さな『島国』。もしも、その定石すら覆す大きな仕掛けがあったとしたら？　というところからお話作りを進めています。

このシリーズでは天候兵器という名前がちょこちょこ出てきましたが、今回はその最大規模となる全世界気象コントロール兵器なるゲテモノが登場します。海水温度。作品のためにちょこちょこ資料を読んでみたのですが……これがまあ恐ろしい。上っ面の平和な語感と違って、何を読んだって恐怖しかありません。科学関係の資料は総じて好奇心と恐怖心が入り混じるものなのですが、ここまで天秤が片方に傾くのも珍しいかも。私的に『検索しちゃダメ』な単語に入るほどでした。絶対にお勧めはしません。……でも見たくもないものに立ち向かわなく

ちゃどうにもならないんですよね……。

『島国』らしさを出すため、オブジェクトのネーミングなどにもちょいちょい気を配ってみました。本当はもっと戦艦らしい名前にすべきなのかなとも思いましたが、『資本企業』というもっと大きな枠組みでは『オブジェクトは皆女性の名前を冠する』というルールがあるため、あんな感じに。他にもオブジェクトが畳返し使ったり、ラスボスが何度も変形したり、大量の影武者が出てきたり、ＹＵＫＥＭＵＲＩがあったりと、色々盛り込んでみました。盛り込みながら、『島国』らしさって一体何なんだ？　などと不思議な気持ちにもなりました。

また、今回は一貫して海での戦争になります。一番美しい海の景色、というと、個人的にはオレンジ色に染まる海だったりします。なので最終決戦の場は朝焼けにしてみました。皆様はいかがでしょう？

潜水オブジェクトについては、割と早い段階から考えていた機体でした。潜水艦のくせにちっとも隠れるつもりがない。核魚雷だろうが何だろうがくまなくレーザーで撃ち抜く。暗い海の底から、あらゆる大陸のあらゆる気候を自在に操る、生物の王として静かに君臨する……。今回は『巨大な怪物』としての、じっとりとした記号性を与えられたかなと思っています。

『他にもこんな倒し方があるぜ』くらい愛していただければ感無量です。

ちなみに、婆さんと黒幕については若い頃の回想なども織り交ぜると、もっと感傷的な文章にもできたはずなのですが、今回は敢えて省いています。『島国』が何故こうなったのか、と

いう部分についてはある程度ブラックボックスにしておいた方が世界観は引き締まるかな、と思っての処置です。ご了承を。

イラストの凪良さんと担当の三木さん、小野寺さん、阿南さんには感謝を。今回も色々と無茶を言ってしまってすみません。小物から馬鹿デカい兵器まで、色々と大変な作品ですが、お付き合いいただきありがとうございました。

そして読者の皆様にも感謝を。今回は正真正銘、丸々一冊使ってたった一機のオブジェクトを撃破する話となりました。ただ巨大な敵を屠る、それだけの物語。楽しんでいただけたのなら幸いです。

それでは、今回はこの辺りで。

この一冊が、あなたにとって些細な糧となりますように。

……いっそ火山島にしてほんとに温泉に浸からせるべきだったか

鎌池和馬

◉鎌池和馬著作リスト

「とある魔術の禁書目録（インデックス）」（電撃文庫）
「とある魔術の禁書目録（インデックス）②」同
「とある魔術の禁書目録（インデックス）③」同
「とある魔術の禁書目録（インデックス）④」同
「とある魔術の禁書目録（インデックス）⑤」同
「とある魔術の禁書目録（インデックス）⑥」同
「とある魔術の禁書目録（インデックス）⑦」同
「とある魔術の禁書目録（インデックス）⑧」同
「とある魔術の禁書目録（インデックス）⑨」同
「とある魔術の禁書目録（インデックス）⑩」同
「とある魔術の禁書目録（インデックス）⑪」同

「とある魔術の禁書目録（インデックス）⑫」（同）
「とある魔術の禁書目録（インデックス）⑬」（同）
「とある魔術の禁書目録（インデックス）⑭」（同）
「とある魔術の禁書目録（インデックス）⑮」（同）
「とある魔術の禁書目録（インデックス）⑯」（同）
「とある魔術の禁書目録（インデックス）⑰」（同）
「とある魔術の禁書目録（インデックス）⑱」（同）
「とある魔術の禁書目録（インデックス）⑲」（同）
「とある魔術の禁書目録（インデックス）⑳」（同）
「とある魔術の禁書目録（インデックス）㉑」（同）
「とある魔術の禁書目録（インデックス）㉒」（同）
「とある魔術の禁書目録（インデックス）SS」（同）
「とある魔術の禁書目録（インデックス）SS②」（同）
「新約　とある魔術の禁書目録（インデックス）」（同）
「新約　とある魔術の禁書目録（インデックス）②」（同）
「新約　とある魔術の禁書目録（インデックス）③」（同）
「新約　とある魔術の禁書目録（インデックス）④」（同）
「新約　とある魔術の禁書目録（インデックス）⑤」（同）

「新約　とある魔術の禁書目録（インデックス）⑥」（同）
「新約　とある魔術の禁書目録（インデックス）⑦」（同）
「新約　とある魔術の禁書目録（インデックス）⑧」（同）
「新約　とある魔術の禁書目録（インデックス）⑨」（同）
「ヘヴィーオブジェクト」（同）
「ヘヴィーオブジェクト　採用戦争」（同）
「ヘヴィーオブジェクト　巨人達の影」（同）
「ヘヴィーオブジェクト　電子数学の財宝」（同）
「ヘヴィーオブジェクト　死の祭典」（同）
「ヘヴィーオブジェクト　第三世代への道」（同）
「ヘヴィーオブジェクト　亡霊達の警察」（同）
「ヘヴィーオブジェクト　七〇％の支配者」（同）
「インテリビレッジの座敷童」（同）
「インテリビレッジの座敷童②」（同）
「インテリビレッジの座敷童③」（同）
「簡単なアンケートです」（同）
「簡単なモニターです」（同）
「ヴァルトラウテさんの婚活事情」（同）

本書に対するご意見、ご感想をお寄せください。

電撃文庫公式ホームページ 読者アンケートフォーム
http://dengekibunko.dengeki.com/
※メニューの「読者アンケート」よりお進みください。

ファンレターあて先
〒102-8584　東京都千代田区富士見1-8-19
アスキー・メディアワークス電撃文庫編集部
「鎌池和馬先生」係
「凪良先生」係

本書は書き下ろしです。

電撃文庫

ヘヴィーオブジェクト　七〇%の支配者（しはいしや）

鎌池和馬（かまちかずま）

発　行　2014年3月8日　初版発行

発行者　塚田正晃
発行所　株式会社KADOKAWA
〒102-8177　東京都千代田区富士見2-13-3
03-3238-8521（営業）
プロデュース　アスキー・メディアワークス
〒102-8584　東京都千代田区富士見1-8-19
03-5216-8399（編集）
装丁者　荻窪裕司(META＋MANIERA)
印刷　株式会社暁印刷
製本　株式会社ビルディング・ブックセンター

※本書の無断複製（コピー、スキャン、デジタル化等）並びに無断複製物の譲渡及び配信は、著作権法上での例外を除き禁じられています。また、本書を代行業者などの第三者に依頼して複製する行為は、たとえ個人や家庭内での利用であっても一切認められておりません。
※落丁・乱丁本はお取り替えいたします。購入された書店名を明記して、アスキー・メディアワークスお問い合わせ窓口あてにお送りください。
送料小社負担にてお取り替えいたします。
但し、古書店で本書を購入されている場合はお取り替えできません。
※定価はカバーに表示してあります。

©2014 KAZUMA KAMACHI
ISBN978-4-04-866379-3　C0193　Printed in Japan

電撃文庫　http://dengekibunko.dengeki.com/
株式会社KADOKAWA　http://www.kadokawa.co.jp/